明治三十七年四月五日發行
每月一回五日發行

第四巻

女學世界

第五號

明治三十三年十二月廿五日
第三種郵便物認可

口繪

記事要目

Higuchi's Book.



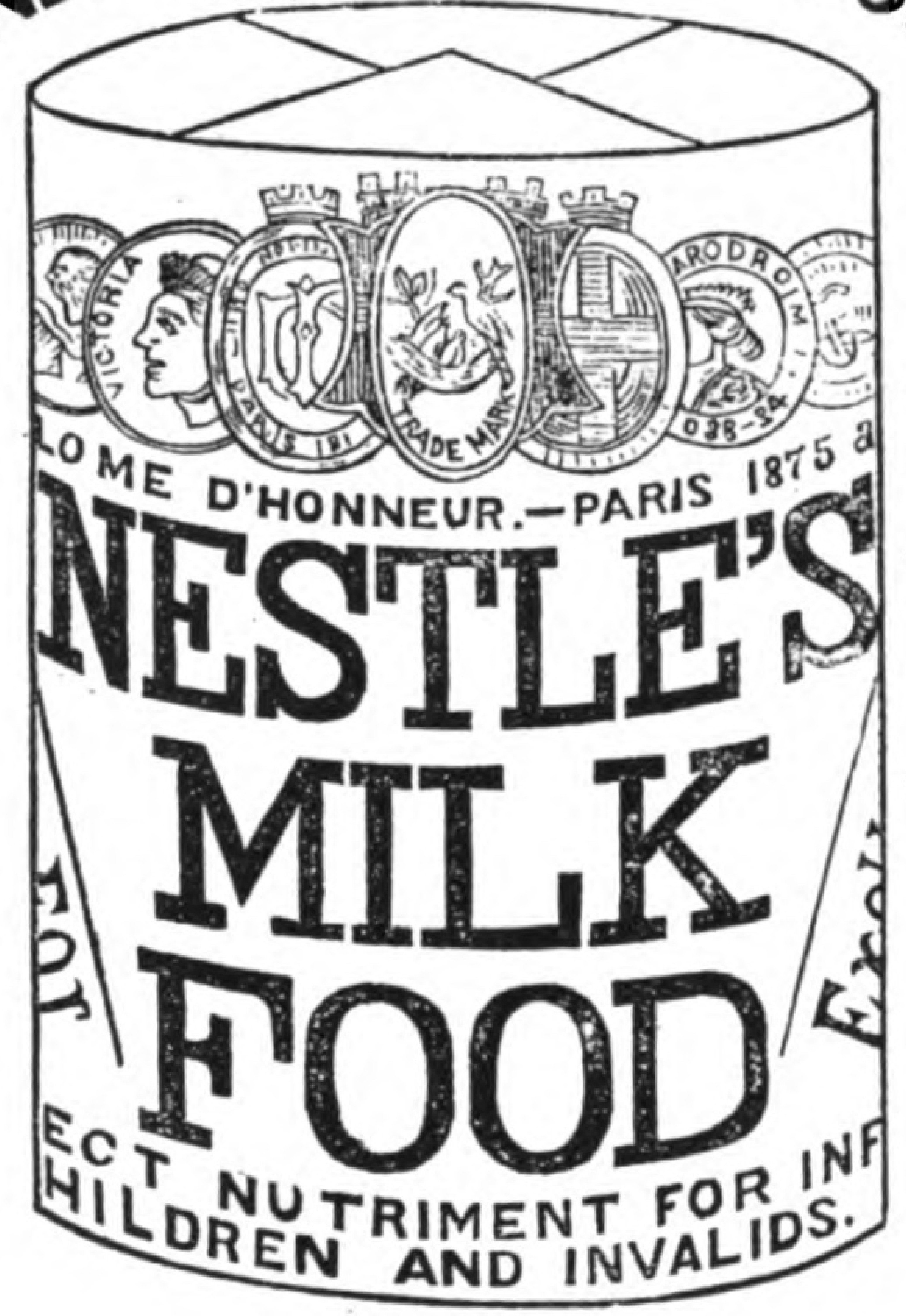

四月一日より
第七回新柄陳列會
寄ぎれ見きり反物賣出
四月卅日まで
三井呉服店
東京

女學世界 第四巻第五號 目次

瑞西國ヘンリーネッスル氏製

ミルクフウド

NESTLE'S MILKFOOD



各國帝室御用品
各國醫科大學、大病院、
醫學博士ノ賞讃ヲ忝フス

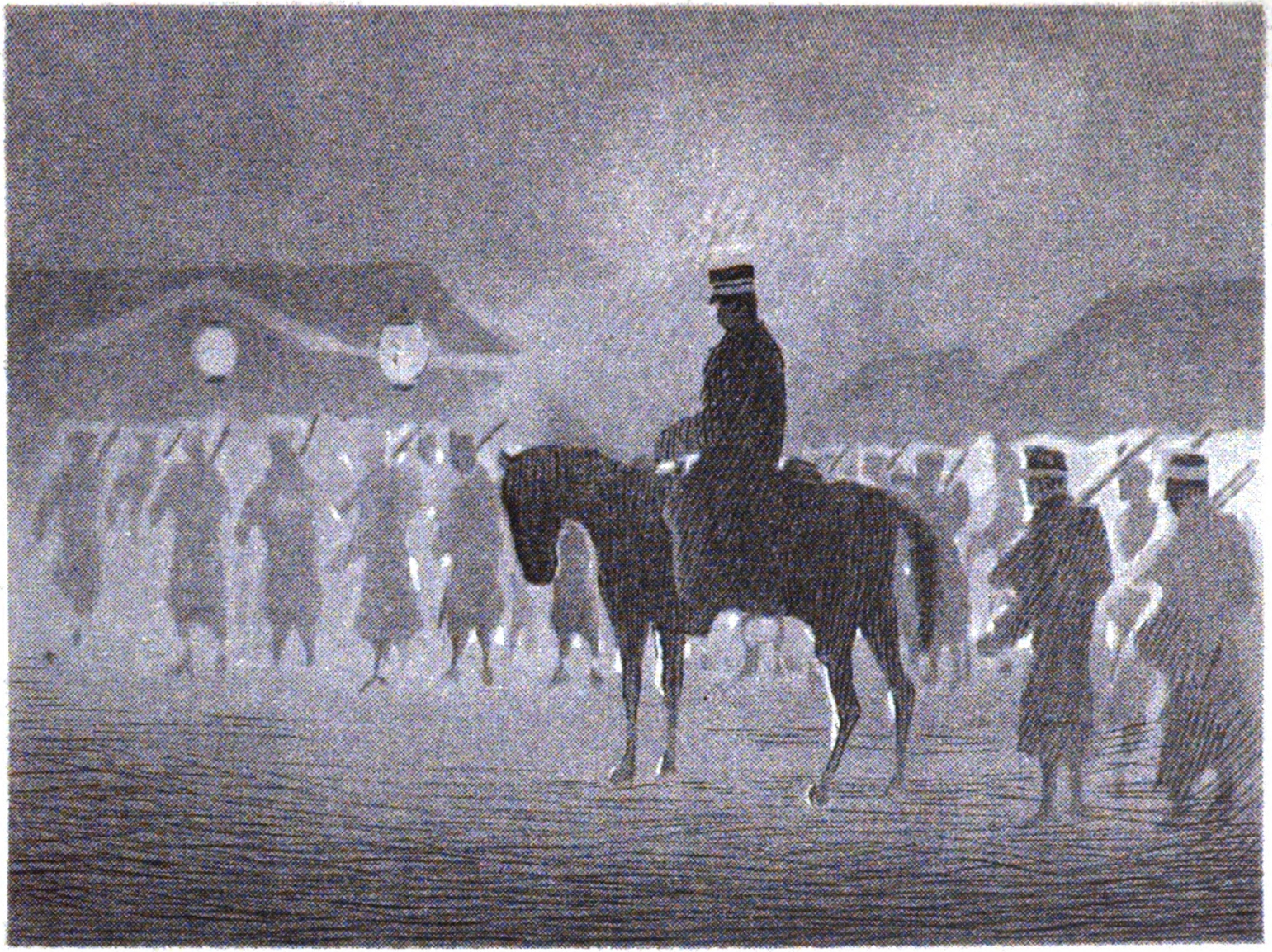
(全國洋食品店及薬舗にて販賣す)

ミルクフウドは麥精と牛乳との調合になり小兒の骨、筋肉を形成するに欠くべからざる蛋白質、炭化水素を含蓄するが故に營養品として尤も消化し易き完美なる食物なり

ミルクフウドは小兒の生育、病者、虚弱者、老人の食物として他に比類なき良品なり

ミルクフウドは完全なる母乳の代用として著名なるものなり殊に母乳の欠乏若くは乳離れの場合に於ては尤も小兒の嗜好に適する最良品なり

夜中の出征



三宅克己氏筆



春の家づと

三宅克己氏筆

發兌元　　　　　　　　　　　　　　發兌元

巖谷小波山人著　**春若丸**　正價拾錢郵稅壹錢五厘



江見水蔭君著

暑中大探檢

正價拾錢郵稅壹錢五厘

四月十五日發行

戰時に於ける少年諸君の好讀物として、露西亞征伐を發行す、記する處戰爭實記あり、戰爭小說あり、戰爭芝居あり、軍歌あり、加ふるに少年諸君が滿腔の熱誠を披露せし征露短文あり、本文の妙、挿畫の麗、皆本誌特有の技術を發揮し以て軍國少年の机邊に致す、乞ふ發刊の日を刮目して待て!!

正價金拾錢

少年世界定期增刊

露西亞征伐

記事要目

口繪　大勝利……極彩色大版……中澤弘光君筆
　　　敵前上陸……海陸諸名將其他……寫眞銅版

- ●櫻太郎……巖谷小波山人
- ●外交始末……黑田湖山君
- ●征露幻燈會……木村小舟君
- ●日露戰話……竹貫直人君
- ●日露名將傳……大町桂月君
- ●軍人の家庭……武田櫻桃君
- ●滿洲地理……長谷川天溪君
- ●鷲の生捕……桂田玉階君

郵稅壹錢五厘

大町桂月君著

日本少年傳

正價拾錢郵稅壹錢五厘

（甲の一）



館文博　　　　　　　　　　　　　　館文博

櫻桃小舟兩君著　**海陸大王**　正價拾錢郵稅一錢五厘

宮中御歌所寄人

中邨秋香先生著

古今集詳解

最新刊

美術的製本　和裝全四冊

卷壹 古今集序 春上下 定價卅六錢 郵税四錢 卷二 夏秋冬 四月中旬發行、卷三卷四續刊

本書は國文界の泰斗中邨秋香先生が多年の研鑽になりたる大著にして詞に顯はれたる一首の心、詞の組合せ、風調、語勢に依て生ずる餘情等を、詳細懇切に説き分け、一首の妙處を示したる、古人未發、未曾有の解釋、一讀忽ち歌の秘訣を悟るべく、而も講義筆記躰總振かな付にせられたれば、國歌國文初學者研究者は勿論、我國文學の花を味はんとする者は是非一讀すべき也

東京市日本橋區箔屋町十六番地

發兌元　前川文榮閣

(甲の二)

心の花

心の花は佐々木信綱氏主幹の文藝雜誌にして毎月短歌新体詩の課題競點題を出し寄書を歡迎す○四月一日發行の第八卷一號には森鷗外氏の美文木村博士の万葉考上田敏氏の新体詩論晩翠氏の羅馬漫吟竹柏園主人の南淸漫遊談大塚楠緒子の脚本夏葉女史の小品をはじめ論說美文新体詩短歌等竹柏會員が淸新の作を網羅せり○一部十二錢郵税一錢半年七十五錢一ヶ年一圓四十錢

發行所　日本橋區本石町一ノ一　竹柏會出版部

奏功確實

簡易謄寫インキ

器械不要

謄寫版寒天版及び其他の印類又は器械いらず此インキ一品にて簡便迅速座上立どころに文書圖畫數十百枚を印刷し得べし本品はすでに諸官衙及び郡區町村役場等の御用品たり

●定價 ニオンス壜入送料共 金四拾錢 郵税代用壹割增

發賣元　東京神田區末廣町三八　中村屋商店

岡山縣下一手發賣所　岡山市上之町　細謹舍

（甲の三）

花吹雪

四月二十日發行

文藝倶樂部定期增刊

正價金貳拾五錢
郵稅金貳錢五厘

これ日本文學の發達普及に盡瘁する十年一日の如き、吾國唯一の文藝雜誌たる名譽を擔ふ文藝倶樂部が、來る四月二十日發兌の定期增刊として、その價値を江湖に問はんとするもの。青年作家中の白眉たる左記十家の雄篇佳作を收む。讀者は卷を開て是等爛熳たる紙上の筆華に恍惚たらむ。發市の日を待て希くは愛讀の榮を賜へ！

表紙
山中古洞氏の筆に成る燎亂たる百花の圖

口繪
武内桂舟氏が才思横溢の餘に成れる白衣看護婦の精彩
木版畫

寫眞版
本誌十餘家の肖像及書齋の寫眞を卷中に挿入して光彩陸離たり

- 後ろ姿……小栗風葉君
- 春の月……德田秋聲君
- うらゝか……柳川春葉君
- 觀世こより……山岸荷葉君
- かは波……生田葵山君
- 沙漠の戀……太田玉茗君
- 悲劇？……田山花袋君
- 決鬪家……國木田獨步君
- 戀のゆくへ……竹貫佳水君
- 殘潮……武田櫻桃君

發兌元 東京本町 博文館

(甲の四)

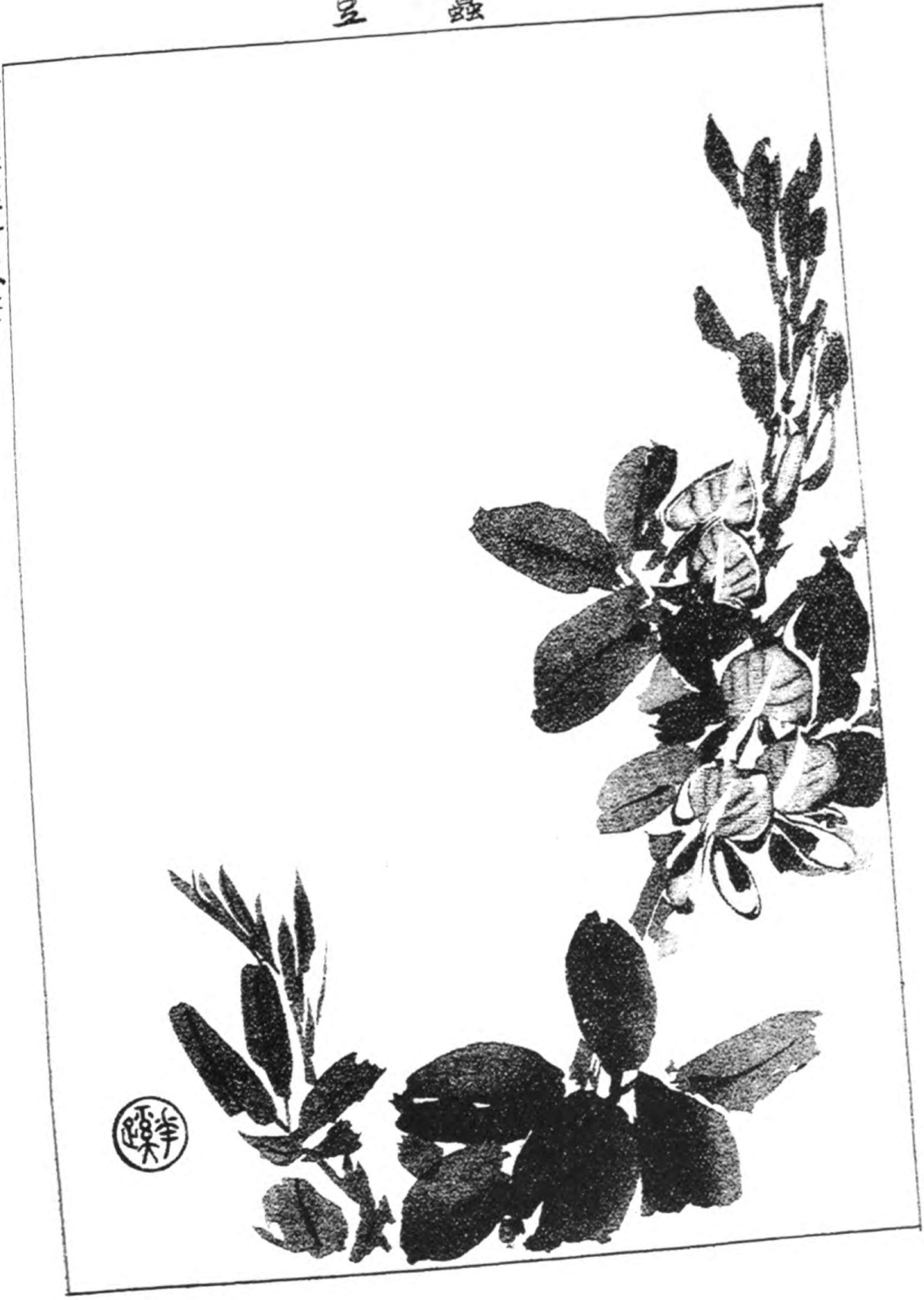
櫻



跡見花蹊女史筆

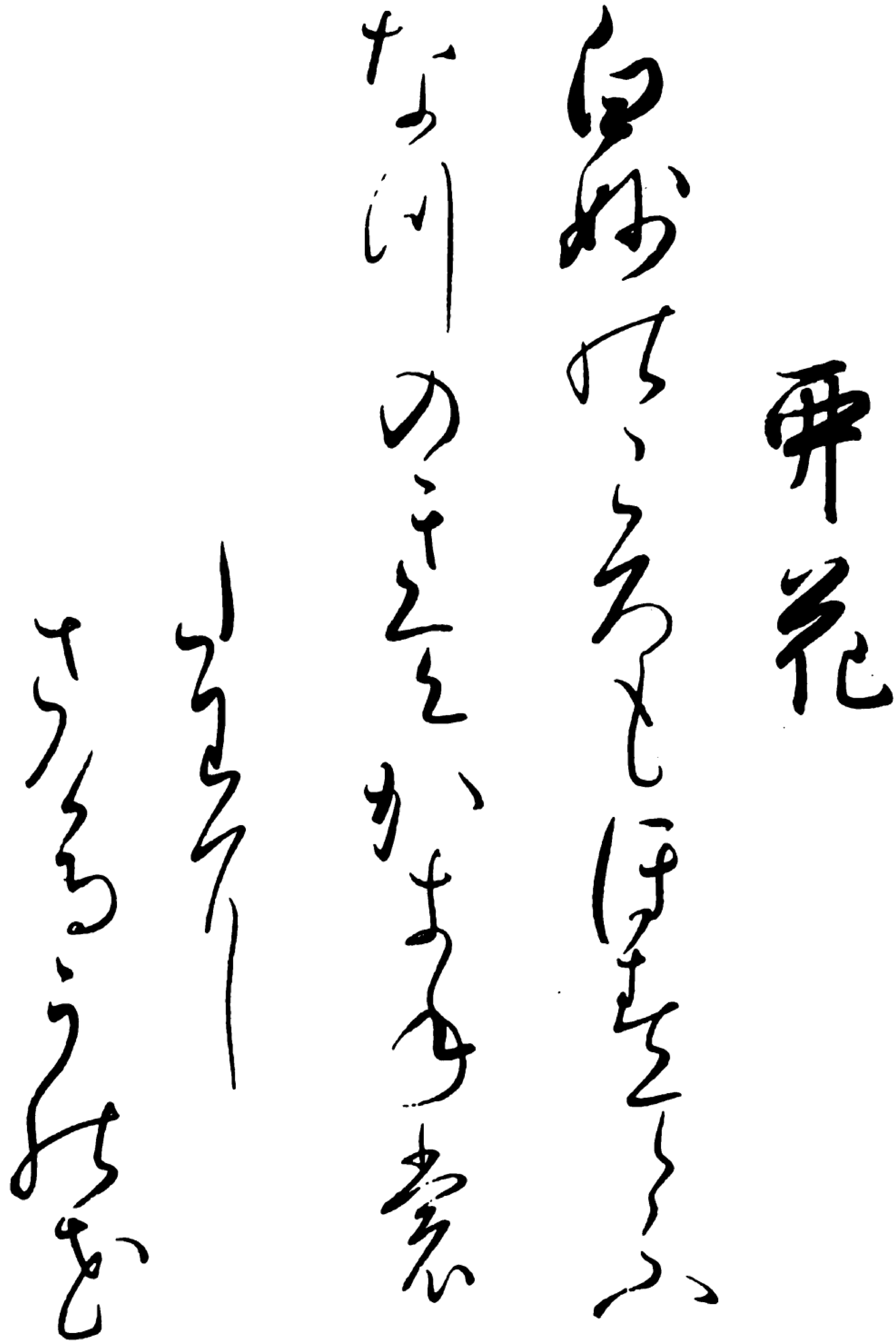
蠶豆

跡見花蹊女史筆

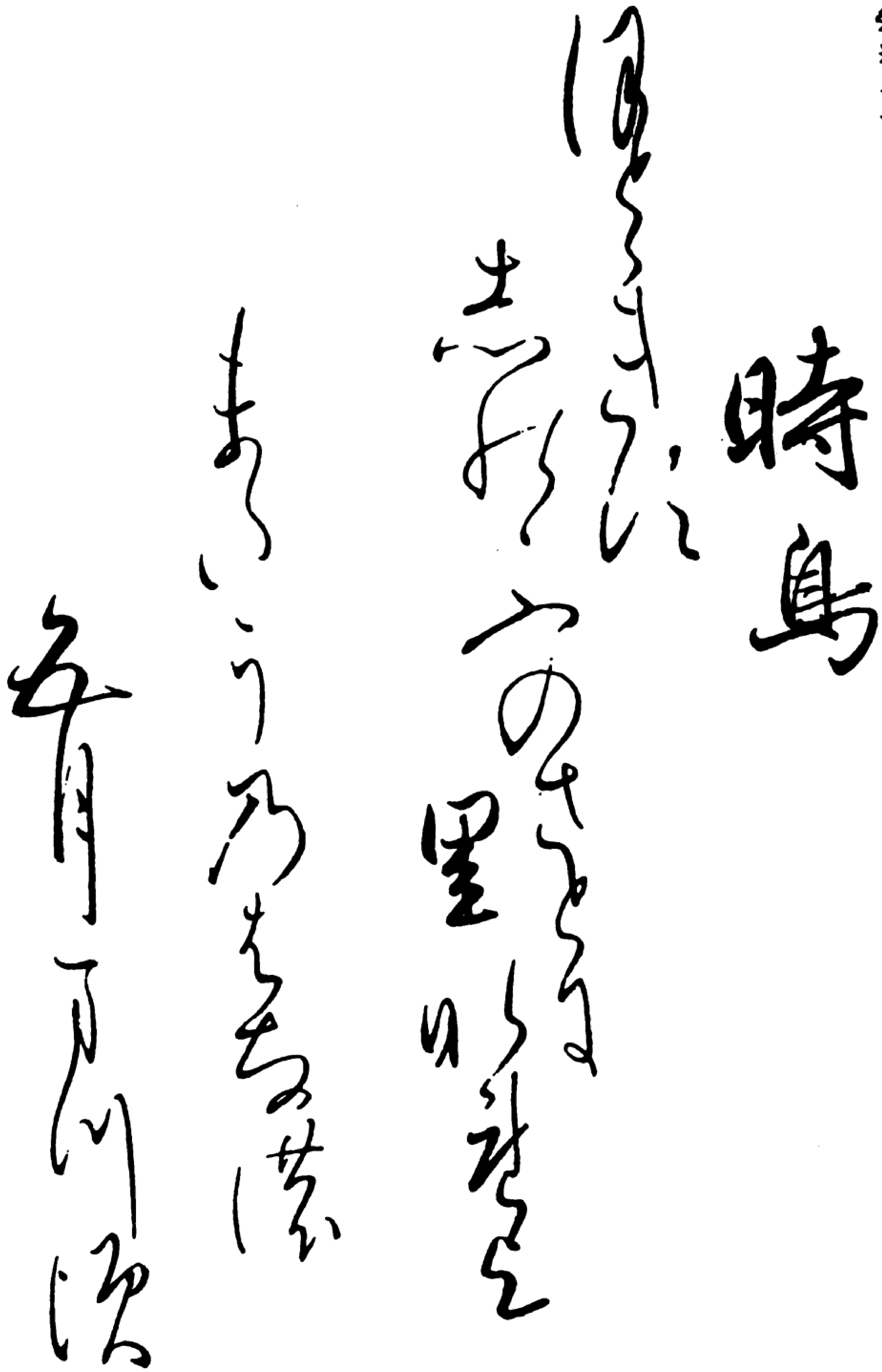


明し秋の夕鐘も哀まさる頃の
條々よみせへ閑にとる筆に
御勧ありてよそさまゆかしく
たのしき楽なへ人多き中に
御便御申まゐらせへ拝啓
あらくなつかしく伺ひまゐらせ

終へ之を取て凱旋軍に迎へく
此度を我に変なく充洽
此働に之を遂に此生務望く
忠勇み同此任よ依しなく
ゆくしれ計ね千此あるのあ宅
彼も無く之を此精居を遂によしく
のこ



多田親愛先生筆



五大軍醫合議製劑

藥價 五週分壹円、三週分六十五戔、二週分四十五戔、一週分二十五戔、二日半分十戔



本舖 東京銀座壹丁目 大阪南久寶寺町堺筋東

山田安民

全國各藥店にて取次販賣す

歐米流行新化粧品

●色白くつやだしたき人は「スプロスミン」を用ひ給へよ直段は三圓。二圓。一圓。五十錢の四種郵送料各十錢

●にきび又はそばかすを好まぬ人は「リ、オニース」を用ひ給へよ直段は三圓。二圓一圓の三種郵送料各十錢

發賣元 藥種貿易商 合資會社 博愛堂

東京日本橋區本石町三丁目（電話本局二八六番）

日露戰報拔萃帖

大日本繪端書會發行

菊倍版紙數百廿頁
總クロース頗美本
石版日露戰爭地圖入

定價卅錢 郵稅六錢

日露の戰爭、今や酣に、國民の意氣亦天に冲す日々の新聞雜誌は戰鬪の光景、艦隊の活動、戰爭の言論、列國の態度、世界の公論、戰爭文學、奉公美談等吾人が長く記憶すべき記事一にして足らざる也、而も報道の遲速記事の前後によりて蕪雜紛料に陷るを免れず、本書は記憶すべき記事、研究すべき問題、保存すべき地圖肖像等讀むに隨て切拔、得るに從て貼込み、時間を省き參考に便せん爲め造られたる者なり、盖し國を愛し家を憂ふるの士は勿論苟も新聞雜誌を繙くものは是非壹册又は數册を座右に備へざるべからず、敢て江湖の好評を望む。

發兌元 東京本町 博文館 東京神田 東京堂

（乙の一）

東京學士會院長文學博士

男爵加藤弘之先生著

進化學より觀察したる日露の運命

全壹册洋裝菊判＝正價拾貳錢郵稅四錢

抑も進化學なるものは、近世動植物學上の一大發明であつて、優勝劣敗乃ち適者生存、不適切者死滅の理法に由て、有機界に進化の起る所以を說く科學である、然るに今日となりては、啻に動植物學上のみならず、天地間に起る凡ての現象は、此進化學でなければ、殆んど解釋の出來ぬヿになつた、列國各邦の盛衰興亡する所以の理も、亦一に此進化の理法によらねば解釋が出來ぬ、仍て余は不肖ながら此理法に由て、日露の將來に於ける盛衰興亡に就て研究して見るに、露國は今日文明時代には、全く不適者であつて、到底漸次亡滅に向はねばならぬもの、之に反して日本は今日の時勢に於ける適者で漸次隆盛に進まねばならぬものであるといふ斷案を得るのである、余の近著道德法律進化の理第三版（博文館發兌定價五拾錢）を參照すれば其理が更にわかり易い

著者敬白

發兌元　東京日本橋區本町　博文館

萬里長征人未還



東京博進社印刷

水師提督上村君の家庭



上村提督　令嬢敏子

夫人貞子　夫人實姉井口清子

（軍人留主宅記事參照）

松島艦長川島君家庭



（軍人留主宅記事參照）

川島艦長　　夫人榮子

長女正子　　長男清　　二男直

裁縫實習



女子職業學校裁縫實習の光景

大高評の新刊軍歌書類

＊　＊　＊

時來れり、時來れり、暴露を討つの時は來れり、驚如何に跋扈するも日東武烈の電劍銃火一たび之に臨めば千紛萬斷立所に剿滅せん我は義の爲めに戰ひ、彼は慾の爲めに敗す、嗚呼我武威を萬國に知らしむるの一大好機は今日にあり是に於てや諸先生唱歌の新作あり字々峻烈句々活躍誦者をして忽ち敵愾心を喚發せしめ全文心血を熱騰せしむるの概あり、實に是れ國民刻下必讀の軍歌といふべきなり

＊　＊　＊

大和田建樹先生作歌　宮内省雅樂師上眞行君作曲
日露開戰軍歌
正價參錢五厘　二冊迄郵稅貳錢

文學士久保天隨君作歌　宮内省雅樂師上眞行君作曲
征露新軍歌
正價四錢　二冊迄郵稅貳錢

佐々木信綱先生作歌　宮内省雅樂師上眞行君作曲
露西亞征討の歌
正價參錢五厘　二冊迄郵稅貳錢

文學士大町桂月君作歌　宮内省雅樂師上眞行君作曲
露國征伐軍歌
正價四錢　二冊迄郵稅貳錢

巖谷小波君作歌　山田源一郎君作曲
征露軍歌 旅順の海戰
正價貳錢五厘　八枚迄郵稅貳錢

巖谷小波君作歌　東儀鐵笛君作曲
征露軍歌 決死隊
正價貳錢五厘　八枚迄郵稅貳錢

文學博士井上哲次郎先生作歌　山田源一郎君作曲
征露の歌
正價貳錢五厘　八枚迄郵稅貳錢

女子大學教授文學士鹽井雨江君作歌　女子大學音樂隊教授白井規矩郎君作曲
女子軍歌
正價拾錢　郵稅貳錢

佐々木信綱先生編
日露戰爭國民唱歌 第一
正價八錢　郵稅貳錢

佐藤六石君作歌
征露大捷歌
正價五錢　二冊迄郵稅貳錢

國府犀東君著（軍詩）
伐露樂府 大陸劍歌
正價五錢　二冊迄郵稅貳錢

野口寧齋君著（軍詩）
征露宣戰歌
正價五錢　二冊迄郵稅貳錢

發兌元　東京本町　博文館

學生必讀

受驗問答叢書

洋裝袖珍

目次

正價 壹冊二十錢●六冊壹圓十錢●十二冊二圓●二十四冊參圓八十錢 ●郵税一冊四錢

第廿三編

相澤新八君編

明治卅六年度 文官高等試驗答案集

（製本既成）

●全壹冊 正價二拾錢 郵税四錢

文官高等試驗制度發布以來茲に十年受驗者益増加し試問彌々密に入る學海にある者講學に受驗方法に全方面の準備を要すべきを勿論なり編者卅六年度發行せられたる試驗に於て優等の成績を得月桂冠の盛譽を得たる諸士の論文を求め加ふるに的確なる試驗準備の要項を加へ去廿七年度以降の成績年表氏名等を纂錄して一書をなし今之を公にす實に講法家及受驗者の寶典なり

發兌元 東京日本橋區本町三丁目 博文館

（丙の二）

古今無比
最新良劑

婦人藥

發見せり
効顯偉大

●婦人血之道諸症最新特効劑

本劑は某病院長大醫の新發明に據り責任を以て調製發賣したるものにして其効の確實顯著なるは左に掲載する所の諸症に實驗して明なり

婦人科諸名醫の稱賛を得たる新良劑也



定價	
一日分	金八錢
三日分	金二十錢
一週間分	金四十五錢
三週間分	金壹圓廿五錢
五週間分	金二圓

主治摘要
○血の道ゟ來る諸症
○子宮病○產前產後
○赤帶下○月經困難
○逆上○頭痛○眩暈
○腰痛○冷感○貧血
○衰弱○神經性諸症

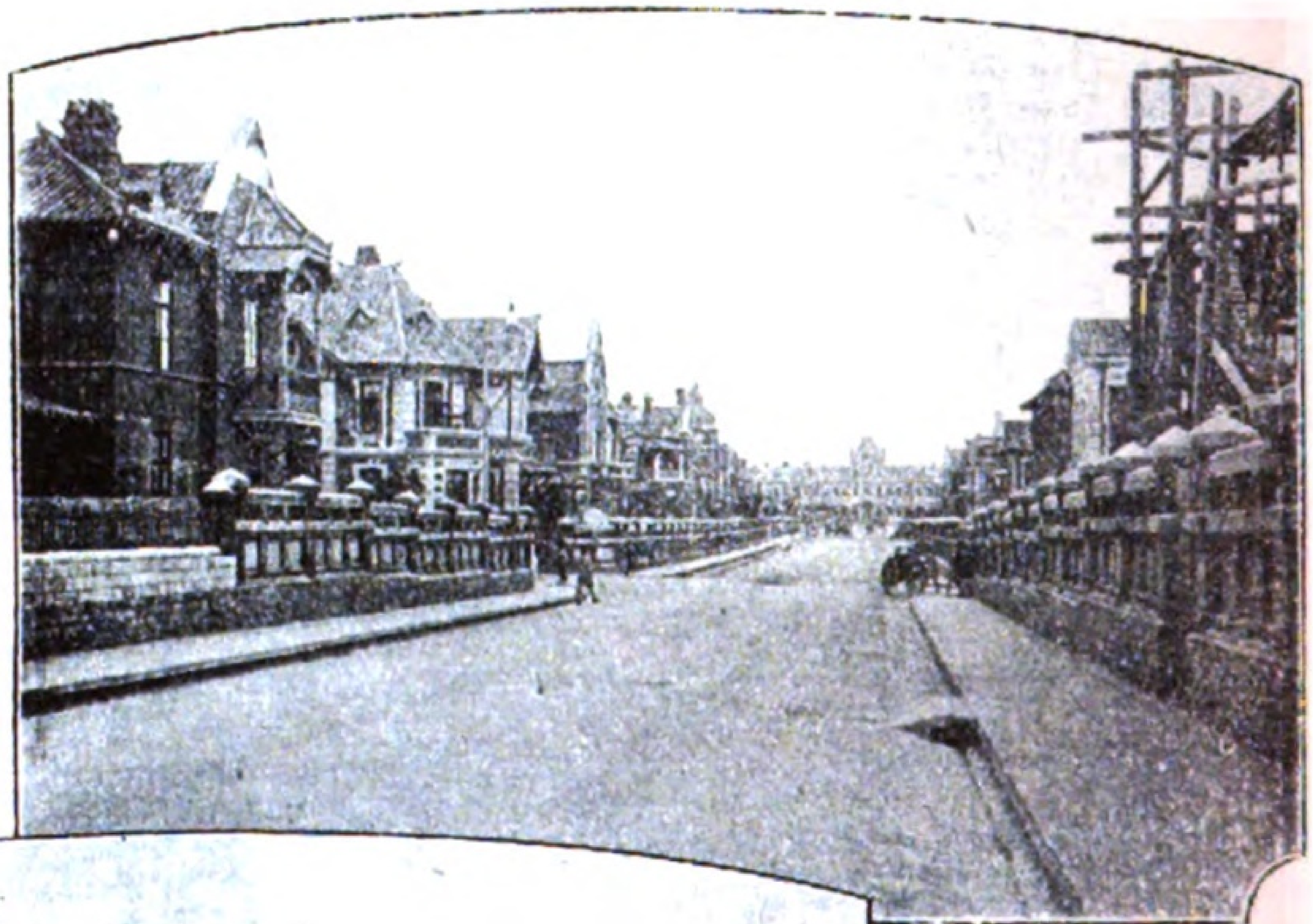
本舖 東京市日本橋區本石町三丁目十八番地
內外藥品賣藥 化粧品問屋 合資會社 博愛堂藥店
電話本局二百八十六番電信略號〇ハク

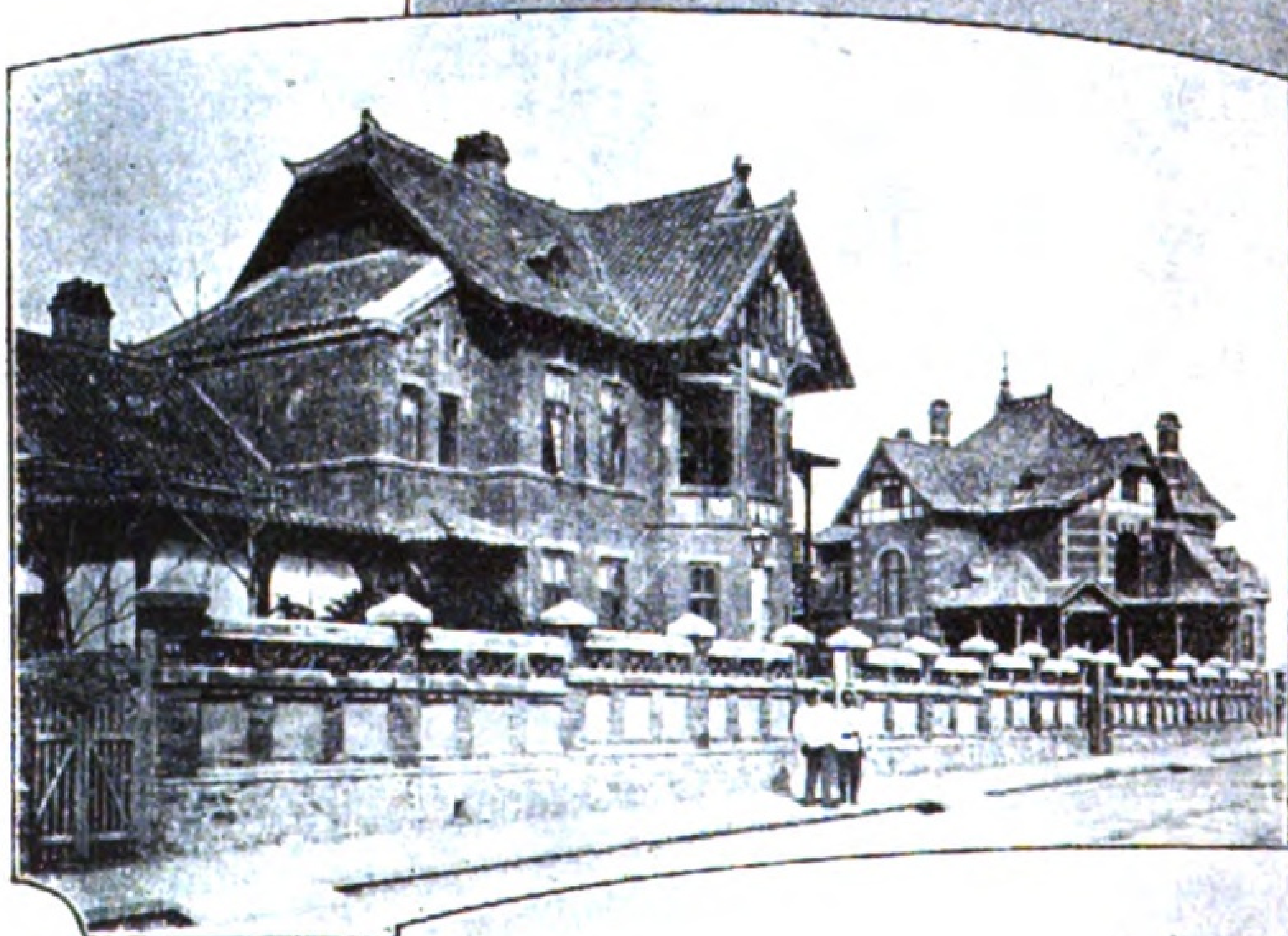
○取次 各地至る所の藥店にあり

(丙の四)

満州の新開地

ダルニーの政廳





ダルニー露國官舍



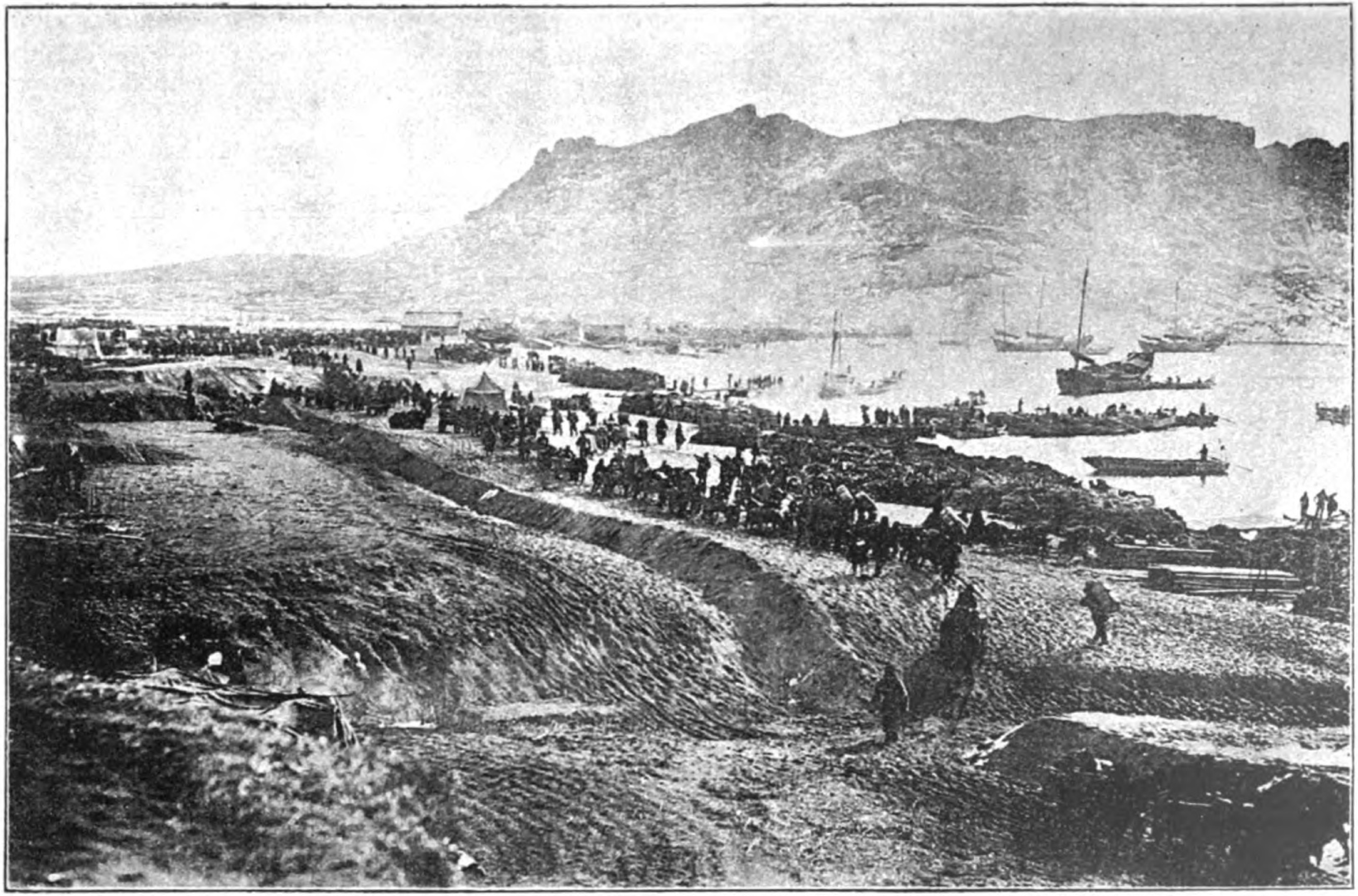
ダルニー露國官舍

初夏の海濱





晩春の郊外



是は過る二十八年一月日清役の當時我が第二師團の大兵が威海衛攻撃を爲して清國榮城縣龍睡灣に上陸せる圖なり前の山は龍睡島にして海濱の屋舍のある所は小西庄といふ

軍旅一と昔（榮城灣軍隊の上陸）



汽車中の看護（赤十字社輸送列車）

紅葉全集

十千萬堂出版部藏版第壹巻既刊

巻の一	巻の二（四月上旬製本出來）	巻の三（四月下旬製本出來）
●二人比丘尼色懺悔●風雅娘●新花桃扇 ●巴波川●南無阿彌陀佛●拈華微笑 ●戀の蛻●此ぬし●夏痩 ●關東五郎●新色懺悔●文ながし ●猿枕●わかれ蚊帳●七十二文命の安賣 ●二人むく助●二人女房	●伽羅枕 ●おぼろ舟 ●むき玉子 ●紙きぬた ●夏小袖 ●戀の病	●三人妻 ●俠黑兒 ●男ごゝろ ●心の闇 ●隣の女

續刊順次發行

四の巻	五の巻	六の巻
●むらさき●不言不語 ●袖時雨●鷹料理 ●三箇條●冷熱 ●浮木丸●青葡萄 ●八重襷 （以上九篇）	●多情多恨●安知歇貌林 ●千箱の玉章●寒牡丹 （以上四篇）	●煙霞療養 ●金色夜叉 （以上二篇）

全部六巻　菊判總クロース表紙書金刷（桂舟畫伯筆）每巻紙數八百五十頁内外總紙數五千頁四十有三編

正價　一冊金壹圓八拾錢●全部拾圓八拾錢●小包送料金拾五錢ツヽ

（丁の一）

發兌元　東京市日本橋區本町三丁目　博文館

帝國百科

第百貳編

水產講習所技師兼教授 農學士塚本道遠君 農學士井上正賀君合著（製本既成）

水產學

全壹冊洋裝
上製五十五錢
郵税十錢
並製四十錢
郵税八錢

近來我邦人口の繁殖と共に海產物の需用頻りに増加し加ふるに海產物は重要なる海外輸出品の一となりて時勢は大に斯業の發達を促して止まざらんとす 而して之を改良發達せしむるには學理を巧みに實地に應用せざるべからざるは勿論なれども我邦未だ斯種に關するの著書多からず隨て之れが研究に思を潛むるの士が造詣の道途を辿るに苦しむは一般識者の夙に慨歎する所なり 然るに塚本井上兩農學士其蘊蓄を傾けて本書を編まる 其斯學研究者に多大の資料を供せらるゝは勿論なるのみならず當業者亦此書に就て講究せば其裨益や蓋し鮮少ならざるなり

第百參編

衆議院書記官 法學士工藤重義君著（全壹冊洋裝菊判）（製本既成）

議院法提要

上製五十五錢
郵税十錢
並製四十錢
郵税八錢

法學士工藤重義君議院法に精通するを以て名あり而して職を衆議院に奉ずること多年、其運用に於て得る所少しとせず、今其得たる實驗と其學べる學理とによりて著せる者を本書と爲す、學理實際二つながら其薀奥を發揮して遺憾なく且參照歐米二十有餘國の議院法に及びて知名の學說は皆網羅することを怠らざりし所なり、一般人士の一讀に價するは固より職に議院に在るの士は座右必ず一本を欠可らず

發兌元 東京市日本橋區

（丁の二）

全書新刊

第百四編

在大學院文學士淺井虎夫君著

支那法制史

（全壹册　洋裝菊判）（製本既成）

上製五拾五錢　郵税拾錢
並製四拾錢　郵税八錢

本書は支那の法律の歴史的發達を記述するものにして支那國民の特質は本史を研究するに於て最も明瞭なるを得べし、今や支那に對する各種の調査追々進捗するも獨り法律の發達に關する研究に甚だ疎なり、蓋し本邦古代の法律は多く支那より出づるを知て然も其關係如何を知らず遂に其母法を極めざる結果誤解を致てして毫も顧みざるものあり、是れ著者が研鑽の傍ら之を論述せられし所以なり讀者之によりて彼我國民の特性を知り之を日本古代法制に比較し更に歐州の法制に對比し其長短特質を極め得ば以て他日有爲の活動に資する所大なるべし

第百五編

法學士　須崎芳三郎君著

露國侵略史

（全壹册　洋裝）（近刊）

上製五拾五錢　郵税拾錢
並製四拾錢　郵税八錢

露國の過去三百年は侵略の歴史なり西比利亞、中央亞細亞、高加索、波斯、巴爾幹等其方面極めて多し一々其跡を尋ねて滿洲問題を馴致したる所以を示すは本書の目的なり而して其の間に露人殘虐の實例あり、外交不信義の歴史あり、外交官の惡辣手段、邊疆武官の狡猾、間諜の毒計等露國の慣用手段は重出層見して讀者をして不知不識の間に自から露國對清韓兩國に用ゐたる奸譎の外交を想起せしむ記事は眞面目にして事實を記するに止め批評を讀者の意見に任せたり別に露國小史ありて露國肇國の始より現帝ニコラス二世に至るまでの略史を載せたるを以て讀者は露國の歴史を知り得べし

本町三丁目　博文館

（丁の三）

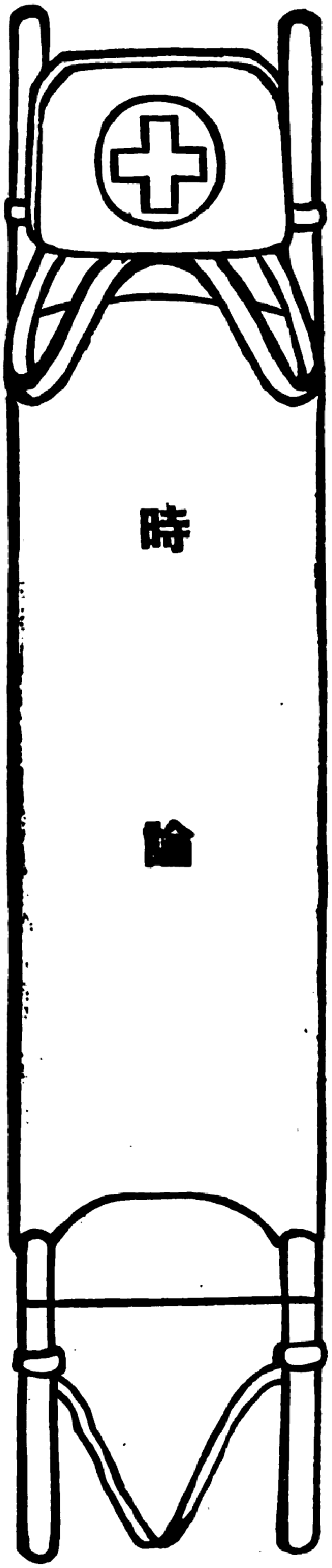
女学世界

第五號　四月五日發行



巴里籠城中の婦人

今を距ること三十年のむかし普佛戰爭の際、ナポレオン三世セダンに破れ、遂に白旗を掲げて敵に降服するの屈辱を忍ぶに至れり。斯る折しも佛蘭西の帝都巴里は一帶獨逸軍の包圍する處となりて市民の恐惶一方ならず、されど元より敵愾心の旺盛なる巴里人士の事なれば、敵軍如何に猛勢なればとて歷史に名高き此の都城をゝめ〳〵敵軍に開け渡して千載不磨の汚辱を蒙くるべきやとて滿都の壯丁擧つて防禦に赴き、男子は皆銃劔を執つて城堡に立ちしかば、彈藥糧食を運搬するものは勿論傷者の運搬看護より軍需品の供給はすべて婦人の手を藉らざるを得さるの塲合となれり。加ふるに籠城日久しくして糧食窮乏を告げ、一斤の罐詰數十フランの價を呼びて猶得る事能はず、市民は遂に怪しげなる馬肉を屠りて僅かに露命を繋ぐに至れり、而かも敵の砲擊頗る猛烈にして大砲彈の屋瓦を破りて飛來するもの頻々、さしも華美、壯麗を極めたる世界の名都は一朝にして修羅の巷となり、滿都の光景その物凄きこと筆紙のよく盡す處ろにあらず。斯かる危急の際に當りて感ずべきは巴里婦人の態度なりき、彼等は男子を助けてよく其任務に服し、數十日の籠城中一人として普軍に降らんといふものなく、滿城の婦人皆死を決して戰を主張したるは流石光榮ある歷史を汚さゞりし大國の婦人といふべし。



戰時に於ける家庭の覺悟

鳩山春子

左は出征軍人家族婦人慰問會の發起者鳩山春子女史の戰時に於ける家庭上の意見を筆錄したるものなり文責は記者に在り

戰爭は好んで爲すべきものでないとは誰も承知して居ますが、先方で仕掛て來るものなれば之れも致方がない、併し戰爭の罪惡なることは、今度戰爭を挑んで來た露西亞皇帝ですら認めて居るのでありまして現に先年も皇帝自から主唱者となつて平和會議を開いた位でありますから、世界孰れの國、孰れの國民でも苟も文明を解する者ならば、戰爭の罪惡なることは既に業に承知して居ることと信じます、ですから家庭に於ては戰爭の罪惡なること、而して我邦が今日戰を爲すに至つたのは、已むを得ずして戰ふのである、文明の爲に戰ふのである、正義の爲に戰ふのである、戰爭の爲めに戰爭をするのではないといふ點は考へて置かなければなりません。

曾てトルストイ翁の小說を讀んで、露西亞の社會の腐敗して居るには驚きました、勿論その小說は、その腐敗を警醒せんが爲めに書いたのでありますから、多少强き諷刺の點もありませうが、併しその一班を推測することが出來ます、殊に貴族社會の如きは、その腐敗最も甚しく、男女交際の如きも、表面は歐羅巴流にやつては

居りますが、其裏面に立入ると、墮落も太甚しいもので、成る程露西亞の文明が未だ進まない所以が分ります今日の戰は、文明を以て野蠻を制する戰といふも過當ではありませぬ。

併し何しろ大國でありますから、只一戰や二戰の勝利で、枕を高ふする譯には參りません、今後如何なる結果が來るかも知れぬといふ覺悟丈けはして置かなければなりません、ですから國民一般、これまでより二倍以上の働きをして、之れに耐ゆる覺悟をしなければなりませぬ、然るに只無暗に戰爭々々と氣を逸らせ、自分の業務をも抛げ棄てゝ、互に額を鳩めて徒らに戰爭の噂話にのみ日を暮らすやうでは大きな間違ひであらうと思ひます、それ所ではありません、出征の軍人は如何なに苦勞でせうか、如何なに難義でせうか、夫れを思へば、跡に殘つた家庭の人も、戰爭に征つたと同樣な考を以て、如何なる苦勞、如何なる難義にも堪え忍び、國の爲め、家の爲め、大に働かねばならぬのであります、殊に滿洲の野で、盛んに戰爭をする頃は、定めて盛暑の候にもなりませうから、其時は、或は戰の爲めに艱むよりも、寧ろ氣候の爲めに病兵を出して困難するとがないとも限りませんですから、前途はなか／＼容易ならぬ事と覺悟せなければなりませぬ。

私も役員の一人になつて居りますが、この程軍人遺族の爲めに慰問をする會が立ちました、之れは其會員等が、時々軍人の遺族を訪問して、慰籍をしたりなぞ、いろ／＼の方法を執るのでありますが、此等の事に就ても私は思つて居ります、之れは無論國民の義務として致さなければなりませぬが、去りとて之れをするからと云つて、家庭の事をお留守にする樣ではなるまいと思ひます、戰も大事ですが又家庭も大事です、戰の爲めなら家庭の事を放抛しても善いといふ次第はありませぬ、家庭の教育其他萬事平生の通り、否平生以上にも行屆かなければなるまいと思ひます、併しソーするには、兩方を働くより外はありませぬ、そこで平生の二倍を働くといふことにしなければなりませぬ、則ち二倍の働さへすれば、家庭の事も行屆きませう、又公共の事業にも從事することが出來るのであります、又この二倍の働位は、出征軍人の艱難を推察すれば、必ずしも爲し得られぬことではなからうと存じます、要するに今日はすべての、國民が常より二倍の働きを爲す時であらうと思ひます、そして之れが今日の國民の務めであらうと思ひます。そして眞に義勇奉公の志であらうと思ひます。(完)

この度かしこくも我が天皇陛下は軍國の用途に就て深く大御心を注がせ給ひ朝夕の御供を節せられ一汁一菜の御手輕なる御供にて日々軍國の大政に御精勵あらせ給ふ由洩れ承はりぬ。日本國民たるもの此際飽食暖衣して安閑たるは誠に申譯なき次第ならずや。（女學記者）

軍國の婦人事業

井深花子

左は芝臺町教會婦人會の會頭にして東洋英和女學校女子學院等に教鞭を執らる井深夫人の談話を筆記したるものなり

此度の戰爭は開闢未曾有の大戰爭で、忠勇なる我が軍人諸士のめざましき働は申すまでもなく、我が四千餘萬の同胞國民亦擧つて之に奮鬪しつゝあるので御在ます、此の時に當り我々婦人は如何に働くべきかといふに軍費献納に、恤兵に、看護に、出征者家族の保護に、其の仕事はいろ〳〵御在ませうが、かゝる表立つた事の方は能く手が廻つて居て、既に其人に乏しくないので御在ます、即ち物質的の援助は能く行き届いて居るやうに思はれますから、私達は此際精神的の援助を以て國家に盡さうといふ考へで御在ます。

其故、金何々圓恤兵部へ献納とか、又は何々義會へ寄附とか申すやうな表立つた名譽の側は、他の人樣に御讓り申して、私達は主として裏面の側に力を致し殊に見えない、隱れた所で人の涙を拭くといふ考で、出征軍人の家族や遺族を慰問扶助しようといふことを先日臺町教會の婦人會に於いて決議したので御在ます。

即ち人の見落した所、又は氣の着かない所を見出して、之に金品を贈る、金品を贈ることの出來ないものは慰めの言葉を與へる、而して時々見舞つては同胞の樣に親類の樣に心からの親切を注いで留守宅に殘る細君や子女の力と成つて遣るので御在ます。

區役所の戸籍簿には獨身者の樣に認めてある是れは正式に結婚を爲て居ないからであるもの丶、實際其の家

庭には妻もあり、子供もある併し其筋及世間ではそれ等を出征者の家族と見做さないのであります。爲めに其の妻や子は飢に泣くといふやうな話を聞いて居ます、か丶る不幸の話は幾らも世間にあるのです、だから我々の力でか丶る類の不幸を見付出さなければなりません、即ち隠れた所で人の涙を拭き、之に同情を表するといふのが我が臺町教會婦人會の申合で御在ます。

かういふ譯でありますから、此會は別段規則も設けず、會費も請求せず、唯だ此婦人會に於て申合せた所を各個人の自力に依つて實行しやうといふに過ぎないのであります、それには幸ひ四五人の男子の方が——矢張り同教會員の——哀れなる軍人の家族を捜索してゐますから、其の方々に頼んで捜索して貰ひ、後から私達が往つて慰めるといふことにしてあります。

總じて婦人の仕事といふものは、表立つた所よりも内側の隠れた所に働くに宜しいのである、世には表立つた所に働く婦人も必要であるには相違ありませんが、其等は極く少數で足りるのであるから、其の餘の多數は内面に立つて働かねばなりません、是が平時に於ける婦人の本分なのであります、故に戰時に於いても矢張表立つた仕事にたづさはり又は名譽の爲にするよりも、裏面に在て之を援助し慰問と同情とを與へると云ふやうな事に力を致すのが、婦人の婦人たる務だらうと思ひます。

それから戰爭時代の家庭教育に就いては申上べき事も澤山御在ませうが、私は此際子供に國家といふことを知らせるのが最も必要であらうと思ひます、それには漠然國を愛せよと許り言ふた所が、何等の感動をも趣味をも與へ得らる丶ものでありませんから、此際は可成新聞を讀ませるやうにして、日々活動しつ丶ある、新しき事實を知らしめ、之に據て國家的觀念の養成に努めるので御在ます。平生は卑猥の記事が多いからして、子供等には新聞を嚴禁する必要も御在ますが、此頃の記事は戰爭に關連した國民の活動を以て充たされて居りますから、家庭教育には何よりも先づ此の新聞を利用するといふことが最も宜いので御在ます。

戰時に於ける家事經濟は、要するに生活費を節約して國家有用の資に充てるといふ一點に歸するのですから餘裕ある家庭は此際冗費を省き、其と同時に勤儉の美風を養成することに努めなければなりません。日本の戰勝は最早疑ふ可からざることに成りましたが、戰勝國の常として、各國の歷史に鑑みても、兎角驕奢遊惰の弊風を生じ易いのであるが、どうか斯ういふことの無いやうに今から心掛ねばなりません、勝つて兜の緒を締め、永く戰勝國の名譽と實權とを保つて行かなければならない、是からは版圖を擴めるといふことは世界で許さないから、我國は版圖以上の高い所に目的を置いて、文明を進め風俗を美にして、世界の模範國とならなければならない、それには我が日本帝國の一分子たる我々の家庭を堅實にしなければなりません。是等は正に我々婦人の勤むべき仕事でありますから、軍國婦人の責任も亦た隨分と重大なものでは御在ませんか。

日本人一般の生活は近來非常に驕奢婬靡に流れて居ります。併しこの生活上の奢靡を矯める事は不斷では中々實行が出來難いものであります、けれども今回の事變は實に空前絶後の大戰爭であつて國費多端、國民一般擧つて節約をせねばならぬ時期でありますからこの戰爭を機會として生活上の膨脹を引締ねばなりません。及ぶべき丈け冗費を省いて、その餘財を軍資（國債なり、献金なり）に供するのが國民たるの義務で又これが奉公の誠意を表したものであらうと思ひます。（女學記者）

戰時に於ける婦人の同情

戸板關子

此頃或る騎兵軍曹が突然私方へ尋ねて參りました。此人は臺灣征討の役に從軍しまして。只今では後備になつて居ります。凱旋の後郷里にて牛を畜ひ。今日漸く其の目的を遂せんとする所で此度召集することゝなりましたが。何樣二十四時間内に出發と云ふのであるから。牛も秣も帳面も十露盤もあるものかと。後事を托するの暇もなく用意ソコ〳〵にして出陣したのである。と如何にも元氣能く遖れ武士勇ましく見へました。自分が長々刻苦經營して稍く其の結果を見やうとする時に突然たる召集令。大概の者ならば噫乎困つたと愚痴も言ふべきに。此人は國家の爲めに財産を棄つることも生命を抛つことも平氣で勇みに勇んで戰地へ赴いたのであります。廣島へ着てから端書を呉れましたが。其の短文の中にも滊車旅行の概況が記るしてあるなど。語辭迫らず綽々として餘裕のあることは分つて居ります。之でこそ戰にも勝てるのだと私は思ひました。又芝の増上寺の前を通りますと。後備第一聯隊第一大隊と記るしてある。其の兵士を見ると年の頃三十以上の者が多くある。此人々は妻子もあらん。眷族もあらん。然るに國家の爲めに父母妻子兄弟に訣れ。屍を滿韓の荒野に曝しに行く。而かも喜んで勇んで行くかと思ふた時は。只何とも言はれぬ一種の感に撃たれました。モー其れ所では無い。仁川旅順に於ける將士の働き振りを見ても。國家を泰山の重きに措き生命を鴻毛よりも輕んじ。雨の如く注き來る砲彈を物の數ともせず勇往邁進終に敵艦を擊破り。露兵を戰慄せしめたる所。一には大元帥陛下の御威稜によることとながら。亦我か將士の忠魂義膽戰陣に臨んで生還を期せざるの致す所と思はれます。恐れ

多くも。軍艦に御乘込みの依仁親王殿下。博恭王殿下。菊麿王殿下も。八日、九日の旅順海戰には御奮闘遊ばされたる由仄かに聞及びましたが。曩に征臺の役には我々が敬愛し奉たる北白川宮師團長殿下は。具さに艱難を嘗めさせられ御いたわしや終に瘴煙毒霧の中に薨去なされました今又少壯勇敢なる此の三殿下が御身を挺して士卒に先ちての御働を承りては我々臣民は感泣せずには居られません。

抑々此度の戰爭は實に容易ならぬことにして。其の勝敗の如何は獨り東洋の利害にあらずして世界の治亂に關係するものなれ



ば。我國民は此際世界の平和安寧を雙肩に荷負つて立つ覺悟が無ければなりますまい。而して又其の相手とする露西亞は如何なる者かと云へば。其の兵隊の四分の三は無學文盲である。敵愾心が乏しい。規律が無いとは申すものゝ。兎に角其人口は我邦に數倍し。其の領土は我邦の數十倍あり。剩さへ是迄度々外國と兵を交へた經驗のある老大國であります。近頃では西半球を除いての外歐洲各國は皆なニコラス皇帝の鼻息を窺つて居る。其の一顰一笑を見て喜憂を懷くの有様である。ニコラス一度咳拂ひすれば歐洲が震動すると云ふても善い位であります。

其の世界の一等强國を。極東の小島國と世界國民の腹の底に賤まれて居た我邦が相手にするのであるから。隨分面白い角力である。が。乍併念には念を入れて立合ふべき勝負である。既に仁川で拔手を喰はせ。旅順で一突き突たので。もはや土俵を割る計りで。僅かに殘した哀れな姿であります。世界の見物人の喝采は非常なものでありました。此分では勝星の日本に在ることは勿論なれども。今や相方呼吸を窺つて居る有樣である。水入・引分は卑怯なる力士の得手である。曠日彌久は彼の慣用手段である。此の勝負の決するのは彼を土俵の砂の中へ埋めるのはトテモ短日月では無い。



酒と煙草は生活上に取つて無用の贅物です。若しも此際日本國民が共同して煙草と酒を廢したならは少くも一ヶ年には一億五千萬圓の金は殘りませう。(全國一千万戸一戸一ヶ月の喫煙費五十錢、飲酒料一圓として)その金を軍資として献納したならばそれ丈けで半ヶ年の戰爭は充分に出來ます。日本國民たるもの此の際赤心から奉公の義務を思ふたならば戰爭中斷じて飲酒、喫煙の惡習慣を廢するの勇氣忍耐がなくてはなりません。

(女學記者)

偖此度の戰爭は暴横なる露西亞を懲らすため。淸韓兩獨立國の領土保全のための義戰でありまして。名實共に立派なる者であります。されば旭日の御旗の向ふ所草木も靡くは當然の事と信じますが。併し我々婦人として何を爲すべきか。戰爭は男子の職分である我等の關する所ならずと平氣で居らるべきか。去りとて長刀押取て戰陣に赴く譯にも行かず。赤十字社の看護婦も凡そ制限のあるもの。亦煆煉なければ物の用にも立たず。然らば一地方の婦女の如く。已が髪を截て敵國降伏の祈りを神に捧ぐべきか。之も一概に良き事とのみ申されず。婦人たる者は此



際各々の夫又は兄弟が從軍したりと思ふて。能く〳〵家内を整理し。些細なることにも注意して儉約を守り。物見遊山芝居見物等の冗費を省くは申すに及ばず。衣服飮食も可成質素を旨とし。冠婚葬祭には。虚禮を避け。物品の贈答に費用を懸けず。此の如くして全國の婦人が其の剩す所を軍費とする時は此の戰爭を幾年も繼續することが出來ませう。妻君が一家の站兵官として成功すれば一國の站兵部も能く整理するのであります。今日の戰爭は將士に勇氣が有つても。兵器は精鋭でも金が缺乏すれば負けることになつて居る。淸佛戰爭の時佛國議會は軍費支

出を否決して其が面白からぬ戰局を結ぶ原因と爲つた。又近頃の英杜の戰爭に杜國の兵は頗る強かつた。流石大英國の精鋭も屢々之に惱まされたが遂に金力に負けて降參した。此の通り強いからといふて安心は出來ません。又今一ツには強弩も久しく張れば弛む譬への通り。長日月の間には士氣の撓むことなしとも云ひがたし。此の如き時に若し本國に在る婦人が一片國に報ゆる精神を以て遠征の士を勵ますならば如何で軍氣の振はざることあらん。

國民新聞を見ると。米國新聞社の前に日露戰爭の報道を見やうとして常に人の山を築くのです



が。時に日本贔負の米國人と露國人と爭論して遂に掴み合ひを爲すことがあるそうです。丸で米國人は自國の戰爭の如くに思つて居る樣です。既に米國の有志者は數千万圓の献金を出願したとか。或る猶太人は軍艦を献納したいと言て居るとか。或る米國婦人達は我邦赤十字社の看護婦たらんことを希望して居るとか。何にせよ正義を愛する國民は皆な我邦に同情を寄せて居ります。我邦でも貴婦人方が或る場所へ集て繃帶を調製して居るとのこと。誠に結構なる御企だと存します。然らば我々下々の者も其相當の分を盡さねばならぬことゝ思ひます。其樣な時

には決して平生の引込み思案を出さず。何でも爲すべし。釐毛にても献金すべし。私は女だからの是計りのお錢など〻卑下すべからず。微塵も積れば山となる。叢輕折軸の譬もあり。若し一家の妻君が平均一日に五錢を節約すれば日本全國に於て。一ケ年に一億數千万圓を餘し得べし。猶は我が國民が有毒なる酒と煙草と之に附帶する不義不潔なる費用を省きたらば。優に二億圓を剩すことが出來ます之れ丈けにても一年に三億圓以上の軍費は苦まずして支出されます實に宏大な者ではありませんか。

今日の結果を見ると。軍事公債應募申込高は四億六千万以上で如何にも喜ばしいことであります。其他軍資金恤兵部へ献納の金額も少ないことではありませんが。其の巨額の金を出すことのできる人は實に少數な者であります。此の少數の金持や又は外國の資產家に寄掛つて猫ばゝで濟す譯には參りません。多數を占めたる貧乏なる國民の僅か宛集めた金が實は貴いのであります。長者の万燈よりも貧の一燈が大切であります。此の貧富貴賤上下一致し。所謂一國を擧つて戰に當るの決心を有てば決して負けることはありません。今日は貪夫も廉に懦夫も志を立つべき時であります。日本國は男子のみの日本國では無い男子と女子の日本國であります。男子に國に盡すの義務あれば女子にも國に盡すの義務があるべき筈であります。日本國民が各々鄙吝なる考へを持つて金を出さねば國の耻辱を招く。例へば洋中に於て船が暴風に逢ひたる時は。其積荷を洋中に投げ込んで其の船の浮く樣にします。其際荷主が各々惜んで之を棄てないならば。船も人も荷物も共に洋中の藻屑となつて仕舞ひます、之と同じ事で。國民各々が其の財を惜んで居るならば。遂に日本國は露國の爲めに壓潰されて。土耳其の二の舞ひとなり。或は終に其の領土とさる〻かも知んません。此の場合に及んでは。僅かの財產を有つて居たとて何になりますか。非常な時には非常な考が入用です。驚いて心配して居る時ではない。男も女も平生よりも働くべきです。活動すべきです。活動しなければ國が疲弊する。國が弱れば戰爭に勝てない。

之は極つた理屈である。一方に於ては大に進んで戰ふべし。一方に於ては殖産工業を盛んにすべし。露國では聖路易の博覽會へ出品を斷つても。我邦では更らに多く出品すべし。之でなければなりません。我々婦人も何でも手足を動かし。毫毛を積んで軍費に充つる樣に致したいものです。

女子と幸福

嘉悦孝子

世の中で何が最も樂しいのでせうか、又何んな人を最も幸福だと申しませうか。あれこれと撰ぶまでもなく、己れの覺悟一つで何んな仕事でも樂みが多くなり、又何んな人でも幸福なる者となりませうと私は思ひます、樂しみや幸福と云ふものは、決して地位でもなく、財產でもなく、名譽でもございませぬ。本當の樂み、本當の幸福は人々の働から得られたものでなくてはなりませぬ。素より外に働くから幸福だとか、內に居るから不幸だとか云ふ理由は聊かもないのです。從つて女だから樂みが少いでもなく、男だから苦勞が多いのでもありませむ。何れにしてもそれ／＼の職分を樂みますれば、幸福もそれから得られるのであります。故に人は各々天から授かつた職分に依つて、各々の安寧幸福を計らねばなりません。

▲不幸は幸福の基

女の專一の職分は家庭を司ると云ふことであります。家庭を司ることに大いなる樂みもあり、希望も出來るのですもの、何處々々までも愛に滿ちたる心を持ちて、其天職とする所を樂しむの覺悟で働きましたならば、何處に苦しみが潜んで居ませうか。又何處に不幸が翼を廣げませうか。己れに力めないで、人の幸福を羨むなど

申すことは、抑も大きな考へ違ひでございませう。私は女程世の中に幸福な者はなく、女の中でも自分程幸福なものはないと常に思ふのです。或る方面から考へましたら、實際私位世の中で損な身体は多くあるまいと思ふ位です、一つ二つ申て見ますれば、是まで私は一度として避暑に出かけたこともないし、氣慰みの湯治に行つたこともなし、日曜の休暇と云つても長閑に暮したことはありません。けれども私はこれが非常に幸福だと思つて居るのです、斯様に働くべき仕事の多いと申すことが、實に私には幸福なる所で、それから推して私共のやうな此様な不幸なもの程世の中に幸福なる人はなし、不幸は確かに幸福を生むの母であると思ふのです若し私が何不自由のない富裕な家に生れ、自儘氣儘の贅澤な間に育ちましたら、決して唯今のやうに働いて見やうと思ふ考へだに起らなかつたらうと存じまして、常に貧しい家に生れたのを感謝致して居ります。若し又私が世の中の所謂幸運児であつたなら、此働かうと云ふ覺悟も自活心も乾度起らなかつたでせう。苦しみを樂んで見やうなど申す考へは藥にしたうてもなかつたでせう。併し幸ひな事には、貧の味をも知り、又不運などゝ申す苦しみをも嘗めました爲めに、却つて唯今では自分の運命と戰ひ最後の勝利を得て見やうとの勇氣も發したのでございます。是は私一己の場合を申したのに過ぎませぬが、推して考へましても、貧乏や不運は天の賜物で、其中に居る人は取も直さず天の寵愛を一身に受けたものと申しても差支ございません。光明は前途に輝き、希望は胸に滿ち〳〵て、見る物聞く物として樂しく仕合せだと思はぬものはありませぬ。全く世の中は己れの心の持方一つで希望も出、情なくなることもあるのでございます、家庭にあつて下女はしための頭に立働きなど致しますのは、詰らぬと申せば誠にこれ程詰らぬことはありませぬやうなものゝ、退いて考へますれば此處にも大いなる希望があり、大いなる樂しみがあり、大いなる幸福があふれて居るやうです。右、左、前、後に多くの子女を育てまする爲に、半日の物見遊山も出來ないのを喞つ母親でも、若し其多勢の子供等が

他日それ〴〵社會に活動するの人となることを思ひましたならば、何の半日の行樂を羨ましいと思ひませう。限りなき樂しみは養育の苦勞中に含まれて居るのでありませぬか、凡そ勞力はこれが決して報いなしに仕舞になることはありませぬ。親が子を育てますのに、如何に苦勞辛苦があつたとしましても、其苦勞辛苦に百倍するの樂しい報いが、他日其子供等に依りて齎らされることは私が申すまでもないことでせう。苦勞の多ければ多いだけ報いも多く、且つ樂しみも多いものだと信じます。で私などは何事を致しますにつけても、成るべく骨の折れる處を選びますので、蠻勇だなど〻仰有る方も無いではありません。併し私は此勞苦が報ひられずに終ることを思ひませんから、決してそれがために望みを失ふと云ふことはございません。例へば其勞苦に報ゆる何者がないとしても、初めから私の幸福と樂みとを勞苦其物の中に求めて居るのですから、少しでも多くの勞苦を凌いで參りますことは、私に取つてそれだけ餘計な樂みと幸福とを與へるものと言つて差支ありません。自分の勞力に對して報償がないなど〻思ふことは處世の上に第一の間違だらうと思ひます。況して世の中の勞苦に償ひが伴はないと云ふことがないのであれば、縱し目の前の滿足は得られないにしても、私等はかに斯くとそれに氣を揉む必要は無いやうに存じます。

▲勞働は快樂を生ず

此樣な鹽梅に、人は勞して樂しみ、樂しんで勞すと云ふ覺悟が胸の奥底に出來ましたら、一日半日でも安きを偸み、無駄に時を費すことは出來なくなるのです。又人の性質は閑居して無事なることを以て本然とは致して居りません。働かない人はそれだけに何かの苦勞を求めて居ます。働く人は働きの上に苦勞を求めますから、外の苦勞は自ら無くなる道理で働かない人が詰らないことに苦勞を重ねて居るのとは、大層な違ひが其處に出來て來るのです。小人閑居して善をなさず、と申しますが、縱し小人でなくても閑居して其人の利益になること

とはありません。殊に家庭を司る女にあつては不足の無いだけに不足が多くなるものです。其爲には良人にも不滿足を與へ子供の養育を十分ならしむることが出來ず、陰氣な不愉快な心持を以て一家を不幸に陷れねばならなくなるのです。又働く人に健康なる人が多く遊び暮す家に病人の絶えないのは實際世の中に其例少なからぬのであります。御覽なさい、働く人に健康を與へ、働かない人に病氣を與へるのは天の配劑ではありませんか。人は働かねばならぬと云ふことがこれでも證據立てられます。

働くことの必要なのは素より女子にだけさうせよと云ふのではありません。けれども男子に比べて女子の方が遊ぶ時間も多く、又其機會も多いのですから、私は殊更に此事を皆さんにお勸めしなければなりません。働くと云ふことには、各々の覺悟が大事なことは繰り返して申す迄もありません。人は習慣に依つて或る度までは支配されるものでありますから、此働くと云ことには、習慣の力を借りると云ふことは必要でございませう。働く習慣は善良なる習慣です。私は子供の中より人は大いに力め、大いに働かねばならぬと云ふ信念の下に、此習慣を養成しなければならぬと思ひます。子供を働きの習慣に導くには、種々の方法も自ら其處にありませうが、一週又は月一度と云ふやうに極めて、愉快なる安息の日を子供を始め一家の者に與へられるやうにしたならば、良い工夫だらうと思ひます。働いた後に得られる樂みはそれこそ本當の樂みで、これ位愉快なことはございません。一家は愛のさざめきに充ち、人は美しき思想を其間に養成することが出來るのです。女子の敎育は唯今のやうに學校のみに任して置いて家庭を司るべき母親が十分なる感化薫陶を與へないやうでは迚も好結果を得ることは出來ません。子女一生の幸福は家庭の敎育に依つて支配せられると云つても大畧差支ない位です。

詰り人は働きの中に自分の樂みも幸福も求めなければならぬ、働くと云ふことは天の命令であります。働くと

云ふことは獨り女子のみに限られたことではありませぬが、當今の女子に最も其働きの現はれないのは皆人の慨かはしく思ふ所でありますから、私共は奮つて此缺點を矯むるに努めなければなりませぬ。家庭の中に大なる樂みがあることを知らない者は誠に不幸であります。子女の教育は其樂みの最も大なるものでありませう。又此働きと云ふことは習慣の力に待つことが多いのですから、子供を育てるのに餘程手加減が要ることだと思ひます。子女の教育を學校教育に任して、母親たるものが顧みぬのは殘念なことです。約めて申しますれば、是だけのことになります。

（完）

露國皇后のお嗜み

露國皇后カザリン第二世は甚だ書物好きでなか〳〵の本讀みでありました、皇后が文學上に貢獻されたことは隨分多いが其一例は有名なる佛國の大學者ボルテイヤデツデロウドの藏書を御買ひ上げになつたのでも解る、皇后は佛國哲學者達の親しい友達で又た尊敬者でありました、そして皇后は政治や政府に關する新しい學理を學ぶ爲に好んで此の學者達の著書を讀まれた、ボルテイアの藏書は七千部もあつたが今日では露國のハアミテイヂ宮殿の帝國圖書館の一部分を占めて居る、ボルテイアのために特別に設けられたる會館にはハウドンの手に成れるボルテイアの肖像が置かれてあります。

それから、皇后がデツデロートの藏書を御買上げになつた話が實に面白いです、これで此の皇后がどんなに怜悧のお方で又寛大な性質で御在すかといふことがよく解ります。デツドロードは自分の藏書が一萬五千弗の價値があるといふて居つた、ところがカザリン第二世は、一萬六千弗に買ふと申込まれた、その上其の賣買の約定條件として、この賣買はデツドロードの死ぬまで待たるゝことゝなつた、デツドロードは巴里を去らずに自分の書齋で圖書掛となることが出來、給料として毎年一千弗づゝ送らるゝことゝなつた、そしてカザリン皇后は自分の圖書掛に書を送つていふには自分は到底自分の圖書に心配をかけ度はないから、今後五十年の間圖書の世話もし、擴張もする爲めにかゝる丈の費用を送らうし五十年たつたらば改めて整頓もしようとて二萬五千弗の切符を封入されたといふことです

家庭月令（四月）

〔一日〕各學校新學年開始、〔三日〕神武天皇祭、我が皇祖神日本磐余彦天皇の神上りましましゝ日。〔八日〕灌佛會、此日は佛祖釋尊の誕生日とて、諸宗寺院に勤行あり、卯の花を捧げ甘茶を献る、〔十七日〕舊暦三月三日、此日より潮干狩の季節、〔二十五日〕端午の準備、本日より五月三日まで胄人形、大刀、幟の市立あり、男子ある家々にては鯉の吹流しを立て、武者人形を飾りて、端午節句の至るを待つ、況して今年は北狄征伐の時なれば、床の間のかざりも舊式以外に、聯隊旗や海軍旗や、玩具の軍艦や、大砲を据ゑて、今風に武装せらるゝなる可し。〔三十日〕天滿宮御衣祭。

〔氣　節〕「淸明」「穀雨」、百花漸く春風駘蕩として肌心地よき頃、二枚重ねに稍羽織の花見衣、いと輕げなり。

〔農　事〕麥の中耕を終り土寄をなす、床蒔の物移植に宜しく、陸稻の播種、床畑の手入、實見の播立等、皆な此の季節に於てす、野菜物にては晩胡瓜、西瓜、十六さゝげ、さと芋、西洋そら豆、西洋玉葱、西洋胡蘿蔔等の種蒔き、亦た此月に於てす。

〔園　藝〕楓、木犀、無花果、佛手柑の植替、枇杷の接木によろし。

〔食　品〕疏菜類——筍、早蕨、胡瓜、うど、さや豌豆、初なすび、蕈類。◎魚介類——初松魚、ひらめ、細魚、めばる、鰕　◎あひだ物——櫻餅。

〔遊　樂〕櫻花滿開、千草萌ゐ出でゝ野色殊に絢爛の好季節となる、若きも老ひたるも袖振りはへて、杖曳きて、或は軍歌歌ひて、郊外の散策を試むる最可なり、左れば諸學校にては此際盛んに修學旅行、及び各種の運動會を催す、又た此月中旬よりは汐干狩に出掛、小裾引からげてミルメ刈る磯に、魚介を漁ぐるの興み淺からず。

〔景　勝〕桃の名所は武州中野、熊ヶ谷、駿州桃郷、櫻の名所は東京上野、飛鳥山、向島、小金井、京都嵐山、大和吉野山。

〔日曜日〕三日、十日、十七日、二十四日、「祝祭日」三日。

新家庭

巖谷小波

▲新日本の女子

日本開闢以來、師を興して外國を征伐した事は、已に數回に上つて居るが、中にも明治の聖代に成つてから、彼の廿七八年役、北淸の役、それから今度の征露の軍と、前後已に三回に及んで、その間が僅々十年、長い歷史の上から見ると、殆んどのべつに戰をして居る樣でもある。

が、今度と云ふ今度の戰爭ほど、わが國に取つて大切な戰爭はあるまい。所謂る『晴れの戰爭』とはこの度の征露の役であらう。それは他でも無い、過る廿七八年の大勝で漸く世界の注目を惹いて、東洋にこの强國あるを知られたわが日本は、今度此度の戰勝で、遂に世界の强國として、萬國にその頭を擢んづるのである。

初は日本の日本であつたのが、一度び進んで東洋の日本と成り、更に進んで世界の日本と成るのは、取りも直さず、今度の戰爭の賜物であるとすれば、苟もこの日本國民たるもの、また之に對する覺悟が無くては叶はぬ。

新日本、新日本と、人はよく口癖の樣に云ふが、今日までの日本は、畢竟新日本の準備時代で、眞の新日本なるものは、今度の戰爭の後に於いて、初めて認むべきものではあるまいか。――余の所謂る世界の日本即ちその新日本である。

さて、將さに來らんとする、この新日本の新舞臺に大いに活動すべきものは、男子であらうか、女子であらうか？ 苟くも日本國民たる以上、敢へて男女の別を問ふ筈は無いが、余は既往の狀態に徵して、此際男子より女子に對し特に活動を促がし度と思ふ。

それはまた何故であるか？ 他無し今日までの活動準備が、男子に比して女子の方が、大いに欠けて居る

故である。さてその欠けて居る所は何所にあるか？少くとも世界的思想に於いて、乃至進取の氣象に於いて！

▲女子の歩調

試みに男女二人を列べて『前へ工』の號令をかけるならば、男は外輪に歩を進め、女は内輪に足を運ぶ、男は直立して前面に目を付け、女は屈んで地を見て行く。今日迄の日本はかうであつた。

されはこそ、男はいつも前に進み、女は兎角後におくれて所謂る雁行の有様を呈す。而も是が、必しもその散歩の時にのみ止まらず、凡ての點に於いて然うであるから、甚だ釣合が取れなく成る。準備時代の日本の社會が、兎角亂調子不揃ひであるのも、畢竟この故に過ぎぬのである。

されば、男の方で、その歩調を揃へる爲めに始終女を待ち合はせ、勉めて足を緩める樣にすれば成る程釣合が取れるかも知れぬ。が、それでは社會の進み樣が無い。

是に於いて、勢ひ女は自から奮つて、その姿勢を立て直し、男の足に後れぬ樣に、その歩を速めねばならぬ事に成る。——あゝ新日本の女たる者は、もはや内輪で歩るくべきで無い。況んや頭を垂れ、背を縮めて、シヤナラ〲と練り行くをや。

▲醜業婦に恥ぢざるもの

かう云へば我が淑女諸姉は、忽ち柳眉を逆立てられるであらう。が、試みに聞きたまへ！　諸姉は彼の醜業婦なる者に對して、内心恥づる所は無いか？香港に、新嘉坡に、浦塩港に、哈爾賓に、將た濠州に、西比利亞内地に、波濤を越え、山岳を侵して、身を異域に投ずるの勇氣、果して諸姉に求むべきであらうか。

無論彼等の業は賤むべく、その志も決して嘉すべきでは無いが、而も家郷を出で丶戀々たらず、外人に接して逡巡せぬ、その進取の氣概に於いては、男子も及

ばぬ所がある。

かくてこれ等醜業婦の、政府の嚴禁あるに拘らず、月に年に其數を增して續々輸出される事は、諸姉の大いに憂ふ所で、その憂ふ所以に於ても、余は頗る同意するのであるが、啻に之が輸出のみ制して、他に之に代るの進取策を講せず。醜業を營む者の他は、日本婦人として海外に出る者の、殆んど跡を絶つが如き觀のあるのは、何と恥かしい次第ではあるまいか。

多數の醜業婦を輸出する事、國辱は即ち國辱であるが、少數の正業婦だも輸出し難き事、是れ抑も國辱ではあるまいか。

▲進取の氣象

飜つて之を西洋の婦人に見るに、彼等は殆んど全世界を自國同樣に心得て、どんな遠くへでも氣輕に出て行く、所謂る傳道師布敎者の外、風俗視察、名所見物の爲めのみに我が邦へ渡來する西洋婦人の、年々その數を增すのを見ても、その一般を窺へるでは無いか。

元來彼等は、旅行を一種の學問と心得て居る。家庭に在る頃から已に然うで、もう中學時代の子供に成ると、男女を問はず、ちと長い休暇には、旅行に出るのを第一の娛樂とし、また豐かな家に在つては、只に自國の領土内に止まらず、家内中が連れ立つて、進んで外國漫遊の途に上る。

また交際社會に在つても、旅行の經驗の無い者は、話柄の種に乏しいので、自然もてが惡く成る仕末。之に反して、ちと珍らしい地方を視察し、奇談珍聞に富んで居る者は勢ひ一座に花を咲かす事に成る。否、この必要から起らずとも、彼等は先天的に旅行が好きで機會のある限りは利用して、新しい事物を察し、珍らしい地方を觀る事に、決して油斷せぬのである。

此等婦人の進取的氣象は、宜しく之を輸入して、我日本婦人にも、大いに養つて貰ひ度いと思ふ。

また結婚の上から云つても、彼等はその心の許す限り、毛色の變つた異人種にさへ、喜んで配偶を求めるのである、之をわが日本婦人の或者の、臺灣、北海道

はさて置いて、東京から九州へ縁付くをさへ、兎角尻込したがるのに比して、正に霄壤の差ありと云ふ可しだ。

▲日韓の縁組

日露の開戰は導火線と成つて、多年吾々の希望して居つた、日韓同盟の條約が成立した。是れ取りも直さず、日本と朝鮮との縁組である。云ふまでも無く、日本は婿、朝鮮は嫁と云ふ役廻り。

然るにその婿殿は、増々その器量を上げて、社會の信用もいよ／\厚く、地位も段々出世して來た。さて嫁御は如何であらう？

家柄は流石に惡くは無い。が、近來家運拙くて、肝腎の嫁御の教育も十分ならず、隨つてその性質も、甚だ内氣な、寧ろ意氣地の無い方である。

して見ると、恰も當世風の紳士の細君に、田舍の箱入娘と云ふ格で、その縁甚だ釣合はず、末覺束なくも思へるが、其所がまた婿殿の腕次第で、その田舍出の箱入娘は、當世流の良細君にもなれば、また、一生引ずりのお神さんにも成る。

元より夫婦は一体一心でなくては成らぬ。夫の短は婦の長で補ひ、婦の弱は、夫の强で扶けて、初めて圓滿な家庭が出來るのである。

若し夫れ、朽木の遂に刻み難く、その嫁御到底物に成らぬとあつては、それでは所謂百年の不作、所詮荷厄介たるに過ぎぬであらう。

それにつけても、婿殿の是からの氣苦勞、お察し申さゝるを得ないでは無いか。

▲女子の獨立力

縁組の序に云ふが、凡そ日本の女ほど、氣の毒なものは無く。これでは成る程男尊女卑で、婦は夫の奴隷たるに過ぎない理由も一通りはあると思ふ。それは何か？第一女子に獨立心が乏しく、よしその心はあるとしても、その力の缺けて居る事が即ちその原因で。これでは成る程男子と列んで、どうしても之に遜れか

かるか、左なくば一步後れてゝなければ、道を進む事が出來ない筈だ。

試みに問ふ、今の多くの人の婦が、その夫の手を離れて、その遺產を少しも恃まずに、よく獨立し得る者が幾人あらう？

「持參金嫁無け無しの鼻に掛け」とは、例の川柳子の惡口であるが、この鼻に掛け得る丈の、持參金ある者はまだしもよい。若し夫れ身に持參金も無ければ、腕に覺えの藝も無い。かいなでの細君に至つては、その高等下婢視せられ、將た、單に子孫繁殖器械としてのみ、僅かに重寳がられるに過ぎないのも、強ち無理は無いかと思ふ。

然し、眞の夫婦たる者は、只愛のみでは賴もしくない、即ち之に伴うて、互ひに敬するの意が無くては、立派な家庭は出來ぬのである。

これを今日の日本では婦の方では夫を敬しもすれ、夫は婦を愛するのみにて、敬する者は甚だ少い。これは抑も何の故であらう？

否、今日の日本に在ては、多くの人の婦たる者の、その夫に愛せられん事のみ希ひ、之に敬せられやうとの望みは、露ほども持たぬ氣に見える、かくしてその心安からば、寧ろ天下太平なるかな！

戰爭が始まッてから日本全國の屈強な働らき人は大槪徵集されて交戰に從事する事となりましたから國內の生產業は自然手薄になッて參ります、三ヶ月や四ヶ月の事なら左ほどでもありますまいがこれが一年二年とつゞいたらばきつと生產事業に大影響を及ぼすだらうとおもひます。さなきだに中流以上の日本の女子は生產といふ事には平常あまり重きを置いてをりませんから、こうなるといよ〳〵國力に影響する處ろも自然大なる譯ですから、從來男子の手でやつた事もなるべくは女子の手に引受けてやらねばなりませんそして平日五時間働く處ろは此の際七時間も働らくやうにしてその埋合せをしなければなりません。（女學記者）



海軍中將伊集院五郎氏夫人

中村鈴子

夫人繁子は舊鹿島藩士大野義方氏の長女にして明治三年一月東京に生れ幼より雅趣に饒み華族女學校へ通學の傍ら繪畫を習ひ風月を樂み其朋友より仙骨の評を博するに至る明治三十年今の海軍々令部次長伊集院五郎氏に嫁してより善く良人に仕へ義子を愛し家政整理に全力を傾注せり

日枝神社の鬱然蒼然たる森を西に控へ、桂首相官邸の裏柵を東南に望む處、これぞ海軍々令部次長伊集院五郎氏の御邸であります。黒い冠木門を入り兩側に檜、多羅葉を交互錯綜して植ゑられた間をダラ〳〵と登り陶製の大きい水鉢を置かれた舊式御玄關に伺ひ、金地に白牡丹を畫いた黒塗縁の大衝立を廻つて、和洋折衷の應接室へ案内されました。檜の柱、透彫の承塵艶かに中央には大テーブルと萠黄蒲團の椅子五六脚と染付の火鉢を据ゑ、紫檀の卷葉入れと、蛇頭に留まる鷲形の陶製灰皿はテーブルの上に並び、御書棚には印籠、蛙の置物なぞ適宜に配列せられてあり。特に目を引くのは盆栽の寒梅一對で、滿枝の蕾綻びて清香室に滿ち、あしらはれたる松竹と映發して、如何にも氣品高く見受けられました。記者が此室に入るや否、金色の唐紙を開いて速かに出で迎へられし夫人は、焦茶の米澤飛白の綿入に、紺地栗梅縞萬筋の糸織の羽織、藍鼠地に霰小紋の縮緬の帯側に都じめの帯止め、藍紫の襦袢の襟下に白い肌衣を重ね、總て御年齢より質素な御服裝の上に、油氣のない髪を無造作に夜會卷に結ばれ、御化粧の痕跡は微塵も見えませぬでしたが、天成の麗質は自ら光彩を放ち、中高な瓜核顔に狹い御額、切長の睫毛の長い御眼元に臥蠶の樣な眉毛は、白い肉色を一層引き立たせ、すらりとした脊格好も單に優艶なるに止らず、凜然たる御風姿は自ら表はれて見えました。

▲御両親

私は無學無識の上に少し變り物で、種々な趣味が無い方ですから、迚も御書き下さるやうな御話が出來ないので御坐います。いつたい私は一人子で大切に育てられましたが、父が非常に嚴重な昔堅氣な人で、出歩行も容易く許しませんでしたし、母も亦規帳面で御坐いましたから、本當に窮窟に仕込まれました。それに年頃から一通りならぬ苦勞を致しました。最も金錢上には餘り難儀も致しませんが、精神の難儀は恐らく私位致した者は多く御坐いますまい。



▲妙齢にして寡婦となる

華族女學校は卒業一年前に退きまして、從兄を養子致し小兒一人生けましたが、其兒は直に病死致し、一年經たぬ内に配偶も亡くなりました。私は斷然生涯獨身で暮らさうと決心しましたが、兩親も老先長い者が獨りで過すには何か一つ快樂がなければと心配致し、私が幼少より美術を好んだ所から、瀧和亭さんに願つて畫を習はせました。私も好む道ですから一心不亂に勉强したので、出來ない乍らも人様に弟子を取つたら如何かと仰しやられる迄になりましたが、父が堅い人で「決して營業的にするな、精神の快樂にせよ」と申して承知致しませんでした。で御坐いますから、私は長い年月寂しい生活を致して

唯だ月花を友とし慰むばかりで御坐いました。其間には種々な感に打たれ、又精神上に非常の苦痛を覺ゆることもありまして、熟々此世の快樂が厭になつて、悟道の人と申すと大層ですが、先づ仙人のやうな心持になつて仕舞ひました、其うち母に死別れまして益々氣力を失ひ、遂にノイローゼに罹つて心神共に大層衰弱致し、橋本さんも迚も全治は覺束ないとまで言はれた位でした。高崎正風は母の兄に當りますが、私を深く愛して居りましたから、親も及ばぬほど行末の事なぞ配慮して呉れ、私が病體になつたのを非常に心配至したのです。

▲再婚

私は前申す通り生涯獨居と決心して動きませんでしたが、高崎の伯父は『未だ三十歳にも足らぬ身ではあり殊に親一人子一人と云ふ寂しい境界でありながら生涯寡居すると云ふことは只だ寂寞な家庭に葬られる樣なものだし又父なき後に如何なる誘惑や災難に罹らぬとも言へない彼是を思へば今の内に再婚するに如くは無からう』と勸めたのです。併し却々決心を變える氣は無かつたのですが、圖らず當家へ參ることになつたと申す理由は、誠に不思議な緣で、私は今の主人とは全然相知らず却て先妻と知己であつたのです、伊集院が未だ中尉か大尉位の時分でしやう、外國へ參つて居た留守中、家も近處ではあり同じ小學校へ通つた先妻ですから互に往來して善く私の境遇や氣質を知つて居たのです、其うち伊集院の家は麻布へ轉じまして暫く打絶えて居つたのが、後伊東(祐亨)さんの園遊會で久し振りに面會しました、スルト私の窶れた姿を見て非常に氣の毒がり、それから伊集院に何卒良緣を見付けて上げて下さいと始終話して居たさうで……伊集院は私を一度も見たことはなくても私の履歷だけは先妻から聞いて善く知り拔いて居たので御坐います。それで男の子を二人遺して病死した細君の靈の爲めには、平生其滿腹の同情を傾けた者が宜からう、且又愛子の爲めに永い年月情を苦めた者は善き母となつて呉れるだらうと云ふ所から、私をと云ふ事に話が始まつたの

で御座います。

▲願くば慈母とならん

父は良縁ではあるが、義子のある處へはと心配致しました。併し私は又義子がある家からの申込ゆゑ、堅い決心を翻へした次第なのです。何故と申しますと、私のやうな不束な者を達てと望まるゝのは最愛の子供の爲を思はれるからで、却て盡すべき義務が存在して居るだけ希望があるのですから、身を粉に碎いても遺子を育て上げて慈母と爲りたいと云ふ決心で此家へ參つたのです。

▲姑息の愛を捨つ

子供は年兒で當年十二歳と十一歳になりますが、揃つて性質が善いので仕合で御座います。私は丁度五歳と四歳との時から育てましたが、子供も眞の母と少しも變らず慕ひますし、



私も亦日増に可愛くつて堪らなくなりました。併し姑息の愛に溺れてはならぬと愼んで居ります。いつたい義子には姑息の愛を施さぬと何となく殘酷のやうに噂される通弊がありますから、繼母の位地に立つて姑息の愛を捨てるのは却々容易でありません。けれども固より身を犠牲にする積りで、最初から十分規則正しく仕込みましたが、伊集院も亦善く私の主義精神を了解賛成して呉れまして、夫婦の心を一つにして育てて居ますから、子供も先づ思ひ通りに善い道を踏みますし、家内中誰も不快の感を起す者なく、今日は誠に幸福な家庭で御座います。

▲方正なる兒育

ちと遠方ですが他に較べると特別に善い校風があるので、兩兒とも一つ橋の師範校附屬小學校へ通はせます。

遠方でも雨天に休ませたり、遅出、早歸りさせたりする事は決して致しません。子供も能く時間を守つて後れず參りますし、且運動の爲に身體も極壯健で御座います。朝は皆と一緒に起してそれから自分で蒲團を疊ませますが、これも壓制でさせずに恰んで致すやうに、最初は御前達は上手だと褒めたり、今に兵學校へ寄宿した時蒲團の疊み方一つ知らぬと笑はれると不可と勵ましたり、種々に致して仕込みましたが、今では自分だけの始末は決して人手に掛けませぬ。

▲炬燵を避かす

いつたい上流社會の子供は、召使の多い爲に安逸に流れる弊がありますが、中以下の子供でも安逸に流れることが往々あつて、甚だ宜く御座いません。軍人の子供は尚更幼少から安逸に流れることを防がねばならぬと存じて、私は寒中でも寢衣を暖ためたり寢床へ湯婆を入れたりする事は許しません、私の家では炬燵と云ふ物を置きません。炬燵を置き寢衣を暖めなどすれば皮膚を弱くします、寢衣は袷にネルの單衣を重ねるだけです。

▲間　食

子供に菓子や果物を定りなく與るのは不可と思ひまする。私所の子供は其れだけは正しく仕付けましたから、定つて與る物だけに滿足して、決して餘分に欲しがりません。其の代り三食の滋養物は十分に食べさせます。

▲緣日步きを禁ず

緣日へは何處のでも一度も遣つたことは御座いません。併し招魂社の祭の時だけは遣つて頂きたいと、私から主人に申しました處、主人も却々嚴重な人ですから、『軍人の子供だから招魂社に禮拜して來るのは宜しいが決して見せ物へ入つたり無駄な物を買つたりする事はならん』と申し聞かせ、下男を附けて遣り、唯だ參拜だけで直ぐ歸宅させました。

▲父母の言を一定す

折角父親が言ひ聽かせても、母親が又異つたことを言ふと何にもなりませんから、私の宅では如何な些細な事

でも、兩親の言葉が一致するやうに致します、これは一番大切だと存じまして。

▲小兒の美術心

不思議なもので、自然意氣が通ずるとでも申すのですか、宅の子供は二人共私の好む美術が好きで御座いますよ。暇さへあれば畫をかいて樂んで居りますので、私が他出して歸りますと、玄關へ列んで『御歸りなさいまし、へーこれを』と言ひながら乾度懷中から畫を出して見せます。私はそれが何より嬉しくつて小さい時分からの畫を斯樣（手にて一尺ぐらゐの高さを形容さる）に貯めて居ますよ。イエ武者なぞより花や風景を畫きますヨ、これも私に似て天然が好きなのでしやう。私が病氣の時なぞは、種々な珍らしい草花なぞ採つて來て枕元へ置いて呉れます、私が好む所を善く知つて居りますこと……實に優しいもので御座います。

▲召使

召使は先々からのが居りまして、子供の極小さい時分から世話を致した婆アやも居ります。それで私が子供を敎育するに就て最初チヨット困難な場合もありましたが、何處までも已れを正しくして盡さうと云ふ誠を以て彼等に對し、又十分に目を懸けて遣ひましたので、彼等も漸々私の心と一致する樣になりました。總て自分の身を正すことを先にさへすれば、決して迫害の附け込む餘地は無いと思ひますヨ。

▲先妻の靈に對して

私は元來無慾の人間である上に、以前に較べると今日は苦のない躰になつて難有い事だと思つて居ります私の幸福であるに付けても常に先妻の事を思ひます伊集院が未だ小身の內から世帶を繰廻し、長の洋行中留守居で苦勞ばかり致し、漸と少し安心の場合になつて子供を生けたと思ふと亡くなつたのですから、實に氣の毒で堪りません。

▲社會より家庭

近來は婦人が社會に盡す事業が盛になりまして、結構な事だと存じます。私のやうな者でも何卒出來るだけ

は務めたいと思ひ、愛國婦人會、育兒會、教育會なぞ種々な會に加はつては居りますが、如何も出席する次第に行きません。これでも主人の出入から子供の世話を細かく注意しますと、相應に一日の用はありますし客も隨分多い家ですから、會毎に出掛けては自然家事が疎かになります。それで皆樣には濟みませんが、名前ばかりの會員となつて居るのです。私のやうな不束な者には迚も二た道は歩けません、教育に力を御盡しになる方は格別、私共は幾ら社會の爲に運動しても家庭が亂雜であつては何にもならぬと存じて、先づ家庭を完全にすることを專一の責任と致す積りで御座います。無益な費を省いて慈善の事に用ゐ、幾分か其方で御助け致したい精神は失はぬ樣に致して居ります。

▲活人畫

彼の時は丁度伊集院が洋行中でしたから出る暇がありましたので、それに私も一度は教育事業の爲に出て見たいと云ふ考もありました上に、永らく御世話になつた下田さんの發起ではあり、出ることになりました次第です。尤も世間では下田さんを彼是申すもの丶、私に取つては師弟の間柄で……學校で先生の講義を聽いて修身上裨益を得たことも多かつたのですから、其恩義は忘れてはなりません。最初は彼樣な大掛りの積りでは無かつたのですが、西洋人を呼ぶには却々尋常の音樂位ではと云ふので、漸々仕組が大袈裟になつたのです、衣裳道具の藤原氏以後の物だけは、大概古い華族樣方の御所持品で間に合ひました。私の大葉子の衣裳は高崎の伯母が以前着た打着の白が丁度上古の物に適當なので、袖を卷いて遣ひました、私は彼の催しの爲に大層歷史服裝の研究を致しましたね。前々から皆樣の御骨折は一通りでなく、些細の事まで一々其道々の先生方に尋ね、或は前賢故實などを調べ、三四日寢ずに準備したのです。

▲父上への孝養

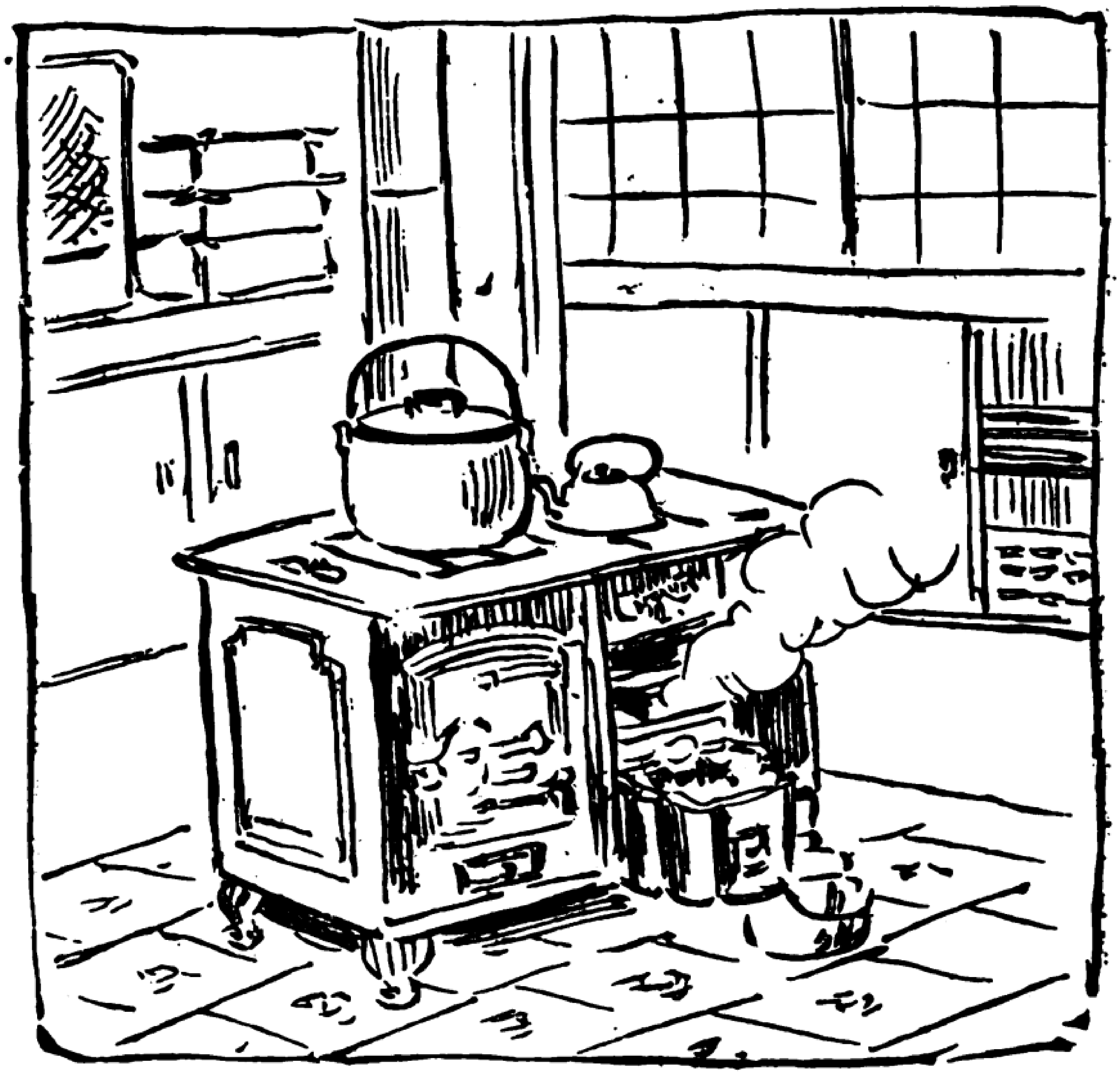
此家へ嫁する時、唯一人の父親を終身世話したいと云ふ私の希望でして、伊集院も是非自分の邸へ迎へたいと申しましたが、父は自分が建てた此廣い家を空ける

も惜しいと申しますので、私共夫婦が麻布から此方へ移るとになつたのです。父も老後の安心を得たと申して喜び、私共と一つ食卓を圍んで樂しい家庭を作つて居ります。

▲臺所の改良

此家は明治十七年に建てたので、臺所も大分損じて參りましたから、これを機會にして豫て計畫して置いた様に少々改良して普請致しました、未だ悉皆は出來ませんが、疾くから方々樣の御臺所を拜見致して居ましたから、彼是參酌して衞生上經濟上種々工夫したので御坐います。

記者は早速御臺所拜見を願ひ、夫人は御自身案内せられました。入口は廣い廊下で、左手硝子戸棚は何物も置かずに御膳立の場所に備へ、下戸棚に吸物椀皿、德利等客用の品あり これに對する部屋に火鉢及び茶菓の器具一切を置いてあります、臺所は凡そ十八疊程の板の間で、竈は中央に据ゑ、其周圍には陶製方形の板幾枚を敷き列ねて、火の元を安全にせられてあり。竈は大きな英國製鋼鐵張りで一個所に燃火すれば七八個所にて煮焚の出來る仕組になつて居ります。夫人は手づから竈の使用法を示されつヽ、一月から此竈で石炭を焚て居ります。石炭は炭薪やコ



ークスより高價ですが、其代りに火力は一番強く一個所で僅か燃せば、此通り一方で手桶に四杯程の湯も沸きます、一方では獸鳥肉の蒸燒、麵包燒、燒芋など十分出來ます、上面には鐵瓶でも鍋でも幾つか一度に載せて煮え立ちます。以前のやうに七輪にも竈にも火を起さずに濟みますから、差引燃料は儉約になる積りですが、尙當月一ぱい試さなければ正しい比較は取れません。何にしても便利は實に便利ですネ。私の宅のやうに客の多い家で、一時に御飯も御汁も拵へ、御肴も燒くなどの場合に、此竈なら一人でも立ろに準備が整ひますからネ。これは西洋人の拂物を買ひましたから。上等でも割合に廉で四十五圓でした、煙突は七圓五十錢、此大鍋が五六圓でしやう、これは主にスープ鍋で御飯は焚けないと云ふのでしたが、私は炊けない道理は無からうと思つて試した所が實に善く出來ます。日本の釜のやうにおねばが出るヿが無いのですから、御飯に甘味が多くてふつくりとして結搆に炊けますこと。



夫人の注意周到なるヿの二三を擧ぐれば、臺所の床下は悉く煉瓦を敷いてセメントを塗り、濕氣及び失火の患を防ぎ、夏日食物を貯ふる戸棚は北側に造り床板は小孔を澤山に穿ち、中段は細長く穿つて冷かな空氣が下から流通する仕掛にし十分に腐敗を豫防してあり、且板の小孔は細かい鐵網を張つて蠅が這ひ上らぬ樣に用心せられ、又戸棚の世話の燒けぬ爲に出入口は東に三尺、西に一間だけに限り、外の羽目に悉くラバロイトを塗つて板の腐るを防ぎ、流しは亞鉛を張つて汚物が浸み込まぬやうにし、且此流しは大小二個に分けて茶器と魚血を別々に洗ふやうにし、臺所へは水瓶手桶を一切入れしめず、唯だ圖の如き壺を以て鐵管より少しづゝ汲み取る仕掛になつて居ります、水を貯へ置けば腐敗し或は黴虫を生ずるからです、柄杓を用へば握つた柄が飲水中に沈み去るヿあつて不潔であるから柄杓は用はせないのであります、尙ほ到來の外國酒を貯藏する穴倉、煉瓦造り石油の貯場、釣[illegible]

帳、煙突上部周圍に張れる鐵網など何れも夫人の新案で、火の元より防腐法、鼠族蟻虫の防害に就て、寸分の隙もなく計畫せられ、御普請の際は自ら大工の墨壺を取つて棚の寸法を指圖されたとの事です。記者は夫人が幼より文雅風流の嗜好に傾かれしに似ず、却て實務の才幹を有せらるゝに驚きました。彼處此處を拜見し元の御座敷へ戻る時、書生部屋を示されて、

此處は御普請中ですが、子供は書生の側に居ることが多いものですから、折々親が見廻らなければなりません。それで硝子窓を廊下に設けてちよい／＼覗いて注意する積です。

夫人は應接室に珈琲を侑め、南の椽側へ出でられ、記者に申さるゝやう、櫻の時分は彼の山王の森と庭の樹梢に淡紅の雲を帶びて何とも言はれません。此方の崖下に列んだ楓は、私が幼少の時分、芽生を一本づゝ折箱に植ゑて樂んだのが皆成長して秋の眺めの役に立つやうになつたので御座います。

▲衣服

私は世の中の慾を忘れた人間で、化粧衣服の觀念がありません、書の趣味で衣服の配色など判斷する心だけはありますが、實際には質素一方で御座います。如何致して我々の身分で少しでも贅澤を致したら、忽ち借金が出來ます、私は洋服なぞ一度も着たとは御座いません、外國人の所へ出ますにも紋付で通して居ます洋服を作る費用を種々有益なる方面に活用致したいと思ひまして。

隔てなき四方山の御話しに思はず長座致し、御玄關に立ち出でた時は、そぼ降る小雨靜かに、大水鉢の瑠璃色一層濃厚に見受けられましたが、夫人は此水鉢を說明せらるゝやう。

これは横濱の眞葛香山の作です。伊集院が昨年英國の戴冠式へ參つた時、彼地の貴紳に珍品を頂いたので其返禮に香山の花瓶を贈りました。其花瓶を買ひに夫婦して香山の家へ出向いた節、此水鉢が後園に轉がしてあつて「佛國博覽會へ出品する積りの出來損ひゆゑ今

に壞して了ふのだ」と聞いて貰つて來ました。尙此上を極彩色するのださうですが、半出來が又一層雅味があると存じます。本當に仰しやる通りヌボー式で御座いますよ。

結末の御言葉を車上に伺ひつゝ、櫻樹を廻つて辭し去りました。

海軍少將 出羽重遠氏夫人

夫人ゆき子は舊會津藩士大沼新城氏の三女なり慶應元年十月を以て生れ明治十四年を以て今の海軍少將出羽重遠氏に嫁す天性沈着質實にして善く夫に仕へ能く家を齊ふ五男一女を擧げ前途頗る多望なるは夫人に取りて何よりの幸福ならん

夭々たる桃の節句は早や明後日と差迫りたれば、人形を抱えて徜徉する振分髪も海軍萬歳を連呼する男子の後に從ひて軍遊びの群に加はる樣いと〳〵勇ましう感せられ、慶應義塾の運動場に抛げ合ふボールの音も何となう遠く砲聲を聞く心地する時、三田綱町なる出羽海軍少將の御留守邸へ刺を通じて令夫人へ御取次を請ひましたが、紹介なきも快く通され、御玄關の眞正面に掲げられたる軍艦の匾額を拜見しながら十二疊の御座敷へ案内されました。斯くて直に出迎へられたる夫人は、縞紬の綿入に更紗の下着を重ね、黒繻子の帶に焦茶の米澤飛白の羽織、紫紺縮緬に蔦を白く染拔いた襦袢の衣紋も正しく、品よき丸髷に薄鼠ナマコの「てがら」、蒔繪の櫛笄を挿されて鬢に一筋の亂れ毛もなく凛とした御眼元、濃い眉毛に嚴正な御氣象は見ゆれど、初對面の客に隔てを置かれず、締つた口元に始終愛嬌を含まれて居られました。郡内の坐蒲團と染付の手あぶりを勸められ、慇懃に御挨拶ありて――

▲留守居

留守中は種々と心配も御坐いますが、引き續いて大勝利のお噂と皆樣の勇ましい御働きを伺ふ度毎に誠に心嬉しう存じまして、此後も何卒吉報あれかしと祈つて居ります。當節は何處の奥樣方も篤志看護婦の方を御熱心に遊ばして結構な事だと存じます。私も何卒出度と存じますが、一人の姑は良人の弟が陸軍の軍人で越

後に居りますので其方へ參り、當方は子供と召使ばかりですから、私が不在に致せば折角御出の御客樣にも失禮になると存じて、ツイ〳〵怠つて居ります。

▲御便り

第一回海戰後に十一日附けの手紙が十七日に屆きまして、我軍大勝利と云ふ事だけを申し越しました。ハイ戰地からの手紙は御用船の都合で遲速が御坐いますので、此度のは少々遲着の方で一週間目で御坐いました。佐世保に居ります頃は大抵三日目位……出發の際は大層喜んで書面を寄越しました。當年はお寒さが強う御坐いますから、彼地は尚更如何樣であらうかと存じ種種防寒用の下着など送りました所が、此地で想像致す



程でもない上に、「餘りゴロ〳〵した下着を着ると軍服の鈕が合ないで困るから送るのは止めて呉れ」と申して參りました。

▲御子達

女の子は當年三歲のばかりで、男の子は五人御坐います。如何も男の子は女と違つて優しい點が無くつて宜けません。ハイもう每日〳〵御父樣が何卒御無事で御手柄遊ばすやうにつて其樣なことばかり皆な申して居ります長男は二十一歲で唯今江田島の海軍兵學校へ參つて居りますので……ハイ皆一腹で長男は私の二十歳の時に出來ましたのです。イエ若い所ぢやア御坐いませんん、私は最早お婆さんで御座いますよ。乳は私のが少

いので半分は牛乳で育てました。次男は攻玉社へ、三男は第一中學校へ參り、四男と五男は未だ小學校へ通つて居ります。

御話半ばに御女中が御來客を取次ぎ、夫人はチツョト失禮をと奥へ立たれました。此時御玄關の次のお部屋で、小學校から歸られた令息が書生さんを相手に復習せらるゝ聲が聞えました。此御座敷の東側に當る床の間に掛けられたのは張水と落欵せる岩上猛虎の大幅、紺地錦の表裝で其配色筆致は善く逞ましい勢を寫してあり、御床左手の隅に御主人の寫眞を立掛けられ、其前に福壽草、紅白梅、萬兩などの鉢植を列べられてあるが、猛虎と花卉の配合は宛然猛將賢婦の伉儷のやうでありました。尙ほ相隣れる違ひ棚には、積み重ねたる寫眞帖、倫敦議事堂の墨畫、英國古代軍人の鑄物、砲彈の雛形など位置よく配列し、東西の小壁には相對して鮮明な軍艦の寫眞額を掲げられてあり、硝子障子から透き見ゆる廣い御庭には、檜、小松、楓樹など錯綜し、四時近い日ざしを受けた芝生の色も一層熱鬧に見へました。記者は尙ほ南の欄間に掲げられた艦火事の水彩畫に眼を移し、如何にも面白い筆と存じて手帳へ寫し始めた時夫人は再び入り來られ

何卒御ゆるり御寫し下さい。それは良人が英國から持ち歸りました畫で御坐います。御承知の通り英國は場所柄故か畫にも艦のが多い樣ですこと……、ハイ私は二三度横須賀へ御艦を拜見に參りましたが、梯子は其畫の通り急ですから登降に却々危い心地が致します、それでも艦の御方は馳けて登り降りなさいますから子……善く御慣れたものだと存じますよ。

▲常磐艦の御話

御座敷の東西小壁に掲げられたる扁額は、御玄關の眞正面に掲げられた扁額と共に、何れも常磐艦の畫であるさうで、夫人の御話は左の通りです。

その軍艦で御座いますか、常磐艦で御座います、玄關のがアームストロングに於て船卸しの時の寫眞ですが、丁度去る三十一年の五月に良人が英國へ受取に出

掛けまして、翌年七月に歸つて參りました。いつたい艦を受取るのは、半成の時――家に譬ふればホンの四本柱が立つた頃に、日本から參つて出來上るまで監督致すので御座います。艦内に水兵の臥床が出來ました頃に、又々副艦長が水兵を百人も二百人も連れて參り、新造艦に乘込んで歸つて參ります。今度の日進、春日は御時節柄で、此方から受取りに御出でにはならず、英國の方が我も〳〵と望んで乘つて來られたさうですナ。船卸しは外廓が略出來た時、海へ卸して其れから内部の造作にかゝると申す事です。

▲艦中の飲食料

何から何まで陸と同じで、少しも不自由は無いさうで御座いますが、矢張り罐詰物も必要で、肉類、野菜、果物などの罐詰類が澤山入りますとの事。又飲料水が不足の場合には、鹹水を蒸溜して用ゐますので、少しも不自由は無いと申します。

▲御主人の平生

一つは郷國風で御座いませうが、良人は謠だの何だのと申すことは一切不調法で、唯だもう勤務一方の人で御座います。それに幼年から艱難苦勞して是迄になつたのですから、『昔を忘れてはならぬ、昔の事を考へれば、唯今の身分は勿躰ない位だ』と申して、自分は勿論、子供達にも贅澤めいた事は嚴しく戒めて居ります。『汝達は靴が如何だの草履が如何だのと言ふが、拙者な[illegible]は竹の皮の草履を穿いて學塾へ通つたものだ、今の少年は贅澤だから志が堅くないのだ』とは毎々出る訓言ですよ。住居や衣服などの躰裁も少しも搆ひませんので『他が何と言はうと拙者は拙者の主義で通す』と申して居ります。家内中夏冬共に遊樂の旅行など致した事は御座いませんが、仕合に皆な身躰は壯健に暮して居ります。

▲御主人の昔

會津戰爭の際、白虎隊に加はる所でしたが、年齡が一つ足りなかつたので入れませんだつた相です。ハイ郷國では白虎隊は却々有名なもので御座いまして、彼の時死に損なつた人が一人唯今でも殘つて居ります。良

人は其後父と別々になつて靜岡へ參り、學僕などを致して隨分苦學致したので御座います。

▲三回の出征

日淸の役には、扶桑や赤城へ乘りました。黃海の戰に於て、坂本さんは良人と交代なさるや否、直に戰死なさいました。彼の折は隨分彈丸が傍をすれかすつた相ですが、運よくかすり疵も受けませんでした。彼の折持ち歸りました劍は、遊就館の戰利品陳列塲へ出して御座います。其次は三十三年の北淸事件の際にも乘艦致し、今度で三回戰塲に臨みますので、軍人としては此上もない滿足で御座います。

▲夫人の幼時

私が子供の時分、會津の風習として、女の子の敎育は絲取、機織、裁縫などを主に致して、遊藝は勿論、お茶湯や活花は餘り仕込みませんでした。特に武家では頑固で、少し三味線でも彈く者があると、彼の女は浮氣者だと言つた位です。私は其樣いふ風習の中で育ちまして、明治六年に出京後も種々艱難の境遇にばかり居りましたので、學校へもろく〳〵に參らず、遊藝は出來ず、誠に不調法な人間で御恥かしいので御坐いますよ。ハイ絲取は八歲位から致しました、鄕國では絲取と機織が出來なければ緣付けないと申したもので御坐います。髮も一般に十一二歲位から獨りで銀杏返しに結ひ習ひ、追々に島田、丸髷、天神髷、三つ輪、何でも獨りで結ふ習慣でした。それゆゑ女髮結は殆んど無い位でしたが、近頃は此風習が悉皆變つて、皆な髮結の手にかゝります。樂な方には流れ易いものですからね。

御話は愈々佳境に入り思はず長座致しましたが、夫人の唐紙を開いて女中に御茶取換を命せらるゝ時、チヨツト拜見したのは次の室に賑々しう飾られたる雛壇、其前に喜び遊ばるゝ幼き令孃を御覽なさるに付け、一日も早く皇軍全勝の局を結びて御主人凱旋せられ、五人の令息に手柄話せらるゝを御待ちなさるであらう抔、勝手に想像致しつゝ寫眞を拜借してお別れ致しました。

（完）

水彩畫まなび

三宅克己

▲用紙

紙は水彩畫の爲め特にワットマンと稱する畫紙がありますが、然し是は價も割合に高く其保存も稍々困難でありますから、最初の間は普通の畫用紙にて少しも差支ありません、然し紙質は可成其の堅きものを撰擇せねばなりません、臨摸するに際し、紙は可成畫板に水貼するを此上なき事としますが、極めて簡單なる圖を寫す等の折には四隅を留鋲にて留置くも妨はありません。

▲畫板

畫板は杉或は檜等にて造りたるものを一番適當とします、然し其他厚紙等にて造りし品もありますから、輕便法を取まして是等を使用するも差支はありません。

▲繪具

水彩繪具は普通白葉鐵製の箱の中に一通り揃ふて居るものがあります、尤も其の品には種々なる種類がありまして、其價も又夫々違ひますが然し舶來品なれば、何れにても一般の用は辨じますれば初めより高價なる品を備ふるの必要はありませぬ普通色數は先づ左の十二色あれば不都合を感せぬことゝ思ひます。

Crimson Lake.	Vermilion.	Gamboge.
Yellow Ochre.	Light Red.	Burnt Sienna.
Emerald Green.	Prussian Blue.	Ultramarine.
Indigo.	Sepia.	Chinese White.

尤も此の外に澤山の色がありまして複雜なる繪を描くに夫々必要なる場合もありますが、然し右の色を工夫して用ゆれば如何なる色合でも大抵は出すことが出來様と思ひます。

▲筆

筆にも又種々樣々なる物がありまして、其何れを撰むべきかは初學者の往々迷ふところでありますが、然し先づ最初は左樣多くの種類を要さぬことゝ思ひます、先づ大部分を塗る稍々大なる筆と細部を描く細き物と且つ又極めて細密なる物を描く細筆と此三種あれば一般に差支はあるまいと考へます。

▲鉛筆

輪廓を描くに用ゆる鉛筆は其質稍硬きものを適當とします、HHなど最も宜敷かと思ひます。

露國皇帝戰勝の大祈禱

二月九日午後四時各宮に於て擧行せられたる祈禱式は殆ど空前の光景を呈せり
則ち皇帝の勅命に從ひ大臣宮內省官吏高等官令夫人等より成る一大群集は聖ジョージホールに集まりしが其中男子は皆盛裝せり人皆莊嚴の感に打たれ暫時の待つ間も耐へ難く思はれしが稍久うして便殿の扉は開放せられ皇帝は第一近衞聯隊の軍服を着せられ皇太后は眞珠色の服を召され寶玉の飾を着け給はず皇后は平素より御好みの白と銀色の衣を着けミケール大公及皇太子を伴せられ之に從ひ給へり其他各皇族悉く順序整然容儀堂々として之に次げり鳳列漸く進みて海軍將校の一團に近かせられしとき陛下は殿に此に向ひ露語を以て例の如く「朕は諸士の健在を望む」と勅諚あり將校一同幾度か大聲に陛下の萬歲を高唱して之に奉答し士氣凜然たる光景を呈せし中に鳳列は徐々に玉步を運めさせ給いて禮拜堂に入り祭壇の前に進みて低頭敬禮して立たせ給へば唱童及び僧侶等は希臘敎の朗々たる祈禱を行ひしかば此廣からざる宮中禮拜堂に立錐の餘地もなく集まりたる群集は强き宗敎心に感激せしめられたり此祈願式中跪拜せしもの多く又床上に低頭したるものさへありたり宮中の祭官は副牧師を從へて恭しく皇帝の前に進み聖餐杯の中なる神水を陛下に撒布して十字架を捧呈すれば陛下は熱心に之に接吻し給へり祈禱式終りて皇族一統徐々として入御せられ宮城に還行せられて後皇帝は更に一場の勅宣を給ひしが黃昏漸く深く祈禱式終らんとする前天地既に暗黑なりき

大僧正祈禱の光景





戰時の家事經濟

塚本はま子

恤兵―献金―國庫債券の應募―
勤儉―節約―出征軍人家族の扶助―

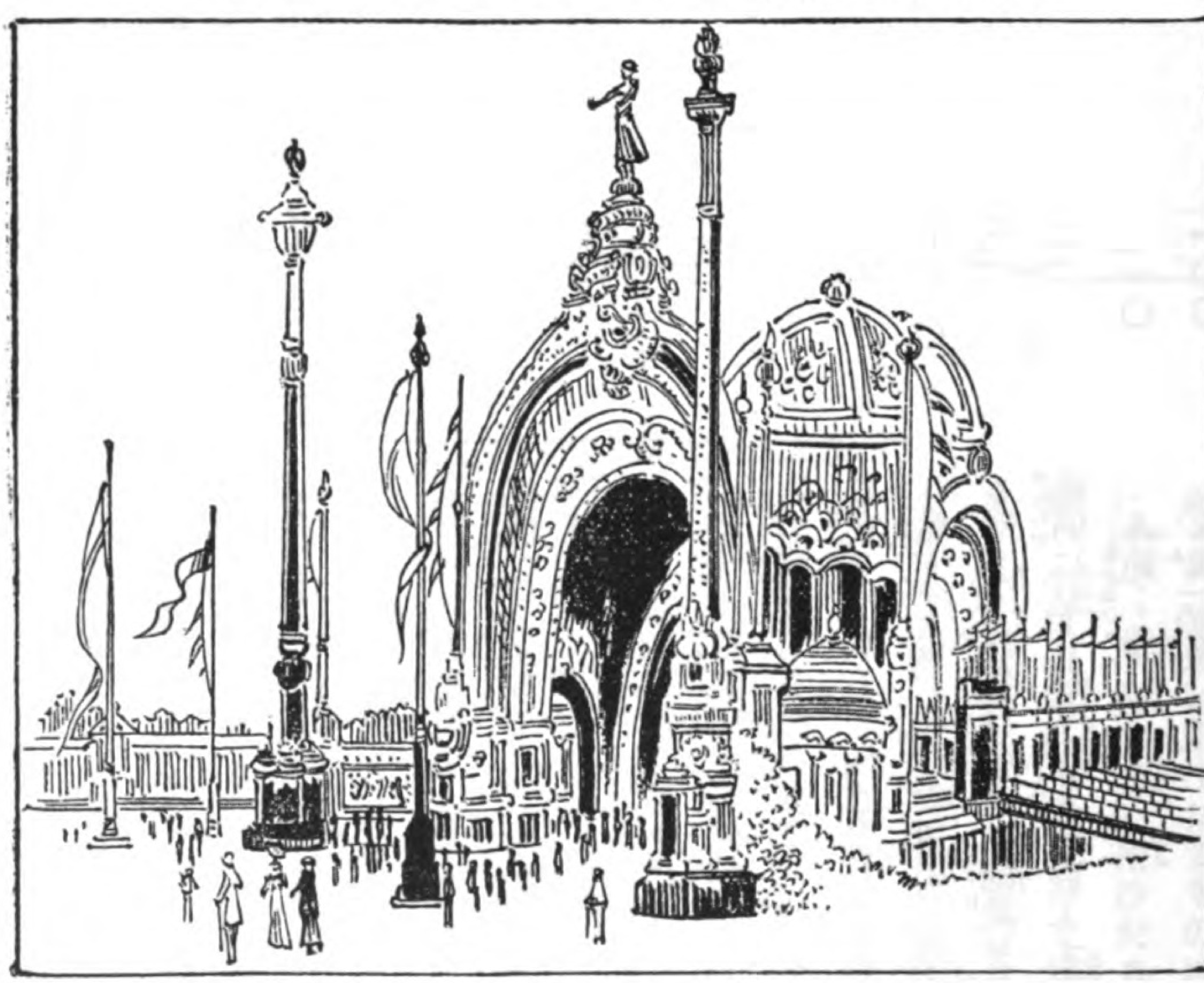
治に居て亂を忘れず、變に處して度を失はざる事は、家事整理の任にあたる婦人の、常に心がくべき事なりといへども、ことに現時の如き、皇國未曾有の大戰爭に預かるべき運に遇ひては、特に非常の大決心、大覺悟を以て、家事經濟を行ひ、嚴に浪費を節し、濫費を防ぎ少しづゝなりとも蓄積して、軍費に、恤兵に、又は出征軍人の遺せる家族の、保護扶助等に當つるやう心掛くべきなり。抑々我國現時の人口を、四千五百萬と概算し、人ごとに衣食住その他の生活費に於て、日に一厘を節約してこれを貯蓄し得るとせよ、一日の貯蓄高、實に四萬五千圓にして、一ヶ月に積算せば、百三十五萬圓にのぼり、一年にして一千六百二十萬圓の巨額に達すべきなり。一人一日の生活費中より、僅かに一厘の節約は、乞食の徒にあらざるよりは、決して出來難き事にはあらざるべし。かの喫烟者にして、一ヶ月間にコイン一包を節せば、優に一日一厘の餘裕を生ずべく、結髪せる婦人が、僅かに月に一回、髪結錢を節約せる費用も亦この高に達すべし。炊事者にして

新炭の使用に注意せば、一厘の儉約はまことに容易にして、しかもその削減は個人の生活上少しの損害をも蒙らざるべし。たゞ損害を蒙らざるのみならずして節儉の美風を作り、制欲の利益を得るにも至るべし。然れども若し儉約の意義をあやまり、飯に代ふるに粥を以てして米穀を節減し得たりとし、肉に代ふるに大根を以てして低廉に賄ひ得たりと誇り、學藝の研究を廢し、子女の教育を止めて、生計上大削減をなし得たりといふものあらば、こはゆゝしき間違といふべきなり。それ人の心意及び身体が、盛に活働し得らるゝは体内諸機關を、搆成組織せる諸成分の化學的變化によるものにして、この作用により、尿となり汗となり、呼出氣となりて体外に排出されたる消耗分を、十分補充するものなき時は、健全なる心意の活働、活潑なる身体の作用、共に營む事能はざるに至るべきものなれば、まづ唯一の補充物質なる、食物を粗惡にして、その費用を削減する事は、元氣なる國民の養成を急務とする今日のみならず、如何なる場合に於ても、望ましからぬ節儉法なりといふべし。學藝の研究に資するはまた他日直接間接に國利民福の基たるべきものなれば戰後の國民には實に必要にして忽にすべからざる事いふまでもなく、子女の教育はこれによりて第二の國民を立派に仕立つべきものなれば、亦極めて緊要なる事なり。さればこの二つは決して削減すべからざる費目といふべし。今左に平時太平の日の、豫算の組方の大畧を述べ、次に現時の變に處すべき査定案を示さんとす。

抑々平時といへども、家事經濟の任を負へるものが、第一の難事は豫算の調製に在り。豫算の調製は毎年の始めに於て、年末會計の整理を終り、月々の諸費目を揭げたる、一覽表を製し、これによりて一年間の費用を各費目ごとに積算し、且つその月々平均數を算出しこれを基として新しき年の人數の增減、臨時費の有無等を豫測し、且收入の增減をも考へ、これに因りて組み立つべきものなり、今次にその一覽表、並に豫算表の大畧を示すべし。

まづ豫算の立てかた、諸費目の分配法は、收入の多寡、人數の多少により相違あるべき事いふまでもなしといへども、普通四五人の家族にして、月々の收入また七八十圓以上、二百圓位までを得る家庭に於ては、その月收の四割乃至五割を以て賄費とし凡そ三割を衣服、住居、諸稅、教育等の諸費目並に研究費、醫療費等の如き、必須にして缺くべからざる費目に用ひ他の一割乃至二割を以て交際、小遣、諸給並に臨時費に充て、殘り一割を

露國皇帝の新禱せるセントジヨージ大寺院



露京第一等の寺院

貯蓄或は保險等の如き、不時の失費或は不幸の際その負擔を輕からしめんが爲の準備とすべき事、平時の心得なり。今次に百分數により、收入を百とし、支出の費目を數を以て表せば次の如し。

▲賄費　四〇

內譯

○米代　一〇
○鳥獸魚肉代　六
○野菜代　四
○製造食品代　二

四〇

○味噌醤油砂糖塩等	三	
○雑食品代	三	
○牛乳鶏卵等の代	五	
○薪炭油等の代	七	
▲被服費	五	三〇
▲家賃(或は地代修繕費)	一二	
▲家具雑品費	二	
▲諸税	二	
▲教育費(不要の時貯蓄)	五	
▲圖書費	二	
▲醫療費	二	
▲交際費	五	二〇
▲小遣費	五	
▲雑費	五	
▲諸給	三	
▲臨時費	二	
▲貯蓄或は保険等	一〇	
合計	一〇〇	

以上は百分比を以て表示したるものなれば、若し二百圓の收入ある人に於ては、賄費を八十圓、被服費を十圓に見積りたると等しく、貯蓄の金額又二十圓と定めたるに同じ。もとより五十圓内外の收入を以て、六七人以上なる比較的多數の家族を養ふもの、或はそれ以下の小收入に依りて、生計を立つる者に至りては、收入全額の五割以上六七割を以て賄費に充て、他の費目は隨ひて削減すべき事いふまでもなしといへども、一割の貯蓄を怠るまじき事は、極めて望むべき事なり。とかく我國人は、貯蓄の念乏しく、富者はその必要を感せず、貧者はその餘裕なきを口實として、上下貴賤その風乏しき傾あれば、特に注意すべき事とす。平時に在りてかくの如しまして現時の如き、國家多事の時に當りては、特に収入の八割以下を以て生計を立て得るやう、各費目中より削減を行はざるべからず。即ち前例にならひ、收入を百とすれば次の如し。

▲賄費　四〇
▲被服　三

▲家賃	一二
▲家具雜品費	一
▲諸税	二
▲教育費	五
▲圖書費	二
▲醫療費	二
（計）	二七
▲交際費	三
▲小遣費	三
▲雜費	三
▲諸給	三
▲臨時費	一
（計）	一三
合計	八〇

右に示したる收入の八割を以て、生計を營み、これに平時貯蓄したる一割と、別に削減し得たる一割とを併せて、二割だけはこの際、軍國必要の事に支出するを得べし。この上猶急の吾人に迫るあらば、猶第二段に於ては、各費目中に於ても、各々削減する事を得べし その方法を述ぶれば、まづ賄費中に於ては、米は一等米、二等米を用ひたるものは、三等四等米を以てこれに代へ、牛肉を多く用ひたる人も、豚を多くし魚肉は鯛、平目の價高きをさけて鯵、鯖、鰮の廉なるを採るも、營養價値に於ては少しも下る事なかるべし。その他薪炭油費、雜食品費等を節約するは、最も主婦の手腕によるべし。被服費も亦然り、普通中等の生計を營める家にありては、新たに衣服を調製せざるも、寒暑を凌ぐには事缺くまじ。住居に關する費用も亦止むを得ずんば借家人等に在りては低廉なる所に移るも可なるべし。家具雜品も亦節約する事を得べし。研究費、教育費の如く、全く節約すべからざる費目といへども新たに購入すべき書籍も、圖書館に足を運ぶの勞を忍び、四錢の半紙を使用せしめたる兒童には、三錢の半紙を用ひしめ、四錢の鉛筆に代ふるに二錢の鉛筆を以てせしめなば、多少の削減を行ひ得べし。雜費、交際費、小遣費の如きは、いふまでもなく出來得る限り、節約するをよしとす。雇人も亦減じて、三人は二人とし、二人は一人とせざるべからず。元來我國の習慣と

して、主婦が炊事に關係すること少く、無識なる下婢にのみ打ちまかするが爲、小人數の家にても多數の傭婦を使役するに至る、隨て監督上種々の面倒を生じ、又無識なるもの丶炊爨したるものは、滋養分の浪費、薪炭油の不經濟等擧げて數ふべからず。而も勤勉なる主婦は、終日裁縫の爲に膝をも崩さず運動不足の爲に、食欲進まず、貧血症を起し、不眠症を生ずるなどつひ知らず〱不健康を招くに至り、家内不幸の基を作るに至る、若し假設平時たりとも、水道を敷設し、瓦斯を引用するなど、文明の利器を利用して、人手を減ずるにつとめ、主婦自ら臺所に出で丶、炊爨の事に當らば、食膳の興味昔日に數倍すべくおのれの健康はもとより、家族の衞生上又經濟上極めて多大なる利益あらん。こはもとより非常の際なるが爲に、述べたるにはあらず平素の心がけに過ぎざるなり。さるを況してかく開闢以來の目ざましき戰をなしつ丶ある今日に於てをや、やんごとなき御方々すら、休ませ給ふべき日にも猶その事に當らせおはしますと聞く、おのれ等が飯を炊き、菜を羹るの勞何かあるべき。ことに日清戰役に、戰ひ勝てる結果にや、近年上下稍々驕奢に流れ遊惰に傾ける時なれば、この好期を利用し、惰眠を覺し、勤勉質朴の美風に歸らざるべからず。

然れども何事に限らず、その目的善良にして、其事柄又如何に美なりとすとも、若しその結果にして心なき人の誤解を生じ、惡慣例を作り、不良の習俗を殘すが如き事は決して心あるもの丶施すまじき手段なりといへども、戰時の家事經濟に於て、なるべく收入の八割を以て支出を支辨し、二割の餘裕を生ぜしめて、これを一は國家有用の費に當て、一は自家の變に備ふるが如き事は、如何に愚人が拙劣に模倣するも、決して過つ事なき事柄にして、啻に戰時に必要なる覺悟のみにはあらで、平素にとりて必要なる改良といふべく、殊に戰後の我國には、極めて必要なる一大要件と稱すべし。若し夫れ氷雪と爭ひ蠻力と戰ひ、千辛萬苦を嘗めて敵國膺懲の實を擧げ國の平和と、光榮と名譽とを擔ひて歸來せる軍人が、他の爲に盛なる歡迎を受くるとせば、內に止まりて奢侈と爭ひ、逸樂と戰ひ、苦心焦慮の結果、家計を整理し、軍費に献じ、恤兵に支出し勤儉と質樸と貯蓄との三大美習慣を、後世にまで殘せる婦人は、天の永久無限なる、歡迎を受くべきや疑なかるべし。

（完）

英國に於ける娘の躾け方

羽仁もと子

當時横濱の根岸に居らるゝ、鈴木四十氏の夫人は英國人でありまして、一昨年彼國で結婚の式をあげ、間もなく相携へて歸朝されました。年若き方（廿一歲）にも似合はず、家事を整理することが實に巧みであります、のみならず料理、裁縫その他家庭に要する様々の手藝に堪能で御座います。私はこの夫人に就て、毎度感服すべき多くのことを見聞するので、或時「英國では普通女の子に、どういふ風な教育をするのでせうか」と尋ねました、スルトそのお答に

「私など學校に通つた時代は、ホンの日本の小學校の年限位のもので、あとは大方家庭に於て教へられましたので御座います。私の兩親は、何よりも大切なものとして常に子供等に聖書を教へ、また各々にも生涯この書物を愛讀するやうに教へました。私共の晝の間の主なる仕事は、母に手傳つて家事を見習ひ、料理などを覺えることで、その間には、矢張兩親の撰んでくれました、様々の書物を讀んで、分らぬ所は母親に尋ねるのです。夜分になりますと、姉はお細工物を教ゆる所に、私は裁縫の學校に行きまして、互に習つたものを交換して教へ合ふので御座います。他人を招んだり招ばれたり、その他いろ〳〵の禮儀作法も、皆母親に教へて貰ひましたので、一體英國の普通の娘は例へば水は何々の元素から出來て居るとか、或はこの部屋から空氣を取り去つて仕舞ふなら、どんな變化が起るとかいふやうな、學問的のことを習ふ前にまづ食物はどのやうに調理するのが、衛生的でまた無駄にもならないであらうか、或は何々の病人には、どんな看護が必要であるとかいふことを、教へられるので御座います」

との事でした。

同じ英國だとて、家庭により身分により、娘の躾方も一樣ではありますまいが、鈴木夫人のお話は、最も平

民的で、しかも最もよい方法であると思ひます。聖書を熟讀玩味させるのは、その子の人物をつくるので、同時に一生の間世を渡る羅針盤を與へるのです。人物の基礎はまづそれで出來るとして、その次にわれ〳〵の生活に必要なものはと云へば、婦人ならば家の持ち方、家を持つて行く上に必要な技藝、即ち料理裁縫などであります。そしてその外になほ必要な事といふのは、妻として夫の不足なき助手または親友となり得ること、母として子供を敎へ得ること、かつ一人前の婦人として、恥からぬ人交りの出來ることとです。これらの役目を果すためには、所謂家持ち一片の女では濟みませぬゆゑ、兩親の撰擇した有益なる書籍雜誌を、段段に讀まして行つて、追々に思想をのばし、その趣味を廣くするのでありませう。この樣な理由ある躾をされた娘でありますゆゑ、考へも一通り確乎して、家を持つても初めより、左程の失敗煩悶なしに濟んで行くので御座います。

我國現在の女子敎育を之と比較して考へて見ますのに、彼の英國の家庭に於て、敎育の第一義として居る品性の基礎をつくるといふこと、之に就て我國多數の家庭に、如何なる要意が出來て居ませうか、女はさし出ず、溫柔しくなければならぬ、女の生意氣は他人の物笑ひになるのだといふやうな、敎も元より必要ではありますけれど、これらのとは申さばホンの上邊の躾といふ位のもので、眞に我々の品性を高め、靈智を開發せしむるだけの力を持つて居るのではありませぬ、私は英國の眞面目なる娘子が、聖書から得る如き深厚なる感化力を、日本の家庭と學校の敎育の中に一も見出すことの出來ぬのを、大いなる遺憾とするもので御座います。

次に一人前の婦人として世に立つ時に、日々の生活に最も直接に必要なること、これを今の日本の中流の娘達が、果して眞面目に敎られて、居りませうか、少數の例外は別として、多數の母親のその娘を敎育するに就て、今や知らず〳〵陷つて居る弊害は、極端に云ふならば、所謂女の子は賣物とかいふ諺の通りに、その

實質を立派に堅固にしやうとするよりも、まづどういふ風にしたならば、人の目に天晴な娘に見えるであらうかと、その方にのみ氣をいれて、娘の將來の爲にどの樣なことを教へて置くのは眞實幸福であるかといふことを、忘れて居ると思ひます。娘が學校から歸つて來ますと、裁縫の稽古、料理の稽古、今日は生花、あすは茶の湯といふやうに、殆と半日の暇もなきほど、種々の稽古事を勵ませて居りますけれど、その裁縫といふものも、眞に家庭で母親の手傳をいたしながら、綴ぎもの張物、ぼろのくり廻しなどから覺えるのではなく、家の娘は此節三枚襲

露國南部コサック兵の生活



ねが縫へるとか、洋服を覺えたとかいふことが、唯々母親并に本人の自慢になるばかり、料理も惣菜の考方も知らずに、西洋料理をはじめるといふやうな工合、將來の爲め必要なる修業である、母親の家事を助ける爲に、寸分の暇をあまさぬまでに、今日もあすもと琴や生花の稽古に鞅掌するのです。

大方の高等女學校も、多數の識者の云はれるやうに、貴族的に傾きすぎて居ると思ひます。高等女學校は常識的實用的の婦人を造るためでなく、少數なる中流若しくは上流の婦人にのみ、入用である所謂身嗜みを教へる所かと、思はるゝ嫌もないでは

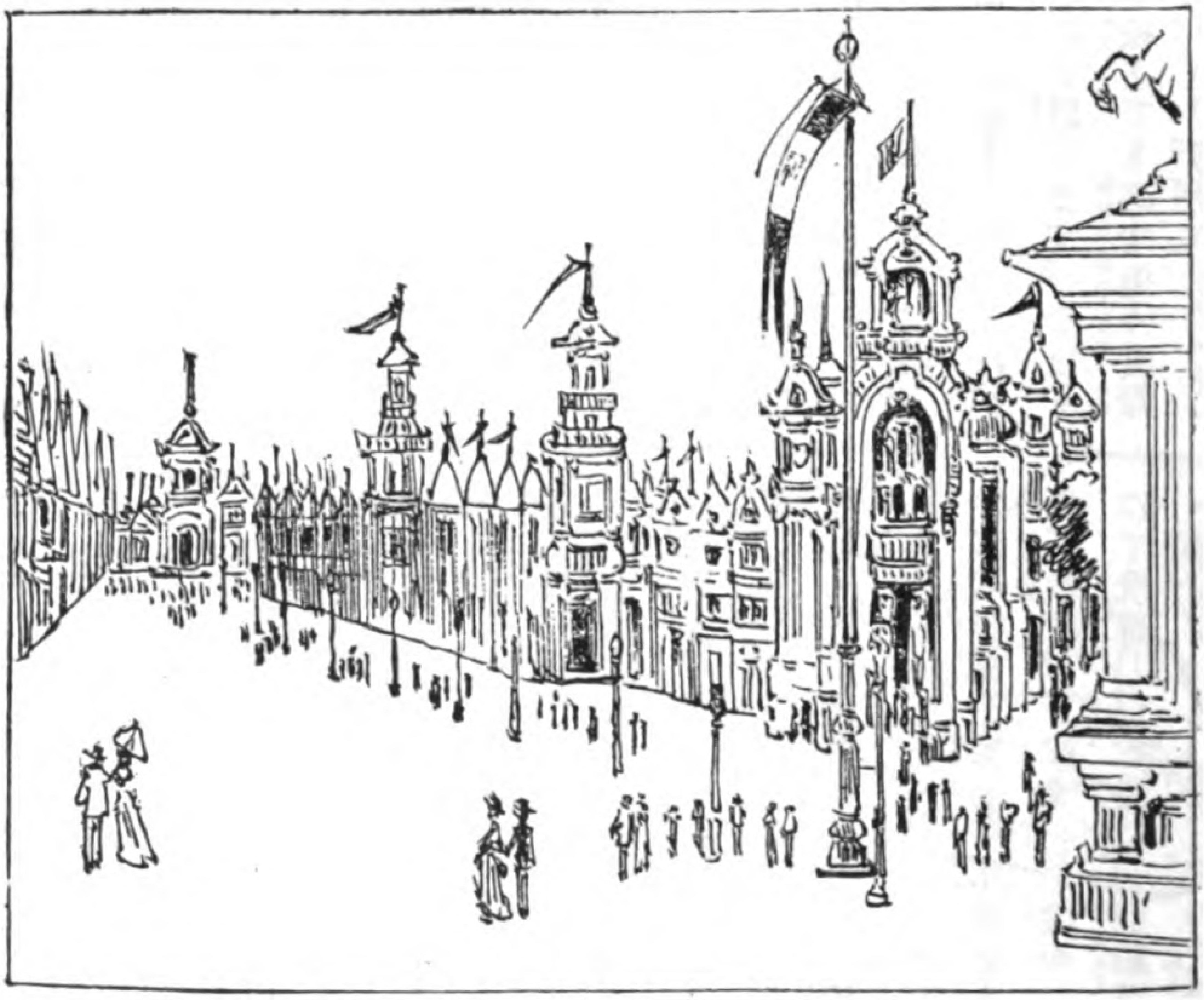
ありません。その作文は多く雅言を用ゐて、普通人には極めて分りにくゝ、書き振りも六ヶ敷きかな文字を太く細くつくりならべて、上品かも知れませぬが、場合によつて手紙の主の常識のあるなしが疑はれることもあります。歌の稽古、和文の稽古は元より、家政學や料理といふやうな、實際的であるべき筈の學科も、多く形式的または空論的で御座います、高等女學校を卒業した凡ての女子が、悉く貴族か富豪か、少くとも月々二百圓以上の収入を以て生活し得る家に嫁入せぬ限りは、徒らに氣位のみ高く、役にはたゝぬ嫁御前と云はれずには濟むまいと思ひます。

次に學校を卒業して家に居り、若しくは嫁して家持となつた後に、西洋の或婦人達のやうに、始終何程づゝかの讀書をなし、または近所同志約束して、小さな讀書會や茶話會を催すとか、日曜日には寺院に行くとか云ふことで、兎にも角にも一年一年、學問と見聞を廣くして益々進歩するやうなことゝの、我々日本婦人には出來にくゝ、家を持つてからは何も彼も忘れて仕舞つたなどゝいふ方の多いのは、一つには從來の習慣にもより、家庭の組織にもよることでありますが、最も大いなる原因は、婦人自身に進歩修養の志の足らぬこと、もしくはその方法を見出す力のないためと思ひます。殊に前に申したやうに、萬事實際的の仕事と、家事の見習ひの出來て居ぬために家を持つてから、御飯のたきやう、洗濯のしやう、香の物のつけかたも覺えねばならぬ始末、從て家内の事に心を惱すことが一層に多いので、毎日の新聞も雜誌も、落ち附いて讀んで居る餘裕がないのです。元より高等女學校の學科などは、八百屋のやうにあれもこれもと數の澤山ある丈に、何も彼も上皮だけで深く頭に浸み込んでは居ないので、少しでも棄てゝ置くなら、あと方もなく消えて仕舞ふが當然です。

之に反して前の英國夫人のお話の樣に、別に高等女學校には通はずとも、小學校卒業の後は、母親の家事を助けて、實際的の家政を見慣はせることにし、殊に親が心して撰擇した書物などを追々に與へてやり、その

中から種々有益な事柄を學ばせ、かつ讀書の力を養ふやうに、また本を讀むことが樂しいものだといふ如き、習慣をつけて置きますなら、他日人の妻となつても、割合に家事の面倒に恐れることもなく、また相應に養はれて居る讀書力によつて、年一年、その人格を高くし、かつは智識の方面にも種々なる進歩をなして、才能あり心掛ある婦人ならば、頓ては精神的にも形式的にも貴婦人として立つべき品格をも備へ、若しくは一朝不幸の

露國宮城の前面



運命にでも遭遇した場合には、生活のためにも何等かの働きをなし得るだけの、素養をなすことも出來るであらうと思ひます。

私の思ふ所を有体に申しますなら、世間の親達には娘御を高等女學校に送くるのにも、矢張前に申した種々の稽古事をさせるのと一般唯々わが子を友達の誰れ彼れに劣らせじといふやうな考から、家によつては隨分苦しい算段をしてまでも、學校通をさせる向もあるやうですが、若しも娘が

四年五年の間、少からぬ費用をかけて、高等女學校に行くことが、果して本人のために何程の實益をなすものかといふことを、眞實に考へて見るならば、左程に苦しんで學校通ひをさせんでも、役に立つ女にする法がないでもなからうと思ひます。唯我國從來の所では言文の一致して居らぬために、讀ませて見たいと思ふ書物を、學力の低い人に容易く解させるといふことが六ケ敷いのでありますし。また今日の母親の多數は、娘の讀書を助けてやる丈の、學力識見を有して居ないといふことが、家庭に於ける自修的學問に大困難を感すべき問題でありますけれど、幸に今日は追々言文一致体の出版物も日に月に殖へて行きますし、親々の子供を教育する目的は、英國の風習を例として以上申した樣な工合に、眞面目に實際的になつて來るなら、他人の助言を乞ふてなりと人々によつて必ずそれ〳〵わが子の教育の工夫位はつけ得る筈かと思ひます。なほまたその樣になりましたなら、學校とても必ず追々實際的なものになつて來るのに違ないので御座います(完)

應急看護法

桂園子

▲火傷

○高度の熱ある物體を身體に觸れしむるときは、その部分に損傷を生ず。これを火傷といふ。

火傷は、その强弱に從ひて徴候を殊にす。第一度の火傷に於ては、觸れたる部分に潮紅を來すのみなれども第二度の火傷に於ては、其部分に水泡を生じ、第三度に於ては組織の壞死を來たし、第四度即最も高度なる火傷は、全く組織を燃燒炭化せしむべし。火傷、體表の三分の一以上に超ゆるときは生命を失ふ。

○第一度の火傷には、油脂類をぬりて、大氣にふれしめざるやうにし、且、冷罨法を施すべく、第二度のものは、穿刺を施して水液をもらし、しかして之に五十倍石炭酸、ワゼリンを塗布し、もしくは百倍の硼酸水にて洗滌したる後に、亞鉛華、デルマトール、硝蒼等を撒布すべし、第三度の火傷も亦第二度の火傷と同樣

の方法を施し、その疼痛を減ずる爲には五十倍コカイン水を塗布すべし。

▲凍傷

○冬日多數の人、殊に營養不良の人の屢水を用ふる者又は屋外にて働作する者に現はるゝところのシモヤケは、日常吾人の目擊するところの凍傷なり。

凍傷は、高度の寒によりて身體に生じたる損傷のことにして、第一度の凍傷を發すれば皮膚蒼白を呈し、第二度にては水泡を生じ、第三度にては組織の壞死を來すべし。その療法も、亦略火傷の塲合に同じ。



出征軍人の家族（其一）

○もし、寒水中に溺れ、或は雪中に倒れなどして全身に凍傷を起し、假死に陷りたるものなるときは、最初は、まづ之を無風の冷室に移し、雪もしくは冷水に浸したる布片を以て全身を摩擦し、ついで漸く溫室に移らしむるやうにすべし。始よりして直に溫室に移すべからず。

▲中毒

○嚥下したる毒物の中毒の塲合には、直に大量の微溫湯もしくは食鹽液などを飲ましめ、指、もしくは鳥の羽等を以て喉頭

を刺戟して嘔吐を起し、毒物を吐出さしむべく、もし毒物の嚥下後時を經て、すでに腸內に達したりと思はるるものは緩下劑を與へ、かつ浣腸を施して、なるべく速に之を排泄せしむべし。すでに嘔吐を發したる後には、更に多くの牛乳等を飮ましむべし。

○すべて、アルカリ類の中毒には、炭酸曹達、石灰水等を與へ、且、兩者共に牛乳生卵等を與ふべし。

○モルヒネ、ストリキニーネ等の中毒の場合には、濃厚なる茶珈琲等を多量に與ふるをよろしとす。

○其他、砒石の中毒には、マグネシヤの溶液又牛乳生卵をあたへ、燐中毒には、同じくマグネシヤ水を投ずべし。但、後者の場合には、決して油類をあたふべからず。

○炭酸もしくは石炭瓦斯の中毒によりて窒息したる者には、速に其患者を室外に運び出して、頭部に冷水をそゝぎ、醋もしくは他の植物酸液の浣腸を施し、呼吸の絕えたる者には、人工呼吸法を施すべし。

○蜈蚣、蜂にさゝれ、若くは毒蛇にかまれたるときはアンモニヤ水あらば速にそを滴下すべく、もし手近くにこれを得ざるときは、醋又は濃厚の食鹽水を以て創部を洗ひ置くべし。その創を受けたる後には、直に其部分を口にて吸ふべく、しかも、傷より上の方を強く壓迫して繃帶すべし。

○狂犬の咬傷の場合の所置も之に同じ。

總て、かくの如き所置を施し置きたる上は、速に醫治を乞ふを安全なりとす。

▲溺死

○水に溺れたる者にして、尚多少の温氣を有し、かすかに心音を聽くことを得ば、その蘇生の方法を講ぜざるべからず。

さて、患者の兩脚を高く引擧げ下體を擡起して、口より水を流れ出でしめ、その濡れたる衣服をぬがして、然る後にアンモニヤを吸入せしめ、羽毛等を以て、鼻腔、咽頭を刺戟し、噴嚔、嘔吐、咳嗽等をうながして呼吸を催進せしむべし。

○もし、これにても尚呼吸を始めしむることを得ざる

ときは、人工呼吸法によりて、これを促さゞるべからず。

その呼吸法中簡單なるは、患者をして仰ぎ臥さしめて頭部を低くし、術者は患者の頭の方に坐を占め、患者の兩方の肘をにぎり出來得るだけ上方に引延ばして、頭の兩側に押し付け、次に、その手を再もとの位置に返し、肘を以て胸の兩側を壓すべきなり。

かくの如き技術を幾回となく繰返し、患者の呼吸を始むるに至りて止むべし。

經驗より來る分娩之心得

翠香女史

子を産みて是を育つるは女子たる者の天職なり、故に子なき女は天職を全ふせざる者にて石女と云ふ、然れど生來の石女は不具者にて、千萬中の一人のみ、多くは病の爲に妨げられて子なき也、處女のうちより衞生に注意すれば嫁しては必ず妊あるを常とす、扨妊と定りて後は殊更に衞生を怠らず、苦しまぬ程に運動し、身を安逸にするとて寢ころび勝にくらす抔決しで宜からず、又勞働に過て息のはづむ迄忍へてするもよからず、とかく萬事適度をはかりて程よく爲べき也。

▲産を氣に掛間敷事

昔より産は生死の堺などいふを聴て、初妊の婦女は如何あらむと案じ煩らひ、無智の老婆などの言を賴みて神佛に祈願し、得も知れぬ神呪、御札等を戴くはまだしも、いつ汲たる歟も知れず腐敗したる水を神水抔稱して呑ますするは、以ての外の事なり恐るべし、元來女の産は天然の役目にして、病に非ねば、輕ければ産婆も間に合はぬ程早き事あり、況や醫者や藥の力を借るべき筈は萬々なき事なり、然るに難産となる時は實に命がけの大厄にて、老練の醫師、産婆が秘術を盡しても叶はぬ事あり、然れど此難産と云ふ事は女子の身體に何か異なれる故障あるか、又は妊中不攝生にして飲食を欲いまゝにし、或は月重りても交接を愼まず、又運動の不足より、過度より、跌蹉轉び、高處より墜落

る坏より難産となる例多し、又さる事は一もなしとするも、餘りに分娩を苦慮するより産蓐に臨みて首の座に曳居らるゝ心地し、陣痛の苦に耐得ずして、一刻も早く娩むと焦燥て、努み過し、爲に肝心の時に勢力欠乏して難産となる事なり、然れば陣痛甚しくなるとも克耐忍して自然に任しおけば、決して難産とはならず、いか程努力たりとて時至らざれば生るゝ者にあらず、又いかに止むとすとも期に臨めば延ばさるゝにも非ず、凡生としいける者兒を生まぬ者はなけれど、鳥獸、虫魚いづれも分娩するに産婆も醫者もいらざるのみか、後の始末迄も悉く自己よく片付るなり、さるを萬物の靈と誇れる人は却て大病人の如く、分娩に大騷をし、跡仕末どころに非ざるは扨々いくぢなしと、犬猫らは笑ふならむ。殊に平常より耐忍力なき女子は、臨産の苦さに聲を發て哭く者あり、女として大なる恥也、慎むべし。昔より數限りもなき女が皆無事に分娩し來りしものを、我とて何かあらむと心を慥にして、耐忍力を逞しくしてさへ居れば、否でも應でも自然に産るゝ也、産に付ての衛生上の心得は醫師の説に讓りこゝには唯その心の持方を説くのみ。

春の園藝

▲草花を蒔く時節は多く春秋の二期で三月十八日からが即ち春の彼岸ですから夏より秋に咲く草花を蒔くには三月が最も適當な時です。偖草花も當時は外國から輸入したものが多く、殆んど數へ盡されぬ程の種類がある併し日本人と外國人とは自から趣味が異つて居りますから歐羅巴で非常に珍重される花も日本では意外に評判の惡いこともある、又日本へ輸入してから五六年も經つて段々種類が變つて別に混血兒の樣な草花が出來ることも多いのです、それで彼我氣候風土の相違して居る爲め、自生した土地では香氣紛々として甚だ愛すべきものも、土地が異ると更に香氣が無くなるのもあり、また全く香氣の無くならぬまでも追々薄くなるのがある、元來草花は色を愛するものと香氣を愛

するものと食用に供するものとの區別があるが、總じて色も香も漸々變化するものが多い、併しその變化するのも却つて草花を愛する人の爲めには趣味を感ずることになる。

草花を蒔くには先づ充分に土地を擇ばなければならぬ溝泥を乾したものか、或は塵芥溜の土へ蒔くのが最も適當です、さうして土地を擇んだ後には種子を蒔くべき場所の周圍へ瓦などを用ゐて枠を立て、雨が直接に土地を荒すことを防ぎ置き種子を蒔いた上に充分こなした土を篩でふるつて殆んど種子が形を隠す程に散らし土地の乾燥と潤澤とを適度にする爲め莚或は藁を布いて置くとそれから大抵三日乃至五日間で發芽します、發芽の後凡そ三十日間内外に第一回の肥料を與へるのですがこの肥料は人糞が第一で其外は油糟または鯡を細末にしたものをふり懸けるので、人糞は鉢或は座敷に近き場所では不潔ですからこんな場合には無論他の肥料を用ゐるのが適當です、併し肥料としては人糞は最も早く効能があるのですが、その効



出征軍人の家族（其二）

能は久しく保たない、これに反して鯡、油粕、人造肥料などは急に效能は現はれぬが久しく保つて居る、即ち人糞は二三日で效能が現はれ他のものは多く一週間か乃至十日間で效能が現はれる、乃で草花は幾百種もあるのですが、三月中に蒔くもので思付いた處を申しますと。

▲フロックス　は春の彼岸に蒔くと初秋に花が咲き、紫、紅、桃色、白、緋、樺、濃紫、絞り等種々あります、何れも頗る美しく草花中では殆んど他に比べるものがありません。

▲金蓮花　三四葉芽を出した時移し植ゑても、花壇または鉢に蒔き付けてもよろしい發芽してから四十日位で紅の花を開きます其花も無論美しい、そして花も葉も莖も西洋料理で食皿の中に盛られて舌打される事がある。

▲麝香連理草　スウヰートピー　秋の彼岸に種を播くと翌年の春に蔓が生じます、その蔓を竹に纒はすのですが、花は豌豆の花のやうで、紅、白、紫、綠、黄絞り等數種あります、この花は甚だ艶麗で、且つ一種の馥郁たる香氣があります、併し豌豆のやうに實を結びません。

▲翠菊　春蒔のものは秋に花を開き、秋蒔のものは翌年の夏花が咲きます、紫、白、紅等種々ありまして菊のやうに培養頗る容易で何人にも充分に花を咲す事が出來ます。

▲金魚草　は宿根草で春秋の彼岸に種子を下し、夏秋の間に高さ一尺餘になり、美しい花を開きます、其形は丁度金魚の口を開いたやうで頗る面白い、花は紅、白、黄、絞り等數種あります。

●草花栽培の心得

草花を栽培するには、先づ其種類を識別して、山草か野草か、但しは平地に生ずるものか、水邊に生ずるものかを究め。而して後手を下さぬと、往々にして枯死せしむる事があるそれから山草野草水草等の區別を知ると共に其植物は如何なる地質に適し如何なる水に培養されるかを考へねば成らぬさてその適する土と水と

を了解した次には其植物は一年草か二年草か、宿根草か球根草かを知るの要がある、一年草とは生長非常に早く、春季種子を下し、夏秋の間に花を開き、冬に至りて枯るゝものを云ひ、二年草とは前年の春秋に播種し次年春夏の間に開花するものを云ひ、宿根草とは一度種子を下せば多年を保ち、其の根も年々繁殖して春毎に芽を發するものを云ひ、球根草とは根の形球の如きものを云ふので、此相違によつて、播種分根の方法を異にするのであります。



出征軍人の家族（其二）

次には其肥料です、山草野草等は多く人糞を適當とするが往々人糞の取扱を厭ふ人もあり又た之れを厭ふ植物もあるので、油糟、乾鰮の類を用ゆる塲合があります。

次は採種、播種分根等を行ふに就て、春が可いか秋が可いか、移植すべきか又疎に蒔くか密に蒔くか、此區別を心得ませんと繁殖せしむべきものも根を絶つ虞があります

尙此外にも必要なる事柄はあるが、まづ一般に注意を加ふべきは、土で、其一例を擧ぐれば、向島邊の土は荒木田と稱して、壁、荒塗などに用ゐるもので、黑味を帶びた粘氣のある、野草には適するが、盆栽の如きには到底用ゐられません。

又請地大畑邊の土は黑松などに適し、山の手のぼか土は赤松に適し、染井駒馬邊の土は草物には不適當で灌木喬木の類に能く適してゐる、此理を辨へぬと一草一木の栽培も好果を見ることが出來ません。

又肥料の如きも濃厚なるものは却つて害をなすから、至つて稀薄なるものを用ゐるのですが、野草山草等は肥料を施せば倍々繁殖して餘りに延び過ぎる嫌がある此等の點も能く心得て加減せねばなりません。

餘暇樂見立料理

大日本割烹學會講師　石井湧太郎

この度趣向を替へて見立料理と云ふ事を思ひ付きましたから皆樣餘暇の節實地御試になつて一家食膳の樂みになさつて知らず〳〵の中に割烹の道を御承知なさる樣に致したいのです。

◎見立

最明寺時賴　梅鯛（枝え付替鯛あんかけ）

中皿　雪中之梅、紅白梅花玉子

梅田午蒡かゝ煮

拵方順序

▲梅鯛

先づ鯛の鱗を取りて頭を切り腹を明けて腸を出し水にて能く洗ひ三枚に卸して中骨を取り次に腹の部に付きたる小骨を去りて後ち其の身を搔き取りて皮を捨て扨て其の搔き取りたる身を出刃庖丁の脊の方にて能く敲き筋小骨等あらば之れを除き摺鉢に取りてよく摺り玉子の蛋白一個を加へ（且し鯛は四五寸位の物二枚位にてよろし）尙之れに味りん煑切り（煑切とは味淋を鍋に取り　火上にかけ沸し其の酒氣を去りたるものを云ふ）と食塩等を加へ梅塩してよく〳〵摺り混ぜ之れを

大梅實程に丸め塩湯の中に入れて湯引べし（湯引とは茹でると同じ）此の如くして全く湯引たる時取り出して水氣を拭ひ之れに靑のりの焦げざる程に火取りて細かに揉み篩にかけて其の粉を取りしものを以てまぶすなり然して之れを梅枝の小なるものに貫き置くべし、尤も注意すべき事は成るべく摺身をよく摺る事と其の味付の加減に心を用ふる事の二ッなり。

▲紅白梅花玉子



出征軍人の家族（其四）

其の初め煮拔玉子より製するものにして玉子を微温湯の頃より入れて二十分間程始終竹箸を以てそろ〳〵と攪き廻し居るべし斯くすれは玉子の黄味は其の中眞に於て茹るものなり尤も鍋は鐵鍋等の地金厚きものを撰ぶがよろし全く玉子の茹りたるや否やを見るには玉子を鍋の外に掬ひ上げて直ちに其の水氣の蒸發し去りて乾く時を以てよしとするなり、之れを冷水中に取りて十分間程を過し而し

て殻を剝き再び之れを湯の中に投じて温むべし此の時布巾の上に美濃紙を重ね敷きて右の玉子を取り出し冷えざる中に立にならべ端より巻くなり巻きたる時丸き箸五本を取りて其の周圍に位置よく當てがい兩端を堅く縛り眞中をも結ぶべし、而して之れを數分時冷し置きて後ち其の紐を解くなり、さすれば恰も梅花の如き形狀となるべし、之の半數は(例へば玉子四個ならば二個なり)其のまゝ尾首を少し切りて眞中より二ッに切る之れ白梅なり紅梅は紅を酢にて溶解し此の中に玉子を其のまゝ切らずに入れて火にかけ鍋をゆすりて玉子を轉ばしながら紅を燒き付けるなり而して一度之れを水に取りて其の酢の氣を洗ひ落し白梅の如く切るべし之れは何れも食鹽を水にて煮とかし刷毛にて切りたる玉子の面へ塗り置くべし。

▲梅田午蒡かゝ煮

梅田午ぼうと云ふは普通の午蒡より餘程太きものなり先づ此の上皮を剝て小口より三四分位宛の厚さに切り水に浸して能く渥を拔ぎ鍋に取りて茹でるなり水は充分に多くなし二三度取り替へるをよしとす然して后ち之れを鰹の煮汁にて暫く煮込み全く柔らかに煮えたる時醬油と味りん、砂糖にて調味すべし扨此の汁煮詰りたる時を見計ひ鰹節を細かに崩したるものを混入て煮上げればよろし。

▲ちよゝあん

之れは薯蕷を洗つて長さ三四寸位に切り茹るなり、なるべく能く茹たる后一寸水に冷して擦り剝きになすべし、此の擦りむきと云ふは角ある箸等の如きものにて其の皮を擦り剝く事なり然して之れを小口より薄く切り馬尾篩にて裏より漉し其の漉せたる粉を以て初めに拵えたる梅鯛の上より掛けて雪に見せたるものなり又梅田午蒡は梅樹の幹に見立てたるものと見て給へ。

鷄卵料理

鷄卵は滋養分に富み、古來より上下を通じて、普く用ひらるゝものにして、我邦食物中、最も肝要なるものなり。凡そ鳥の卵は、其鳥の種類と畜養の方法等に依

りて、其性質同じからず、殊に重量と形狀の如き、甚だ相違することなれども、其成分に至りては大差なし通常は、白き部分と黄なる部分とより成れるものにして、白き處は純粹なる蛋白質と水とより成り。黄なる處は蛋白質、油質、硫黄并に水等より成るなり。今左に其分析表を揭げんに、

蛋白質	一二、五五
油質硫黄	一二、一一
含水炭素	〇、五五

此分析に供せしは、一個十匁の鷄卵にして、殼は平均一匁三分位あるを以て、內容は八匁七分位と知らる可し。

鷄卵を常に食用とするに、



出征軍人の家族　(其五)

健康なる人は、黄白共に之を食ふ可しと雖ども、甚だしく衰弱したる人は唯だ黄肉のみ用ふ可し、是れ黄肉は白肉に比較するに、其味美にして、消化容易なればなり、而して通常其消化に要する時間は、三時間乃至四時間なり。

故に時として其生卵に刺衝劑を混じて、風味を美ならしめ、消化を最も容易ならしむることあり。例せば葡萄酒と卵、或はブランデーと卵とを、混味し用ふる如き是れなり。而して右二樣の中葡

葡酒と生卵とを混和したるを以て、就中優れりとす。或は亦之を牛乳に混和して、滋養分に富める食料を製することあり。然れども、此混和は滋養と消化を進むると云ふ程のことなかる可し。要するに鷄卵は其味頗る淡泊にして、而も滋養分に富み、兼て消化容易なれば、健康と病者との差別なく、用て共に適する食品と云ふ可し。

然れども、分析表に掲ぐる如く、砂糖分、澱粉に乏しきを以て、宜しく之を含めるものを副食として用ふるを最も好とす、而して之を食用するには、一日中特に朝餐の膳部に供するを可とす、蓋し歐米人の朝餐にパンバター等と共に、之を食するは此理に由るものならん。

左に和洋鷄卵料理法を記すに先ち、最も必要なる鷄卵の良否を知る法と、之が貯蓄法を記す可し。

▲鷄卵の良否を知る法

鷄卵の兩端中大なる方を、舌にてナメ試み、冷く感ずるものを良品とす、また＝光及び強き燈火に透し見れば、半透明の狀をなし、其中心の殊に然るを佳なりとす。或は食鹽一、水九の割合なる液中に投じ、沈むものは良品にして、浮ぶものは不良なり。

○鷄卵の殼色に赤白の兩樣あれども、是は養分の多少及び新否等には、毫も關係なきものにして、其卵面に艷美の色澤を有するものは、新鮮の徵にして、其然らざるものは、不良の品なり。

○鷄卵を振りて音響あるものは、日數を經たるものにして、隨て滋養分少なきものなり。

○鷄卵を破りて、白身の粘氣に富み、黄身の凸きものは、新鮮にして養分に富めども、白身水の如くにして粘氣なく、黄身扁平なるものは、不良にして養分を失ひたる徵なり、黄身の完からざるもの、即俗にミダレと稱するもの丶如きは、中腐の品なり。

○鷄卵の黄身の赤色を帶ぶるものを上品とし、淡黄なるものを下等となすもの、往々あれど、此れは大なる誤にして、穀類及び魚獸肉等の良食物を以て、鷄を養ふときは、其黄身は淡黄色となり、野菜虫類等を以て養へば、其黄身赤色を帶ぶるものなり。故に黄身の赤色なるが爲に、養分多しとの理更になく、從て其赤色なるを見ては、良品なりと思ふ可からず、かの支那卵の如きは、粗食なるが故に、其黄身極めて赤色を帶ぶるものなり。

○鷄卵を煮又は燒く時、力なく脆くして碎け易きも、不良の證なり。又生食する時、一種の塵臭を帶ぶるものも、亦然り。

、▲鷄卵を貯蓄する法

鷄卵を永久に貯ふれば、消化を惡くし、滋養分を減ずるものなれば、可成速に之を用ふるを宜とす。然れども萬不得已の場合に於て、之を貯存して數日若しくは數週間、毫も物質の變化を生ぜざらしむることを得るなり。其はアラビヤゴムを溶解したる水を以て、其殼を塗り、又は胥油を塗りて乾燥したる木炭の中に置くを最上とす。是れ油又はゴムを塗るは其

氣孔を塞ぎて空氣を通はしめず、腐敗を防ぐ爲めなり。
○其他之を石灰若しくは石灰水に投じ、暗室に置く法もあれど、こは其殻を脆弱にし破壊するの患ひあり。
○又一時の假貯法には糖糠、赤小豆の中に投じ置くを以て足れりとす。
○總て貯蓄するには、常に暗處へ置くこと最も緊要なり。

＊　＊　＊　＊

▲切鷄卵……鷄卵を破り、よく〳〵かきませ、鷄卵五箇毎に、葛粉を少量と、粉茶一服程入れ、麩を燒く加減にて燒く可し。火はトロ加減にて薄く燒くなり。之を用ふるには、極く細く切り、煎酒にて、刺身物、煮物、膾物等、種々遣ひ方あるなり。

▲巻鷄卵……切鷄卵の如く、鷄卵を潰し、よくかき交せ、文火にて燒く可し、何魚にても魚の擂肉を上に、よき程置き、なかば燒けたる時、一方より巻き、カンピヤウにて縛り、薄醤油しだしにて煮上げ、後如何樣にも好みの如く、切り用ふるなり。

▲渦巻鷄卵……是れも鷄卵をよくかき交せ、麩の燒き方にて、上の方未だ乾かざる時、海鰻のすり身に、饂飩の粉を等分に混ね交せ、饂飩の如く刻み、蒸し出したる「饂飩海鰻」を押重ねて打返し、油紙にて能く鍋を拭き、今度は鱧の方を燒き、小口より巻て輪切とす可し。「饂飩海鰻」には、うど、きんかん、切肉、鳥肉等を入れて、ノッペイにしたるは妙なり。

▲包み鷄卵……湯呑茶碗樣のものに、厚紙を押し入れ茶碗と共に湯煎にするなり、又ブリッキにて、梅、櫻紅葉等の形を拵へ、胡麻油をひき、鷄卵を入れ燒くか又は蒸すも適宜なり。尤も味付けんには、先きに燒鹽砂糖等を混和す可し。

▲豆腐鷄卵……豆腐をツカミくづし、細かなるスイノウにて漉して、酒二合と、水二合とにて煮るなり。尤も炭火にて、三時間餘煮る時は、右の漉し豆腐は、一ッに混合す可し、之に達矢醤油を加減し、金匙にてよき程すくひもる、辣料あはせ置く可し。

▲田樂鷄卵……鷄卵に醤油と酒シホ少し入れ、酢を最も少し加へ、よく攪きまぜ、田樂に塗り、炙り燒きにし、ふくれたるを度とし、罌粟と擦山葵をおく可し。

▲虎皮鷄卵……鷄卵の白肉ばかりをとり、黄肉を別の

器に入れ置き、白肉を箸にて能く攪拌せ、塊のなくなる迄にして、後黄肉を入れて攪拌す可し。(注意……初めより黄白混合すれば塊は解けず）後ち鐵鍋に豚の油を入れ、天麩羅の如く揚げるなり。但し鷄卵十箇に、豚油一合の割合にして、鷄卵の溶解したるには、適宜に食塩を混入し揚るなり、又油を鷄卵の充分吸收みたる時、上下を轉覆して兩面を燒く可し、之に焦目の付たる工合、即ち支那料理にて、虎皮蛋の名あり。

▲蟹屬鷄卵……鷄卵の白肉を能く攪きませ、泡雪の如くなりたるものに、海蟹を湯瀹にして肉斗りを、尖り箸にて取出し、右の白肉と共に交へ、鷄豚汁を入れ、蒸沸して食す。是も支那料理にて、芙蓉蟹と云ふ。

▲牡丹鷄卵……鐵鍋に胡麻の油を充分煮立て、鷄卵を打破り入れ揚る時は、白肉油にちゞれ、黄肉中に在り恰も牡丹の形の如し、故に此名あり。

▲米飯鷄卵……米飯を通常の如く炊き、之に鷄卵を塩又は醬油、酒、砂糖等にて味を調へ、能く攪拌せ、薄燒きにして細く切り、飯に交合せ、鮨の如くするなり又は鷄卵を茹で、白肉を去り黄肉のみを採みほごし、飯に攪拌せ食するも、妙なり、兩様とも薄清汁に加味せし、淡泊の汁をよしとす。

▲浮和鷄卵……鷄卵何箇にても能く攪拌せ、其分量の三分の一程、鰹節の煮汁醬油を入れ煮る可し。

▲鯵の海塩　鯵にはゼンゴとて兩面の脊と腹との間に堅き鱗あり、此魚を調理する時は先づ右のゼンゴをば尾の方より頭の際まで充分にスキ取り鰭は頭へ附けて切落し水にて洗ひ、次に尾をも切落しそれより骨を拔取るなり此骨を拔取るには庖丁の先をば脊骨の上下へ肩際より尾の方まで切り入るゝべく此方法を用うれば容易に骨を拔取り得べし斯くて骨を拔きたれば魚の大小により全形の儘或ひは二つ切三つ切等適宜に切りて鹽をば振掛け置き二十分間以上一時間程を經て湯煮を爲し椀盛又は茶椀盛の種と爲すべし尤も急塲時は充分塩にまるめたる上煮湯して用う偖また清汁は別に仕立てこれに豆腐の小切或ひは茗荷の小口切を入れ、清汁は塩味とし醬油をば極少々注し、吸口は好き程に見計らひて用うべし。

衛生顧問

(問)眉毛を濃くする法と面皰を治す法とを敎へて下さい。(花子)

(答)毛を濃くする法は本誌糸氏の一日醫者無毛症を見たまへ面皰は「硫黄軟膏」或は「イヒチオール軟膏」何れにてもつけて御覧なさい。

(問)女の身で體重拾六貫少し何か熱心すれば齒痛み逆上します療法敎へて下さい(肥大少女)

(答)素人の方に分り易く言へば血があり過ぎるのです一月に四日程宛左の藥をのんで御覧なさい。

硫苦　二〇、〇(五匁程)　稀鹽酸　一、〇
白砂糖　適宜　溫湯　一〇〇、〇(中合)
右一日三回分服

(問)齒牙の健全を保つには食鹽と普通販賣の齒磨粉と何れが善いでせうか、滋養の爲に卵を食するには生と半熟とは何れが善いでせうか(無名)

(答)齒磨粉は沈降性炭酸加爾曳謨二匁と炭酸麻倔涅曳謨一匁とを混ぜて自製するがよし、卵は湯を澤山のむことを厭ふならば生卵がよしさうで無れば半熟が善し。

(問)ニキビの療法と疥癬を傳染せぬ方法及び其の治法とを敎へて下さい。(海上かほる子)

(答)ニキビは(花子)の答を見るべし。疥癬を傳染せぬ方法は該患者に接せぬより外に仕方は無い治方は百露拔爾撒謨といふ藥を附けるが第一等である。

(問)頭部に小さき疣出來追日增加し身體中に夥多殖て困りますが療法はありますまひか(雪香女史)

(答)竹楊子の尖を針の如くに細くしそれに硝酸を甚だ少量につけそれを疣に附けると取れますが其の樣に澤山殖ゆるのは纎維腫といふ病であるから外科專門の名醫に治療を乞ふより外に仕方は無い。

(問)毛をはやす善い藥はありますまいか。(しづ江、三條みす)

(答)本誌の糸氏一日醫者無毛症を讀みなさい

(問)食事每に茶に食鹽と胡麻とを入れて飮む癖がありますが衞生上如何のものでせうか敎へて下さい(大阪敏子)

(答)惡いこともありませぬお嗜ならば飮みなさい。

(問)低鼻を高鼻になす治療法或は治療處有之候哉。(きみ子)

(答)東京日本橋區十軒店土產商會にて賣る隆鼻器を買つて試みられよ、(されど必ず効あるかは知らず)

(問)皮膚を白色になす砒石劑服用の分量御示敎を乞ふ(麻布みね)

(答)砒石劑は醫師が患者に與ふるのですと小心翼々として用ゐるものなりされば素人の方は用ゐぬが善い日本人の色の黑いは特有である白いのよりは何程立派であるかも知れぬ答者などは色の白い女を見ると醜くゝ感じます。

(問)神經衰弱症とは不治の病なりや并に療法を敎へ玉へ(ゆき子)

(答)治療するものである。滋養食物を取り、運動をなし、心身を安慰にし、就褥に臨んで溫浴をなし、能々眠るやうにし、左の如き藥を服すべし。

規那丁幾　五、〇　稀鹽酸　一、〇
白　糖　適宜　水　一〇〇、〇
右一日三回分服

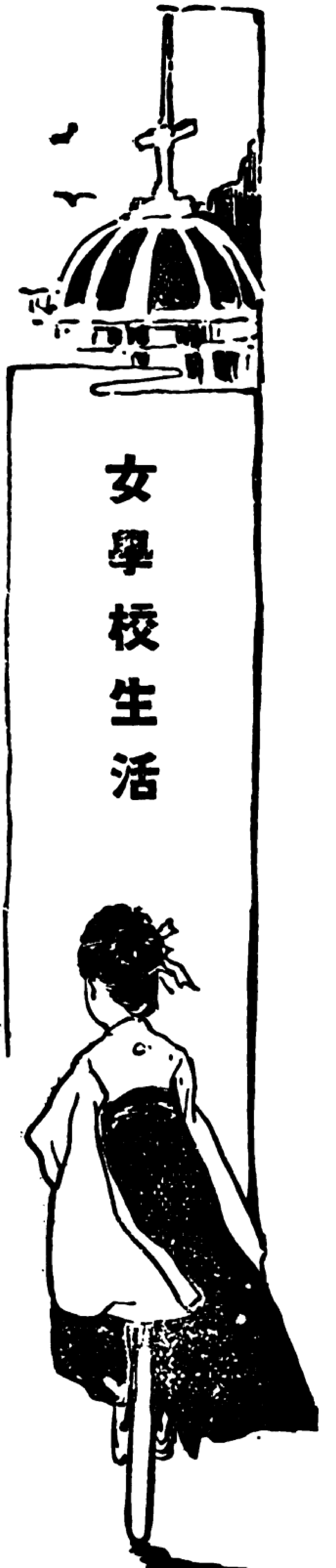
(問)髮に鬢附の代りにワセリンを附けても衞生上差支ありませぬか。(愛子)

(答)差支ありませぬ。

(問)一、あざとほくろを除く方法はありますまいか。
二、藥の加へ方に二十倍或は一分とは如何
三、月經閉止は如何にせば善いでせうか。
四、神經衰弱して居る者は何時間眠れば宜しいでせうか。(越後國ＨＡ)

(答)一、は本誌糸氏一日醫者を讀みなさい。
二、は二十倍とは藥が一瓦に對して水が二十瓦あることで一分とは「一匁の十分の一」のことをも言ひ又百分比例でいふこともあります。
三、は答ふること出來ませぬ何となれば月經閉止の原因は何十とありますから之を詳しく述ぶるには數頁を要さればなりませぬからである宜しく昨年一月頃の本誌糸氏一日醫者欄に詳しくありますから御覧なさい
四、は何時間でも多く眠る程善いです即ち八時間以上が善いです。

女學校生活



第三高等女學校　生徒の控所

麻布の第三高等女學校にては巧みに控所を利用して、生徒の管理上及び訓練上の用に充てゝゐる。控所は昇降口の石段を上り切つた取付の一室、間口十二間に奥行五間半といふ大廣間であるから、優に四百人の生徒を收容して餘あるのである、此室に這入つて先づ目に映ずるは、周圍の白壁に折廻して取付てある棧、それには西洋風の眞鍮の折釘を一尺隔位に打付、側に生徒の名前を記した紙札が一々貼り付てある、之に海老茶色の毛糸の肩掛や、深緑色の絹天の肩掛や、茶褐色の木目縞の被布や、紫色の布呂敷やが、ズラリと並べて懸けてあるので、唯だ最う綺麗と申すより外はない。

校長小林盈氏の話によると、一週間に二回、全校の生徒を此の室に集めて置いて、管理及び訓練に關し、有益な話を爲るさうである、其の時間は朝の第一時の始業前凡そ五分間であるといふから、話す事柄は極く簡短なものに違ゐないが、各級の生徒を一室中に集めて同時に同様の話を聞かしむる便利があるから、上級下級全體に通じて注意を與へるやうな場合、例へば色鉛筆の有害なる理由を説いて戒心を促すとか、寒中の衛生法を説いて各自の注意を求めるとかいふ様な場合には至極都合が宜しいのです。

扨東方の壁間に懸けてある黒板面を見ると、是も控處利用の趣意に出でたのであらう、下の如き圖が書いてある。

而して其の下の案上には三羽の小鳥（しめ、千鳥、あどり）が仰向樣に横へてある、是は教諭森川氏が理科教授の準備として、授業前控處に先つ其實物と圖解とを示し、豫め生徒の觀察を精確にして置かうといふ、深切な用意に外ならぬのである。

それより其の左方の壁上を見ると、校長小林氏が以前奉職して居られた青森縣師範學校の雪景寫眞が掲げ出してある、而してその側の黒板を看ると、



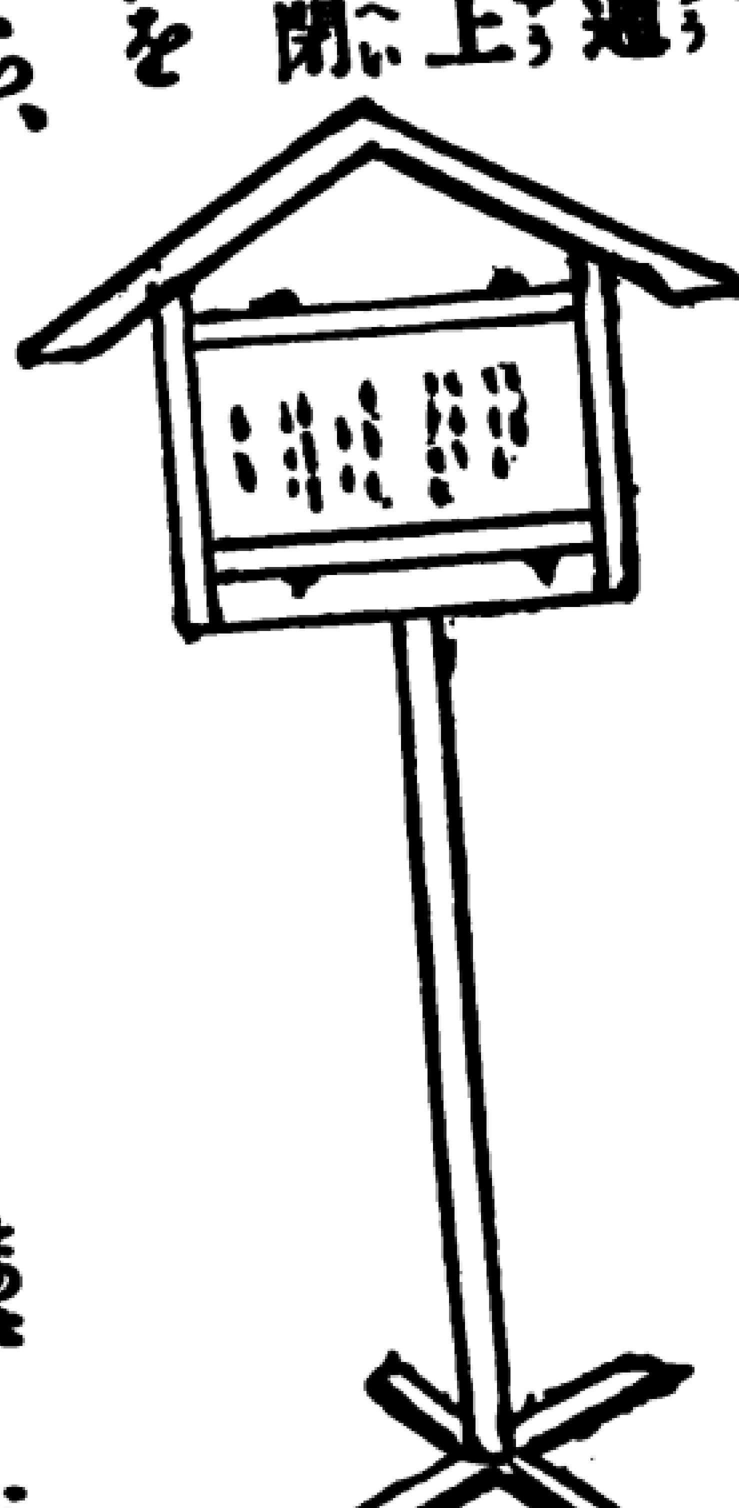
左に掲げたる寫眞は、昨冬話したる雪中に於ける青森縣師範學校である、屋根の白きは雪である、人の居るところが、地上六尺許の高さに積れる雪の上なることは、人の頭の二階の窓に届かうとするのを見ても分る、一昨年の弘前五聯隊の雪中遭難は今頃の事である、

と記した文字が讀まれのである、で、此の寫眞を見此の説明を讀む時は、如何に青森縣下の寒威が凜烈であるかを想像し、續いて彼の有名なる雪中行軍者の、悲酸なる最后を連想して、大人と雖も猶ほ肌に粟するの思あるのだから、況して妙齡なる女生徒の幼い心には之が爲め何れ程波動を起して、その注意を喚起するか知れない、されば此等の用意は、教場内の教授をして一層有効ならしむる價値あること言ふまでもないのである。

由來學校の控所といへば、授業時間の前後に各級の生徒が落ち合つて、跳び歩いたり、無駄話をしたりして、紛々囂々する外は何の用にも立たない塲所のやうに誤解してゐたが、一度此の校に於ける控所を見る

に及んで、控所も亦た敎室の一部であるといふ事を悟つた。

控所を去つて石段を降り、生徒の通用口に行て見ると、下駄箱の傍に下馬札やうの制札が置いてある、掲示のことばは、「傘、穿物を正しく置けよ、事小なれども、其心ばえを見らるゝものぞ」といふ女子に適切な訓戒である、制札に掲示すべき告辭は時々取換ゆる必要があるので、普通の制札とは違ゐ、圖に示すが如く上下二所に梭を打ち、バチ仕掛で開閉するやうにし、告辭を書付た半紙を此の間に挿むやうに出來てゐるから、取外は自由自在、加之に支柱の下には十字形の足が取付てある爲め、何處へなりと持て行つて据付られる便宜があるから、至極重寶な器械である、故に此の校に於ては運動場にも、体操場にも、音樂練習室にも、到る所に之を用ゐて、或は戒飭を與へ、或は命令を渡して、管理者の意志を無言の間に全校の生徒に行き渡らしむるの用に供してゐる。



生徒も亦た之に依つて適當なる指導を受くる外、時には興味ある格言をさへ讀み味ひ、知らず識らずの間に其の品性を陶冶してゆかれるのである、されば余輩は是等の事が敎育上に面白い効果を持ち來すものなることを信じて疑はぬのである。

東京裁縫女學校

お茶の水女子高等師範學校の裏手に當て、煉瓦造三階建の一大校舍がある、是なん女子敎育界の一大勢力として其名を江湖に走せたる東京裁縫女學校である。余は過般同校を參看する機會を得たので、行いて刺を校長渡邊辰五郎氏に通じた所、折惡しく差支ありとの事にて令息滋氏が代つて應接に出で來られた。

▲本校の分科

氏は先づ規則書を持ち出でゝ、同校の敎科が本科

（年限二ヶ年、其の一年を各前期後期に分ちあり）、普通速成科（高等日數百八十日に縮ち教授細目普濟の上卒業試驗を行ふ）高等速成科（同上）普通洋服専攻科（同上）隨意科の五分科に成てゐることを示めされ、扨て言ふやう。

今迄は裁縫専門の學校でありましたが、來學年よりは外の學科をも加へる積で、校名も單に渡邊女學校と改稱致します、と同時に規則書も悉く改正致しますから、唯今御覽に入れた分科の名前も多少變はるので御在ます、尤も新學年より這入る生徒にのみ適用致しまして、古い生徒には矢張是迄の規則を其儘用ゐて行く積りです。

▲生徒の數

生徒の數は昨年三月の月末試驗後に——卒業生も新入生も入れずに——在學生徒のみを調べました時に七百八十人許御在



ましたが、其が現在は八百二三十人に成つて居ります、其の内寄宿生が四十八人居ります、で多い時は千百五六十人に登つた事が御在ます、尤も是は文部省で教室の定員を制限されなかつた前の事で御在ます、文部省の規定は百立方尺に就て一人といふことでありますから、九百六十人までは容れられるのですが、さう一杯にして了つては窮屈ですから、定員丈は入れないことにしてあります、けれども生徒は年年のやうに殖えて參りますので、御覽の通り教員室も事務室も無いやうな始末で、狹隘を感じて居りますから、唯今此の横手に増築致して居ります、其は五間に三間の三階建で、下を事務室と教員室にし、二階と三階とを教室にし、新入生を出來る丈多く玆に收容致す

考で御在ます、斯ういふ譯で校内には到底運動場を設ける譯に參りませんから、今回運動場に充てる目的を以て、瀧の川附近——田端停車場より上つた山の上に二千坪の地所を購めました、で生徒は土曜と日曜とに其處へ行て隨意に運動又は遊戯をすることにしてあります、卒業生は大抵毎月のやうに一回——五六十名宛、出して居りますから、一年には六百名位御在ませう。

▲沿革

本校の創立は明治廿六年で御在ます、尤も此前より私塾として開いて居つたのは餘程長いことです、夫は校長が明治十三年東京女子師範の裁縫科敎師を囑托された時分から、傍ら裁縫練習所と申す家塾を設けて居つたので御在ます、其後女子職業學校を興して、裁縫科の主任教授を致して居りましたが、廿九年に同校を辭して、專ら本校の敎務に從事することとなりました之より先き三年即ち明治廿六年の春で御在ます、在來の家塾を擴張して學校の躰裁となし、玆に初めて本校の創立を見るに至たので御在ます、越えて三十三年一月本郷東竹町三十五番地に在た本郷會堂を買ひ求めて、之を改築致し、こゝに引移り、唯今の東京裁縫女學校と成つたので御在ますと、語り終つて、應接室を出で校内諸室を案内せられた。

▲敎室の參看

校内の模様に就て余の瞥見した所を書いて見やうならば、先づ玄關を這入つた所の右手が大廣間、こゝには廊下に沿つて障子が立切てある、中は三十六疊と二十二疊の二間に成つて居て、壁側に生徒の机が一直線に寄せ付てあるを見る外、何物の目に觸るゝなく、唯だ廣々とした所である。

此室は寄宿舍に充てゝ御在ます、寄宿舍は此の外にも二十二疊のが二つ、三十六疊のが一つ、都合五室御在ますと、滋氏は說明せられた。

廊下を出外れると、中庭になる、こゝは生徒の昇降口と見え、下駄箱が置き列べてあつて、中に靴やら、草履やら、ボックリやら、吾妻下駄やらが行儀よく揃て仕舞てあるが、出入の混雑を防ぐ爲に一々下足札が

結び付てある、是を以て見ても如何に生徒の多いかゞ分る。

氏は其の彼方の、机と腰掛の並べてある一室を指して、此室は理論及隨意科の敎塲で、九十六人を入れますと言はれた。

それより階子を昇ると、廊下の隅に五臺の彌針機械が据え付て在て、恰もホワイト、シヤツの運針最中で在つた。その直ぐ側が高等科と本科二年后期の合級敎塲で、唯だ見る、一面の平疊に百五十人からの生徒が、裁板を前にし針を手にして坐つて居る、其間を敎師が彼方此方と縫ひ歩いて一人々々手を取る樣にして敎へてゐるが、餘り生徒の數が多いので、何れが先生やら生徒やら見分が付かぬ位で在た。

それより三階（普通速成科の半部を納む）四階（本科一年前期を納む）二階（普通速成科及本科一二年を納む）等の諸敎塲をも見たが、何處も彼處も生徒で一杯で、隅から隅まで雜然と居並んだ体裁は宛然蠶を養つてるやう。

氏は敎塲の一隅に掛てある、軍人留守宅慰問資金投入箱といふのを指し示して、これに小遣錢の剩餘を入れさせる事にしてあります、と言はれたが、其の用意や誠に欣すべきである。

▲敎授の方法

本校の裁縫敎授は個人的であります、一齊敎授だと敎師は樂に成りますが、實物を揃へるといふ事があるので、家庭に不便を感じさせますから、本校では實物敎授に於ては個人的に一人々々敎へ、理論及隨意科には一齊敎授を用ゐます、裁縫敎授には三十人に一人位の割當に敎師を配置致してありますと言はれた。

尚ほ聞く所に依れば、本校の門下生間に校長渡邊辰五郎氏の紀念銅像を建設せんの計畫あり、既に其の醵金の高も數千圓の巨額に達したるを以て、近々建設に着手するといふことである。

裁縫敎育界の巨匠として、將た名譽ある恩師として門下數萬の者よりしかく其の德を仰がるゝ氏の事業や誠に盛んの事と言ふべし。

三輪田女學校 家族組織の寄宿舍

寮生の一人

我が三輪田高等女學校は明治三十五年四月に三輪田眞佐子刀自が在來の家塾を改めて學校組織になされたのでありますから、其の寮舍の如きも家塾的即ち家庭的に發達して來たもので、お邸内に在る四棟の平家建が即ち其なので御在ます。

他の學校の寄宿舍の樣に廊下續きの合壁とは違ゐ、全く棟を異にした四戸の寮に分れて居りますから、其の一寮は取も直さず一家の体裁をなし、從つて家具萬端も家庭的に整てなりますから、此處に起臥する私達は我家に居ると同じ樣な心持で勉强することが能るので御在ます。

校長の三輪田先生は寮の舍監であると同時に母の位置に居り、而して寮中の年長者が姉の位置に座り年少者が妹の位置に座つて居りますから、同時に監督し又た監督されて、互に世話を燒き合ふといふ便宜が御在ます。

尤も寮には田村と仰言る女の先生が一人、私達と同居して被爲入います、此の方は全體の長姉ですから、時に老先生の代理とも成り、副官とも成て舍内一切の事を管理して被爲居ます。縫裁と家政がお擔任で御在ますから、寮に在ても縫張洗濯等の事に實地の練習をなして下さるので私達には何程爲になるか知れません。

寮は上級生と下級生と組合せて一家族にしてありますから、私共は此等の方々と姉妹の樣に御交際致すので御在ますが、每月一回抽籤で組替を致しますので、折角御心易く成た時分には、既う居所が變つて外の方と御一緒するやうに成るのです。斯う爲る理由を伺て見ますと、女子と云ふ者は兎角一方の交際に偏するもので、朋黨を結ぶ弊があるから、然う云ふ事の無いやうに、全体の融和を計らうといふ思召ださうで御在ます。

又た寮には、附屬幼稚生と言て漸う九才位になる小學時代の生徒が置いてあります、斯ういふ幼小い方を私達の間に入れてお置きになる理由は外でも御在ません、私達女子が小兒に對する愛情を涵養すると共に、其の弟妹に對する取扱ひ方をも習ひ、育兒實習の一端ともなるからで御在ませう。ですから、私達は可愛がつて上げて、顏を洗つて上たり髮を結て上たり、衣服を着替へさせたり、惡戯を叱つたり、何の事は無い寄て群て手遊に致す樣なもので御在ます、けれども是が爲めに寮の生活が一層家庭的に成て、樂しく睦に暮されるので御在ます。

校長は實踐主義の方で、何でも御自分が先に立て爲なければ氣が濟まぬといふ御氣象で被爲居ますから、朝も一番先きに御起に成て、率先して一家の事を處理なさるので御在ます、だから其に習ふ私共は、自然と良い習慣を得らるゝので御在ます。

それから塾生の金錢は親元から送られると直ぐ校長の御手許に御預けする事に成つて居りますから、私共は唯だ帳面丈を持てゐて、之に必要の金額を其都度自書して、校長より受取るので御在ます、是は簿記の練習にもなり、失費の節約にもなり、金錢といふものゝ觀念を正確にする事にも成て、私達の爲には餘程善いので御在ます、

此寄宿舍の特色は、個人の關係と信用とに依て成立て居る事とて、別に保證人といふ樣な者は立てゝないので御在ます、從つて其の管理もすべて自治的で御在ます、ですから、入舍すると直ぐに老先生とは母子の關係になり、朋友とは姉妹の關係に成て了ひます、故に三輪田高等女學校の寄宿舍は、何處までも家族組織の寄宿舍であるといふことを並に繰

遲して置きます。

堀越裁縫女學校の噂

▲本校は斯界の泰斗と申上る程、此道で有名に成て被爲居る堀越千代子氏の御建に成た學校で、明治三十年二月の創立であるといふことです、だから足懸七年計にしか成りませぬが、其の間の進歩は大したもので、開校以來卒業生を出すこと前後五十九回、現在の生徒數四百六十人、此內寄宿生六十名と註せられて居るので御在ます。

▲本校は家庭を治むる者に必要な技術を御授けなさるといふのが、本來の目的ですが、第二の目的たる裁縫科教員の養成といふ事にも、力を盡された結果、今では大方此の學校を卒業なされた方が全國に洽く分配されて、高等女學校や女子師範の先生を爲てお出で御在ます、現に東京でも女子大學に二人、職業學校に三人、其他三輪田女學校、成女學校、日本女學校、第一第二の高等女學校にも本校出身のお方が教鞭を執つてお在なさるさうです。

▲和服、洋服兩方共教授して居られますが、寧ろ洋服の方が得意であるとかいふ評判を聞いて居ります、其も其筈で御在ます、一体裁縫學校で洋服の裁縫を正則に教へるやうに成つて、抑々の元祖本元と申しては奇怪しいが、實際此校が嚆矢なのですから、幾らか此の方に重を置かれて居るからでせう、兎に角洋服の教授を民間より學校に受取て、之を全國に普及した――唯今では何れの女學校でも裁縫科目に洋服といふものを加へる樣に成つた――其の功は沒すべからざるものと言はねばなりません。

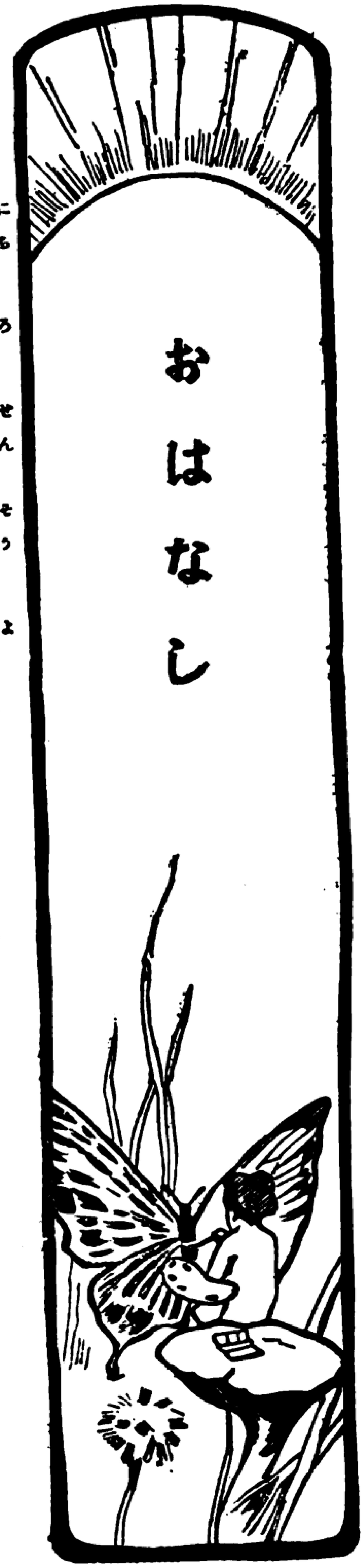
▲教授の樣子を聞きますと、洋服には一齊教授を用ゐ、和服には縫方丈個人教授を用ゐ、裁方はすべて一齊教授にしてあるさうで御在ます、而して教授の仕方は新式で他の樣に仕立屋風ではないさうで御在ます、一齊教授とか個人教授と申しては、お了解に成らぬ方があるかも知れませんから、一寸お斷り致して置きますが、

此の一齊敎授と申すのは、實物を揃へさせて置いて、同時に同種の物を一齊の運針の下に行ふので御在ます、謂はゞ戰爭に一齊射擊と申すのと同じ理屈なので御在ます、それから個人敎授と申すのは、從來仕立屋風の所で行てたやうに、思ひ〳〵の品物を持て來させて、一人宛手を取つて敎へた個人的の仕方を申すので御在ます、何方が可いかと仰言せらるゝならば、無論一齊敎授の方が文明的で、遙かに進步した仕方なので御在ます。

▲此の學校の學科を申上ますと、(一)普通科(和服、一年中の修業)、(二)一年速成科(和服、一年の修業)、(三)速成科(同、六ケ月の修業)、(四)高等科(和服部三ケ月、洋服部十ケ月)、(五)高等科洋服速成科(六ケ月修業)、(六)試驗豫備科(六ケ月、修業)、(七)別科(猶ほ隨意科と、いふが如し)、の七科に別れて居りますが、中で一番生徒の多いのは速成科ださうで御在ます、玆には若い方も、隨分年老た方も來て居るやうでして、中には嫁入前に差迫つて泥繩的に御支度なさる方なぞもお在なさるさうです。

▲試驗豫備科と申すのは、裁縫敎員試驗に應じて見やうといふ方の爲に設けた所で、技術の外に敎授法、敎育學、管理法、心理學等の必要學科を專門的に敎授なさいますから、將來女學校の裁縫敎師に成て獨立の地位を得やうとお心掛になるお人達は、斯ういふ所で十分御準備なさるが宜しう御在ます。

▲又た別科(隨意科)の内には色々の學科が置いて御在ますが、就中裁縫敎授法は本校の得意とする所で、其に次では細工物と摘細工の二科が好評で御在ます。



日露戰爭夜ばなし

少女記者

今度日本とロシヤと戰爭になりましたのは、日本始まつて以來の大事件だといふので世間では中々の評判でありますが、私共には戰爭の因緣が一寸分り兼ねますから、手短に一寸御話して頂きとうございます。

承知致しました御存じの通り今度愈日本と露西亞との戰爭が始まつて、忽ち我は仁川旅順の海戰で、大勝利を得ました。敵の方は、軍艦八九艘、或は沈み、或は損じて、最う役に立たなくなつたのです。諸嬢どうです戰爭の眞つ始めから、斯樣に勝利を得ましたのは、實に愉快でありませう。日本万歳、万々歳です。恁う早く戰爭になつて、直きに勝たうとは、誰も思はなかつたでせう。實に寢耳に水、いや寢耳に勝利で有つたのです。新聞の號外を見て、誰も彼も、驚かない者はありません。爾して皆が氣も狂はんばかりに、歡んで勇氣勃々です。

併しながら、今から餘り騒立つては困ります。今度の敵は、支那兵とは違つて、些とは骨がありませう、直ぐにへこ垂れるよーな事も有りますまいから、國民全体が褌をしつかりしめて掛らなければなりません。且つ諸嬢は、學生だから、恁う云ふ時には、其心掛けが、普通の人とは違つて居なければなりません。只戦争々々勝利々々と、悦んで狂ひ廻はる丈では、感心しません。此際諸嬢は、先づ第一に、今度の戦争は、どう云ふ譯で起つたか、其次第を調べて、承知して居なければなりません。次に、露西亞は、どう云ふ國で有るか、又滿洲や朝鮮の地理は、どうかと、此等の事を、ちやんと調べて置かなければなりません。

さて御質問について是から今度の戦争の起つた次第をお話し致しませう。御承知で有りませうが、明治三十三年四五月の頃、支那に義和團の暴徒が起つて、官兵も之に加はり、遂に北京の各國公使館を圍みました。是は外國人を皆打拂つて仕舞うと云ふ爲めで有りました。そこで各國が申合せ、一緒に兵を出して、太沽天津を攻落し、北京に入つて、やうやく公使や其他の人々を救出した事が有ります。外國人が實際我兵の強いのと、規律の正しいのとを見て、驚きもし、感心もして、大評判となりましたのは、此時の事です。此時滿洲にも所所に賊が起りましたが、其方は露西亞が、獨りで兵を出して取鎭め、騒動のない所までも併せてとう〱滿洲全体を占領したのです。

其後此亂も全く鎭まりまして、最う大丈夫險呑な事はないと云ふので、我國を始め、他の國々は、皆夫々兵を引取りましたけれども、露西亞ばかりは、何の彼のと言ふて、日を延ばして、兵を引上げません。引上げんのみならず、反つて段々と兵士の數を増して、此處にも彼處にも、盛に兵營を新築して、何時までも、滿洲を占領する用意をするのです、而して我國や米國其他の國に向つては、此後幾月たてば、乾度兵を引上げる、滿洲を取り切りにするよーな事は決して爲ないなど丶、口では立派な事をいつて約束して置きながら、其期限が

來ても、矢張引取らず。又同じような事をいつて、日を延すので、際限がない。どうもずるい横着な國です。

それでも支那は弱いから、どうする事も出來ません。そこで我國が、昨年からやかましくいつて、幾度か談判しましたけれども、何時も曖昧な返事をしたり、相談の場所を變へたり、又時には不埒な事をいつて、何時迄たつても埒が明きません、爾して其間に、露西亞はどし〳〵戰爭の用意をして、遂に朝鮮にまで入込むよーな事になりました。

諸君どうです。露西亞は支那や朝鮮を何とも思はぬばかりでなく、我國までも子供のように看做して、欺したり、賺したり、又威したりして、全く馬鹿にして居るのです。それで昨年から政事家や新聞記者抔が、演說や新聞紙で、なぜ戰爭を爲ないか、何時まで愚圖々々して居るかと、やかましく言ひ出して、政府を責めたのです。誠に無理は有りません。

併しながら、戰爭と云ふものは、さう容易く出來るものでは有りません。先づ第一に、敵に打勝つ充分の見込が立たなければなりません、第二には、戰爭の仕度、第三には、軍資金と、此三つのものがちやんと備はらねば、戰爭は始められません。縱令此三つのものが備はつても、尙勝敗は時の運と云ふ事も有りますから、なるべく戰爭せずに、濟す事が出來れば、其方が、一番善いのです。

そこで政府の役人は、堪忍に堪忍して、なるべく穩かに相談を纏めようとしましたけれども、何分露西亞が我國の言ふ事を承諾しませんから、我國の方でも、遂に堪忍袋の緒が切れて、とう〳〵談判破裂、戰爭と云ふ事になつたのです。

此まで話して來れば、今度の戰爭の起つた次第は、大概お分りになりましたでせう。けれどもまだ肝腎な事で話さない事が、一つあります。それは次に問題を出して、話すことゝして、暫らくこゝらで休みませう。

露西亞が支那の領地を占領したからとて、日本がなぜやかましく言ふか。なぜ戰爭まで起すのですか、そこの處を十分に聞かして下さい。

此問題は、大切な問題です。其答が充分出來なければ、今度の戰爭の理由が能く分りません。ですから諸孃と一緒に、暫らく此問題を研究致しませう。

今諸孃の家の一軒置いて隣りの者が、亂暴にもお隣りの屋敷内へ這入つて來て、家を建てゝ住込んだと假りに定めてご覽なさい。恁う云ふ場合に、其は怪しからんといつて、諸孃の家から直ぐの隣りと、其隣りとへ談判して、亂暴人を立退かせる事が出來ますか。それは出來ますまい。若し隣りの屋敷内で亂暴でもして、危險でだまらぬ時は、始めて談判も出來ますが、併しそれを聞入れぬ時は、警察署か、裁判所へ訴へる外仕方が有りません。自分で腕力を振つて、無理に追拂ふ事は出來ません。

一つの國内で、家と家との間の事なれば、今話した通りで濟みますが國と國との間の事は、少し違ひます。國と國との交際上では、不都合な事が有つても、外に訴へる所がない。そんな警察署もなければ、裁判所もない。そこで各國が銘々自分で、其始末をするより外に仕方がない。其始末をするに付いて、餘儀なく他國の事にも、色々關係しなければならない事になるのです。

今擧げた例を、今度は國と國との間の事柄として、若し諸孃の國に取りて、不都合な事が有るとすれば、今度は諸孃の國が、直ぐ隣りの國へも談判し、又其隣りの隣りの國へも談判して、若し承知せざれば、餘儀なく兵力に訴へて、戰爭しても、其亂暴國を追拂つてしまはなければなりません。爾して自分の國の不利益を除き安全を計るよーに爲なければならないので有ります。

我國が、露西亞と支那との事に關係するのは、丁度今話したような譯です。露西亞は、我隣國支那の滿洲を

何時迄も占領して、終には自分の領地にして仕舞うと云ふ了簡を持つて居るのです。爾して滿洲を取れば、又段々と他の處を取る工夫をし、終には朝鮮を取つて、我日本國までも窺ふような事になるに相違ありません。

支那人が、昔から申す虎狼の國と云ふのは、丁度露西亞のよーな國を云ふので有りませう。露西亞は隙さへあれば、人の國へ喰つて掛るのです。恁んな厄介物が、隣國の屋敷内に棲んで居ては、何時飛出すか分りません



花の嵐山

危險千万、近所大迷惑。どうしても、我國では默つて之を見逃して置く事は出來ません。是非とも此厄介物を、遠く追拂つて仕舞はなくつては、安心が出來ません。國家の爲め、誠に餘儀ない事なのです。是が今度の戰爭の起る次第です。

そこで之を約めて言ひますれば今度の戰爭は我帝國が自分の國を永く安全にしやう、又東洋の平和を永く保たせやうと云ふ理由から起つたのです。爾して滿洲から露西亞を追拂つて、再び平和

の害にならないやうに、壓付けて仕舞うと云ふのが、目的で有ります。

此目的は、屹度達せられませう。今度は國民皆一致して、非常な勢ですから、海陸軍人も一生懸命で遣りませう。前には樺太を取られ、後には遼東半島を横取りされて、怨が重なつて居ますから、今度は是非遣付けてやらなければなりません。

日本と露西亞の關係は唯今のお話で大概分りましたが、序にその露西亞といふ國に一体どういふ國で、如何なる歷史のある國でせうか、ザツト御話を願ひませう。

かしこまりました、では是から少しその露西亞の事柄を申しませう。先づ此の地圖をご覧なさい。地圖は上の方が北で、下の方が南、右の方が東で、左の方が西です。そこで其上の方即ち北の方の薄暗き所は、一体に皆露西亞の領分です。大變大きなもので有りませう。それからずつと東南の方で、海の中にぽつ〱と、赤く染めてある所が我日本國であります。

どうです此地圖の上で日本と露西亞とを較べますれば、丁度小さい鯱と、大きい鯨とを較べるやうなものです。是には少しひけを取るやうな心持がしますけれども、國の強弱、はあながち其大きさには拘はりませんから、心配するには及びません。

露西亞は、歐羅巴が其本部で、亞細亞の方は、其領分です。然るに其本部は全國の四分一、亞細亞領が四分の三で、亞細亞の分が餘程廣いのてす。今兩方を合して、其廣さを云へば、世界中英國に次ぐ第二の大國て、凡そ我國の六十倍ほどあります。土地の廣い割合に人口は少ない、總体て一億四千五百万ばかりで、ざつと我國の三倍あまりです。人種はスラブといふ歐羅巴の種族を首として、韃靼種族、(これは亞細亞人種です)芬種

族其他色々の種族を澤山含んで居るのです。

國都はセント、ピータースブルグと云つて、人口が百万餘り日本の東京よりは少し小い、一つの開港場で、諸國の船の出入も澤山ありますけれども、毎年十一月より翌年四五月までは、河水が凍りますので、貿易は全く絶ゆるのです。此都は有名なピーター大帝が建てられた所で、其後代々の皇帝が、此府に住せられて、全國を自分の見込通り勝手に支配せらるゝので有ります。今の皇帝ニコラス二世は、先年まだ皇太子の時分、我國にご漫遊の節、滋賀縣大津で、一人の巡査が亂心して、刀を以て切付け負傷させた方であります。

教育は歐羅巴の内では、餘程後れてる方で、高等教育のみが稍進んで居るのみです。全國に山嶽といふものは殆んどなく大概は平地で林が多い、で交通は國内が廣い丈に、大河も澤山あり、又運河も澤山堀つてあつて大分便利になつて居るので、滊船が千五百餘艘も有ると云ふ事です。それに鐵道は、是まで二万哩もあつた上に、近年ウラル山（これは亞細亞と歐羅巴との境にある山）を越へ、西比利亞を横切つて、浦潮斯德まで、とう〱掛けましたのみならず、途中ハルピンと云ふ處から分れて、又一線を旅順まで引延ばしました。此鐵道は、我國の人が、大變恐れて居た所で、其出來上る前に討たねばならぬ出來上る前に討たねばならぬと云ふ事は皆言ふて居た所なのです。

國民は忠義の心が厚いと云ひますけれども、中には虚無黨などゝ云ふ、恐るべき仲間があつて、時々皇帝に危害を加へるよーな事があり、又壓制に苦んで居るものもあり、滅ぼされて餘儀なく服して居る者もあるのですから、却々我國のよーな譯ではありますまい。ですから常備兵が百万もあり、戰爭の時には三百何十何万の兵を出すことが出來ると申しても、それは只數ばかりで、實際強いかどうか分りません。露西亞のコサック兵と云ふは、有名なものですけれども、是も其強かつたのは昔の事で、今は一般に惰弱で精神も腐敗して居ると

いふ事です。

地理の事は大概分りましたが、序に歴史のお話を願ひ升。

是から歴史の事です。露西亞は元スラブと云ふ種族の建てた國ですが、永く蒙古種族の韃靼人に支配されて苦んで居たのです。丁度今とはあべこべです。それが今より五百年ほど前、イヴアン三世と云ふ王様の時代に、始めて韃靼人の支配を離れて、露西亞帝國の基を



花の愛宕

立てたので有ります。イヴアン四世の時には、四方を征服して、大いに其領分を廣め、そろ〳〵西比利亞を侵し始めましたそれから又百年ほど經て有名なピーター大帝が出たのであります。

ピーター大帝の位に即きましたのは、丁度今より二百二十二年前の事です。此時分露西亞の國は少しも海に出て居ませんので、どうも國が開けません。そこでピーター帝は、土耳其と戰爭して、アゾブ海を取り、始めて黒海の出口を得ました。

それから國の政事を二三の貴族に任せて、自分はオランダとイギリスに行き、先づ船大工となりて、船を造る事を習ひ、又他の諸國を廻はつて、色々の事を取調べました。それから諸國より、學者や、技師や、士官などを傭つて、國に歸り、總ての事を改革せられたのであります。

ピーター帝は、又バルチック海（ロシアの北の方にある海）に、一つの港を得たいと思ふて、瑞典と戰爭を始めました。初めは度々戰爭に負けましたけれども、最後に勝利を得て、とう〱バルチック海の東岸の地を取りました。そこで都をモスコーと云ふ處より、今のセント、ピータースブルグに遷しました。是から露西亞が段々勢盛になつて來たので有ります。

ピーター大帝の後、カザリン二世と云ふ大女帝が出ました、これは中々有名な女英雄で、露西亞の勢が益盛になりました。此女帝の時に、又土耳其と戰爭して、黑海にあるクリミヤを取り、又プロシヤ、ヲーストリヤの二國と連合して、ポーランドを滅ぼして、其國を三つに分けました。そこで領分は廣くなり、勢は益盛になつて、遂に歐羅巴の一等國となつたのであります。

又話が後へ戻りますが、イヴアン四世の後、露西亞は段々進んで、西比利亞を侵し、ピーター帝の時より前既にカムチャッカ（これは日本の千島と對した處ろ）に、手を着け、次第に滿洲に入込んで來ました。それから露西亞と清國との衝突が起るようになりまして、清國は度々滿洲の土地を削られ、又清國と英佛との戰爭の時には露西亞が仲裁して、其報酬に黑龍江の北、烏蘇里河の東、朝鮮の境に至る廣大の土地を得ました。

恁んな鹽梅に、露西亞は段々西比利亞と滿洲とを取り込んで、自分の領分とし、とう〱日本海に出て、浦鹽斯德の港を得ました。それから此港に、大變金を掛けて、軍港にしましたけれども、此港は冬海水が凍つて船の出入が出來ません。そこで軍艦の置場所にも困り、又貿易にも出入にも不便でたまりません。どうしても

最う一ケ所、冬も凍らぬ港を何處かで得なければ、大變困るので、それで始終支那や朝鮮の港に眼を付けて居りましたのです。ところが丁度明治廿七八年に、日清戰爭が起つて、其結果遼東半島を我國で取る事になりました。それを見て、露西亞は自分で望んで居る所ですから、遂に佛國と獨乙とを味方にして、三國で邪魔して我國へ取らせなかつたのです。爾して其後、露西亞は支那政府に迫り、無理やりに二十五年の間、旅順大連等の港を借りて、自分の領地同樣にしたのです。

支那國が危くなつて、東洋の平和に害があると云つて、我國に遼東を返へさせて置きながら、直ぐ其後で、露西亞が自分で、其土地を取つたと同樣に借りるとは、實に不埒千万の事です。是は我國民のどうしても忘れる事の出來ないことなのです。爾してまだ其上に、滿洲を占領して返へさないのですから、我國民も、最う我慢は出來ません。若し是までも我慢して居たならば、遂に朝鮮が危くなつて、我國は安心して居られなくなります。

そこで今度はどうしても、戰爭しなければならん。支那朝鮮の獨立を固ふして我國を安全にし、且東洋の平和を永く保たせやうとするには、戰爭の外に途がない、今度は誠に餘儀ない場合なのであります。

さあ是で今度の戰爭の起つた次第と、露西亞國の模樣とが、大槪お分りで有りませう。滿洲や朝鮮の地理は地圖で能くご覽なさい。

終りに最う一言。諸君は今度の戰爭に付て下し給へる宣戰の詔勅を拜讀して、其御趣旨を能く了解して居られなければなりません。

歷史談

戰爭と日本女子（上）

大町桂月

一

男のみの社會には非ず。日本の武强、世界に比類なきは、表面は、もとより男兒の力なれども、裡面には、また女子の力なくんばあらず。文明の世には、女子が男子と共に戰ふの必要なかるべし。されど、女子の氣質如何は、大に家庭教育に關係す。また母なり、妻なりの心掛如何も、大に出征の士の勇怯に關す。日本武勇の榮譽は、日本女子その半を占むべき也。

元來、日本は、武を以て立てたる國也。獨り男子が勇武なりしのみならず、女子も亦武勇なりき。今之を性格の上より見れば、義を重んじて死を輕んずといふ風は、男女を通じての、日本人の特色也。されど、內にありては、武士の母となり、妻となりて、其子、其夫をして、よく武勇ならしめ、實際戰爭に出で丶も、男子に劣らぬ働をなしたり。思ふに、太古の遠征者は、いづれの國も、屯田のさまにて進みゆきしならむ乎。夫、戈を執りて先きに進めば、妻、輜重を司りて、後より進み、もしくは、共に戈を連らねて進みし跡、なほ我國の上古に殘れり。日本武尊と橘姫との如き、仲哀天皇と神功皇后との如き、上毛野形名夫妻の如き、これ也。

余は、先つ日本女子が、直接に戰爭に出で丶、いかばかり武勇なりしかを記し、次に間接に、日本武士の武勇に關して、如何ばかり功勞ありたるかを記し、又次に斯く直接に、間接に、日本女子が男子と榮譽を分つに至れるは、如何なる特色あるに由りしかを記して以て今後の日本婦人の參考に供せむとす。

二

余は、直接に戰ひし烈女の例として、上古にありては、上野毛形名の妻、降りて、巴御前、板額、富田信高の妻、近くは會津戰爭の際に於ける岸竹子の事を記

すべし。

上毛野形名、舒明天皇の九年に、將軍となりて、蝦夷征伐に出掛けゝるが、この頃のならはしとて、その妻を携帶せり。かくて、進んで戰ひけるが、時、利あらず、大に敗れて、その兵みな散せり。形名ひとり身を脱して、壘中に入る。壘中には、その妻あり、侍女數人あり。今は如何ともする能はず、一旦こゝをにげのびて、後圖をなさむといへば、妻肯んせず、慨然として曰く、今は遁げむとするも、遁ぐべきに非ず。遁ぐとても、徒に捕へられて、恥をさらすに過ぎず、願くは熟思せられよ、御身の先祖は、海外までも征服して、威武長く赫々たり。今、御身は、その子孫にして、將軍の任を拜しながら、難に臨みて、卑怯にも遁げ去らば、啻に御身の耻辱なるのみならず、先祖の前烈に泥をぬる也と。形名、最とは思へども、また戰はむ勇氣もなし。何はともあれ、酒でも飮まれて氣を休め給へとて、妻、酒を出す。夜深うして、四面に、楚歌ならぬ軍馬の聲あり。壘中、燭くらけれども、めゝしき虞氏の涙はあらず。形名、酣醉して臥す。妻、自から夫の劍を佩き、侍女數人をして弓弦を鳴らさしむ、その音に、夫も目さめて起てり、敵も思ひの外に壘中なほ兵士多しと思ひあやまりて、圍を解いて去れり。かゝる程に、敗兵集り來りて、勢また振ひ、終に蝦夷を平定せり。形名の妻の沈勇は、その夫をして功をなさしめたるのみならず、永く後世の懦夫をして起たしむるに足る也。

木曾山おろし吹きたちて、平家の木の葉武者を西海のはてに散らしたるも、圖らずも、關東武士に、あとより寄せられて、朝日將軍の武運も、今は西に傾けり、宇治、勢多の戰やぶれて、今はとて、都を落ちゆく。死なば共にと、つれだちたる万綠叢中の一紅、巴御前の事は、兒童の耳にも熟す。今更說くまでもなけれど、日本烈女の一例として、よそに閑却すべくもあらず。

義仲は、主從、わづかに十三騎也。畠山重忠、大軍にておしよす。衆寡敵せず、川原へひき退く。重忠おしよす、義仲また返り鬪ふ。巴御前、萠黃縅の鎧に射

残したる鷹の羽の征矢負ひて、滋藤の弓の眞中を取り、蘆毛の馬の太く逞しきに、巴摺りたる鞍置きたるにうち乗りて、眞先に進みて戦ふに、重忠も辟易して引きかへし、榛澤六郎に向つて、如何に六郎、われ十七歳の時より戦に出でたると、其數を知らざれども、未だかばかり猛き武者を見ず。木曾方には、今井、樋口、楯、根井が四天王と呼ばれたるが、あれは、四天王にはあらず。何人にやと云へば、その四天王の随一なる今井の妹、巴御前なりといふ。さらば、女に負けて、



花の上野

引きかへしたるか。重忠が名折なり。進めや、ものどもとて、また押しよせ、殊に巴御前をめがけて戦へり。義仲、巴をくませじとて、かけ隔て丶戦へども、その甲斐なく、重忠、終に巴に近づき、金剛力を出して、その鎧の袖をつかむ。今は、かなはじとや思ひけむ、馬に一鞭あつれば、鎧の袖は、むなしく重忠の手に殘りて、巴は早や一町ばかりかけぬけたり。餘りの力に、重忠も舌をまきて引きかへせり。

義仲、漸くきりぬけて、西の宮河原にゆけば、從騎

はわづかに七騎也。巴もなほその中にあり。先頭に立てり。何とや思ひけむ、かぶとをぬぎて、緑の黒髪を春風にたなびかせり。年、二十八、女盛り也。色白き顔、黒髪と相映じて、艶麗にも、また勇壮也。遠江の住人、内田三郎といふもの、その顔頗る美なるが、力は六十人力とて、力自慢の剛の者也。巴を見つけて、郎黨に向ひ、必ず巴を生捕りて、鎌倉殿に上らむ。われに六十人力あり、汝等三十餘人、合せて、三百人の力はあるべし。巴、如何に剛なりとも、百人の力はあらじ。汝等は左右より進め、われは前より進まむと云ひけるが、いや／＼、たかゞ女を生捕るに、郎黨の力をかりては面目なし。われ一人にて向はむ、手助けすなとて、巴めがけて進む。巴之を見て、馬をかへし、やがて、馬頭と馬頭と相接し、鎧と鎧と相觸る。一方は、絶世の美人也。一方は、關東に名たゝる美男也。而して共に剛力也。いかばかりか美観を呈して、且つ壮烈なりけむ。三郎、巴の黒髪を三まきばかりからまへて、腰刀ぬきて、首をかゝむとす。巴叱して曰ふ。

汝は内田三郎なりと名乘りつるが、そはいつはりにて、名もなき下郎ならむ。何の、下郎ならむ、われは、まことの六十人力の内田三郎なり。何とてかく云ふにや。云ふべきわけあり。女にくむ程の男が、刀を拔き、目に見するやうやはある。軍の作法も知らぬ田舍武士かなとて、拳をにぎりて、刀持ちたる臂を、したゝかにうては、もろや、刀は落ちたり。左手にて内田の冑をあふのけ、腰刀ぬく手も見せず、首をかきて、來りて義仲に示す。むざんや、八州に鳴りわたりし剛のものも、運つくれば、斯の如し。われもまた如何なる人の手にかゝりて果つるやらむとて、愁歎すれば、さすがの勇女も、涙せきあへず。義仲、巴に向ひて、汝は女なれば、これより落ちのびよ、死際までも女をつれたりと言はれては、義仲が末代までの恥辱なり。いざ／＼と促す。巴、共に死なむと乞ふ。義仲きかず、歸りて故郷にこの樣を知らするが、我に對して、何よりも忠實たるわざなりといふに、巴も、今は止むを得ず、死ぬる夫を後に見て、生きともなき命いきのびて、都の

花をみすつる雁と共に、雪さむき北の空、信濃路さしておちゆけり。

板額は、巴と勇名をひとしうす。されど、その顔は、全く反對にて、巴は絶世の美人なるが、板額は、絶世の醜婦也。

城長茂、源頼家に殺されけるが、その甥資盛、如何に將軍なりとて、無法なるわざなりとて、越後の鳥坂に據りて叛す。頼家、佐佐木盛綱をして、之を攻めしむ。板額は、その資盛の叔母也。雄傑にして、力强く、弓を善くし、兵略あり櫓上より射るに、虛箭なく、



花の向島

寄手大に辟易す。如何にもして、之を斃さむとて、信濃の人、藤澤清親、城のうしろの山上より射て、その兩股を貫く。さすがの勇女も、その創の爲めに力よわりて、終に捕へられたり。捕へられて、頼家の前にひき出されたるが、毫もわるびれたる樣なく、雄姿颯爽たるに、みる人、みな驚嘆せり。淺利義遠といふ勇士、頼家に請ひて、之を娶らむといふ。かゝる醜婦を、何の物ずきぞと云へば、美醜は臣の問ふ所にあらず、かゝる絶世の勇女を妻とし勇士を生みて、將軍を守

護せしめまつらむとてなりといふに、賴家笑つて許しければ、大に喜び、うちつれて、甲斐の國にかへれり。

德川家康の臣下に富田信高といふものありき。上杉景勝兵をあげし時、家康に從ひて、小山に赴きけるが、石田三成、また兵を大阪にあげしかば、家康の命をうけて、その居城伊勢の安濃津にかへりて、防備を修む。分部政壽、古田重政之を助く。毛利秀元、長曾我部元親、三万餘の大軍を以て、攻むること、太だ急也。信高力をつくして戰へども、衆寡敵せず、火箭にて、城櫓まで燒かれて、城將に陷らむとす。本多志摩守曰く、最早守るべからず。早く自盡せよと。さらばとて、本丸に入らむとしけるが、秀元の先陣の將、中村淸左衛門はげしく追擊して、信高の危さ、言はむ方なし。

本丸にありける信高の妻は、夫既に討死せりと聞き、さらば共にとて、槍を提げて、敵中に突入し、縱橫無盡に斬り倒す。敵將中村は、終にその槍先に斃れたり。なほつゞいて、五六人を斬り、その勢當るべからず。その爲めに、敵兵、逡巡して進まず。信高は、重圍の中にありたるが、妻、奮戰の爲めに、敵兵圍を怠りければ、漸く生路を得たり。眼を放て、その勇者を見れば、武裝鮮明なる年二十四五の若武者也。政壽に問うて曰く、あれは、貴殿が近侍のものかと。政壽曰く、否、而かも女武者のやう也と。信高、近づいて見れば、豈に圖らむや、其妻也。さすがの勇女も、夫を一目覗るよりて、涙をそゝぎて曰く、君はまだ無事にておはしけるか。われは、君既に戰死したまへりと聞き、共に死なむものとて、出でゝ戰ひけるが、圖らずも、無事なる御顏を拜することよとて、喜ぶこと限なし。信高も、爲に重圍を脱するを得たることを謝して、うちつれて城に入る。敵、なほ攻むること急なりしが、高野の僧、來りて和議を講ず。信高到底守るべからざることを知りて、人質を交換して、城を開きて去れり。

この戰國の頃には、この外、直接に戰ひし女性、頗る多し、尼子氏が備中經山の城を攻めし時、城主、中島元行の母が奮戰せしが如き、織田信忠が、信州高遠の城を攻めし時、諏訪莊右衛門の妻が奮鬪せしが如き、

みな以て日本女性の爲に氣を吐くに足れども、余の意、傳記を主とするにあらねば煩をいとひて、之を略して、直に岸竹子にうつらむ。

竹子は、會津藩の士、岸七郎の妻也。會津が薩長の兵に攻められし時、七郎は、百瀬某と共に、一隊を率ゐて、越後口に赴きぬ。竹子も、坐して國難を見るに忍びずとて、夫と別れ、本軍につきて、彈藥運送の事をつかさどりけるに、薩長の勢、破竹の如く、賴に思ひし猪苗代まで攻めおとされて、敵は、今は、瀧澤峠までおしよせたり。時に、



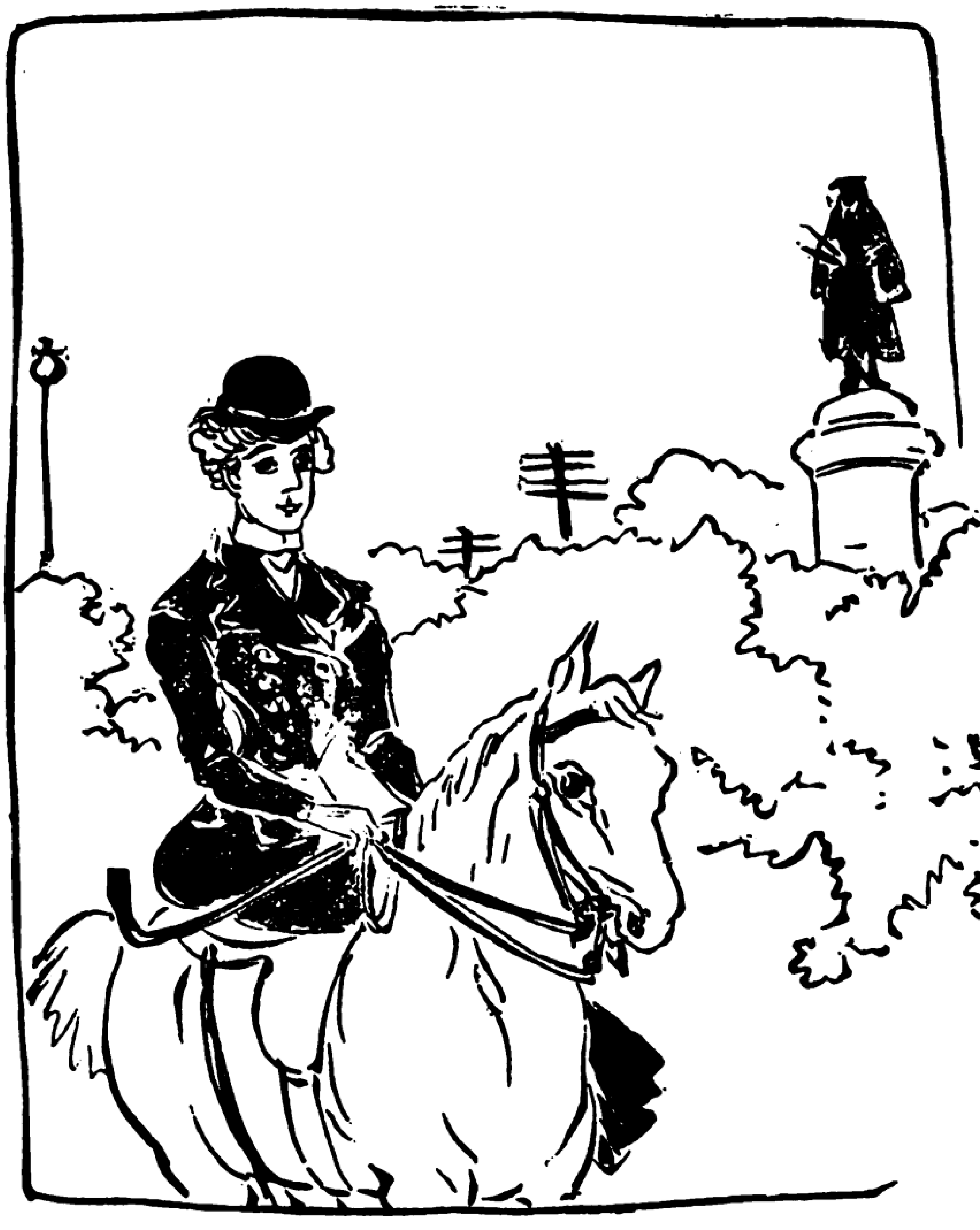
花の飛鳥山

明治元年八月二十三日、會津の兵は、力をつくして、茲に先途とたゝかへども、衆寡敵せず、しどろ、もどろになりてにげゆくさまの見苦しさ、彈藥運送の事をなし居たる竹子、男にもまされる剛毅の女性、見るに見かねて、腰なる一刀、すらりと引きぬき、軍中に加はりて、ふみとゞまりて戰へり。鬢髮、風に亂れて、緑雲、空に舞ひ、くれなゐの唇、かたく閉ぢて、柳の眉さかだち、滿身の力を込めて、電光石光ときらめかす烈女の鋒先に、近寄る五六人の敵、たちまち斬り倒

されて、迸り出づる鮮血、地上に流れて聲あり。このさまを見て、會津の兵、一時は勵まれて、引きかへしたれど、敵は、新手を入れかへ〳〵て攻めよするに、またも浮足たちて、七八町ばかりにげ延びたる處に、ゆくりなくも、一隊の兵、横手よりあらはれ出でぬ。これなん、さきに越後口に向ひたる百瀬某の一隊なりける。會津の敗兵も、これに勢を得て、共に力をあはせて尾撃する敵兵を追ひのけて、軍氣大に振ひ、再び來らば、たゞ一戰に蹴ちらさむと、勇みに勇みて、待ちかまへたり。

越後口に向ひし二將、その一の百瀬は歸り來りたれど、岸は歸らず。歸らぬもその筈、既に討死したる也。百瀬、竹子を見て、いたくうち驚き、さても、御身はこゝにおはするか、某は、六月以來、越後にありて、數度の戰に、辛うじて一命をたすかりて、茲に來りぬ。いたはしや、御身の夫、七郎殿は、去月十日の戰に、あへなく討死したまへり。その屍は、山陰にうづめてしるしばかりの石を立ておきぬ。紀念の爲めにとて、此短刀を持ちて歸りけるが、我とても、明日をも知らぬ露の命、せめて、これを御身にわたして後に死なんものと、思ひし甲斐ありて、今茲に、ゆくりなく、對面したることのうれしさよ、御夫のかたみ、いざ受け給へとて、短刀をさし出せば、竹子、かしこみて、押しいたゞき、越後口の戰は、いとゞはげしかりきと聞き侍りしを、かゝる中にも、夫の屍を葬られ、短刀さへ持ちかへられしは、此上もなき御厚情、謝しまゐらするに言葉もいで侍らず。この上の御情には、夫の討死のさま、ひと通、聞かせ給ひてよとて、涙一滴こぼさぬ心のをゝしさ、さればにて候、御身の言はるゝ如く、越後口の戰は、いつも、てづめの戰なりしを、わけて、去月十日の戰は烈しかりき。七郎殿と某とは、退兵五百をひきつれて、陣が峯にて、薩長の大軍をくひとめ、終日、敵兵をなやましけるに、思ひもよらぬ横合より敵兵あらはれ出で、前後より攻め來りければ、味方は不意をうたれて、討死するもの、數を知らず。されど、七郎殿は、一歩も退き給はず。自から陣

頭にいでゝ、味方を指揮して戰はれけるが、銃丸、雨の如くそゝぎ來りて、面をむけむやうもなく、七郎殿は、終に胸をうちぬかれて、無念と一聲、敵の方をにらみて、息絶え給ひきなど語りけるほど、若松城下に當りて、大砲小砲の音、すさまじく聞えければ、すは、敵は既に城下におしよせたりと覺えたり。猶豫すべきにあらずとて、百瀬は令をつたへて、長蛇の陣をつくりて、いちはやく城下におし出しぬ。竹子もつゞけり。



花の九段坂

やゝしばらくして、七日町に入らむとするほどに、薩長の兵、すでに一の郭をのりとりて、勢、破竹の如くなれども、城中より打ていでゝ、女、小兒にいたるまでも戰ひければ、薩長の兵も力つきて退きぬ。しばらくして、また新手を以て攻めけれども、勝負なく、城下をやきはらひて引きあげ、その夜は、戰なくて明けぬ。翌日、朝まだきより、また押しよせ、追手からめ手、一

時に攻めたてゝ、砲聲とゞろきわたりて、天地も崩るゝばかり也。天寧寺山の要害さへ、敵兵にとられて、城は、もはや、禦ぎがたく見えけるに、白河口に出でたりし一隊、歸り來りて、越後口の一隊と、瀧澤峠の敗兵と共に力を合はせて、死を決して戰ひければ、兩軍の死傷、いくばくといふことを知らず。黒煙天にみなぎりて、咫尺をわかたざる中に、ぬきつれたる劒、火花をちらして、きらめきわたり、寄せてはかへし、かへしてはまた寄せ、奮戰苦鬪して、積屍山をきづくばかりなりしが、會兵、次第にうちやぶられて百瀬も、あへなく討死せり。昨日は我夫の上、今日は人の身の上、われも明日はいづくの土とやならむ。明日をも待たぬ露の命と言ひし言葉の舌未だかわかぬにその身は、龍門原上の朝露と消えうせぬ。せめては、その屍を葬りて、夫の屍を葬りくれし恩誼にむくいむとて、かよわき女の身なれど、思ひ凝つたる一念つよく、我より遙に大なる大兵の死骸を脊負ひて、亂軍の中を逃げのびてゆく程に、兵火、行手をふさぐ。それをも避くるに遑なく、火をふみ、烟を冒して、通りぬけ、七日町より郊外に出でゝ、岩根こゞしき山のふもとまで來りけるに、追ひくる敵なければ、百瀬の屍をおろして、一息つき、如何にして埋めむと思案しけるに、倒れかゝりたるひと本の木ありければ、これを引きぬきて、その跡を少しばかり掘りて、やがて、死骸をばうづめ終り、これにて、夫の爲めに恩を酬いぬ。最早、思ひのこすことなしとて、衝立ち上りて、城の方を望めば、火烟、天に冲して、はや、落城せるさま也。その身も、また深き手創を負ひたれば、今は、これ迄なりとて、夫のかたみの一刀、手に取りあげて、脇腹につき立て、城の方をふし拜みつゝ、息たえたり。年二十八也。

軍に妻をつれし風習はやまるのみならず、却つて女子の力をかるを耻とするの風起り、且つ女子は内を治むるが主となりたれば、直接に女子が戰爭せるとは、割合ひに少なし。千餘年の間に於て、余は、五人の烈女を擇べり。亦以て日本女子の武勇を代表するに足るべし。

談叢

軍艦の話

S・S・生

今回日露の開戰となりまして、その戰爭の序びらきとして、まづ仁川、旅順口で敵味方の激烈な海戰がありました、幸に敵の軍艦幾艘は轟沈され、我が海軍大捷利の報知を得て、四千五百萬人の胸は踊り帝國萬歲の勇ましい聲を聞くのは何よりの事で、東鄕司令長官、瓜生少將の名は至る處ろに傳へられ、レトウヰザン、ツエザレウヰッチの名稱は八百屋、肴屋の小僧までも口にする樣な次第となッたのは實に前代未聞の事で、今日日本國民の腦中に一人として軍艦を描いて居らぬものはありますまい。一人として旅順攻擊の大海戰を心に留ないものはありますまい。又日本全國至る處ろ海戰の噂のされない所はありますまい。併しこの海戰とか軍艦とかいふ事は毎日の新聞號外で皆樣の注意を惹て居るにも拘らず。一体この軍艦が戰爭をする時にはどういふ工合にしてやるものか、一等戰鬪艦とは如何なるものか、水雷とはどんなものか、これ等の事情を詳しく知ッて居る方は甚だ稀であらうと思ひます、今日一國を擧げて戰爭に從事して居る我國民が軍艦の事情一と通りの事は承知して置てよからうと思ひますから、まづザツと槪略の事柄を爰に述て見ませう。

▲軍艦の種類

大は一萬五千噸の戰鬪艦より、小は五六十噸の水雷艇に至るまで、凡そ海戰に用ゆる船の種類は今日の處でまづザッと八種類あります、即ち戰鬪艦、巡洋艦、海防艦、報知艦、砲艦、水雷母艦、驅逐艦、水雷艇とまづこういふ按排に名前が付けられて各々その船の性質、種類に依ッて區別してあります。

（一）戰鬪艦

この軍艦は主戰艦といつて敵の軍艦に向つて戰ふのを專一として居る艦で大概一萬噸から一萬四五千噸軍艦中戰鬪力の一番强い艦であります。さればその形は尤も偉大で堅固で、艦全体が鋼鐵で造られて居て船緣の厚さが七八寸もあらうといふ位、凄まじいほど壯大なもので、これが橫須賀とか、佐世保とかの軍港に碇泊して居る處ろを陸上から見ますと、まるで山の樣なと形容してもおかしいが、まづ海の中の城といつてよい位。この軍艦の役目は專ら敵の軍艦を擊ち毀したり、砲臺を破つたりするものであるから、その攻擊力も、防禦力も共に充分に備はつたものである、さればこの一等戰艦に備へられてある大砲は通常砲四門、速射砲四十六門。その大砲の大きいのになると所謂十二インチ砲といふので砲身の長さが七間もあツて、その中へ籠めて打出す彈丸の高さが三尺、まづ丁度八九歲の小兒の脊ほどあります。丸は椎の實の形になつて居て胴の周圍が手桶位に見へます。さてこの一等戰鬪艦には凡そ何人の乘組があるかといふに、將校から水兵まで合計して八百五十幾名といふ定員、して見ると一寸した地方の一市街の人口と比敵して居ります。これで戰鬪艦の如何に大きいかといふ事が知れませう。唯今日本で一等戰鬪艦といふのは

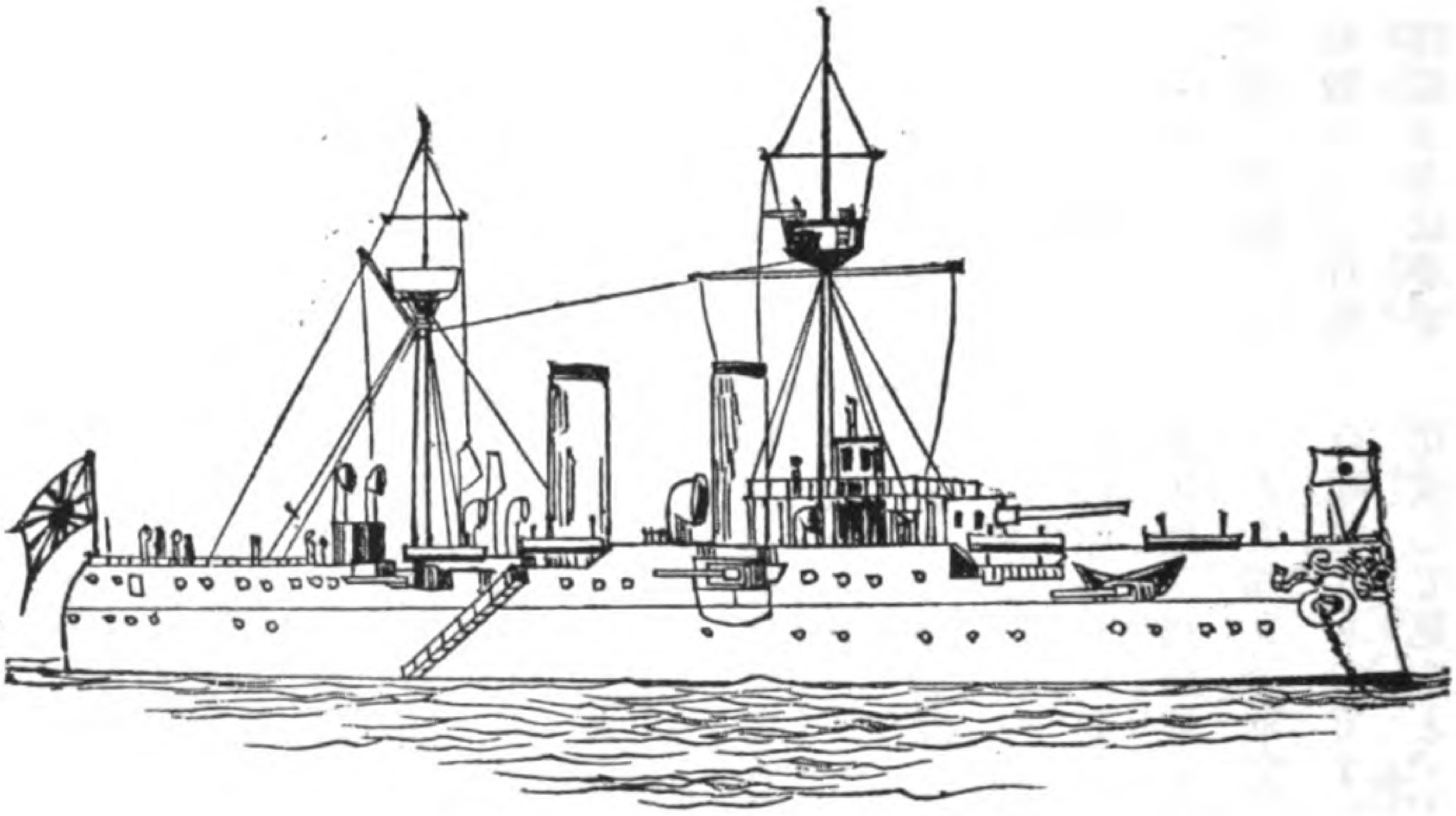
朝日、三笠、初瀨、敷島、富士、八島

の六艦で外に鎭遠、扶桑が二等戰鬪艦であります。

爰で一寸此の戰鬪艦構造の大略を申しませう。噸數はまづ前述の如しとして、艦の長さが四百ヒート、即ち六十六間ですから一丁餘もあり、幅が十二間、深さ七間餘で水中に入る部分が四間半、速力は十八海里、即ち一時間に八九里を走るのでありますから。この速力で行きますと一晝夜には二百里を走る事が出來るのであります。艦内は都合七階になつてゐて内四階丈が水面以上にありまして、司令長官室、艦長室、士官室、會議室、食堂、病室、中々整頓したものであります。

(二) 巡洋艦

この軍艦は軍艦中で一番任務の澤山な軍艦で戰爭の時には敵の商船運送船を奪ひ取つたり、それを護衛して居る敵の軍艦を撃ち破ッたりするのが重なる任務で、或は深く敵地に這入てその軍艦の動靜を探ッたり、又味方の運送船を護衛したり。それから戰鬪最中には遊擊隊となつて臨機應變の働きをするので軍艦中尤も多忙な役目を帶て居るのがこの巡洋艦であります。從つて戰鬪艦などよりもズット速力が多くなければならぬから、石炭も澤山に積んで置かねば、ならぬ、それから巡洋して居る途



中で若し敵に出逢つたらば早速に防衛をせねばならぬから遠方から大砲を擊ち出して効用のあるやうに有力な大砲も備へて置かねばならぬ、併しこの巡洋艦には尋常のと、裝甲と二種あるが、いづれにしても速力を重んずる艦であるから船体を輕くする必要上、餘り厚い鐵を着る事は出來ない。裝甲の方は戰爭中戰鬪艦と同じ働きをする、唯速力が迅いので遠くへ離れて戰爭をするのに都合よく出來てゐるのであります。その噸數は一等巡洋艦で大概七千噸以上一萬噸、二等で四千噸から五千噸、三等で二三千噸。又乘組

人員も一等となれば六百人以上、二等三等で二三百人より百四五十人是に屬する艦は

出雲、磐手、淺間、常盤、八雲、春日、吾妻

下つては

笠置、千歳、嚴島、松島、橋立、高砂、吉野、高千穗

と、いふ樣な順になります。

(三) 海防艦

これは本國の沿岸を防禦するのが重要な任務で遠く海を越へて出戰する樣な場合はまづ滅多にないのでありますから、防禦に必要な丈けの攻擊力及び防禦力を持つて居りさいすれば、速力などは左ほど早くなくてもよろしい、唯沿海の岸の水の淺い所で敵を迎へ擊つのでありますから吃水即ち、船脚の淺いのを特色として居る、そして船の構造は大槪鐵骨木皮、即ち骨組だけが鐵で木材づくりとなつて居る、その噸數千二三百噸から三千五六百噸位なもので、普通巡洋艦よりは小いのであります。尤も我國には一等二等の海防艦はなくて唯三等のがあるばかりです。乘組は百二三十人より二百人以上までであります、

濟遠、金剛、比叡、筑波、高雄、葛城、大和、武藏、天龍、海門、

これが三等海防艦であります。速力は十三ノット内外のものが多い

(四) 砲艦

砲艦は極めて重寳に出來た艦で、其形の小さいに拘らず比較的有力な大砲を持つて居る、元來船が小さいから、よく島の蔭や、又は淺瀨の所でも自由自在に運動ができる、河を溯ぼつて敵地の砲臺を攻擊するなどは此の船の特色として居る所であるが、平素は重に海外殖民地や居留地を警備して人民保護の役目を務むるのであります。艦の大さは一等砲艦で二千噸、二等で四五百噸位なものですから一等戰鬪艦、若くは大巡洋艦に比較して見ると、まるで相撲取の傍へ赤兒を持つて來

た様なものです。速力は大抵十ノット位なもの、唯今日本にある砲艦は十五艘でその名稱は
平遠、筑紫、天城、磐城、大島、愛宕、鳥海、赤城、鎭東、鎭西、鎭南、鎭北、操江、摩耶
などである、これも乘組は一艦三四十人から百四十人位までであります。

（五）報知艦

この艦は戰爭のある時、敵情を偵察したり、命令を傳へたりする艦で、一方に於ては敵艦隊の動靜を探り又一方では我が艦隊と根據地との間の通信の連絡となるもので。專ら司令官の耳目となつて働らくのであるから、速力の早いのが第一で兵器の如きも速力を減じないまでを程度として攻撃力、及び防禦力にはあまり重きを置かないのであります。船の容積も大概は千噸以上千五六百噸位なもので、乘組人員は五十人乃至二百人、宮古、八重山、千早、龍田、なぞがこの報知艦であります。

（六）水雷母艦

これは數多の水雷艇の母親ともいふべきもので、我が水雷艇隊が遠く軍港又は根據地を離れて敵地に遠征する時に必要な糧食や、炭水などを充分に艇内に積む事が出來ません、斯る場合に此の母艦といふものを伴れて行つて水雷艇に必要なすべての供給をこの母艦から受けるのである。それ故この母艦は十分廣い船艙を有て居なければならぬ、併しこの種の艦は敵と戰鬪をする目的でないから攻撃力、防禦力ともに誠に乏しいのである、日本では豐橋艦が即ちこの母艦で、唯一隻しかないから、有事の日には有力なる商船を以てこの母艦に假裝せらるゝのであります。噸數は四五千噸のもので乘組は二百人以上です。

（七）水雷驅逐艦

これは敵の水雷艇を追つ駈けて捕獲するのが重なる任務であるから、其形は水雷艇のやうに小いものであり

ますが、速力は普通の水雷艇を乘り越へる位迅くなくてはならぬ。即ち一時間三十ノット以上であるされば其の攻擊力は水雷艇を破壞するに足るべき速射砲が尤も必要である。艦の大さは大概二三百噸のもので二等砲艦よりも更らに小さい、又乘組人も五十人乃至六十人まで唯今では

村雨、春日、曉、雷、東雲、さゝなみ、電、曙、夕霧、薄雲、おぼろ、霞

など是れに屬する艦は十幾隻であります。

（八）水雷艇

夜陰又は霧の深い時などに乘じて不意に敵艦を襲ひ、艇内に備へられた水雷發射管から魚形水雷を發射して敵の戰鬪艦を攻擊するのが其の役目である、一發の水雷で山の如き艨艟も一瞬間に破壞、轟沈するのであるから、その任務は中々重大で、又その効力は實に恐るべきものである、水雷艇が敵艦に近づいて發射するのは一町以內の近距離でなければその効目がないのであるから、随つてその危險も又實に非常で、若し一朝敵艦に見つけられたらば忽ち擊沈さるゝを覺悟して居なければならぬ、さればその運動も又神出、鬼沒の働きがなくてはならぬ、今回旅順口に於ける我が水雷艇の働きは實によくその任務を全うしたもので、天祐と人力と相待て成功したのである。この艇は概ね薄い鋼の板で輕く造られたもので五六十噸から百噸位の排水量、速力は二十ノット乃至二十七ノット、位であります。

▲軍艦職員

以上は軍艦の種類と、其の役務の大凡を申したのでありますが、さてこれから是の軍艦を動かして實際の働きをさせやうといふに就て必要なる職員と、その職務の大概を記して見ませう。

軍艦の職員とは上は艦長から下は下士卒水兵に至るまで凡ての乘組員を總稱したもので數多の階級に分たれ各員は皆それぞれの役目を帶びてゐるのでありま す

まづ一隻の軍艦に乘組むところの將校の任務の大概を區別して申すと、重なる處ろで

一、艦長　二、副艦長　三、航海長　四、砲術長　五、水雷長　六、機關長　七、主計長　八、軍醫長　九、分隊長

まづ大体は斯樣に區別されて居て一般乘組の將校下士卒は皆これ等の各部長に從屬してそれ〲銘々の職務に服するのである。でまづこれを陸軍に擬らへていへば一軍艦は恰ど一聯隊の組織であッて、萬事艦長の主宰の下に活動して行くのであります。

艦長以下の任務

▲艦長●●　艦長は船の大小に拘らず又、その官等の高下に拘らず、凡て一艦の主宰者であッて艦內數百人の安危存亡を引受け、事に臨んで勇猛なる決斷を要するのであるから其の任務の重いだけに又その權力は頗る大きいものである。戰鬪艦若しくは巡洋艦のやうな大艦の艦長は通例大佐であるが、海防艦や、砲艦の艦長は中佐、下ッて驅逐艦あたりの長は少佐である、されば艦長は平素一艦內の將校下士卒を指揮誘導して能くその任務を盡さしめ、又艦の搆造から、艦內の諸機關、武器の能力を熟知して、一旦事のあッた時には、命令の下ると同時に、直ぐに戰が出來るやう一切の準備をして置かねばならぬ。それ故不斷に艦內もろ〲の配置を作り、部下の將校をして常に操練を行はせ、いざ事のあつた曉には之を實地に應用するの機會を待つてゐるのであります。次に副艦長は艦長を補佐して行くものであつて、艦內百般の事柄を處理する役である、艦內の各部を整頓し、艦員の動作を監督し、又艦內の經濟にも注意して需用品の節約を謀り、物品の保存整理等までもよく監視して艦長をして內顧の憂なからしむるものは實に副長の任務である。

▲航海長●●　艦長の下に航海長といふものがある、これは船を運用する役で天候の模樣や、水路の情況に通じて常に安全なる航海を取るのがその大体の任務であるまた砲術長といふのは軍艦に備へてある所ろの大砲を主管とる役であつて、不斷是に關した一切の研究をし

一朝事のあつた時には、砲手を指揮して敵艦を粉碎する重大の任務がある。以上副長、航海長は戰鬪艦乘組では中佐、砲術長は少佐である。

▲機關長　それから機關長といふのは軍艦內に裝置してある一切の機關、譬へば艦內の消防に用ゆる喞筒、だとか、海水から淸水を取る器械の蒸溜器だとか、艦內の各室に空氣を送る爲めの通風器だとか、又舵を按排する爲めの操舵器だとか、それから電氣燈を點する發電機だとか、その他一切の機關を主管する役でこれは機關大監若しくは機關少監といふのが任せらるゝのである。次に軍醫長といふのは、不斷は艦內一切の衛生を司どる役で。戰爭の際、負傷者があれば部下を指揮して急應の手當をする是も亦重大の任務である。

▲軍醫長、主計長　主計は金錢の出納、糧食、被服に關する一切の事柄を司どる役で艦內日々の消費を計算するのがその任務である。又軍醫長は艦內の衛生一切の事に關する任務を司どるのであります。

▲分隊長　それから分隊長、これは便宜上艦內乘組の下士卒を各部に區別してある、その一部の長で、平常は部下の隊員を統御して其の性質行狀を察し、よく彼等を誘導して忠實に職務を盡さしむるのが其の任である。

戰爭の時には砲臺を指揮したり、彈藥庫や機關室に居て部下を勵ましたりして、士卒を奮鬪せしむる人である。少佐、機關少監又は大尉、大機關士の官にある將校がこれに任ずるのである。

其他軍醫長以下艦內乘組の士卒はいづれも以上の各部長に從屬してそれ〳〵その任務を盡すのであるが、戰鬪艦の如き大艦になると一艦內の人員七八百名に上り、恰も一小市街の人口を集めたほどの大數であるから艦內の用務は實に多種、多端で、普通水兵の外に信號を司どるものもあれば、舵を受持ものもある、食物炊事を司どる料理番もあれば、船中の器機を修繕する大工や鍛冶もあつて凡そ艦內で必要な事柄は大概艦內で用の足りる樣に出來てゐるのであります。

戰鬪組織

一軍艦の事はまづそれで大凡に推察が出來るとして、扨て實戰の時にはどういふ工合に戰鬪組織をするかといふに、是は元より敵の情況にもよるけれども、一隻の軍艦では戰爭は出來ません。必らず幾多の艦隊を編制して敵の艦隊に當るのであります、艦隊は便宜上いろ〳〵に組立られるが、まづ有功な軍艦三四隻を以て一艦隊をくみ立一艦隊に一の司令官を



乘せて指揮を司らせ三艦隊、乃至四艦隊を合せて一の聯合艦隊を編成するのであります。旅順口の海戰にはこの聯合艦隊で戰ふたのでありますから軍艦の數は十隻以上與かつてゐるわけであります。それに艦隊となると數多の水雷艇や驅逐艦も附屬してそれ〳〵得意な技術を揮ふのであるから戰鬪區域の海面はなか〳〵賑はしく盛んな光景で生命を賭けて出征し

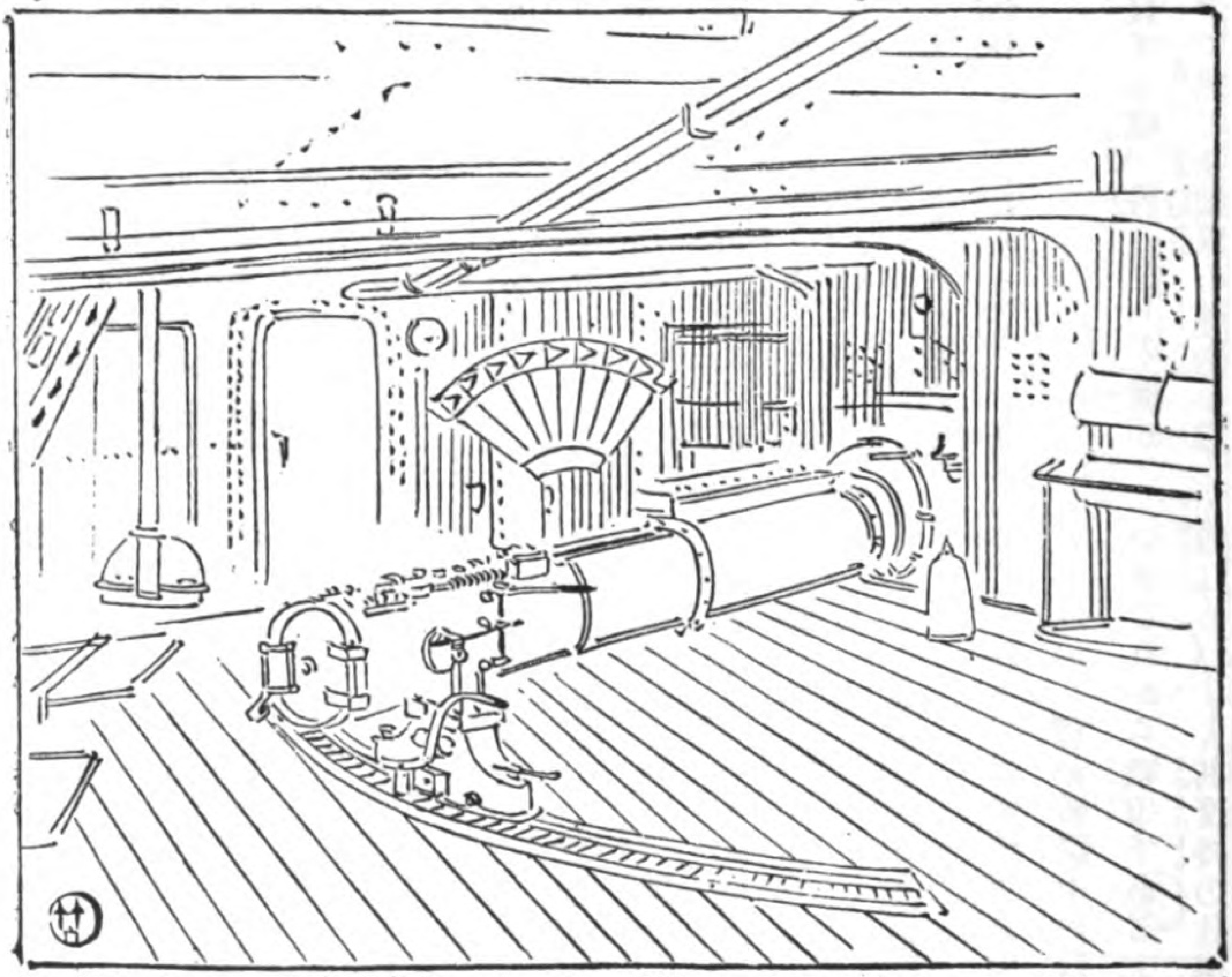
たものでなければ、この壯大の景を觀る事は出來ませんが、若し輕氣球などの上から此の光景を瞰ろしたならば、實に魂飛び、肉は踊るでありませう。凡そ此の世の中で人間の力で爲し得る事で壯烈な觀物はこの海戰に越したものはありません。

▲艦内構造の大略

軍艦の壯大な事、幷びに艦内の構造の整備た事を知らうとおもへば、まづこの製造の代價を知るのが一番徑捷です。今一萬四千噸の一等戰鬪艦一隻を新規に製造し樣と思へば一千三百萬圓の巨額を要するのであります。今日、日本で中等社會の人々の住居して居る家屋一軒の建築費用は平均して三百圓だそうです。今千三百萬圓の代價を以て家屋を建築しやうとおもへば、四萬軒の中等の家屋が建てられるのであります。日本で四萬軒の家屋のある所ろは、まづ有數の大都會で、名古屋、横濱、神戸、廣島、仙臺位なものでありませう一等戰鬪艦一隻の價は、實に是等大都會全体の家屋の價と比敵するほどの巨額であるから、是れは船といふよりは寧ろ海の中の城廓といつてよろしいのであります。

してこの海中の城廓は凡そ如何なる構造に出來て居るかといふに前述の如く艦壁の厚さか鋼鐵で七寸三分、艦中第一の武器たる大砲の身長が七間、彈丸の直徑が一尺。この大砲一度の發射料が千二三百圓ばかりかゝるといふので大概は察せられませう。艦内は上下七階になつてゐて各將校下士卒の室を始めとして食堂、醫員室、水兵室、病室、炊事場、浴室、工作場などが四階、五階、六階にあります。四階から下は機關室、石炭庫、彈藥庫、糧食庫などでありますが、水面以下になりますと、眞闇ですから晝夜電氣燈が點いて居ります。尤も水面以上の部屋でも場所によつては闇い所ろがあるので隅から隅まで電燈を點じ得る樣になツて居る、又艦内は八方に電話線が架設してありますから電話交換所もあります、それから又艦内の重要な場所には水火の浸入を防ぐ爲めに鋼鐵の扉があツてその合口

には護謨が附着してあるから萬一艦内の一部分に火災が起りましても又萬一艦に孔が穿きましても一滴の水も一穗の火も浸入する事は出來ぬ樣に成つて居ります。それから又諸方に消火栓の設けがありまして、いざ出火といふ場合にはポンプの作用で立所ろに多量の水を噴出せしめて之れを消し止める裝置がしてあります。普通一般の人の考へでは船といふものは窮屈で、不便で甚だ住ひ難いものである樣に思ふてゐるのが多いでせうが。それは舊時の事で近年造船の術が開けてから、



窮屈、不便といふ樣な感念はなくなりました、殊に一萬噸以上の大艦になりますと、艦内の構造は途方もなく廣濶となりまして武裝の完全は申までもなく萬般の設備巧妙なる裝置が出來て。將校の居室など實に善美を盡したものであります。就中艦長の公室になりましては廣大なる御殿の樣な構へで、四圍の裝飾など實に眼を驚かすばかり、來客があれば一室に數十百人の賓を招待する事も出來る、新聞雜誌、繪畫、圖書などいろ〳〵と珍らしいものが備へ附けられて。海上

生活に少しも無聊を感ずる事はありません。時には演劇や、假裝舞踏のやうな、遊戲歡樂を催ふす事も出來る、又冬は暖室爐を設けて室内の氣温を暖ため、炎暑の折柄には電氣力で以て涼風を送る裝置も出來て居ます。殊に食物には尤も注意がしてあッて、鮮肉を貯藏する爲めに凍氷を造り。赤道直下を航海する時にもアイスクリームの御馳走が食べられます。

斯樣な次第で艦内の設備は萬事、至れり、盡せりで、その結搆善美なる事筆紙には盡されません。

司令塔(艦中の主腦)

それから軍艦の前部の柱の根に一段高く厚い鋼鐵で造られた觀望の臺があります、これを艦橋と申しますがこの艦橋の上に司令塔といふ處ろがあります。これは人間の體で申せばまづ腦髓ともいふべき處ろで戰鬪中司令官が此の鐵塔中に居て命令を發する所であります。

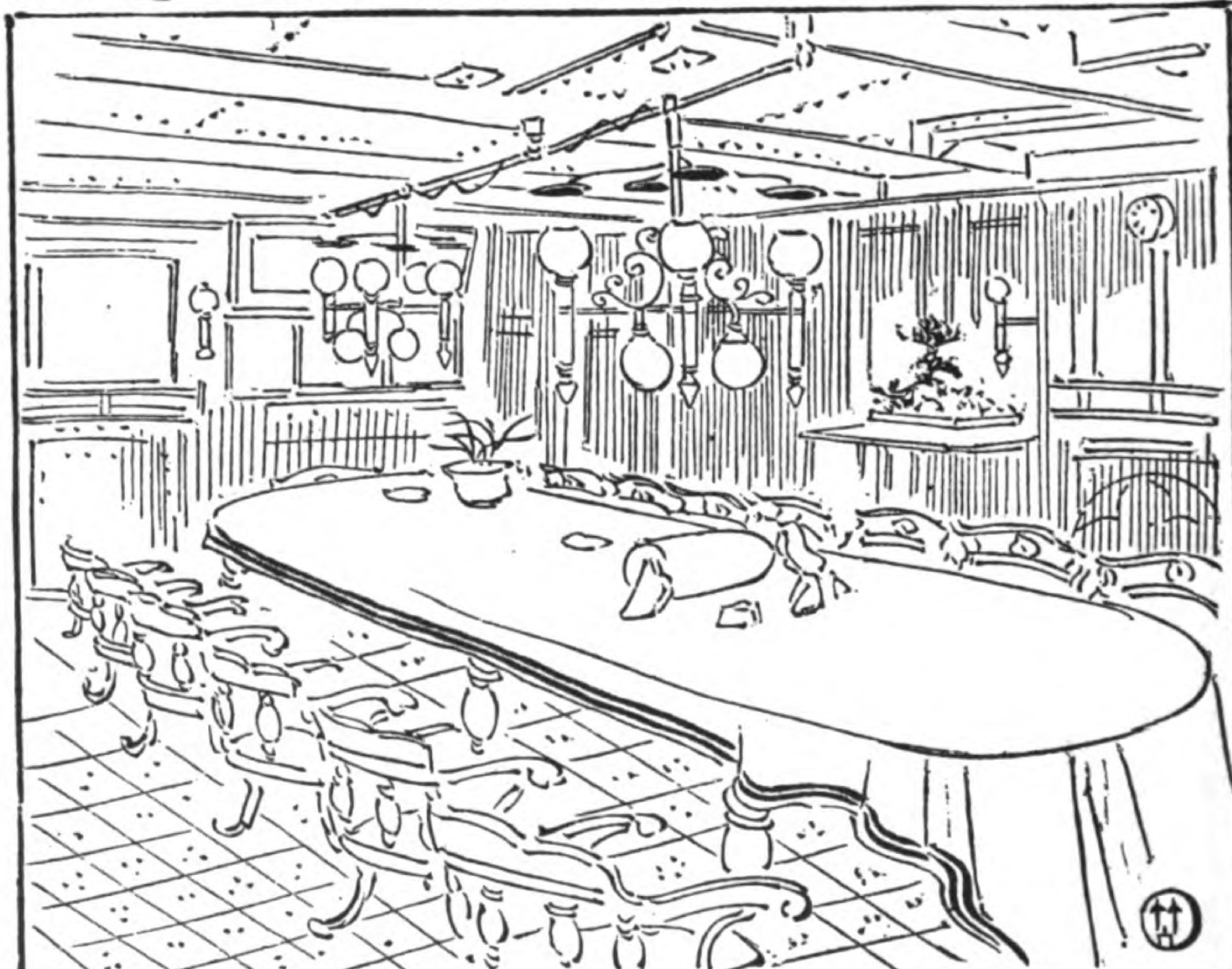
兎に角軍艦の主腦で命令の發する處、殊にこの艦が旗艦であれば司令長官が乘ッて居て全艦隊の運動を指揮する處であれば、敵の彈丸は多く此所を目懸て擊出すのであるから砲擊の中心となッて中々危險な所である丈けに其の搆造も又中々に堅固で厚さ一尺以上の鋼鐵で以て圍ふてある。水瓶の大さほどある大砲の丸がポン〳〵擊込んで來ても破ぶる事の出來ない程堅固に造られてあるが、司令長官はこの鋼鐵の圍ひの中に籠つてゐて艦隊の運動を指揮して居るのである。

それから機關室へも、彈藥庫へも其他の各部へもそれぞれ命令を傳へる樣に電線が通じて居りますが、激戰の際には敵の彈丸が間斷なく飛んで來て内部の裝置を大概滅茶〳〵にして仕舞ので各部の通信は斷絶して號令を傳たへる事が出來なくなります。

▲戰鬪中の狀態

さてこれまでは軍艦平日の有樣を申したのでありますが、是から聊か戰爭中の狀況を想像して見ませう。いざこれから戰爭であると號令が下ると。數百の乘組員はめい〳〵其受持の仕事にかゝるのである、まづ端

艇は其の座臺に固く縛りつけられ、その外側は帆布で以て覆はれる、これは若し彈丸が飛んで來て端艇に當ツても破片が飛ばない爲めである。甲板上には砂が撒かれる、これは負傷者があツて血が流れても人が滑らぬ爲めである。ズックで造ツた長い管がそこら中にうねく〳〵してをる、之は若し敵彈に當つて艦中に火災が起ツた時ポンプで水を送る用意である。石炭を詰めた袋が煙筒の根に積み重ねられる、これは砲彈の打ち込むのを防ぐ爲めである。その他、鐵片や木片の飛んで



來るのを防せぐ爲めに砲臺や司令塔の周圍には綱具や鎖の暖簾をかける。又水雷に擊たれた孔を塞ぐ爲めに蓆の用意をする。

又砲術方はそれ〴〵受持の砲臺に立ッて。いざといはば擊ち出すやうに身構をする、司令塔には、艦長、砲術長、水雷長、航海長、信號長と各部の長がこの一所に在ッて戰の氣配を察しつつ、各部へ命令を傳へんと、戰機の熟するのを待つてゐる。

又甲板下の機關室には熟練の將校が士卒を指揮しつゝ司令塔から傳へる命令によ

ッて油斷なく作業をしてゐる。水は絶へず回轉しつゝある鐵塊に注ぎかけられ、油は間斷なく機軸に注がれて機關は滑らかに運轉しつゝある。

戰の機はいよ〳〵熟して敵、味方の大砲は間斷なく發射せられ。砲聲は雷の轟くが如く、敵より發する彈丸は霰の飛ぶが如く我が艦上に落下りて甲板上に働らく人々の上に危險はいよ〳〵加はり。「アッ！やられた、殘念！」の一語を殘して斃るゝもあれば、「何、これしきの事に驚くものか、今に見ろ、この一彈で見事擊ち沈めて見せう」と敵艦目懸けて打出す砲手、併し敵の彈丸は益々滋くなつて、檣は損ずる、索は切れる、最早信號を行ふも困難である。砲手若干名は死傷して今は減員で働らいてゐる、喞筒や繫管は破損して消防に困難を告げる、併し乍ら防火隊は彈丸雨飛の間で必死となつて盡力してゐる。艦內、かしこ、此處に負傷者が横はつてゐる、運搬手は是等の負傷者を擔いて、治療室へ伴れて行く、煙突は彈丸に貫かれて、機關兵は蒸氣の噴出に苦んでゐる。

▲激戰の光景

敵味方の艦隊はいよ〳〵接近して最早五百メートルの距離をも殘さぬ。双方とも砲火の交換はいよ〳〵烈しく爲めに檣は折られた、艦橋は崩された、最早姉妹艦との通信も出來なくなる、無線電信の信號も効力を失ふて仕舞つた。斯る危急の際に又一大難事が發生して蒸氣が管から噴出しそれを防止する爲めに機關手が盲目となる者もあり、燗傷をするものもある、併し辛ふじて綿屑を詰めて一時の防ぎをした。

此の際艦の腦髓たる司令塔は間斷なく敵の砲丸に見舞れたが、有繋に一尺以上の厚さある鋼鐵の圍壁は少しも損害は受けないけれども、內部の裝置は滅茶々々に破されて仕舞つて、艦長の號令は最早傳へる事が出來なくなつて、各部は皆孤立の姿に陥入つて仕舞ふた。去ながら勇猛なる我が艦隊の將卒はこれ式の事で決してその勇氣を阻喪するものでない。敵の水雷が飛び來つて艦側を破壞するまでは、猶砲擊をつゞける。此の

如き有様は、眞に是れ劇戰の狀態でその壯快、激烈の光景、とても尋常の筆紙を以て形容の成るものではない。

序に申して置きますが、實戰の際十二インチ砲一個彈丸を發する費用が千三百圓、又魚形水雷の發射費用が五千圓、それから一等戰鬪艦一隻一晝夜間運轉せしむる費用即ち石炭の消費高が二千五百圓かゝるそうです、戰爭の費用も又實に大したものであります。（完）

植物の話

木村小舟

▲有毒植物

心のない母親は、只子供の目を喜ばせたさに、路傍に咲いて居る、名も知れない美しい花を折つて、其子供の手に渡すことがある、手に持つたものは、何でも構はずに口に持つて行くのが子供の性質だから、此花も只見て居るばかりでは氣が濟まないので、一寸嘗めて見ると、豈斗らんや口唇も又舌の根も、宛然燒ける樣な疼痛がして、口を利くことも泣くことも出來なくなり、惡くすれば可愛い子の生命まで絕たれる事がある、折から春の彌生となり、子供を連れて野の遊びを催す人も多くなるから、轉ばぬ先の杖にもと先づ有毒植物のお話を致さうと思ふ。

有毒植物の內にも、アルカロイドを含有するものと、酸類を含むものと有るが、此のアルカロイドと云ふものは、鹽基性の窒素化合物であるのだ。

罌粟は春の末に、大きな艶麗な花を開くが、其實の未だ成熟しない時に、爪か何かで傷を付けると、中から白い牛乳の樣な粘氣のある汁が出る、此汁の中には、雜多のアルカロイドが含まれて居るが、就中モルフィンが多い、モルフィンは大層苦いもので麻醉劑として藥用に供されるが、一匁の六十分の一で人の命を奪ふと云ふ恐ろしい毒物である。

支那人は罌粟から製造した阿片と云ふものを無暗に喜

んで喫用するが、之は前記のアルカロイドの作用で快睡を貪るので、畢竟神經を遲鈍になす大毒物に外ならぬ。

青梅の未熟なのは、殊に酸味が強くて、子供に好かれるが、之は實に危險なものだ、總じて未熟の果實は、胃の營養を害傷するが、殊に青梅の汁の中には、青酸と云ふ猛毒が含まれて居るから、夫れに中毒して死亡するものが頗る多い、尤も此の青酸は、梅子が成熟すると共に、糖類に變化するから、啻に毒分の消失する斗りでなく、酸味は化して甘くなるのである。

毒蕁は春の季から、陰濕な地に繁茂する草だが、其莖には微細な刺が一面に生じて居る、この刺は一種奇妙なもので、一度手を觸れたが最後、恰も蜂に螫されたと、同じ疼痛を感ずる、抑も此刺の中には、蟻酸と云ふ酸類を含み、夫れを人の皮膚に注射するからである。毛茛はやゝ水濕ある地に生じ、一に『うまのあしがた』とも云ふ、春の半に五瓣の黄花を開き他の雜草に擢でゝ、人の目に付き易いから、從つて之を賞玩するものが多いが、實は非常な毒を含んで居るから、子供などには持たせないが安全だ、毛茛によく似たものに『狐のぼたん』と云ふがある、花は毛茛よりやゝ小さく花時もやゝ遲くて、殊に小溝水田の畔に群生する、共に其實は金米糖の形をして居て、又共に毒物だから、注意するがよい。

毒卯木は春の末野山に燃ゆる樣な深紅の實を結ぶ、この實は丸で房の樣になつて、野山を彩つて居るから、誰でも一寸食つて見る氣になるが、果實の毒は他の物より一層激しくて、之を食ふたものは、人獸悉く命を殞すので、現に我國でこの實の爲に死亡する子供は、平均一年十人に近くあると云ふ話だ。

芹は春の料理として、風味甚だ佳く、一般の家庭に賞用さるゝが、同じ芹の中にも、毒芹と云ふものがある、毒芹は芹と同じく水邊に生ずるが、一種の惡臭があるから、注意すれば直に判る、尤も芹の莖と異つて中空で、其地下莖は非常に肥大して居る。

樒は俗にお花の木と云ふて、其枝を佛前に供へ、又葉

からは線香が出來る、元來常綠木で、其葉には一種の芳香があり、大層氣色のいゝ物だが、其果實には激しい毒分がある、子供は葉の香がいゝ爲、實も又乾度甘いだらうと思つて食べ、不幸にも死亡することがある。

羊躑躅は春の庭園に美觀を添へるが、之も其花が毒で、本草綱目と云ふ書物には、羊この木の葉を食へば、躑躅して死す、故にこの名ある由に記してある、かの紅躑躅の花の酸味を愛して食ふ子供等は、時々この羊躑躅を手にする事がある、實に危險な話だ。

どくだみも又春の季に白い花が咲くもので、葉の形は心臟に似て、猛烈な臭氣がある、之も毒性の物だから、手に觸れないがよい。

有毒植物は其數が非常に多くあるが、玆には只春の季節のもの丈を、二つ三つ記して置くに止めた。

▲藥用植物

見る影もなく野に生ひ出づる雜草の内にも、思はぬ奇妙の功能を有するものがある、例へば彼の蒲公英の液汁は、健胃劑として、製藥家に賞用され、人參も又健胃の効があると云ふ話だ。

牛肉又は鮭鱒などを、生食したり半煮の内に賞味する人は、よく條蟲を生かして困ることがある、今之を驅除するには、柘榴の樹皮か其根を採り、煎汁として使用する、或は柘榴に代ふるに綿馬と云ふ羊齒の一種を用ふることも有る。

白屈菜は春の末から、夏へ掛けて、黃色な四瓣の花を開き、葉はやゝ菊に似て居る、去年尾崎紅葉山人の胃癌に罹るや、この草の名は一時に世間に知られた、由來白屈菜は毒草であるのに、其製造の方法に依つては、却つて非常な藥草となる、是所謂毒を以て毒を制するの類であらう、併しこの葉は田蟲の妙藥として世間で重寶がられる、故に俗に田蟲草の一名さへ有る。

春からは追々毒蟲が多くなるが、之に就いてめなもみ、或はやぶはこべの葉は、大に毒蟲の毒を解くもので、ふきの葉も毒蟲の螫した處へ貼つて置けば効能があると云ふ話だ。

山に遊びて、何氣なしに漆の樹を折り、漆かぶれに逢ふ子供がよくあるが、之を治するには『ひよどりじようご』か『つめくさ』の草を採んで附ければ、忽ち其毒を消すとの事である。

▲染料植物

吾々の衣服を染める第一の原料は何であるかと云へば、言ふまでもなく夫れは藍である、藍の原産地は、印度と我日本とで、印度の藍は專ら木藍だが、我國の藍は蓼藍、山藍、木藍など、色々の種類がある。

一体この藍の葉や莖には、青藍と云ふ色素を含有して居る、この青藍は他の色素の樣に、水や酒精では容易に溶けないから、小麥の糟と石灰と夫れに灰汁とを加へて、溶解を促すのだ、尤も近時應用化學が進歩して、彼の石炭タールからして、青藍と同一の物質を採取することを發見し、而も藍草から取るよりも遙かに多量を得るので、從つて藍草の栽培は衰微する傾向がある。

藍に次いで名高いのは洋茜で、この草は小亞細亞と土耳古とに一番多く出來る、茜の根にはアリザリンと云ふ赤色の色素を有つて居るので、以前は緋金巾等も、專ら之で染められたものだ、然るに近來は重に、石炭タールからアリザリンを採取するので、洋茜は殆んど其價値を失つた、曾て石炭タールの製法が無かつた頃は、土耳古國では一ヶ年二千万圓餘の收入を、一にこの洋茜から得たと云ふ話である。

此他植物染料としては、露草がある、露草は一名を螢草とも云ふて、其花瓣からは青色を得られる、紫は白色の小花を開く草で、根の煎汁から紫色が出來る、江戸紫とて一時は有名な染料となつて居た。

鬱金は里芋に似た草で、中央亞細亞は其原産地である、根の粉末を煎汁として木綿類を染める、黄色で大層美しいものだ。

黄色なものに山梔の實がある、山梔の實は秋末霜を戴いて黄色くなる、之を煎汁として黄色を得る、刈安は薄に似た草だが、其莖の煎汁は同じく黄色である、が尤も之は前の二色に稍劣つて居る。

蘇木と紅花とは、共に紅色の染料を製出するので、蘇木は印度の原産地で、専ら其木材を用ひ、紅花は形薊に似て小さく、其花瓣を用ふるのである。

▲飲料植物

吾等は毎日食事の際、必ず茶を飲み、コーヒーを飲む、又人と對話する場合には、煙草を喫して、大に精神に愉快を感ずる事であるが、之等は何れも植物性の飲料である。

煙草は全世界の人民が、上下貴賤の別なく、一般に飲用に供するもので、その名稱が殆んど全地球皆タバコで通用する樣に、何れの國民も之を好まぬ者は無い。支那人が阿片を喫し、カムチヤツカ土人が樺林に生ずる一種の菌を好む樣に、煙草は他の飲食物の樣に、どんな甘い味があるでもないが、只麻酔性のある結果、一種の快感を精神に與へるのが其本色で、夫れで恐るべき有害な物であるに拘らず、盛に人に賞用される。どうして煙草が今日の樣に、全世界に廣まつたかと云ふと、煙草の性として氣候や土質に打ち勝つものだから、赤道の南北三十五度の邊迄は、何の事はなく健全に成長するからである。

日本に初めて煙草を傳へたのは、天正の頃例の南蠻人が持つて來て、長崎邊で一服何文と云ふ風で、人に吸はせて居た、夫れから段々全國に廣がつたから、一時法令で嚴禁されたが、何等の効もなかつた、今日も猶丁年未滿の者に限り喫煙をゆるさないが、之も餘程むづかしい話だ。

昔時羅馬では、禁煙の法令を中々嚴重にして、初犯笞刑、再犯死刑と定められたが、却つて之は失敗で、其爲盛に死刑の罪人が續發したと云ふ話だ。

煙草の中には、ニコチンと云ふ一種のアルカロイドを含有するが、之が劇烈な毒素なので、未だ煙草に馴れないものが、僅に二三服喫用した丈で、夫れで命を失ふた話は、古今東西いくらも有るのだ。

煙草と同じく、最も廣く世人に常用さるゝ物は茶である、茶が日本へ渡つたのは、遙かに古い話で、傳教大

師が唐から皈る時に、その種を持つて來て、山城の宇治に植へたのが、抑も其初めで、茶は多分支那が其原產地で有らうとの事である。

其故か昔支那に一人の坊主が居て、徹夜して難行苦行をして居ると、其内に睡たくなつて堪まらないので、とう／＼双の目の玉を抉り出して捨てゝ仕舞ふと、後から一本の木が生へて出たか、之が即ち茶であつたと云ふ、舊い昔噺が殘つて居る。

茶の成分はさて何であるかと云ふと、夫れは先づ茶素と、タンニンと、そして揮發油とである。

茶素は鹽基性のアルカロイドであるから、無論毒であるが、幸にも其量が少ない爲に、却つて身体に興奮作用を起さしめる利益がある、茶に澁味があるのは、タンニンを含有する證據で、之は大抵の植物には、凡て含まれてある、茶の香氣のいゝのは、即ち揮發油のある故なのだ。

茶と殆んど同一の成分があるのは、蓋し珈琲である、この木は本來アビシニヤの產であるが、後に瓜哇スマトラ邊にも、盛に植付けられた、珈琲は茶と同じく、常綠樹で有つて、小さな櫻實の樣な果實を結ぶ、この果實の中には、奇麗な二個の核があるが、この核のことを俗に珈琲豆と呼ぶのである。

今この珈琲豆を燒いて、そして粉末にしたものこそ、人が日常の飲料とする珈琲なのだ、さてこの珈琲の中には、コフエインと云ふ例のアルカロイドが含まれてある爲、茶と同じく、血液の循行を催し、精神の快樂を與えるものである。

珈琲と共に洋風の飲料として、有名なものはチヨコレートがある、チヨコレートは加々阿の樹に實る果實の仁から製造するもので、その成分には、テヲブロシンと云ふ、一種のアルカロイドが含まれて居る、加々阿樹の產地は、亞米利加及び西印度である。

要するに熱帶の地方には、飲料とする植物が非常に多い、之は熱國で淸涼劑を得ることが甚だ乏しいから、自然界はよく其調和を計つて居るのであらう、例へば南米に旅人木と云ふ木があつて、其幹を傷くれば、玉

の樣な淸水が出るし、又無花果に似た木で、乳の木と云ふものは、幹から牛乳と少しも異はぬ液汁を流出し、而も夫れが非常に人体の營養になるとの事である。其他吾々が、夏日の淸涼劑として、重寶がる處の彼の檸檬等も、實は熱國產の蜜柑に似た實から製出するものだ。

▲纖維植物

吾々が日常着用する衣類は、重に綿毛から織つた物で、この綿毛は上下貴賤、殆んど人体を保護する第一位の物である。

抑も此綿毛は、綿花の實から出來るので、夫れを製造して綿毛とし、織物として、以て人体に着用すると、第一非常に暖い、なぜ之が暖かいのかと申すと、この細かな纖維の中に熱を導かない……即ち不導体の空氣を貯へて、その內と外との熱をば、この纖維で以て境して仕舞ふから、なんぼ体温が外に向つて發散しやうとしても、この纖維の爲に妨げられて如何する事も出來ない、夫れで身体は何時も高温を保つことが出來る。

綿毛を生ずる植物に、木綿と草綿との二色がある、綿毛はこの植物の、成熟した果實を、大切に保護する爲に、夫れを包んで居た果皮なので、非常に細い纖維から出來て居る、即ち綿毛は、最初は自分の果實を包むのであるが、其役目が終へて仕舞ふと、今度は人の体を包んで呉れる、要するに二代の忠義を勤めるものだ。

綿花は其性として、温暖の地を好むので、其產地も又北亞米利加の南部、南米の諸國、印度、支那等に多く產し、日本にも又多少產出するが、到底夫れで需用に應ずることは出來ないから、專ら印度や支那の內地から輸入さるのである。

綿毛に次で有用なものは、製紙の原料である、三叉は其內肉の部を以て紙とするので、銀行券は專ら此紙を使用する、三叉は其枝が柔かで、屈折自在に出來るから、往々庭園に植へて枝を曲げ奇功を弄する人がある、されば俗に結ぶの木と云ふ名もある、雁皮紙は非常に薄くて、且つ奇麗な紙だ、之は山野に自生する、雁皮

と云ふ灌木の根皮から製造する故に、この名があるのだ。

甘蕉の葉は夏帽子を造り、楡の一種からは、北海土人の常服たる、彼のアッシを織り、亞麻の纖維を以て織るをリンネルと云ひ、麻の纖維も又繩となり、衣服となつて、其用途は頗る廣い。

この樣に植物の多くは、一として人の用にならないものは無い、のみならず猶發見を重ねたら、どんな有用の物が出て來るか分らぬ、植物の德も又偉大なるものと云はざるを得ない。（完）

動物の保護法

動物の保護色といふ事は科學界に於ける尤も趣味ある研究事項なるが近者東京朝日新聞に見へたる松章生の分類にされたるものあり面白ければ茲に其一節を拔萃せん。試みに庭園に出でゝ草木に棲息する昆蟲を見ると樹幹に止まるものは褐色なる木皮に擬し葉に居るものは綠色を呈するか或は葉面に附着せる塵埃抔に粧うて居るのを目擊するであらう即ち同一の種類に屬するアリマキであつても樫に居るのは黑褐色で梅の新枝のは綠色で櫻の新芽のは赤褐色である而も斯る例は甚だ多い鼠、田鼠及蝙蝠の如き夜中又は暗い處で活潑な動作をするものは大抵暗黑色を呈するが、梟や夜鶯には一種の斑紋があるのは薄暮の頃に目立たない上に日中林の間に隱れる時は樹の色に擬し、敵をして認め難からしむる爲である、蛞蝓及び蝸牛の色が木の皮に似て居るのや螽斯及浮塵子の色が綠色なのや揚羽蝶幼蟲の色が新芽に類して居るのや蛛蜘の色が垣壁に似て居る抔は世人周知する所である又海中に浮游する動物には透明なものが多い即ち白魚や海月の如きもので水中に在る時にの此等を發見する事は誠に容易でない、多くの游泳魚類が碧色又は帶黑青色で砂底に棲む鰈、鮃及び鰯抔の上面と貝類の色が能く砂石に似たのや龜及鼈の如き或は鰻、鰡抔の泥色であるのや鰕が藻の色に類するのや海岸の岩礁に上る海馬が岩石の色に等しのは皆保護色の理に基くもので海鼠や蟹や蝶鰕抔の色も亦同樣である、蜥蜴類に至つても夜守の脊が壁色で蜥蜴の脊が土砂或は岩石色で（叢中のは綠色）あるが熱帶地方には此種の動物は誠に多く何れも氣味の惡い彩色がある阿非利加に産するカメリオンは其居處に應じて自己の色を變へるので有名な動物だが我國の雨蛙も亦樹の上に生活して皮膚の色を自由に變化して其止まる所の物體と同色にするか是等は最も完全な保護色と云ふべきであらう

熱帶の森林には綠葉が鬱然として四時色を變へぬから此間に棲息する鳥類の色は綠色を基礎とするが普通である即ち孔雀、食菓鳩、鸚鵡其他數多の鳥類は大抵綠色の翼を備へて居る然るに溫帶地方に至ると落葉樹が多いから其間に棲息する鳥類は體軀の背面に種々の褐色を基礎とした彩色を帶びて居る、又沙漠の地方に住む動物は大抵皆砂色を呈するが之は斯る地方では樹木其他の物蔭に匿れて危難を避け或は敵に近寄るの便がない爲其土石の色を粧ふが最も必要なのに基いたのであらう



赤十字の旗影

硝煙雲と漲り、彈丸雨と飛び、劒芒の林立する處ろ砲聲の殷々たるところ、見る間に鮮血流れて川をなし屍は積んで山を築くこの凄じの光景を現出する修羅の巷に博愛慈善の標榜ある赤十字の旗を飜がへし、一視同仁の慈眼を開いて彼我兩軍の傷病兵を收容し、其の救護に勤むるものは實に赤十字社の任務なり而して其の旗蔭には、十字の徽章を翳したる白帽の看護婦が健々しく立働きて、傷病兵の介抱に努め、纎手克く劬り慰めるものなれば、戰時に於ける赤十字社の事業程尊くも亦た優しきものはあらじ。左れば日露の戰端開かれて以來、仁川の本邦婦人は卒先して此の任に當り、敵艦ワリヤーク、コーレッツの負傷兵を收容して救護に盡す所あり、内地に在りては篤志看護婦人會の活動となり、救護機關の輸送準備となり、病院船博愛、弘濟二船の回航となり總裁小松宮妃殿下及び會長鍋島侯爵夫人以下の綳帶製造、次で米國マギー孃の率ゆる篤志看護婦先發隊一行十名の到着となりて益々光榮ある我が赤十字社の發程を祝するに至れり。

▲貴婦人の勵精

婦人にして軍國に盡すもの少からざるが中に、別けても目覺しく覺ゆるは、赤十字社に於ける篤志看護婦人會の活動なり、同會にては先頃より總裁小松宮妃殿下及び會長鍋島侯爵夫人、副會長千家男爵夫人等の發起により、出征傷病兵救護の目的を以て、一萬三千卷の綳帶を製作しつゝあるが、最初此の議を決するや、梨本宮、東伏見宮、伏見宮、北白川宮、閑院宮各妃殿下を始め、華冑縉紳の夫人令孃の籍を同會に置く人々、續々之に賛加して、製作に從ふことゝなりたれば、同會にては澁谷なる赤十字社の一室を借り入れ

て、繃帶製造所に充て、申込の總員を一二三の三組に分ちて、毎日交替に出勤すること丶せり。

▲製作の摸樣、かくて一組には毛利公爵北堂安子外八名、二の組には花房男爵夫人千鶴子外七名、三の組には仁禮子爵夫人壽賀子外七名の幹事を置きて之を取締り、二月十七日以來各會員熱心に繃帶の製作にいそしみつ丶あるが、初め製造したる半反ものは軍用に適せず、戰時には二十尺以上のものに非れば用に立たずとの事に、同月廿二日以來改めて一反五ッ割とし、先月來までに出來せしもの一萬卷餘に及びたりと、會員の總ては厚誼深き紅閨の中に人となりたる女性のこと丶て、慣れぬ手業ながら、各夫人いと熱心に競つて之に從事さる丶爲め、其の進歩著しく、一人一日七百餘卷を製出すといへり



華族の夫人にて別けて勤勉なるは、同會長鍋島侯爵夫人、副會長千家男爵夫人毛利公爵母堂安子、樺山伯爵夫人常子、德川公爵夫人知子、黑木大將夫人百子の各夫人にて、中にも畏く覺ゆるは各宮妃殿下の此處に御列席ありて、御手づから

繃帶卷をなし玉ふこととなり、殊に梨本宮妃殿下の如きは當初より多く御勤務御出精あらせ玉ひ、御製作品は一日六十餘卷と承れば、その御いそしみの程、拜察さるゝなり。

▲奥女中の寄附、繃帶製造の總高は最初一万三千卷の豫定なりしも、其後北白川宮奥女中一同より白布百反東伏見宮奥女中一同より五十反、蜂須賀家奥女中一同より五十反、酒井伯爵家より百反の御寄附ありし故尙若干の増加を見るべく、其他患者用の帽子を寄贈するもの多し、梨本宮妃殿下には御手づから帽子二打を



編せ給ひ御寄附遊ばされしと承る、又た各貴婦人は日頃に似ず頗る節儉にて、出席の折も馬車は愚か俥さへ用ひたまはず皆な徒歩にて御ひろひ遊ばさるゝ由、左れば辨當の如きも至て麁末にて、握飯に梅干を添ゆるあり食麵包に砂糖を附くるあり、海苔卷、澤庵漬等却て粗食を誇るの有様なりといふ。

▲外國婦人の參會、本邦駐在の外國貴婦人にして此會に同情を寄せて參會するもの多く、英國公使マグドナルド夫人を始め、同公使館一等書記官バークレー夫人

同公使館附武官ヒユーム夫人、白耳義公使ダヌタン男夫人、米國公使館附海軍武官コレーン夫人、葡萄牙公使フレダース夫人、佛國公使館附陸軍武官コロスザール夫人、其他ボーペル夫人、テーリー夫人等日々出勤して、繃帶卷に從事し居れり、因に云ふ、英國公使マグドナルド夫人は殊に同情を寄せられ、此の會を輔くる爲め自ら首唱となつて、去月五日慈善音樂會を上野音樂學校に開き、其收入數千圓を擧げて同會に寄附したるにぞ、會長鍋島侯爵夫人には其の領收證に左の國風を添へて感謝の意を致したりといふ。

物の音に人の心を和げて、
我みいくさにつくす嬉しさ。

▲傷病兵の代筆、篤志看護婦人會の人々は繃帶の獻納のみをもて足れりとせず、尚ほ進んで傷病兵看護の任に就かんことを申出でたり、聞く所に據れば、此の特志看護婦人會の會員は毎金曜日を以て、本社に集り看護事務に關する醫師の講義を聞くことに成り居ると其の根抵より看護婦として養成したる者に比ぶれば、經驗及び熟練の程度到底比肩すべくもあらず、故に追て補助看護婦として之を採用し傷病兵の代筆、其他の方法をもて渠等を慰安する職に當らしむる筈なりといふ、抑々此法は廿七八年役の際石黒男爵夫人くが子の名に依りて始めて實行されたり、當時石黒軍醫總監は野戰衛生長官の任にありて、傷病兵の實狀を視察したる結果、弗と傷病兵が其の創痍の爲めに自ら通信の自由を妨げられ居るを發見したりき、爾來夫人の名をもて看護婦若くは看護人をして代筆の勞を取らしめ、其の思ふ由を聞き取りて、患部の經過は勿論一切の近況を親戚故舊の許へ通信し遣りたるに、渠等の喜悦は一方ならず、之が爲めに大なる慰安を與へて一層經過を速かならしめたりき、故に戰局の進行如何によりて、篤志看護婦人に此等の職を執らしむる筈なりと。

▲海上の看護婦隊

海上勤務の看護婦隊として、博愛弘濟の二船に乘組みたるは、隊長周防ちやう子、稻田ゆき子、野崎しき子

在田のぶ子以下四十名、その勇敢なる活動は、舷頭に立つて龍神を叱汰する戰士にもをさ〳〵劣らず、いでや此の人々の履歷を掲げて、我が姉妹の蹶起を促さん。

▲周防ちやう子、芳紀三十七父は周防謙介といひ、越前福井の藩士にて、春岳公の近侍を勤めし人なり、維新后馴れぬ商業に手を出して失敗し、家道漸く傾きかゝる悲運に會せしが、ちやう子は明治十七年福井公立小學校を卒業し、後神戸に赴きて、神戸英和女學校に入り、二十三年首尾よく全科を卒業したれば、其の年九月タムソン夫人と共に同地に於て、基督主義の日曜學校を開き、廿五年中迄教鞭を執り居たり、此の年感ずる所有て奮然志を決し、赤十字社の看護婦生となり、愈々て廿七年看護婦生の教科を卒業して、日清戰役の當時救護事務に服し廣島豫備病院に在て専ら捕虜患者の看護に從ひ、戰役平定の後其賞として金十五圓を下賜せられ、二十九年三陸海嘯の折にも同地に赴きて被害者の救助に努め、次で三十三年北清事變の際には、病院船設けられしを以て、其の看護婦長として博愛丸に乘組み、戰地に赴きしが、此時同女の



▲手紙の代筆

陛下に看護したる傷病兵の數は内外人を併せて、無慮千四百三十八人の多きに逵せりといふ、されば事件戡定の後、其の功をもて勳七等に敍し寶冠章を授けられ佛國大統領よりもオフ、ヒシエー、ダカデミーと稱する勳章を贈られたり、女流の身にして斯の如く榮譽ある勳章と、二個の從軍徽章を授けられ、誠に類稀なる事なり、こたび又三度目の從軍をするに至りしは、同女が去る頃仁川よりその從兄なる本鄉弓町二丁目の醫師有賀立雄氏に宛て、言ひよこした書簡は、能く其の當時の狀況を髣髴たらしむるものあり、其を左に、

拜啓去る月廿九日宇品港出帆三月一日門司港にて石炭搭載今三日午前八時半仁川港に安着致し候間御安神なし下され度く海上は平穩と云ふ程には御座なく候へども船暈もなく我等に取り好都合に候ひき當港に參りて海上を眺むれば各國の軍艦は林の如く立ちならび何となく所々に見ゆる○○○○○○○○に奥床しく存ぜられ候殊に御存じの通り當港は過つる日海戰のありし處とて露國軍艦ワリヤーク、コレーツの二隻はあはれなる有樣にて沈沒致し居り唯帆柱と煙突のみ見ゆるのみに御座候八時半に着せしより各國の軍人は申すに及ばず婦人にてもいでや博愛丸を見物せんと來る者引きも切らず醫員船員を始め我等までも案内に疲勞を覺ゆる位にて中々の見物に御座候斯くも我病院船が各國に知れ居るかと思へば何となく床しく存じ候

醫員理事上陸致されし模樣にては比較的患者は多數ならねど日本病兵の外露國軍人廿二名との事目下露國人は仁川なる赤十字社病院に收容致しありて何れも重症の由此度は伊豫松山に收容するとの事に御座候我等は彼我の區別なく博愛看護するの本分なれば益々熱心に親切に盡す精神に御座候來る五日頃に收容致し六日には一度歸る積りに御座候へども未だ判然致さず此度は長く戰爭の續く考へにて以前とは異なり萬事節約にして食物などは實に粗末なるものにて船中の働きには閉口致し候然し是も皆國家の爲め又陸海軍人の苦を思へば不自由も何も構はず候然し船内は非常に寒く殊に仁川港に着し甲板を洗へば氷結するの有樣また山嶺には雪を頂き居り候内地とは十度位は異り居るやうに覺えられ候(下略)

▲在田のぶ子　本鄉眞砂町在田爲憲氏の三女、芳紀正に三十有一、明治二十七年初めて赤十字社の看護婦生となり、時恰かも日清兩國の開戰に際したるを以て、東京豫備病院に勤務して、送還傷病兵の看護に從ひ其の功により事件平定の後金七圓の賞を下賜せられ、廿九年三陸海嘯の際にも救護の爲め被害地に出張し、又た北清事變の際には周防ちやう子と共に博愛丸に乘組み救護に從ひたるが、時正に炎暑の候船窓の蒸熱宛ら釜中に坐するが如きにも屈せず、甲斐々々しく立働

き看護に盡力せり、此折は陸上救護の設備が甚だ不完全なりしかば、傷兵の或者は何時しか創口化膿して、無數の蛆を生じ、目も當てられざりしが、同女は彼等を親切に劬りて、始終慰藉に勉めて居たり、左れば其の筋よりは賞として從軍徽章と共に金三十圓を下賜せられたり。

▲白石きみ子　芳紀漸く二十二のうら若き婦人なるが、長らく露國に在住して露語に通じ居るといふを以て、仁川の海戰にて負傷したる露國兵二十二名の通辯を爲し、親切に劬り慰めたりしかば、負傷兵等も其の德に感じて、母の如く慕はれたり、之より先き博愛丸は仁川赤十字病院に收容中の彼等を受取つて、之を伊豫松山の赤十字支部に送り屆くることゝ成りしが、去月十一日を以て其任務を果し、愈々告別の旨を告げし所、負傷兵等の大男は手放にて泣き出し、君子の裾に縋り付き「貴孃ばかりは是非留て下さい」と容易に放し得ざりし迄に別れを惜みたりと、之には他の看護婦等も坐に同情の念を催し暗涙を禁じ得ざりしといふ、殊に渠等の生國の言葉を以て不幸なる境遇を慰めたる其の効勞は實に慈善の大なるものなり、因に云ふ負傷者中には足を切斷せし者三名、手を切斷せし者二名あり猶ほ此他に四名程の重傷者あり、其の内



▲令孃の繃帶卷

には露國屈指の大資産家の息子二人ある由にて、彼等は從兄弟同志なりといふ、左れば他の者にも非常に尊敬され居れるが同人は今回の開戰に際し、金卅萬留を軍資として露國政府に献納せし位なれば今回我邦の優遇にはいたく感激せしと見え、戰爭終局となり、故國に歸るを得ば、直ちに家族を伴れて日本に來遊し、こたび世話に成りし人々の所を禮廻りすると言ひ居れり

▲救護機關

▲陸上の救護　戰時に於ける赤十字社の救護機關は、救護班、輸送縱列、患者休養所、材料部及び病院船の各種に分れ、目下救護班百六十斑輸送縱列三縱列の準備あり同社現在二百九十一人の醫員、十四人の醫長四十五人の調劑員、千九百二十人の看護婦、七百六十三人の看護人中より之を編成するものにして救護班一斑の人員は醫員二、調劑員一、書記一、看護婦長若くは看護人長二、看護婦若くは看護人二十名と爲し、傷病者百人までを救護し得べく輸送縱列とは傷病者を後方に輸送するの任務にして一縱列は理事一、醫員一、書記一、看護人長二、輸長三、看護人三、輸送人夫百二十をもて編成し、傷病者三十名までを輸送し得。

▲海上の救護　海上の救護機關としては病院船を用ゐる、是は去る三十二年和蘭海牙に於て開かれたる萬國平和會議の結果、ジユネブ條約即ち赤十字條約の原則を海戰にも應用すべしと云ふ 本邦の提議が可決されしを以て、中立船として病院船を用ゐる事を確保されたるより爾來博愛弘濟二船は此の任務に就き現に北淸事變の際にも二船の大沽 宇品間を七度往復して、内外の傷病兵二千七百三十人を輸送したり、左れば這般戰の役にも、此の二船を以て病院船となし、博愛丸は救護の第一着手として韓國に赴き、彼の仁川に在りて我が救護を受けて居たる負傷露兵廿二名と我が病兵を載せて、去月九日伊豫松山に來り、之を縣立病院内臨時赤十字社病院に送り屆けたり。

▲二船の構造　博愛弘濟の二船は、共に去卅一年英國蘇格蘭レンフリユー造船所の建造に係り其構造はスクーナ式を用ひ、三層の甲板と二本の檣とを有し、長三百十二呎巾三十八呎深十八呎強あり、總噸數二千六百三十六噸最强速力十五浬半を出し得、慿くて平時は郵船會社に交付して外國航路の郵船に充て居れど、有事の日には忽ち其體裁を變じて救護の任に當り、各々二百名の傷病者を收容すべき設備整へり故に其船内は手術室、藥劑室、顯微鏡室、X光線室、將校病室、下士卒病室、傳染病室精神病室、屍室、製氷機械室、熱氣消毒機械室、看護婦室、看護人室等に分れ、手術看護の設備一として缺くる所なし。

▲乘組職員　は機關士、運轉士等航海上必要の船員は別として其外に理事一、醫長一、醫員三、調劑員一、調劑員補二、書記二、看護婦長二、看護婦二十、看護人長二、看護人二十の職員より成り、今回此任に當りしは博愛丸の方は理事吉川元雄、醫長岩井禎三の兩氏、又弘濟丸の方は理事田中亮、醫長小山善の兩氏で、以下夫々最も適任の人を選拔されしが、就中博愛の看護婦長周防ちやう女、稻田ゆき女、弘濟の看護婦長野崎しき女、在田のぶ女、此四人の率ゆる看護婦四十名と註せらる。

▲甲種船と乙種船　今我邦にては博愛弘濟の二船を病院船に用ゐたるが、到底此の二船丈にては總ての救護を全うし得べくもあらざれば、昨年十二月戰時救護規則を改正し、病院船を甲種乙種に別ち、百人若くは

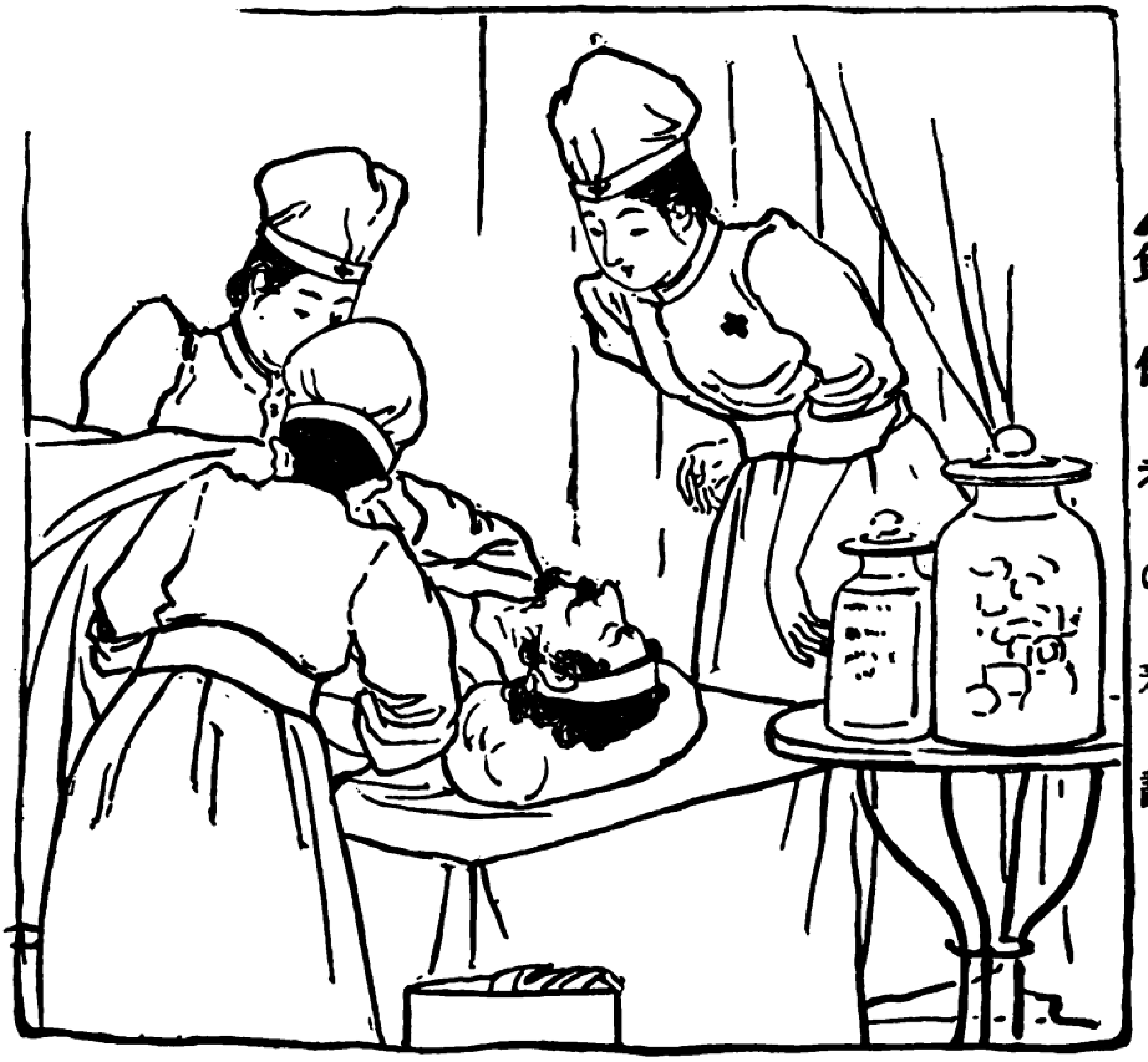
二百人を航送し得るものを甲種とし、其半數を收容し若くは航送し得るものを乙種と定めたり現在は未た甲種に屬する博愛弘濟の二船に過ぎざれど、交戰の進行如何に據りては追て乙種船の編成を見るに至るべければ、赤十字社船と政府船とを一見區別する爲め、政府船には白色の船腹に巾一米突半の綠帶線を畫き、赤十字社船は同じく白色の船腹に赤帶線を畫き政府は近々西京丸と神戸丸の二船をもて病院船に充つるといふ。

旗艦三笠と有馬中佐

國分操子

日本戰鬪艦四隻と運送船二隻旗順口に於て轟沈せられたりといへる二月廿六日の露國公報を掲載せる新聞號外は、いかに吾人の心膽を寒むからしめしよ、必誤りならんとは思ふものから疑懼の内にその日は暮れて、明くれば廿七日の新聞は我上村第二艦隊司令長官の報告を掲げたり之によれば我艦隊は廿三日暗夜に乘じ旅順口閉塞の目的を以て天津丸以下運送船五隻に石材を滿載し決死隊を募りて之を港口に沈沒せしめしにぞありける、この冒險的の計畫を熱心に主張し、自ら其決死隊長として之を實行したる沈毅勇敢の中佐有馬良橘の名を見、又名譽ある我艦隊旗艦三笠の名を聞きて一年三笠艦觀覽の折有馬中佐の懇篤に案内の勞を取られ、種々說明を與へられたるを想起し、うたゝ懷舊の情に堪へねば其日の日記の

▲負傷者の看護



一節を、左に抄出して之を同好の姉妹に示すことゝはなしぬ。

明治卅五年六月八日日曜日

この日はかねて新造軍艦三笠を横須賀に觀るの約あるを以て、例よりはとく起き出でゝ、先空の氣色を見るに、いとよく晴れたり、嬉しきことたぐひなし、急ぎ新橋停車場にものしぬ、同行十數名皆東京女學館の職員なり、横須賀に着きしは九時前なりき、かねて山本海軍大臣の紹介を煩したれば、軍艦よりは特に小艇を派して吾等を逸見波止塲に迎へられたり、程なく本艦に着きしに甲板に立ちて一行を迎へられし士官あり一禮の後告げらるゝ樣、本日は艦長不在なるを以て代理として御案内致すべし、余は航海長有馬良橘なりと、夫より中甲板に下り、各の携帶品を一室に預け、少時休息の後、同氏の案内に從ひ・順次觀覽するに、たゞ廣大なる家屋の心地して身の船中にあるを忘れぬ今一々之を記るす能はざれども、其堅牢と精巧とは實に想像の外なりき、一時間餘にして漸く一覽し終りぬ、かくて食堂と覺しく美しく裝飾を施したる一室に於てコーヒー及南洋より求め來られし鳳梨を饗應せられぬ、渇したる折とて殊に其味の甘きことたとふるに者なし、航海長は再圖を開き説明して曰く本艦は英國バローのビッカース會社の製造にして起工より竣工に至るまで三年三ケ月を費せり、其進水式を行ひしは明治三十三年十一月にして之を受領せしは本年三月なり、此の艦は英國の軍港ポルツマウス附近にて公試運轉を行ひて其の速力を試驗しサウサンプトンに至り瀛機の解放撿査を行ひたり、艦の長さ四百呎巾七十六呎吃水二十七呎二吋にして噸數一萬五千百餘を有し、速力十八海里半なり、然して十二インチの大砲四門六インチの大砲十四門、十二斤砲二十門、三斤砲八門二斤半砲四門以上十二インチ外は悉く速射砲なり水雷發射管四門を有し上甲板より艦底に至る間を數階に、又船底を二重に造り、此の各階と二重底とを更に數百部に區畫して假令一部を破壞することあるも全部浸水の患なからしむ、艦の水線に幅約八呎、最厚九インチの甲鐵帶あり、又其の上端より

艦の上面を覆ふ所の厚さ三インチの防禦甲板ありて以て艦の致命部を保護せり、乘込定員は八百餘名なれども、旗艦とならば增して約九百名となすを得べしと、其廣大なること推して知るべきなり、航海長は更に話頭を轉じて曰く、本艦は三月八日英國の軍艦クインの進水式に列せんが爲めにプリマウスに至れり、英國皇帝は皇后と共に其の式に臨まれたり、時に日英同盟後なるを以て皇帝は直に本艦々長早崎大佐を召して謁を賜ひ殊に優渥なる御物語ありて款待至らざる所なかりきと云ふ、かくて同十三日に彼の地を發しビスケイ灣を過ぎてジブラルタルに立寄りたりと、この時一友問うて曰くこの地は英國にて甚樞要とする海峽なりと聞くいかなる故ぞ、航海長答へて曰く其廣さ廿餘海里ありて甚狹からねばさして要害とするに足らねど一朝事あるに際し艦隊を以てこの海峽を扼すれば、佛國の北海艦隊は地中海艦隊と合同協力する能はず、これ其の重要視せらるゝ所以なり、然れども近來大砲の製益精巧を極め砲丸遠距離に達するに至りしかば當時西班牙は對岸彈達距離の山上に砲臺を築き



▲米國篤志看護婦隊の來着

つゝあればジブラルタルの要害は漸く其の効力を失はんとしつゝあるなり、さて本艦は夫より地中海を過ぎてポートセッド港に立寄りぬ、この地はスエズの堀割の入口なり、堀割通行の船舶の吃水は昨年までは廿五呎七吋を以て限りとせしが本年一月より増して廿六呎三吋とせり、而して本艦の吃水は廿七呎二吋なれども既に千餘噸の石炭を消費し盡したる後なるを以て幸に重量物を艦外に積卸し吃水を輕減することなくして通過するを得たり、紅海は暗礁多く且時々兩岸より砂の嵐起り咫尺を辨せざることありて、船舶の破壊する者多く、航海者の尤も寒心する所なるが、本艦は幸に連日好天氣に會しよく經緯度を測量し得たるを以て無事に通過するを得たり、夫より印度セーロン島なるコロンボに立寄りしに、かの島人いたく打喜び、我が同胞日本國の軍艦至れりと相誘ひ來りて觀覽を乞ひ、恰も自國の軍艦なるが如く其の堅牢壯大なるを見喜びて曰く文明世獨キリスト教國のみならむや、佛教國中又日本の如きあり、大に吾人の意を強うするに足ると、この島は釋尊降誕の所佛教の本源地なるを以て常に我が國を指して同胞の國と稱し、かしこくも我が天皇陛下の御眞影を奉戴して朝夕之を拜し天長節の如きも盛なる祝賀會を催す者尠からずとぞ、かくてシンガポールに立寄り夫より直航して横須賀に着きしは五月十八日なりきと、嗚呼近年我が國威の揚りつゝあるは目にも見、耳にも聞く所なれども斯く天竺のはてまでも遠く及びたらんとは實に思も寄らざりき、我が大君の御稜威のかしこさ、かゝる君主を戴く吾等臣民の幸の多さを、今更の如くに感じて漫に涙の下るを覺えざりき、航海長は年齢四十左右風采温雅言語明晰なり己はかゝる興味ある談話に時の移るを覺えざりしが、側の友に促されてやがて艦を辭し、又小艇に送られて逸見波止場に着きぬ、顧て三笠艦を望めば日章旗は高く檣頭に飜りて宛然たる一大浮城、實に護國の重寶なり。

和田の原八潮路とほく照すらむ
三笠の山の朝日子の影

と口ずさみぬ、今日の觀覽に於て殊に愉快に感じたるは艦內一家族の如く相親睦して漫に形式に拘泥せず、上長官は父母の如く下を慈み下士水夫は子の如く上に懷き、和氣藹然として各樂みて其職に從ふにぞありける、又笑止かりしは吾等の試に片手にて大砲を左右に動かしゝを、ある田舍人側に立ちて熟視したりしが怪訝の念に堪へざりけむ突然こは張子の大砲よと大呼して水兵等に痛く笑はれたるにてありき。徒に大言壯語をなす者は決して眞の勇者に非ずとは常に聞く處なれども當日の航海長今日の冒險決死隊の隊長ならむとは唯々驚嘆するの外なくなむ。



▲露國の負傷兵

軍人の留主宅

▲上村海軍中將の留主宅

笠間醉雨

第二艦隊司令官として或る方面に特別任務を帶びて向はれた海軍中將上村彥之丞君の留主宅を訪れました。

爪先き上りの坂路を少し登つて、門を入り、矮鶏檜の馬車廻を右へ曲つて、玄關に進めは、正面には薔薇の美しき西洋畫の扁額が掲げられてあつて、その横には鳩の剝製、鹿の角の刀掛、鉄砲、鉾、青龍刀、砲彈、さては釣竿などが雜然として飾られてあるので、主人その人の一種の骨董好なるを推せられました。

刺を通じて案内を乞ふと當家では皆不在ですが、留守の者でも宜しければ、まづ此方へお上りなさいとのことで、記者は玄關に上り、左手の廊下を眞直に入り、更に左に折れて椽側を傳ひ、外れの十疊の座敷へ請じられました。

客室は限無く奇麗なる緞通を敷き詰めてあつて、眞中には伊萬里燒の大火鉢が据えてある、床には古い菊花の繪墨の幅が掛けられて、其前に白梅は床しげに生けられてある、琴が二張寄せ掛けられ、又大弓が二三張立てかけてあるのは、夫人の嗜好と中將の嗜好との徴とも覺えられた。その他中將の寫眞、大砲の雛形などが、配置よく据え付けてある、それから右の方の違棚に眼を移せば、そこには中將夫人の寫眞、花瓶、寫眞ブックなどが整然と飾られてありました。

仰げば、軍艦の見事なる扁額、人物の寫眞額も掲げられ、天井からは電氣燈がぶら下つてゐて、何となく西洋趣味が發揮されてありました。

やがて、御免なさい、と云つて、入り來りしは、年比四十五六の、丸髷に結つた、顏のでつぷりとした、身軀の小さからぬ、品よき一個の婦人でありました。

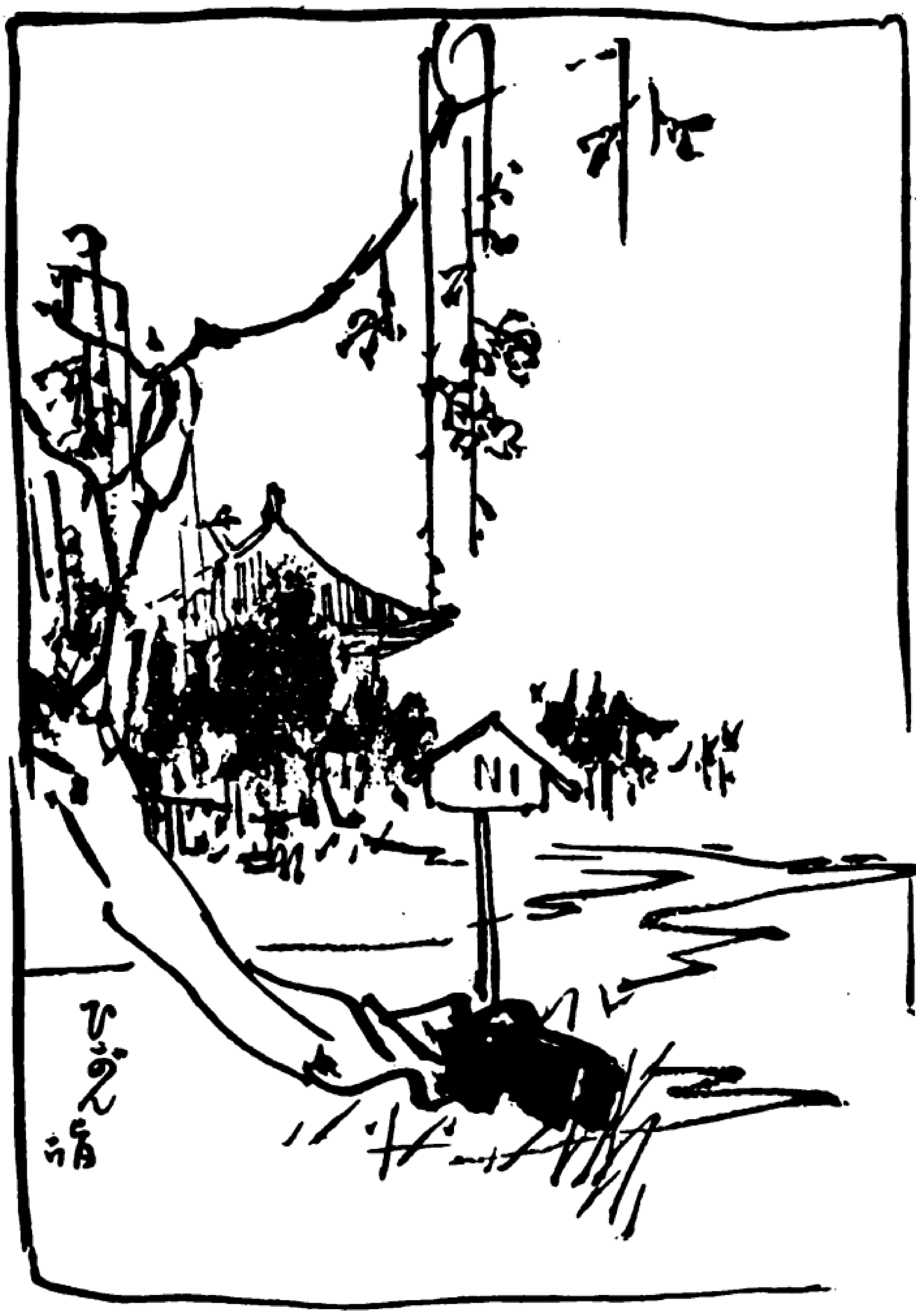
記者は來意を述べますと、彼方は至つて、はき〱とした東京辯、談話の樣子を以て見ても、何となく當家に親しき縁由ある方と覺えました、これは中將夫人の實姉井口濟子であります。

▲中將の略歴　將軍は鹿兒島の藩士で、當年五十四歲、戊辰の役十六歲で官軍に從ひ、白川口に出戰し、敵彈に胸壁を貫かれましたが、其疵の未だ癒えざるに又直に箱根に轉戰されました。それより後、明治四年に至り、始めて海軍兵學寮に入り、六年卒業實地研究の爲め、筑波艦に乘組み、清國、臺灣、米國等へ遠洋航海

をなし、九年立揚艦に乘込み西國の方へ向はれました。が、適々運惡しく同艦が破壞の難に遭ひましたけれど、其危機に臨んで、よく其措置を誤らず、十分に海軍々人としての技能を發揮されたといふことであります。

で、十年六月少尉に任せられ、鹿兒島戰爭に功あり、十五年の朝鮮事變にも出張されました。

で、軍艦は千代田、天城、大和、魔耶、鳥海等の乘組員或は艦長を務め、二十七年の日清戰役には、丁度大佐で、秋津洲艦長でありましたが、其年六月朝鮮に廻航し、同じき二十五日豐島沖に敵の運送船操江號を砲撃して、捕獲したのが彼の戰役の火蓋の切り初めでありました。將軍の剛膽能く大事を斷じて、鋭鋒を開き得たのは、長く我が國民の記憶に存して、忘れ得べからざることであります。又黄海の海戰、臺灣澎湖島占領の際にも殊勳偉功を立て、それより直に臺灣の軍務に服し、二十八年十月五日北白川宮殿下の御遺骸を守護して歸京したのであります。



▲將軍の平生　將軍資性豪邁豁達にして、彼の東郷鬼平八と並で稱せられてゐますが、此人も唯に武勇一遍の猛將ではよく、笑めは嬰兒も馴れ親しむといふ按排です

其戰に臨むや、深謀遠慮、艦隊を操縱することの妙は、宛ら己れの手足を動す如く、世界海軍中の大立物として、東鄕中將と共に仰かれてゐる方であります。將軍は狩獵を好み、斯道にかけては頗る達者でありますが、亦大弓も名手で、柳葉を百歩にして射るとやら。又將軍も梨羽少將と同じく、骨董に趣味を有つてゐますが、梨羽少將の如く、文藝的の骨董でなく、寧ろ武藝的で、何となく古武士の氣韵を帶びてゐられます。ですから、玄關からして、居間も床の間も、遊就館的のものが陳列されてあります。

▲その家庭　中將夫人を貞子(四十六年)と云ひ、明治十一年中將と伉儷の契を結ばれましたが、唯一の令孃敏子と呼びて、今年十三歳になられるを、蝶よ花よと愛で育てゝをらるゝが、現今は、夫人の令姉前記の井口濟子(五十年)と共に留守し、夫人は佐世保に出張されてゐますが、敏子は、よく伯母の命を守りて、日夜餘念なく學事に精勵してをられます。

聞けば、夫人は此戰爭の際、東京に居て荏苒として、徒に留守を守つてゐるのも、軍國の婦人として考慮なきものと云ひ、日清戰爭の際の如く、愛孃敏子を令姉に預け、其身は佐世保に在りて、他の海軍々人の夫人と共に、目下繃帶卷に從事されてゐらるゝのであります。が、夫人は敏子が、嘸や寂寥の感に堪え兼ねてゐるであらうと、心陰に思ひ、頻りに手紙を送りて、當地へ來れと勸められましたが、敏子は何としても之に從ひませんで、即ち書簡を佐世保なる夫人の許に送つて、「父上は戰爭にお出になり、母樣も佐世保へお出になつてゐらつしやいますが、私は學校をお休して、彼方へ參りましたつて、別に何のお役にも立ちませんから、私は伯母樣と御一所に此方にお留守をしてゐて、勉強して、今度の昇級試驗にも好き成績を取つて、父樣のお譽めに與りたいと思つてゐます。ですから、私は參りません。けれども、何れ試驗も濟みまして、お休みにもなりますれば、早速參りますから、それまで待つてゐて下さい、……それから又、父樣も國の爲めに十分お働きなさいませうが、母樣は折角戰爭の摸樣

をお知らせなすつて下さいまし」と云ふやうな文言で、返事をなさつたと云ふことですが流石に中將の令孃たるに恥じません。又敏子は芝區三田なる棚橋絢子刀自の東京高等女學校の本科一年生で、同校中最も幼少ですが、伯母君の嚴格なる監督の下に、日夜筆硯と相親みゐらるゝから、學術も優れ、品行もよく、記者が丁度訪問した折には、日曜日にも拘はらず、莊司中佐の令孃綾子と共に、南向の二階の座敷で、机を並べて勉強中とやらで、折折瓏々珠を瑠璃板上に轉がす如き聲を聞きました。

▲川島海軍大佐の留主宅

記者は上村中將の邸を辭して、直ぐ同番地の松島艦長海軍大佐川島令次郎君の留守宅へ向ひました。



德川伯爵の邸の前を過ぎて、左手を見れば、未だ古からぬ門の軒洋燈にも川島と明瞭と讀まるゝので、車を下り、小かなる小橋を渡り、潜門を押し開き、門内に入り、刺を通じて來意を述べました。すると『奥樣はお風邪で、お熱が御座いまして、臥つてゐらつしやいますが、何か私で分かる事ならばお取次でもしてお話致しませう？』と深切に云はるゝので、記者は唯、『何卒お願申します、それで結構です』と謝しながら、例の手帖取り出し、玄關へ腰を卸さうとしましたので『此方へ此方へ』とのことですから、無遠慮の記者はづか〱と左手の階段を上り、四疊の次の八疊の座敷へ打ち通りました。

圖見れば、床の間には松島艦の名に相應しき雙鶴の

墨繪の幅が掛つてゐて、前には白梅が飾り氣なく生けられ、石製の大砲の雛形が二臺整然と据えてありました。

振り返つて、仰げば大槻磐溪翁の筆なる「淸陰夜煮茶」の扁額を揭げ、その向の小壁には、大佐の寫眞、夫人の寫眞、その他軍艦の寫眞額が揭げられ、何となく大佐夫人の西洋趣味が滿ち溢れてゐました。

櫻炭のぱちつく瀨戸の火鉢へ左手を翳してゐれば、先の召使は、小間使と共に、茶、菓子、煙草など運びて來ました。

記者は、大佐の事を種々尋ねましたが、中には分り兼ねる所も多いので、記者は尋ねべき所を、一々紙に記して、夫人の病室へ聽きに往つて貰ひました。やがて、又召使が來て、「奧樣は頭髮をお解きなさつて、失禮な風をしてゐますけれど、ちよつとお目に掛りますと有仰いましたから」とのことで、記者は露艦沈沒の報を聞いた程嬉しくなりました。

「これ坊や、急ぐと落ちるぞ、徐に〳〵」と、優しく子供を制せる聲して、登つて來られましたので、私は衣紋つくろひ待つてゐますと、やがて間の襖を、靜に押し開き、年比三十一二の、黑き頭髮を惜げもなく解き流した、顏色白な、眉の濃い、眼の涼しい、一個の婦人でした、その橫から、顏を出したのは、年比四歲位な、顏の丸い、目のぱつちりとした愛ぐるしい坊ちやん、これが御二男、その後からは、十二三歲位な、眉目の秀麗いそして婦人を其儘なのが長男の令息、共に叮嚀に挨拶をされました。

記者は大佐と同鄕の故を以つて、一面の識なきにあらぬことを述べ、更に來意を述べ、種々談話を承つたのでありました。

▲大佐の略歷　君は加賀金澤の藩士で、當年四十一歲海軍兵學校の出身で、明治十九年少尉となり、二十四年に海軍大學に入り、翌年春卒業し二十六年の末に、侍從武官に補せられました。

日淸戰爭の時は大尉で、猶ほ侍從武官でありましたが、その資格で、軍艦松島に乘り組み、澎湖島の方へ

一月程出張せられ、後二十九年の十月英國留學仰せ付けられ、三年にして歸朝せうとした時に、又直に同國公使館付を命せられ、猶ほ三年間滯英して三十五年九月に歸朝し、直に艦隊の參謀に補せられ、富士、朝日の副長、宮古の艦長に歴任し、昨年九月大佐に進み同時に現今の松島艦長に補せられたのであります。

▲今度の出征　日清戰爭の時は、前記の如く最早戰爭が終つてから、侍從武官の資格て、澎湖島へ往つた限りでありました、又北清事變の時は英國留學中でありまして、一度も實戰には出られなかつたのです。で、今度も亦出られないかと心配してゐた所、松島艦長となつてゐて、出征の命が下つたので、大佐は手舞足踏を覺えざる程喜んで、その途に就かれたのであります。



▲大佐の平生　大佐の人となりは豁達で磊落、人と語るに城府を設けず、その人と交るや些の隔意を挾まず質樸な極めて話好きな人であります、而して、平生在邸の際には、唯、令息令孃を相手に或は相共に散策を試み、或は罪なき子供遊をなされまして、無上の娯樂としてゐらるゝさうです。又自分が唯一の娯樂としてゐるものは、寫眞術で、これは英國留學中に、公使林董君の寫眞好に感化れて、同公使は大佐の先生であるさうですが、此頃は先生に輪を掛けた位好きになつて軍艦に在る時も、家にある折も、この機械は手放さぬといふ位であるさうです。又、挿花も好き、犬も好き鳥も好き、自轉車も好き、夫人は笑ながら『良人は遊ぶ事にかけては何でも好きで、嫌ひといふことはありません』と。

▲その家族　大佐と夫人粂子との間に、長男清（十三）長女正子（八つ）次男直（五つ）三男眞（三つ）との都合四人ありまして、長男清氏は慶應義塾の幼稚舎へ、長女正子は芝區白金小學校へ通はれてゐます。

▲夫人の渡英　記者は夫人と話してゐる内に次男の直氏が、夫人の膝に靠れながら、薔薇色の頬に溢るゝ計りの微笑を湛へ、その愛らしき口元より折々「べビーべビー」の語を耳にするを異に覺えたので、尋ねて見ますと、夫人は笑ひながら、これは英國で生れまして保姆に預けておきましたが、保姆がべビー／＼と言つたものですから、自分の名だと思つてゐるのです……ハイ、私は良人の留學がすぐと公使館付となりましたので、林公使なんか皆樣が私を呼んだら可いだらうと勸められたものですから、私は淸と正子とを川島の母に預けまして、英國へ參りました、その間に生れたのがこれで、……べビーは何處で生れたの、あの兄さんお聞かせなさいと云つて、直氏の躰を膝の上で廻し、顏を記者に向けられたので、直氏は溶けるばかりな微笑を浮べて、「べビーは英吉利の倫敦で生たれんだ」と無邪氣に云ひ放ちて、やがて、又「マンマ、べビーは海軍になるんだね」といつて、愛らしく、笑はれました。

▲英國婦人の氣質　これに付き、夫人に尋ねました所「私なんかにそんな難しいことは分りませんが、まづ彼國の婦人の可い所は剛毅で着實で又可けない點を云へば執拗で剛愎であります。で、一体に英國の人は男も女も固守耐忍の力が、此方の人より强いやうです。また傲慢で自ら尊むの風が甚しいもので御座います。ですから、善い方に移り、新しい方を取るといふことは遲くつて鈍い代りに、一度信じた後は、復た容易に動かぬといふ風があります。ですから、又何か決行してゐるとは、一歩も退かぬといふ風で御座います……交際なども始めは先づ冷淡なやうですが、お互に性行を知りあふやうになつて來ると、それは又非常に深切で、輕々しく交際を變へません。この子の保姆なんど矢張左樣いふ風で、それは實に淚の出る位、深切にや

つて與れました。此子も亦能く其保姆に親んでゐました、而して此方へ歸國る時などは其保姆が甲板の上まで送つて來て、泣いて泣いて、動かないんですよ、それから私共此方へ歸つて了ひましてから、手紙は毎度よこしますが、毎年此の子の誕生日までに、此方へ屆くやうな都合にして、何か品物を必ず送つて來ます、此間も此方から寫眞を送つて遣りましたら、大變禮を云つて、事細に手紙にいろ〳〵書いてよこしました、實に感心なものです、まづ此等は英國婦人の中でも極極深切懇篤な人でせうが、其不深切な人と來た日にやまた餘程強面いもので、驚く位であります。兎に角英國婦人は自分を信じ、自分を守ること甚しいものですから、其主義とか、道とかの爲に、主張したり、確守したりする時は、他人の攻擊なんど、それこそ馬の耳に風で、我を張つてゐますことは、多情多感の女子で何うして那樣であらうと思はるゝ位、強情で御座います。



話は大分方角ちがひになりますが、夫人より聞いた面白いことがありますから序に此處に記して置きませう大佐英國にある時、倫敦は騷々しいとて、リツチモンドに其居を寓してゐましたが、次男直氏を近隣の人々が、物珍しさうに、『日本人の赤坊、日本人の赤坊』といつて見に來るやら、寫眞取りに來るやら、始終次男直氏は英人の見せ物の樣になりましたので、大佐は戲れ笑つて、『これから二ペンス位づゝ取れば日に一弗位になる』と云はれましたが、中には、日本好きな英人は『日本の赤坊は何處の國の赤坊よりも宜い』と云ひまして、自分の妻君の孕んだ時態々見に來て、胎敎の

材料ともしたといふことであります。

▲大佐と中村大佐　大佐は中村大佐（靜嘉）の甥で、その面貌、音容が酷似してゐるのです、殊に其聲色が似てゐるから、中村大佐が川島家へ來まして、玄關口で家人を呼ばるゝと、川島夫人は我が良人と思つて出迎ひに出ますと、それが中村大佐であるとか。川島大佐が中村家へ來て、玄關口で家人を呼びますと、中村夫人は我が良人と思つてゐますると、それが川島大佐であるとか、隨分笑種となることがあるとやら。

支那風物談

竹柏園主人

歌壇の名將として雷名嘖々たる竹柏園主人昨冬支那漫遊を志し南清の殷庶たる揚江沿岸の名勝舊跡を隈なく涉獵して歸朝せらる歌人の見たる支那大陸の風物談蓋し又別種の趣あらん、左は即氏が觀光談の一節にして毎日新聞に見へたるものなり。

▲女の服裝　桃色の着物を被て徘徊する里乙女の姿が枯れた柳の陰にチラ〳〵と見えるのも美しいが處々の舟着で遙に岸を望むと紫や淺黄や黒の人が摺れ違つて往つたり來たりするのも色の配合が頗る面白い全體女の着物で一番多い色は淺黄の無地であつて縞物は殊に稀であります地は天竺金巾で上衣は何れも單を用ひ寒い時は綿入や袷を其下に着け夏は蠟引の光りある黒を多く着ますが尤も是は廣東の人で此服裝の時は同じ色又は茶の濃き油を引いた團扇或は扇を持つのが法則になつてゐるさうです身分の宜き人は桃色、淺黄、淺水色、紫、黒等の上衣を用ひ地は金襴、緞子、繻子、紋繻子、天鵞絨等であつて紋縮緬は宜い物の中には這入りません又男は鳶色、海老茶、金茶などの單純の色を好み總て複雜の色は用ひられてゐない樣です。

▲其髪飾　時の生花を用ひ其中でも蘭菊、臘梅或は桂の花などが多く用ひられて居ります花の餘り開かぬ程を一ツ〳〵針金で束ね花櫛の形に造り枝を附けて髷すのである花の香を愛する所は床しいが美しい花の一枝を折つて其儘髪に挿すなどの風流は無く何れも針金で細工をするのであります其他は金銀珠玉もて鏤めたる

もの紛ひのもの紙で拵へたもの貝で造つたもの様々あつて形も亦た色々ですが其等の中で花の形を模したるものは貝細工に限られてゐる様です櫛は老若共に用ひない其代りに笄の如きものを用ひる宜い人のは金若くは玉で拵へ賤しい者は銀若くは紛ひ物を用ひまする次に

▲其腕輪 は鼈甲、玉又は黄金の細工を仕たのが色々ある小川で物を洗ふ賤の女すらも尚ほ銀製の腕輪を箝めて而も一ッを忌んで皆な對を用ひてゐる彼の校書の輩は少なきも三ッ四ッ多きは八ッ以上を片手に箝めてゐますが其價を尋ねると一個が大抵三百兩以上だと云ふことです一兩は我國の一圓三四十錢に當ります夫から

▲其耳輪 は必ず附けてゐる是も金銀珠玉の種々の飾りのあるもあり又福とか壽とか字形のを附けてゐるのもある小供の遊んでゐる折には時として嵌めてゐないこともあるが其耳を見ると皆な耳輪の穴があります指環ですか指環も必ず嵌めてゐます服裝の宜くない者でもピカ／＼光つた奴を用ひ、船頭の妻や娘でも銀製の薄くて幅の廣いのを多く用ゐて居ります。

▲婦人の髪 南清の女は邦人の如く髪の毛を屢々洗ふと云ふことは致しません洗ふのは夏とか年の暮とか一年に漸く二度位ゐでそれも暦上の吉日を撰んで洗ひます日本でも舊弊の人は申の日とか戌の日とか八釜しいことを云つてゐますが丁度其通りであります、ヂ油を用ひず削り花と云つて「びなんかづら」を薄く削りそれを水に浸して置いて用ひると是も日本の昔の通りです又櫛や毛筋立は形は違つてゐるけれども同じく用ひ唯だブラッシを遣ふことだけが日本と違ひます元結の代りに根を束るのが黒い糸外に見える所の髪の下を束るのが赤い糸で是は老若共に一致して居ります笄は髷の眞中に眞直に挿すのですが中には二本とか三本とかを横竪に挿してゐる者もあります。

▲女ハイカラ 例へば紡績の女工の如き總て賤しい者は束髪のやうに網をかけてゐる毛の散らない爲めでせう尤も女學生などが網をかけてゐるのもありますが是

れはハイカラの意であらうと思ふそして髷は惣體根の上つたのは野暮で根の下つたのが意氣だとしてありますから校書などは多く根を下げて結つて居ります又小さく惣髪に結つてゐるのも見受けましたが其れは矢張婦人のハイカラで斯う云ふ人は多く西洋の靴を穿いて居ります髷は三ッ多くて五ッ位を入れるさうで是れは髷の大きさが一定してゐますから髪の多い少ないに依つて違ふのでありませう。

▲美人　先づ生際は日本では富士額とか云ひますが支那の美人は圓くなつてゐるのを宜いとします其爲めに額の毛を拔くのであります顏も圓顏を賞美する丁度日本の王朝時代の美人が總て圓顏で榮花物語などにも「かゞち」(ほうづき)の様だとか「おもわぶくよか」とか形容してありますが畢竟支那の美人を標準にしたのでせう今南清で最も美人の多いのが蘇州だと聞きましたが大概圓顏であります楊州は少し面長の様に見受けます又生際の毛を拔くのみならず顏の產毛迄剃刀を遣はずに拔くのであります其方法を尋ねますと絹糸を二ッに割いて其兩端を兩方の手に持ち其中程で顏を擦るのですが誰でも鏡に對つて自から巧みに遣ります、夫から眉も地藏眉を宜しとして巧みに造つたり黑いものを塗つたりして居ります。

▲幼兒　は日本の稚兒輪の如く最も可愛らしく思はれますが十二三になると左の鬢に髷を結ふのが實に可笑しく珍らしいです試みに日本の娘に左の小鬢に島田を結はせたら何んな物が出來上るでせうか、、、

▲務本女學校　普通支那の女子には教育は殆ど無いと云つて宜しい男の子は日本の昔の寺子屋の如きものが諸所の廟に設けられてあるそれに通ふのですが女は行きません稍々身分のある家のは宅で習ふ位ゐです尤も外國人の多い上海漢口には女子の宗教學校が立てられてあるが小生は上海で城内の務本女學校を參觀しました是は支那人の私立ですけれども中々奮發して昨年迄は日本から御存じの河原操子女史を聘して居りました生徒が百人足らずゐまして課程は日本の高等女學校に依つて居ります唱歌なども詩を西洋の譜に合せて歌ひ又日本の文典なども教へて居りますそして生徒の中には三十歳のもの十二三歳位のものもあつて年齡が極めて不同です夫から授業中肩掛を纏ふてゐるのもあり又眼鏡など掛けて頗るハイカラめかしてゐました。

いくさのうはさ

號外日錄

月旦子

○二月二十三日は我が艦隊が旅順口閉塞の企をなしたる日に候。港口閉塞とは、港灣の出入口に船舶を沈めて艦の通路を塞ぐものに候、旅順口の出入口は黃金山と老虎尾との中間にて其間僅かに三丁ばかりに候へば此間に二三艘の船舶が沈沒致したらば、通路は全く塞がれて港内に在る敵の軍艦は嚢の鼠と相成る義に有之候、此の計畫にて我が艦隊は舊き運送船五艘に爆裂藥を仕掛け決死隊を組織して旅順口に向ひ候、併しその結果はあまり上首尾とは參り兼候、必竟敵の艦隊に接近して致す事に候へば、悟られては一大事と深夜秘密に行動致し候へ共。敵艦は逸迅く我が艦隊の企てを悟りたるものと見え、探海燈を浴せかけて陸上砲臺よりは絶へず砲擊して我が戰員の運動を妨げたる義に候。決死隊の勇士は七十七人にて、沈沒せしめたる運送船は仁川丸、天津丸、武州丸、武揚丸、報國丸の五艘に候、此の空前の壯擧に就て我が艦隊の豪膽に驚ろきたるもの啻に露西亞人のみならず、實に世界各國人の耳を驚かしたる義に候。

○三月六日は我が艦隊が浦鹽斯德を砲擊したる日に候露西亞海軍の根據地は旅順と浦鹽の二個所に候處。旅順口は去月八日に大打擊を蒙りて以來、損害夥しく最早港外に出で、日本艦隊と對戰する勇氣も無之候へ共、一方の浦鹽斯德に於ては未だ有力なる戰鬪艦數隻有之、何時乘り出して我が沿海を脅やかすやも計られず候、然る處我が艦隊は六日大風雪を冐して進擊し浦鹽港の敵艦并に砲臺に向ッて大砲擊を加へ候、されど敵艦は堅く港内に引込みて少しも應戰は致し不申候

○三月十日は旅順大連大攻擊の日に候、同日は我が水雷驅逐隊の一隊と、敵の驅逐艦と相接近し猛烈なる戰鬪を致し候、戰艦と戰艦との戰は普通の事に候へ共、此の度の如き驅逐艦と驅逐艦との戰は海軍歷史あつて

以来の珍事に候、此の際敵の死傷は實に夥しきものに候へしが、我が艦隊にも相應に損害を蒙り戰死者七名負傷者十四名有之候又此日驅逐艦の戰闘終ると、更に優勢なる日本戰闘艦と巡洋艦とは各々手を分ちて旅順の砲臺と市街を砲撃致し候、計畫は首尾よく其効を奏して黄金山砲臺には數個の大砲丸爆發し、老虎山の砲臺も多數の彈丸落下して砲臺は概ね破壞せられ候、殊に市街は日本艦隊より發ちたる砲丸が砲臺の山を飛越えて落ち來り、遂に大切なる敵の火藥庫に命中し、一帶の建築物は猛火に包まれて大部分は燒却致し候。爰に於て旅順口は暫らく死獸の狀を呈し候、斯る次第に候へば露兵も最早旅順口を守るの勇氣なく砲臺兵營軍艦等一切を棄てゝ逃げ出したるにはあらずやなど想像せしめ候兎に角此の日の大砲撃にて一時雇ひの職工等は勿論市民の大半は逃走したる事は最早爭ふべからざる事實に候。

○扨てこの大砲撃には我が艦隊には些少の損害も無之候、と申すは敵の砲臺より打ち出す砲丸の達せざる處に艦隊を置いて砲撃したる義に候へば、敵彈は少しも來らず誠に安全の地點に有之候、併し斯かる安全の地にありてよくも敵の砲臺を破りたるのみならず砲臺の後ろに隱れたる市街までも彈丸が達したる事よと御不審は尤に候、それは我艦隊から發したる砲は少くも六哩、以上の効力ある大砲と聞き及び候。されば、砲臺の後ろには如何なる建物があるといふ事を豫め測量して、その邊へ着彈點を定めて發射したるものに有之候。

戰場だより（勇士の書翰）

○海軍少佐廣瀨武夫氏が呉にある家族に寄せたる書狀、

▲記者曰く、本書は旅順口閉塞の任務を帶びて報國丸に乘込みたる廣瀨少佐が、其航行の途中より書き送りたるものにして、字簡なりと雖も意無量一讀直ちに勇士の肺腑を窺ふに足る。

武夫の武運は並に旅順口閉塞の壮挙に加はるの栄を得現に報國丸にて目的地に向つて航行中に有之候陛下の御稜威と天佑に頼り其成効を確信致申候而して武夫が其間に處して平素の嗜止謹て心掛居候武士道を辱しむることをなさじ御安神可被下候

富で一家一門の倍々繁榮を祈り居候再拜

二月二十日報國丸に於いて　武夫

母上様
姉上様
叔父上様
叔母上様
登代子様
馨子様

本艦朝日を發するに臨み福田中主計より詩を求められ候間其責塞左の如きものに御座候

丹心報國一死何辭
與船痿骨旅順之陲

御一唱可被下候

○閉塞艇隊司令櫻井少佐が、大阪要港部留守官邸に在る夫人雪子に寄せたる書簡の一節

▲記者曰く、少佐は旅順口封鎖の際閉塞艇隊司令官として某艇に乘組み、決死の勇士收容の大任に當り、偉功を奏したるの人なり、

戦爭といふものは中々忙しいもので要港部に居た時の様に入時出勤四時退出といふ譯には行かぬ夜でも晝でもノベツマクなし何とか彼とか要事があるので時々の通信も思ふ様には參らぬ然し私が萬一戦死でもしたら手紙より何より早い電信で通知が行くから御身たちには直に分る又其外戦況に就ても新聞の方が早くて面白いから別に申送る必要はない通信がない時は無事で元氣で働て居ると思へば間違ないのである

▲記者曰く、洒々落々たる日本武士の意氣、躍如として紙上に踊るにあらずや、萬一戦死の時は云々以下の如き何等痛快の文字ぞ。

○海軍大尉正木義太氏が、廣島市鐵砲町の生家にある夫人喜代子に送りたる書狀、

（前略）總べて戦爭は運不運にて死なうと思つても死ぬものには御座なく候拙者の如き强運のものは彈も矢も立ち申さず候（中略）二月九日の戦に我が艦にありし品々は御身（夫人をさす）の送られし守り札（是は大尉が出發の際夫人が心を込めて送りたる加藤清正の像を畫ける卷物にて大尉の父より贈られたるものなり）と生虎（大尉の長子）の寫眞に候、戦爭中拙者は檣樓上に立ちて鐵砲門の指揮致居候處たんく戦も遠距離に相成り候故、打ち方を止めさせて、懐より生虎の寫眞を取出し左の如く申て寫眞に戦爭の狀況を見せてやりたり

此戦にて東洋の形勢が定つて、汝の一生に戦が無いやうになれば、汝も男と生れて不甲斐ないであらう、それ故寫眞ながらもよく此

狀況を見て、男子と生れた意氣を養つておけよ若しまた戰に出會ふやうな事あらば、貴夏よく見ておいて後學の爲にするのだぞ(下略)

二月十七日　喜代子殿　義太

▲記者曰く、一讀再讀するに勇あり情ある大尉の面影髣髴として紙上に活躍するを覺ゆ、死生の巷に立ちて從容迫らず、悠然として愛兒の寫眞を抱き、恰も生ける人に物いふが如き光景は、之を畫にも描き、また詩にも歌ふべく、噫何たる優しの振舞ぞや、昔楠公櫻井驛の敎訓にも似たらずや、右は旅順口第二回攻擊後に發したる書信なるが、其後港口閉塞大計畫執行を卒へて、生還したる當時差出したる第二回の書信は左の如し。

一筆申上候拙者も其後變りなく常々壯健致居候戰爭に與り何よりうれしく日夜肝膽を碎き居り申候、數日前に愈々望み通り大計畫實行致候、殘念にも成功仕らず遺憾此上もなき事に候へども生命は失ひ不申候故又た陛下の御役に立つ事も有之べしと存じ殘念ながら生存致居候、度々送物被下有難存候、既に過日決死大計畫執行の節も、御身の送られ候品物に身體を堅め、何不足なく出艦仕候處誠に心持宜敷御座候(下略)

二月二十九日　喜代子殿　義太

噫是れ一篇の活哀詩彈丸爆裂の舷頭に立つて泰然自若なる大尉が、嚴君と夫人との心づくしの守札に身を固めて運命を之に任したる其の情、何ぞ優しくして尊きや、昔兜に名香を薰きしめて出陣したる英雄ありしと聞くが、それにも增さる好丈夫といふべし。

◎一等機關兵上野岩次郞氏が、武州丸に搭じて旅順口閉塞の任務に就くの際、實父富藏氏の許に送りたる書面、

去る六日歡聲の中に佐世保を解纜いたし候翌八日朝鮮大同江沖合にて同夜旅順口襲擊の水雷驅逐艇を送り申候其時送りし私の身今は送らるゝ身と相成候定めし御承知の事とは存じ候へども沈み殘りの敵艦まだ旅順港內に潛み居り出づるの見込も無之徒らに日を送り居り申候處此度決死隊なるものを編成され我が汽船五艘は其決死隊を乘組ませ來る二十一日の夜を期して五艘を其まゝ旅順港口に沈め以て港內にある敵艦をして港外へ出づるを得ざらしむる事に決せられ候幸にして私は決死隊の一人に選ばれ今夕本艦を發し右汽船に乘組いたすべく候就いては生還萬々覺束なく否々決して生きて還らるる身には御座なく一命を

陛下に捧げ奉るの時にて實に身にあまる光榮に候、かく死を決して出し上は討死は覺悟の事何時友人村竹より戰死の通知あるとも決して〳〵驚き下さる間敷候然々君に捧げし此身況して戰爭の折柄選拔されての上なれば此上なき名譽の上の名譽實に家名を揚ぐるの時に候

戰死の通知有之候とも決して悲しみ下され間敷大杯を擧げて國家の爲御よろこび被下度候先は死別に臨んで今世の暇乞まで暑さ寒さに御用心なされ度專一に候

二月十九日午後四時

大日本軍艦常盤　上　野　岩　次　郎

吉野村　小　西　富　政　殿

▲記者曰く、盡忠決死の文字、所謂海行かば水漬く屍の眞情紙上に躍如たり、

○二等兵曹林紋平氏が出征前、美濃國土岐郡土岐村の母の許に寄せたる書面、

▲記者曰く、氏は決死隊募集の時、血書して願書を出したる壯烈無比の勇士なり、

（前略）若し戰の時は私の俸給全額を母上の許へ送るやうと艦長海軍大佐伊地知彥次郎閣下まで願書を差出しておきましたから愈々戰爭となれば母上の許へ私の俸給がみな行きますから其中十圓だけは貯金にして置いて下さい其餘は僅かですがどうぞ小使にして下さい（中略）新聞によると世界のものが皆海戰に付て注意してゐますそうで一番始めの戰は海戰ゆゑ世界の人々が注目するのも無理はありません若し日本が海戰に負けたなら陸戰はしなくとも駄目です、かういふ譯ですから海軍の兵士は生命を捨てゝ働かねばなりませんので固より生きて歸るといふやうな精神はないので國家の爲に死ぬる決心であります、どうぞ母上樣には御達者で末永く御長命のほどを陰ながら祈つてゐます。

益吉樣（氏の弟）には御不運にて生れも附かぬ不具の御身（脊髓炎にて半身不隨）となり殘念の御事と奉察ますがどうぞ母樣に心配を掛けないやう御成長なされませ

次男現職海軍二等兵曹　林　紋　平

御母上樣　益吉君

▲氏は沈勇寡默の人、平素母に奉ずること極めて厚く俸給の幾分を割きて母の膝下に呈し、弟益吉を勞り居たり、されば此の手紙の如きも一意母の身の上を案じて、老后の計を講ずるに餘念なきを示せり、父母に孝にして始めて君に忠なるを得べしとは、氏の如きものをこそ謂ふべきなれ、又た氏が

○封鎖の任務を果したる後家郷に致したる書面の一節は左の如し。

過日天津丸より差出しました書面の通り二十五日午前四時が私の死期と思つてゐましたのに意外にも七十七名の決死隊の内一名の死者もなく（實際は一人ありたるなれど氏は當時知らざりしなら

ん）且つ傷者もなくして幸でした（中略）さて私の乘つた天津丸は海軍中佐有馬良橘閣下の司令にて二十五日午後四時より旅順の老鐵山の岸について前進中旅順港の西の砲臺下にて敵の探海燈の探知する所となりまして私の船に彈丸雨の如く射擊を加へ左舷に二發命中なし爆發いたしたるも中佐閣下以下十七名突進して一つの傷も受けませんでしたが我乘船は不幸にして目的地に達せざる中に暗礁に坐礁して沈沒いたし殘念此上なく思はず落涙仕候（中略）我艦には開戰以來大損所なし私も只今の所では無事健康で軍務に從事してゐます今後に於ても決死隊が募集の砌は志願の決心故不肖の決着の砌が御別れと御承知被下度候云々

○某艦乘組辻清太郎君が京都府下南桑田郡稗田村字佐伯上島象次郎君に寄せたる書翰の一節

（前略）寒氣非常に烈しく夜に至りては口中より吹く息も氷となりて實に驚くばかりです海岸にある小島は半分迄は氷の如くです我我は夜は哨兵を爲し艦外に在りて遠く海面を見張り敵の水雷艇或は驅逐艦の攻め來らざるやを靜にうかゞふ

戰爭といふ奴は中々面白きもの又勇ましき者です軍艦では先づ一晝夜には凡そ〇〇哩は走りますから今日此所で戰ひましても明日は〇〇哩も別れて一寸一服やりますが實に愉快なのです

（中略）二十五日我艦隊は旅順に向ひしに其れ敵艦ノーヴイク、パーヤン、アスコリードの三隻港内に入る能はずして港口にある三隻の敵は二斤半砲及び十二斤速射砲にて戰ひ我〇〇〇〇砲は各各砲臺を打破せり

敵の砲臺には所々にて百門以上の砲あり何れも砲口を揃へ打出す彈丸雨の如くに來れ共露馬鹿の打つ彈丸は多くは當らないです我艦隊より烈しく打出す强彈にて一時は山上の砲臺も黑烟となりて實に愉快なりし

港外にありし敵艦は多量の損害を蒙りて港内近くに退きたり軍艦〇〇は港外に在りし敵の驅逐艦二隻大運搖して逃行を見附後より追掛け一隻は打沈めたれ共一隻は何れ共なく逃行きたり（下略）

▲記者曰一讀戰鬪の光景を寫し出して躍然肉飛ぶの思ひあらしむ

○戰死者小竹機關兵が、三月三日附を以て加州小松町字大文字町の實家に送たる最后の書翰

拜啓時下殘寒の候先以皆々樣には御別條無之候哉御尋申上候陳ば已に新聞紙にて御承知の御事に御座候得共日露の交渉は愈破れ遂に砲火を交ふる時機に立至り候却說前報の如く二月七日午前十時佐世保軍港を萬歲の聲に送られて威風堂々戰途に就き申候向ふ所は即ち旅順口にて八日午後十一時半頃旅順口沖合に達し遙に港方に當り探海燈の照らすを認め候是ぞ正しく敵艦なり積年の怨恨を晴らすは此好期一擊の下に露奴を海底の藻屑と果し呉んと勇氣は日頃に倍し候ア、生は最早此時今世の終りと覺悟せり艦は忍びて漸々近づき約〇〇〇米突の距離に進み轟然一發の魚形水雷を發射せり此時敵艦は周章發砲致し候得共一彈をも受けず引返し申候其後廿三日旅順港口閉塞の企あり決死隊を以て編成せる運送船五隻の先導として旅順港口に向ひ又二十五日大艦隊の旅順口砲臺攻擊

にも從ひ申候が重々運つよく一弾をも受けず生命無事軍籍に罷在候間先々御放念被下度候併し是等の戰爭は只々序幕に過ぎず生も今迄運つよく命長らへ候得共今後尚幾多の胃險困苦の戰も有之可く殘念ながら再び兩親始め皆々樣に拜顔は覺束なくと存じ候間生はなき者と御諦め被下度候軍人たる者君國の爲身を犧牲に供するは最も本望の至りと存候就ては書面差出す筈の所出戰以來の多忙にて斯く迄延引致候間惡からず思召被下度候此後時々御音信申す積りに御座候

尚弟保治には叱敎成人致させ被下度皆々樣も御攝生御長命の程偏に御願申上候早々不悉

三月三日

第〇聯隊第二機關銃隊　小　竹　又　三

御　兩　親　樣

▲記者曰く、氏は此書面を出したる後數日、第四回旅順攻撃に奮戰して、遂に豫期の如く名譽の戰死を遂げられたり、されば此書は實に最后の書信とは成り畢んぬ、是等の戰爭は只に序幕に過ぎず生も今迄運强く命長らへ候得共以下の文字は豫て覺悟の殉國決死の眞情を吐露したるもの今更ながら讀み返へさるゝなり、吁

○橘少佐がその家族に遣りたる書翰の一節

拜啓倍々御清適奉賀候小生無恙去る八日夜海外居留民歡呼の裡に〇〇に上陸し其の翌親しく〇〇港頭の海戰を望み尋で海軍の連戰連勝の快報を聞き勇氣自ら百倍し目下安全人馬を休養して〇〇に

ま#り肉後の動作は軍機に關するを以て開陳仕兼候得共勇氣奧奮せる〇〇の軍隊を率ゐ活動可致期も近きにあらん幸に部下一同健全以て死力を竭し義勇公國家を發揚し聖恩の萬分の一を酬いんことを期し居り申候時正に春色動き〇〇の氷も稍々解らぎ志氣旺盛各自擴を挾み滿洲の氷雪何かあらんと勇み居候幸に御安慮あらんこと

▲記者曰く烈々たる勇士の本懷この一信に溢る。

○園田中尉が家鄕に送りたる信書

嚴寒之候愈々御壯榮の事と存上候正月以來御無音仕候處邦家の現勢は一身一家を顧みるの時にあらず宜敷御賢察願上候今や四千萬の同胞擧而忠君愛國の熱誠を發起すべきの秋況んや平素軍事の局にあるもの一命鴻毛より輕からざるべからず業喜深く覺悟する處あり胸中只一死あるの外一物無之候近き將來に於て驚天動地の大活劇は始めらるべく候他は軍機に關す云はんと欲するも云ふ能はず候偏に御健在を祈申候此れ最後の手紙たる可く候敬具

▲記者曰く忠君愛國の熱誠この如し日本軍の敵に克つ所以偶然にあらず。

○津田まさ子孃より

記者樣おかわりもありませんか伺ひ奉ります、春になりまして少し氣候もよろしくなりましたわね、私たち女學世界の愛讀者は皆至極大丈夫ですわ安心して下さいましな、又女學世界も追々盛大になりましてね私よろこびますわ、時節がら日露の爭ひで記者樣方御心配で御ざいませうね私等も氣をもんで居るのですが何分女の事で何のやくにも立ちませんのですからねせめて兵士の無事でもいのりませうと思つてね毎朝土地の神社に參詣致すのでございますよどーか女學世界も記事をなるべく出して下さいましよどーかおねがい申します、記者樣方御身を御大切になさいましな私兵士と共にいのりますよ。



才媛詞藻

塚越停春君選

（天）軍旅の夫を憶ひて　兵庫　きん子

おなじくは萬代までも殘る名を
　とめての後といのらるゝかな

眞情至るものは、用詞の巧を須ゐずして自ら妙也。軍旅の夫を憶ふもの、多くは此以上ならず。

（地）櫻　大阪　岡　秋子

流れゆるき小川に晝の月見えて
　櫻散る也水清き里

婉麗如レ畫。詩味無限。

（人）櫻　長岡　照子

世の中の波の立ち居も打忘れ
　しばし長閑けき花の影かな

花下の人生觀とも謂ふべきもの歟。「しばし」の一語、意味深し。

秀逸

○○軍旅の夫を憶ひて　東京　佐藤ちよ子

いさぎよく花と散りませ吾背子と
　おくりし文をくゆる夜半かな

情至り辭至る。

○○櫻　愛知　森井せき子

手負ひたる荒鷲一羽谷に
　落ちて大比叡あたり山櫻散る

勁拔甚。敬服敬服。

○○軍旅の夫を憶ひて　備中　大西美佐尾

吾が背子は何處行くらむアムールに
　駒水飼ふと今日か立つらむ

萬葉當年の古調あり。

▷〇軍旅の夫を憶ひて　熊本　柏木房子

なまじいに涙は見せじ武士の
妻のたしなみわれ忘れめや

涙なきの處却て深悲を見る。一讀人をして神風連の烈女を憶ひ出せしむ。

▷〇野蕨　備中　大西政代子

荒れ果てし十萬石の城跡に
蕨萠出で丶春の雨降る

國破山河在。城春草木深。

〇〇櫻　三河　永田きん

敷島の大和心を其まゝに
咲きこそ匂へ山櫻花

此くの如くにして顯ならず。

丶〇軍旅の夫を憶ひて　京都　三の宮つゆ子

勇ましき君が御姿勇ましき
君が御聲は猶殘れども

閨怨長し。

丶〇軍旅の夫を憶ひて　東京　中村八千子

うつしゑにみ國の櫻さゝげつゝ
君がほまれを只祈るかな

巧に軍人の内を歌ひたるもの。

▷〇軍旅の夫を憶ひて　河内　矢寺はぎ子

たよりなき背子思ふ身はみいくさの
知らせのみこそ力なりけれ

眞に軍人の妻たるものゝ情を抒ぶ。

丶〇櫻　河内　櫻井喜子

舟競ひやみにし志賀の湖に
夕月うすく櫻散るなり

叙景の上乘なるもの歟。

〇〇櫻　山城　中川さだ

櫻狩短く嵯峨に日は落ちて
花園村は十六夜の月

優麗限りなし。

〇〇櫻　越後　太田安子

宮人の車は去りて櫻散りぬ
江南十里雨寒き夕

情景並至。

▷〇軍旅の夫を憶ひて　河内　大矢たね子

いくさ舟かちしたよりに我が胸の
波をさまらぬ夜半もありけり

いくさ舟、波等字々相響く。獨り情のみに非さる也。

〵〇櫻　同

出でたちの駒にかざせりはなむけの
歌書き添へし山櫻花

何等の風流ぞ。

〵〇櫻　波津子

歌はれつ待たれつはては惜まれつ
櫻よ世には恨みなからむ

たけ高し。

〵〇櫻　松江　岸崎いし子

御いくさに召されて出る益荒雄の
征衣の肩に櫻散る也

情趣多し。

〵〇櫻　越中　伊東露子

散りやすきものとし知れば櫻花
咲くさへ惜き心地こそすれ

凡ならず。

〵〇野蕨　河内　竹内敬子

岡のべに姉を待たせて乙女子の
摘みては急く野路の早蕨

巧に兒女の態を寫す。

〵〇櫻　定子

春雨の名殘の雲と思ひしは
一むら咲ける櫻なりけり

形容し得て陳ならず。

〵〇櫻　東京　佐藤千代能子

草枕旅にある身も忘れけり
花の都の花にうかれて

面白し。

〵〇櫻　備後　井上美子

もろこしに咲かぬ櫻の匂ひこそ
我が敷島の花にぞありけり

着想群を抜く。

〵〇櫻　伊勢　中村はん子

わが門のひともと櫻人の目に
かゝる春にもなりにけるかな

用調巧妙。

〇軍旅の夫を憶ひて　安房　小西まち子

あな嬉しあな心地よし現なれ
ハルピン城頭駒を立つ背子

力あり。

○櫻　東京 増田とき代

花咲けど今は昔の殿にして
弓競ひする公達もあらず

感慨多し。

ゝ○櫻　廣島 溝口愛

馬子の歌ひとあしごとに霞み行く
堤のほとり櫻散る也

有聲の畫。

ゝ○櫻　滋賀 田中とみ子

いと長き隅田堤の春の日も
花に短き心地こそすれ

用語詩情と共に妙。

○野蕨　大阪 吉野ひさ

廣野なる窪みに生ひし早蕨は
もえても人に知られざりけり

才子佳人亦此の慨みあり。

ゝ○軍旅の夫を憶ひて　石見 宮内登美子

病みませる姑の君を慰めて
背子のいさほを語る夜半かな

見るが如し。

○櫻　伊勢 間島磐子

衛士が焚く篝の光うすれ行きて
烟ほの〴〵櫻に迷ふ

好作。

ゝ○軍旅の夫を憶ひて　陸前 渡邊しげ子

あけがたの風よ吹かざれ我背子は
唐の荒野に今朝もたつべし

古情あり。

ゝ○櫻　兵庫 小ぎく

忘れてははてなきものと思ふまで
花盛りなり三芳野の里

凡ならず。

ゝ○外征の夫を思ひて　仙臺 梅村まつ子

征きましゝ背子の玉章たらちねに
讀みて聞かする雨の夜半哉

實景實情。

○櫻　大阪 坂口繁野

散りてなほゆかしき春の櫻かな
大和男の子の心と思へば

佳。

○櫻　丹後 高宮安子

咲積く花に心をさそはれて
筏は水にまかせけるかな

越後　五十嵐美代子

大井川矚目。

ヽ○櫻

ウラル山に君か離の宮立てゝ
植て見まほし大和櫻を

秋田　竹内かね子

普く四千萬衆の希望を歌ひたるもの。

ヽ○櫻

外國にあらぬ櫻をウラル山
うつして植む春は來にけり

三重　米澤よし子

然り、眞に日本國民の特性を發揮すべきは只新の日を然りとなす。

○櫻

思はざりき大和島根の櫻花
黄金山下春風に匂ふ

京都　三の宮つゆ子

佳。

○野蕨

なき友を送りし野邊のおもかげを
忘れかたみに摘む蕨かな

伊勢　飛露子

所思多。

○野蕨

春日野に蕨をりつゝ遊ぶ子の
ながき袂に日は斜めなり

遅日暖烟の實景。

ヽ○軍旅の夫を憶ひて

いさぎよき名をあげてよ暫く中も
御身安かれとまづ祈る也

東京　幹子

人情此くの如し。

ヽ○櫻

杣人が斧とぐ上に亂れ咲く
櫻の花を朝日の照らす

東京　林芳子

奇趣奇想。

ヽ○櫻

奥殿の亂舞もはてゝ細どのゝ
朧月夜を唯櫻散る

湘南　葉山しげ子

一種の宮調。

ヽ○櫻

いでや今外國人に山櫻
咲ふり見する時は來にけり

京都　平岡こま子

竹内かね子と好一對の歌。

ヽ○櫻

琴おきて号外を呼ぶ聲す也
櫻花散る夕暮の窓

東京　高井小ゆるぎ

赤坂四谷邊の實景。

〇櫻　愛媛 高橋茂子

よし散るも花は櫻とみさとしの
御文の中に櫻一片

着想妙。

〇櫻　奈良 成田鈴子

櫻花風をも待たで散り行くは
足るてふ事を知ればなるらむ

教訓あり。

〇野蕨　同

稚子にひかれ〳〵て思はずも
袂にあまる野邊の早蕨

實情。

〇櫻　東京 佐々木富江子

ゆるやかに浮ぶ緋鯉のかげ見えて
櫻かつ散る夕暮の池

即目の景

〇櫻　伊勢 山本しげ子

君がため子は北の野の雪と消えし
老嫗が家に櫻咲きほこる

「咲きほこる」の語面白し。

〇櫻　京都 田中立

咲ける時見るばかりかは櫻花
散る姿さへめでたかりけり

下句凡ならず。

〇櫻　岡山 横山きよ子

雪消えてかため厳しき裡木戸の
朧月夜を櫻散るなり

高妙。

〇櫻　丹後 高宮やす子

いにしへも今もかはりはなかりけり
花見る人のみやび心は

〇櫻　名古屋 清水みさを

舞ふこてふ心つけてよ初櫻
羽風に堪へぬ露もこそあれ

眞に婦人の歌。

〇櫻　陸奥 ひで子

おほけなく櫻咲きけり守る人も
あらじと見ゆる古寺の庭

多少の感慨なきを得ず。

〇櫻　伊豆 ひで子

咲もよし散るもめでたき花にこそ
大和心の程も見えけり

好作。

〇櫻　岡山 橋本芳子

咲きいでゝいさぎよく散る櫻こそ
　大和男の子の心なるらむ

好作。

ゝ○櫻　水戸　榊　春子
高殿のうたげのさやぎ靜まりて
　一本櫻月朧なり

情景面る。

○軍旅にある夫を憶ひて　京都　薬山みさを
ひざの上に寢むる吾子のうつゝなき
　姿にも又しのばるゝ君

妙。

○軍旅にある背を思ひて　備中　大西操子
露宿り銃を枕に吾背子は
　何夢むらむ荒野らの月

妙々。

佳調

（櫻、野戰、軍旅）

●　大阪　星　みよし
さしのぼる朝日に匂ふ櫻こそ大和島根の光なりけれ

●　山口　田邊桃枝
君よわが家な思ひそよしやわれかよわしとても君の妻なり

●　越後　堀田田鶴子
矢うつみ船の上にかざさばや大和男兒の愛づるこの花

●　三河　山内經子
ものゝふのそのま心にたぐひてやちるをおしまぬ山櫻花

●　東京　さくら子
咲きつゞくたかねのさくら來て見れば雲にかけ入る心地こそすれ

●　靜岡　松井かず枝
おぼろ夜の月にうかれて又もきぬこよひ盛の花の下かげ

●　岐阜　坪内清枝
追分にたちし石ぶみ新らしくかたみの櫻いま盛りなり

●　東京　原田ひさ
きゝすなく野邊の小松の下わらび折殘されて春たけにけり

●　石見　增田松代
島がくれマストの影の見ゆるにも父よと呼ぶ幼子あはれ

●　河内　櫻井喜子
淋しげにほゝ笑む稚兒をわが背子はいづくの野邊に夢みますらん

●　駿河　山本俊子
軍人の送別今や酣の會場しばし花吹雪する

●　熊本　永田とし子
志賀の山や今も咲きけり宮人の昔かざしの八重櫻花

●　陸前　西川春子
九重の御園の内の八重櫻ことしはわきていろまさるらん

●　京都　中川あい

これやこの大和心とおもほへばいよ／＼ゆかし山ざくら花
● 駿河　菊地武子

勇ましき號外賞の聲聞て又も取出す夫の寫しゑ
● 石見　齋藤ゆり子

うれしくも樂しくもありし蕨野のまとゐ告げなむ京なる友に
● 長崎　古賀芳子

背の君のいさむ門途に櫻さきてわれにならゐと花は匂ひぬ
● 伊勢　眞野常子

家づとに折てやゆかん手すさびにうら／＼もゆる野べのさわらび
● 伊勢　佐藤きく子

さくらよりさくらにつゞく吉野山香にゑふ少女歌にあくわれ
● 伊勢　藤本まさ子

われはたゞ野邊の早蕨とるものをなに驚きて雲雀たつらむ
● 伊勢　大國あや子

神のあだ人のあだとて討つ背子の夢むすぶ野は虎ほゆる高麗
● 備後　森戸次子

山里の賤が伏家も春たちてかすみに匂ふ山ざくら花
● 遠江　そめ子

春の田をかへす／＼も背ぞ憶ふいたづきもなく勳あげてと
● 和泉　西出靜

なやむ時見てはほゝゑむ背の君の三十一文字門出の言葉
● 美濃　はつ子

春日野のやけ野のわらびいさ折てまつらむ母の家づとにせむ
● 京都　田鶴子

乙女子が花のたもとをふく風にこぼれをちけり野邊のさわらび
● 大阪　藤濱

授乳する稚子の笑顔をながめては心に浮ぶ西比利亞の空
● 越後　坪井わか子

唐土の野邊の醜草刈つくし移し植てん山さくら花
● 堺　藤井なを子

西比利亞に大和の櫻移し植ゑて花見る春や近きにあらむ
● 津市　好子

わすれ子をひしと抱きてふし拜む招魂社前さくらちるなり
● 山梨　田中明子

春をいたみ琴の音みだる朧月夜櫻の風に散りしく
● 越後　吉田梅子

御戰にせこはたちとるこの春を花見て何のおかしかるべき
● 小石川　渡邊すみ子

笛の音はかすかになりて隅田川おぼろ月夜にさくらちりかふ
● 甲斐　小林松代

たゝかひに召さるゝときゝて勇みたちし夫の面影忘れがたくて
● 大阪　大道白百合

うなひ子が水に浮ばす舟みてもわがせの君は如何とぞ思ふ
● 埼玉　萩野くに子

月おぼろ瀧もぞ落つと思ひしは岩にしだるゝ櫻なりける
● 越後　佐藤榮子

立ちならぶ老木の櫻花咲きて霞めるあたり小犬たわむる
● 栃木　木村つゆ子

君が行く船見送りて歸るさを櫻散りしく川添ひの道
● 和歌山　谷井鶴子

さかりなる花の色香にうきこともわすろとせしをちりにけるかな
● 本郷　水上清子

花〳〵とかすめる花のさくら花やまとおのこの心なりけり
● 群馬　片柳れい子

ならくぬぎ茂り合ひたる葉合ひより蝶かあらぬか山さくら花
● 上毛　佐藤松枝子

君が影消へにし方を眺むれば櫻にかゝる月朧なり
◉ 大阪　矢寺はぎ子

ちりてさへ惜まれぬるを桜木の嵐にむかふ花もありけり
● 伊勢　岡島榮子

川の本はまかれど櫻ひとり生ひてひとり花咲くうまし國ぞも
● 銚子港　さわ子

里遠き山路をたどる片岡の芝生にもゆる春のさわらび
● 京橋　佐々木まさ子

胸ながら歌をたむけて過ぎにけり花さきそめし櫻井の里
● 備中　石原淳子

三つ五つ櫻の香ちりし時雨路もれて聞ゆ號外の聲
● 群馬　曾根蓏露女史

軍立ちしせこ思はひて立る夜に北つ海さして雁鳴き渡る
● 神奈川　渡邊深子

しき島のやまと聲やこれならむ九だんのさかにちるさくら花
● 弘前　平山知嘉子

櫻さく國のをのこぎみ櫻に恥ぢぬ功たてませ
● 本郷　安井とみ子

山ふかみ谷間がくれのもと櫻ほとろとなりて折る人もなし

大君にさゝげまつりし背子が身をなほやすかれと神にいのりて
● 本郷　中野信子

鋒とりて出立つ君に送らなんいさぎよく散る山櫻花
● 芝區　山崎さだ子

少女子の鄙歌もるゝ折り〳〵に梭の音聞ゆ櫻咲く里
● 長野　恩田とし子

賤が女は白き手拭かたにして霞立つ野の初蕨つむ
◉ 越路　しげ子

をさな子にとはれて示すシベリヤの地圖の上にも君をしぞおもふ
● 栃木　澄江子

わらびとる鄙歌聞ゆをちこちに霞の奥や廣野なるなん
● 青山　長尾糸子

庭もせにちりぞはてぬる櫻ばなきのふまでとは覺ねるりした
● 長野　青柳つれ子

をやみなく雨はふれども中々にもえ出にけり野べの早蕨
● 名古屋　水野こと子

美はしく花はさけども奥山の一本さくら知る人ぞなき
● 名古屋　松原ちか

吉野山峯の嵐はしづまりて入相のかねに花ぞちりける
● 鎌倉　坂本ふゆ子

姫君のふりのたもとにひら〳〵とにほひこぼれて散る櫻かな
● 深川　遠藤たみ子

梓ゆみ春のすさみにシベーリアの荒きゑみしを打ちますか君
● 群馬　堀口みな子

● 新潟　内藤ゆき子

● 隅田川花も流れてゆく水のせきとめがたき春の暮哉
伊勢　中村はん子

● 小柴垣黒木の鳥居野の宮の春静かなり老木の櫻
本郷　古川すゞ子

● もの思ふ種とは知れどさくら花さけばさすがにうれしかりけり
姫路　西村茂子

● 奥山の青葉に匂ふ白雲は花なき頃の花にぞ有ける
茨城　大橋夏子

● 春されは野守か庵も賑はひぬ蕨折りに人おとずれて
仙臺　村田さく子

● 年老いし母と愛子に許されて敵になうしろ見せぞ我か夫
津市　永田和子

● 櫻さく春の終日野に出でゝたゞ徒らに逗留ならす
下谷　秋庭翠子

● 西比利亞のしこ草かりて武夫らの植ゆる花野ゝ山櫻花
兵庫　柳田春枝

● 高まげの姫君ひとりおぼろ夜になに思らむ櫻ちるまど
播磨　杉田都留子

● 名のみ世に今ものこれる兄君の遺愛のさくら又さきにけり
伊勢　植木重子

● 父を呼ぶ稚子を抱きて眞夜中に北なる空を眺めやるかな
京橋　佐々木こう女

● やめゝ子のさびしき寢顔見まもりて軍の夫を想ふ夜半がな
伊勢　大國ひさ子

見馴にし山の姿もかはりけり峯にも尾にもつゞく櫻に

麹町　古谷ゆり子

● 若武者の乗り行く駒のいなゝきて風なり／＼に櫻花散る
伊勢　山本しげ子

● 殘月夜山路をたどる賤が女の背負ふ薪に櫻ちるかな
伊勢　小林とし子

● 天の下花は多けど日の本の櫻にまさる花なかりけり
長門　木村いく子

● 濃きあわき花はあれども櫻花外國までも咲き匂ふらむ
京都　中西美智子

● 妹のたすけをかりて病院の窓にさくらを見るゆふべかな
越後　佐藤銀子

● きのふけふ咲ける櫻の木の下にかすみて聞ゆ馬子の鄙歌
三河　卯の花

● いくさいかに吾背いかにと物思ふ床にほゝゑむ背子のうつしゑ
備後　森戸初子

● 武夫が勇みて立つるさまにゝて朝日に匂ふ櫻うつくし
長崎　古賀秀子

● 風あれて三日月凄き此夕露營の夫の上しのばるゝ
越中　關ゆき子

● 早蕨ももへやしぬらん故郷のきゞす鳴く野に煙たなびく
山口　渡邊靜子

● 日毎々々満洲の空ながめてはさちくいませと我がせこ思ふ
岩代　菅野和子

● 移し植ゑし西比利亞の野の櫻花大和心に咲き匂ふらむ
越後　木曾霧葉女

姉君は玉の男子をうみましぬ門の櫻も今朝さきそめり

● 牛込 逢田見まき子

西伯利亞の野邊の醜草刈り取りてこゝに植ゑばや山櫻花

● 美濃 山田愛子

わだつみのはなれ小島も日の本のしめのうちなれ櫻花さく

● 羽前 楢岡眞子

夜あらしに夢破られて窓あけて先づながめやる西の空哉

● 福岡 大田とも子

亡き夫の菩提とむらふ新尼の墨染の袖に散るさくらかな

● 伊勢 疋田せつ子

春くれば咲くとは知れど今更にながめあかぬは櫻なりけり

● 下總 椿の家都子

いつとても春にかはらぬ花なれどめづる心は年にそひ行

● 信州 成澤兇子

汝もまた鷲の羽風を起るかやこぶしをあげし野邊の早蕨

● 栃木 大島定子

御軍に召されし我背歸りこで軒端にをねる椿の花ちる

● 小石川 常盤千代

かへらじとちかひし我せ魂まくらこよひアムールを夢にこゆらむ

● 安藝 松阪椿子

鷲の羽かぜや花にさはりけん二ひら三ひらちる櫻かな

● 越後 和歌田馨子

いざゝらは歸りて母にまゐらせんやけ野の原に折りし早わらび

● 大坂 倹子

ものゝふはかくこそあれと櫻花手折りて友に送りけるかな

● 岡山 植田貞子

山櫻手折ばやとて乙女子のあふむく顔に二片三片

● 函館 村上つる子

出征の君を慰むさくら花一ひら文にそへてをくらん

● 前橋 ゆき子

我つまのしろきベツトにふすとみてさむれば淡きともし火のかげ

● 新潟 鹽谷美須

きさらぎの長きたもとに散る花の散りて美くし櫻の姿

● 岐阜 砂風女史

あづさ弓春の朝の櫻がりながめはつきぬすみ田川かな

● 神奈川 渡邊澤子

うれしくも悲しくもきくすゝのれにおもふはなにぞシベリアの空

● 芝 瀬なばな

こゝろなく子らは蕨を折りくらす父うせましゝ城あとの野へ

● 尾張 鈴木とみへ

けなげにも云ひし言葉のしかすがにくりかへさるゝ春の日長し

● なな江

去年の春いまわとみねし妹と手折るもうれしのべのさわらび

● 京都 きよ子

大原女かましはにそへし一枝の櫻うつくし春の夕ぐれ

● 熊本 藤本友子

我が背子は此朧夜を如何に見ん寒き露營に太刀枕して

● 伊賀 服部かつ子

月かげのくらき風夜よ我がせ子はてきの何地を斥候やすらん

● 熊本 豐子

ますらをの心の花か山櫻ことしはいとゞにほひましける

● 備後　杉田俊子

しき島の大和男子の心根に咲き匂ひたる山櫻花

● 東彼杵　兒玉まき子

ちる花を月も惜とやてらすらん吉野の山の有明の空

● 高田　小林靜枝

いのちあらば又あはんとていでゆきしせの上こひしこの時にして

● 美濃　莊加ふじ子

月青く鐘の音ほそき夕まぐれいなゝく駒に我背をぞ憶ふ

● 備後　つくし

あるとしもなきともわかぬ我主の衣仕立てし甲斐やいかならん

● 淡路　松月女史

スラヴ族とくきてみよや敷島の花の都の春のあけぼの

● 美濃　詩茂皮じゆん子

はしきやしうないつどひて春の野に蕨つむ日の風溫かき

● 大阪　俠田眞千子

きゞす鳴野邊なつかしみ來て見れば春めづらしくもゆる早わらび

● 宮城　かりがれ

泣くちごを軍話にね入せし淋しきねやを月さえわたる

● 備後　すみれ

競ひてし妹もあらなく我ひとりつむもものうき野邊のさ蕨

● 周防　増原よし子

雨の夜半風の朝に憶ふかな軍に出でし我背いかにと

● 鳥取　砂川澄子

咲きいでゝいさぎよく散る櫻こそ大和撫子のこゝろなりけれ

● 下谷　靜子

寒さをも飛びくる玉もおかしつゝ進みますらん吹雪する日も

● 本郷　古川すゞ子

敷島のさくらは露をちらしつゝサクラルが山ににほひぬるかな

● 熊本　安田文子

朝な〳〵夫に供ふる陰膳におきそふ露は涙なりけり

● 芝　川井嘉久子

雨のごと彈丸ふる野べに我夫の戰ふさまを見る心地して

● 下谷　杉山きく子

もろこしの月を見つゝもわが夫は忍びおはさむふるさとの空

● 本所　天沼ますね

大君のみかきの跡と植ゆひて氣だかく咲ける一本櫻

● 相模　木村槻子

外國の人に見せばや皇國の民の心と匂ふ櫻木

● 北品川　黒岩蓮花

夕霞さくらの下に立ち込めて篝火高に月おぼろなり

● 熊本　柏木房子

鄙唄の聲もきこえて里人か野邊の早蕨つみはやすなり

● 相州　みどり

彌月夜野蕨かごにみち〳〵てゑみてかへりゆく少女子のむれ

● 岡山　森靜濱子

佐保姫が霞の袖につゝまれて萌え出でにけり野邊の早蕨

● 羽後　菊地ゆき子

知るや君遼東の野の地圖見ては朝な夕なに祈る心を

● 弘前　菅なか子

いにし子の小さき拳を思ひ出でし早蕨摘いて春の野になく
● 羽後　淺沼みゑ

明け暮れに慕ふものから夫の君を夢に見てけりシベリヤの原
● 岡山　立神政子

畫師去りて旅僧さりて川添の櫻にせまる夜の色かな
● 山口　縄田ふみ子

我夫と名殘をしみて別れしは今宵の如き月夜なりけり
● 盛岡　太田とも子

今日もまた里の乙女子つどひ來て我手にゝたるわらび折るか那
● 京橋　佐々木富江子

勇ましき夫が軍の手柄話かたる人だに戀しかりけり
● 札幌　山角眞子

はなの風靜かにふきて乙女子の赤きリボンに櫻花ちる
● 石見　宮内登美子

もろこしの原の醜草なぎ捨てゝやまと櫻の種を植めや
● 大阪　井上登美子

シベリヤの地圖うちひらく益夫の帽子の上に櫻花ちる
● 伊勢　嶋口もみぢ

春の歌しづかに思ふ丸窓に櫻一片風なきに散る
● 和泉　井上とみ子

永き日の午砲響きて兵營の歩哨の銃に櫻散るなり
● 廣島　和知廣子

胡蝶舞ゐひばり鳴く野のわかくさに交かくせるわらび尋れん
● 信州　小池登喜代

ほの〲とおけはなれゆく山のはに霞にまかふ山さくらかな
● [illegible]　三枝千代子

しのゝふの心としもいふ樂木の花こそ[illegible]の花のはなゝれ
● 尾道　野田つや子

つとひてし人はかへりて入相の鐘のひゞにちる櫻か那
● 近江　細野かう子

さきにほふ花の下みちゆくごとに老もわかきも足とゞめけり
● 武藏　須崎せん子

美しと眺めし雲もうらみ貌戰ひの野の夫慕ふ朝
● 下總　むつ子

日あたりにかみを洗へる少女子のあらふ水面にさくら花ちる
● 伊勢　河村君子

あつさ弓春の山べのさくら狩り雲に分け入るこゝちこそすれ
● 群馬　橋本延子

ふりの袖せに結ひつゝまゝことの調度ならふる花の下蔭
● 美濃　建部鈴子

うら〲とかすむ岡べに來て見れは里のをとめ子蕨をばをる
● 信濃　竹鼻すみゑ

山のはに月は懸りて朧夜の思出おほき花のかげ哉
● 長門　飯田ふじ

うら〲と霞める野邊に蕨摘む乙女の聲は春めきにけり
● 津市　戸倉信子

津ま琴の音も靜かに朧夜のほのかに匂ふ花の庭かな
● 河内　前田縫子

畫かんと繪師ののべたる畫絹に一ひら散りし緋櫻の花
● 名古屋　落葉子

子守歌遠くなりゆく夕暮のをかのへ白く櫻花ちつる　●　佐倉　しらぎく

花もなくたづぬる人もなき野邊にときしりがほの野菊もゆる　●　島根　小泉てふ子

春の川のやゝに暮れ行く山寺の七堂伽藍櫻花散る　●　伯耆　羽山らく子

賤の女がになへる柴にやさしくもかざしとばかり匂ふ一枝　●　津市　戸倉信子

ますらをのかたみの櫻笑みそめて金洲城頭春風ぞ吹く　●　名古屋　田上小金

遊子一人駒急がする峠路の一本櫻夕風に散る　●　和歌山　歌子

山櫻めでにし昔思ひいでゝそゞろ都の君ぞこひしき　●　上毛　すみれ子

風もなくて獨り靜かに花散りぬ神や楠におりたゝすらし　●　大阪　田中青

みよし野の山の下みち人絶て櫻ちるなり月淡き宵　●　大阪　大道若菜

大君にさゝげし夫のいのちぞと思ひながらも神にいのりて　●　大阪　たみ子

春くれば園のふる日もうぐひすの梅の花笠きつゝ鳴なり　●　大阪　たみ子

咲そむる桃の花こそみちとせをかさぬるはゝのはじめなりけり　●　千葉　池田しか子

降りつもる雪のしづかに更るよもしらで語らふ埋火のもと

和歌兼題

山吹
樵路躑躅
（〆切四月十五日）
餞別
（披露五月五日）

◎賞品天、地、人、の外秀逸二十種に呈す

▲家庭日記
▲寫生文
（〆切四月十五日）

懸賞文規程

投稿用紙は半紙又は罫紙二つ折（和歌は端書に限る）の事▲題目の下には必ず住所姓名を明記すべし▲文字は必ず楷書又は行書にして叮嚀鮮明なるを要す一種にして數葉に亘るものは必ず右方の上部一ヶ所を紙撚にて綴るべし▲原稿は博文館編輯局女學世界とせらるべし▲投書原稿は一切返却せず

鶯の聲

野毯女學校　長尾糸子

雛の梅もやう〱霧を破りて、遠ち方に鑿鑿きたる霞の間より見ゆる遠山の景色、さては、近きあたりの岡の上の椿とも云はず、田の面の水の色までも色づきて、いづれ春ならぬはなし。まして昨日けふ、雲雀の空高くひくゝ囀り合ひて、友まち顔なるに、寒からずあつからぬ春の日ぞ長閑なる。わけて、たかしきは、ふしとゝなはぬ鶯の、竹の林の森近かう來てなきたるは、心も爽かに日新らしく聞かれて、またなくあわれ深し。さるにても、此は日露の戰ひに巷の噂さとり〲、今日はみいくさ勝てり、明日はいづこに戰ひあらん、なにがしは重傷を負へり、それがしは打ち死にせり、くれがしは手柄せりなどゝ聞くからに、我れながらうれしくも、勇ましくも、また悲しくも覺ゆるぞ是非もなき。なかにも我が子我が夫のみいくさに從ひて、いさをゝたてしときゝたる父親の悦びは如何ばかりならん、いたでを負ひしとき、知りたる母親の心掛りは如何許ならん、打ち死にせりとのたよりを手にしたる妻の悲みは如何ばかりならむ、彼れを思ひ是れを考ふれば、そゞろに涙催されてつたなき言の葉に言ひつくすびやうもあらざるなり。鶯はなけども心は春ならざるなり。誰れか、軍旅にあるみいくさ人の身上を思ふの心にかわりあらんや。朝には祖先の位牌に我子の手柄を祈る親もあれば、夕には鎭守の森の産ぶ神に我が夫の無事を祈る妻もあるべし。其の心はいさましと云はんか、悲しと云はんか、あわれとも云はゞこそ、生くるも死ぬるも皆御國の爲めなれ。はたまた、とゝせの昔の恨みを晴らす時と思へば、いかでか悲しむことのあるべき。たとへ外つ國の野邊に屍を曝すとも、其のいさをしは千歳の末までも人の鑑として仰ぎたゝへられん。其魂は護國の神として、長へに祭られん。死ぬべきときに死なざれば、生くるに勝る恥ありとか、殿の庭に花と散るは武士のならひにして、あたら五尺のからだを床にそこねて生きながらへんはこよなき恥ぞかし。仇打ち取らずば命とさしちがへても死ぬべきなり。げにやこたびの戰ひこそ二千五百有餘年來傳へ來し我が祖國の爲めに。

雨後の眺

香川　安藤光代

糸の如き春雨の連日ふりしきりて、野邊遊も思ふにまかせず、うす暗き破窓の下に針はこばし居たるに、俄かに明るうなりゆきて久し振に心地よき朝日はキラ〱と笑みそめぬ、嬉しさ限りなく障子引あくれば、見渡す庭の木々の梢は何れも露をふくみてさながら、浴後の佳人の如く、いま盛なる紅梅、けふ此頃笑みそめし花壇のアチロ子などとり〲春の色を現はし、南天の實に宿れる露は、紅玉と水晶を貫ける如く、紅唇堅く結べる綿島は無數の土筆一時に生ひ出しかとあやまたれ、何れを見ても心浮き立たぬはなく、うらみし春雨も流石に嬉しき心地せられぬ。稍小高き邸の松の樹陰土塀越しにながむれば、二月の海、どこやら嵐の末も聞ゆれど、海の面は陽炎の如くゆら〱と靜なり、彼方に見ゆる鹽飽諸島は、濃緑の色美しう、うれ〱と彼方にめぐりて恰も琵琶湖に望める如く最中に浮べる木笠島は竹生島にもたとへつべし　かまぼこなりの貮島の邊白鷗の如き漁舟の二ツ三ツ　眞帆ふくらませたるが彼方の島影に見ゐずなりて又現はるゝなどいはん方なく。雁の一連又一群波を渡

りて消ゆけば、後ろに來る北風に雨雲に拂はれて、空は玻璃の如く水天のけじめわかずなりぬ。

波にうつれる磯頭松は長へに晩翠の色をあらはし、叢頭やく烟の淡く立こめたるなど、暫し無心に眺め入りしに。

「光代〱」と父上の召し給ふ御聲のふと耳に入りたれば驚きて家に入りぬ

友の死せるをきゝて

肥前　馬渡泰子

山の端近うなりたる日影うす黒の雲におほはれて 入相の鐘何となう物哀れなりやがて 夕げたうべて机によりぬされど如何なる理あればにや左右せん心もなしとかうする中夜もはやふけ 行きてがた〱ごろ〱のかしましき車の音もねたへ乳をよぶ幼な子のなきれもやみて 今はたゞ犬の遠ばへのみきこゆ折しも 電報〱と呼びきぬ何處ゝりの便にやと走せ行き取る手おそしと見るにこはそも如何に驚かざらんや 梅子今死すとありけめや現やとまどふや 持ちたるまゝ其處にまろび伏す又もゆめにやあらんと起きあがりともしびかきたてゝ繰り返し見れど 更に甲斐なしあゝ梅子の君よ 如何でやみぢを急ぎ給ひしぞあゝあぢきなしかの九月十五日こそ最後の別れなりしかいかで 我身を殘し給ひしぞとつぶやきつゝ何時の間にやらかたへの箱より うつしゑ取り出しありつ今ははや人心地もうせたる樣なり くもれる眼おしひらき見るに梅子花子とわらはのうつしゑなり 梅子の君こそは眞中にのび〱しうみどりの黑髮おとなしく殊に笑をふくみておらせ給へり かゝる人のいかでかと又もまよはれてさきの便りをよみかへせどかなしさまさるのみ實に實にうき世たよりなしあぢき無しとかこつ 折しもにわとりの時の聲おどろがすはやよあけにやと床にはい入りぬ されどいかでかねむるをにんまどろむゆめもたゞあはれのみ

田端

本郷　林よし

散步にゆく

動坂の隣の坂より田甫に出づ、此坂の兩側に、竹藪あり、梅林あり、松林あり、梅林には梅の花こちたく香ふ。

田甫には、麥青し、菜青し、彼方此方畑かへす人あり、芹摘む少女あり、嫁菜つむ少女あり、鄙歌うたふ。

川を越えて村に入る、道惡るきこと甚し。 木屋をのぞき見ながら、さる寺の前に出づ、石の二王たてり、白き赤き黄なる色々の紙貼り付けられたり。堂守の家より線香買うて賽する男あり。寺の門の外に石の碑あり、山城醍醐寺うつしと書す。庭樣からず。 二王堂の後より、隣の八幡社に入る。喬木の杉樅、ものふりて神々し。 けはしき石段を登る。 社の後に大なる公孫樹あり、老りたる椎の木あり。何を祭れるとも知られど、いづれは、子守の遊び場處なること、拜殿の樣にて知られぬ。 又寺の庭に入る。 緖餘齋堂といふ形おかしき小堂あり。 本堂には、弘法大師を安置す。巡禮の札の澤山張りつけられたること、ハタキを幾千もつられて下げたらんが如し。庭に老いたる椿あり、海棠色の小さき花をつく幹の圍りは一丈にも餘るべし。その幹、地上四尺許りの所より、裂けたらんが

如く、二本になり、その心は、朽ちて洞となれり。と見かう見するほどに、例の二王堂に賽するもの、男女老いたる、若き、幼き、甚だ多く、鰐口の音絶えず聞ゆ。あゝ身を忘れて欲に迷ふもの多き世なるかな。さるにても、二王や弘法大師などによりて、病氣平癒を得、又は福をうべしと思へる如き、野蠻思想、あゝ如何に強く人を惱ますことよと、いと哀れに思ひぬ

釣堀を見、神明町を過ぎ、天祖神社の前より歸る。

國元なる妹の許に

姉　すみれ

御地も此頃は雪なごりなうとけはて 嶺のさわらび麓のつく〴〵しなど折からの御遊山もあるべき頃と相成り候處如何に御暮しなされ候や 私事この地に出でしよりははやくも半年ばかり過ぎ候へ共 幸に少しのさわりもなう學びの道にいそしみ居候まゝ 御心安う思し召し下され度候朝な夕な學のみちのいやしげき中にもくれかゝる夕暮の空にはふる 鄕の事どもこひしう思ひ出でられ候 去年の夏かの前の流れにて魚すくひなどせし事比べん方なくおもしろくは候ひしがことしは おやめなされ度候御許一人にては危く候まゝ かの門の傍なる梅は今年もよくみのり候やかの實をとりし時御許の頭の上におちて 私の笑ひ候を母上樣にしかられ候ひしがわろかりきと今にいたり思ひ當り候 母上樣には御持病などもおこらせ給はずやかく 遠くはなれ居りては如何に孝養の心ふかくともまゝならず候まゝ御許にも其御ふくみにて今のうちにあくまで 御盡しなされたく且つは私の分も願上候猶暑中の休みには 是非歸鄕致し度存じ居候まゝよろずは其折きこゑかはすべく候 御兩親樣によろしくかへす〴〵も時候御厭ひなされ度候あら〳〵かしこ

今朝

湘南　葉山しげ子

黒木の垣根に梅咲く門、水桶片手に押あくれば、おゝ霞みたりな今朝は。

よべ此山の樹立ちに騒ぎしは南風とおぼしくて、麓の田畑のさても青くなりたる事よ。青きが中に田越川の支流は、しげき芦間を蛇の形にくねりて、流るゝともなき水の上に朝日照りそひて銀色の光りをなす。

長き松原打烟りて、梁越しに見ゆる海士が家根五つ六つ。

浪よする濱邊に、白き手拭、赤き袂を飜へすは貝拾ふ乙女か。松生ふる磯の上に菅の小笠の見ゆるは釣する男の子か。

漕ぎつれ急ぐ船影も、櫓の音も、次第〳〵に遠ざかりて、呀、いつしか霞の中に消えつ。群れ立つ鷗の羽音迄、遠けれど靜かなれば聞ゆなり。

水と空との境なる足柄箱根、杳々と紫だちて夢さめあへぬ風情、烟か。影か。まづ〳〵潮の吐きたる霧とや見なん。流石に富士の高嶺は、かすかながらも大そらにしろ〳〵と。

げに忘れたりとよ、山居の春の心地よきに思はずあさいして、日も稍高くなりたるを。いざゝらば沓の細道踏み下りて、いつもの如く山下水を汲まうよ

出征軍人の家庭

横濱　寺田光子

もう三月のお節句も過ぎたのに今朝は珍らしく雪ふり出し梅の花散るかとも思はれる春のあわ雪見る間にとけてしまふけれど この頃に比しては中々寒く 又火桶なつかしく思はれるのであるみよ子は今日も朝早くから起きてうがひなしつゝ雪のふるのを見て 何と思つたか急ぎ母のそばへ走りよつて「母様雪れ父様さぞお寒いでしようとこれも父君を思ひ起した 其時の母様の御心の中どんなであつたろう其内弟の武雄さんも「雪だ〳〵うれしい〳〵」と云ひながら起きてきて 三人共に膳に向つたいつも武雄さんの話しの面白いので母さんも 我を忘れて思はず笑ふのが常であるみよ子さんは父様のおるすを何となく 淋しく思ふやうではあるけれど又母様にはわざときつく見せるいぢらしさ、

やうやく食事もすみ母様は何やらかき給ふみよ子は走りよつて「母様父様に差上るのみよ子もよろしく申上げてれ」と母の顔さしのぞく武雄さんもう竹やと戰事して遊んで居る 母様は急ぎ認め終つて今きた新聞を見るや海軍大勝利と大きくかゝれてあつたので打喜ぶみよ子も 武雄も母様のおよびになるので走りきて 大勝利ときいて思はず海軍萬歲父様萬歲と二人は叫んだそばに居た竹やまで一所になつて叫んだ、

其中に親友の君子の誘ひにきたので 急ぎ荷物かゝへて笑みの中に母に禮をして やがて二人も事なげに雪の中を步み出した母様は暫し後を見つめて居たが寒い風が吹いたので障子の内へはいつた、

この小さき二人の少女達にて 如何に話し合ふであろう定めて父君の上を氣づかひながらも 我軍大勝利を耳にしてうれしく學校へ行くであろう

嗚呼彼等少女の父君今や何處にありて如何なる夢をや結ぶらん、

家庭日記

羽前　あや子

六時過ぎ起床、例日より寒さ強く妾より先に姉上の起き玉へるに妹の身として明日よりはと思ひなどして姉上と共に 朝飯の仕度などするうちに淸の起きたるにより衣裳を着せ顔なとを洗ひて居るうちに母上も 起き玉へば兄上諸共に飯臺に向ひて食事をなす、兄上は役所にと八時少し前に出て玉ひたれば 跡片付などして母上より云ひ付けられし用事を辨しに五町まで至りたればそのついでに今日は 八幡神社に參詣せばやと行きみれば山の麓のことゝて殘雪は木の間にきら〳〵 としてまはゆけなり、

常はもたれど今日は妾の誕生日なれば、心ばかりの手向して社をたちいで歸り途に貞子の君の病床を訪はゞやと思ひ立ち寄れば 貞子の君にはは今日は餘程氣分も 善き樣なればとて氣散じに新刊の女學世界なとを讀みて居られけるが妾が參りしを、いたくよろこび樣々と語り合ひ早く全快して鳥海山に遊びに行き度しなどゝ云ひければ 妾は養生專一にして早く全快の樣にと吳々も慰め十一時半頃歸りたり、

晝食後姉上と共に湯屋に至る長らく 休業せし事とて入浴の人も澤山にて所せまき樣なりき歸りて女學世界の水滸の話を讀み淸に話して 聞かせなどして居る中に兄上及び久保澤、駒林の兩君役所より歸り來玉ひて湯にゆくとて間もなく立ちいて玉ひしかば 其間に夕飯の仕度にと姉上

はたち玉ひければ妾も傍に手傳などして 臥る内に母上も縫物をやめて大鈴に炭などをつぎ居るうちに兄上も湯より歸り來玉ひければ 皆々心地よく夕飯の膳に向ひぬ、午后七時頃久保澤さん來る兄上と共に友人の許に出でかけ玉へり、昨夜は久保澤、駒林の兩君來玉ひ双六などして遊びしかども今宵は出で行き玉ひたれば 餘ら來玉はず母上は清と共に八時頃より伏し玉ひたれば姉上も妾も 九時頃にて裁縫をやめ新聞女學世界などを讀み兄上の歸り待ち居りしに間もなく歸り來玉へば 錠さして臥床に就く間もなく十時半、

家庭日記

静岡　大中あい子

五時半起床昨夜よりの雨いまだやまず 白鳥山内房村など霧の爲めに定かならず 昨日より寒し例によつて洒掃を終ゑ裁縫を始む八時ごろ雨ひどき中を(浦鹽の號外々々)と呼びもつて飛んで行くかゝる 田舎へ號外とは珍らしい如何なる事件にやととんで 出で呼べども雨の爲めに聞はず殘念ながら引返しあとにて聞けば都にて 昨日の號外なりといづれ田舎へ來るのはそんな物よと大笑なしぬ、今朝よりの雨で何の賣屋も來ず仕方なき故三時頃風呂敷をかゝへこみ我家を飛び出し裏へ出で 畔道をたどり小川のほとり黄色の毛せん引きたる如き 菜の花のさきみだれたる間はた芝生の上など急まかはずかけ廻り漸くの事にて 二つかみ程の土筆坊を得歸り袴をとり湯煮して胡麻あへになし 夕食の膳に上された骨折の御馳走よと笑ひつゝ一同舌打ちならしぬ、

夜は鮒枝様への返事を書き日記をしるしてねむりしに 十一時にてあり

き當日のこん立

朝　味噌汁　黄豆

ひる　さけ　香の物

夕　湯豆腐　土筆の胡麻あへ　菜のしたし

出征軍人の家庭

本所　かつみ

私の夫は陸軍士官で近日出征の途につくべき一人で御座います結婚の式を擧げたのはつい昨年の暮で時節柄呑氣らしいとは思ひましたが 昨夏以來許婚の間柄でありましたので 殊更取急いだ譯であります當時夫は某學校の生徒で勉學中の身故僅一ヶ月の新家庭別段の樂みもなく 日一日馴れぬ家事に追はれて漸く少しは家内の整理も出來たかと 思ふ間もなく今回の事變が起つて俄に借家を形付て夫の實家に 同居する事に成ました、

二月の幾日でしたか「今日あたりは學校も閉鎖されるだらう」と噂して出勤されたが間もなく靴音烈しく立歸られ玄關に衝立つた儘「愈々閉校になつた折返し行かねば成らぬ細いので若干金を呉れ」と云はれて立ながら新聞を見て居られる私は嫁て斯うあらうとは思ながら 今更の様に心臟の鼓動は烈しく成つて 來る生憎小さいお錢は足ない彼是取集めて居ると何をして居るのかッ」と大喝一聲叱られました慌てゝ勘定もせずに「是丈です」と差出すと無言の儘ポッケットへつかみ 込んでさッく と出て行かれたので 暫し茫然として見送つて居りますと召使の小女が心配そうに勝手口に立つてまじくして居るのですそから 私は直に要軍司や机の中の細い物の始末をはじめ 翌日は母上も來られて種々取形

付衛物は大概送りかへし 小女も先へ遣はして空屋同然の處に二月間籠居して辭令の參るのを待つて居りました 道具が足らないので大家のお婆さんに汁を煮て貰う丼を持つて漬物屋へ行く小なナイフで 魚肉を切る等それは〳〵申樣のない不便を致しました其間夫からは將來に 關する覺悟の事など種々誡められ私も 自分の意見を述べて立派に誓言したので御座います其翌日辭令を受け全く引上げて參りましたが 洋傘片手に信玄袋を下げた處など 遠足歸りの樣な有樣で人目からは樂しそうに見ゑたでせうが心はそれ處ではありませなんだ、

爾來數日間夫は隊の方へ詰切りで 書面を以て「あれを作れ是を整へ置けよ」との命が有りますので家中毎日大騷ぎで殊に私は種々の袋類を縫ふたり靴下を編んだり眞綿入のシャツを作つたりして 寸暇もありませんでしたすると或日の夕方でした大變勇んで歸宅されて「愈々近い内に出征する事に成つたから」との仰同じ出るものなら後まはりになるよりはと私共迄嬉しい樣に思ひましたが座に女心の何となく 物淋しい樣な感じがして顔を見たり 物を言ふたりすると餘計胸が迫ります故可成避けがちにして居りますと「どこか不快なのか」 と氣づかはしげに問ひ掛けられましたので自分ながらつく〴〵恥かしいと思ひ 此樣に心弱い事で成るものかと 自心で自心を叱つて思ひなほしたのであります其夜は家内一同集まつて茶話會を開き夫が持參された 地圖について種々說明されるのを母上迄眼鏡越にて 熱心にきかれ彼是雜談に夜を更しましたが一つとして戰爭の話でないものはありませなんだ、

「停車場の見送りなんぞはいらないよ泣かれでもすると大變だ」と高笑一番して門出されるのを「その樣な女共では御座いませぬ」といふて皆皆で送り出したのは其翌朝の事でありました、

近日愈々出發さるゝにつき 母上は老いの身の御信心も一層にて雨風の烈しい日にもかゝはらず 不動尊の御守札を頂戴に成田へ參詣に出かけられました曉風肌をつく玄關外に燈をもつておくり參らせた 私は覺ゑず其後影を拜して感涙に咽んだので御座います、

花ふゞき

松江　岸崎滿子

「春野の小草ふみわけて、東に西に北南——」朗かなる聲は野べの美はしき花の下より聞ゆつ。愛らしき雛兒輪のわらべ一人、緑に萌ゆし芝生の上に、散りたる花をば針つけたる糸に刺しつゝあり。

歌の聲はたとやみて疲れたりと計り 小草が上にそと坐して、腰につなぎし夥多の花の、驚眼一百つなぎしにさも似たるをば 數ともなく取り出でゝ、數へつ、眺めつ、 さも樂しげにほゝゑみつ。

いづこよりか舞ひ來し黃なる蝶の、可愛き手許かすめて彼方に舞ひ行けば愛らしの眼はいつしか其あとを延ひてもつれ行く蝶の影見送りつ。

風一陣、裾に吹きて、淡紅の雲は空にまひ雨と降りて、坐したる少女の右も左も前もうしろも、暫しが程に花の褥と散りしきつ。餘りに多き其獲物に、いづれより拾はんかとあはてまどひて小さき其身を右に走り左に拾ひつ、悦び滿ちたる聲張り上げて「春野の小草蹈分けて——」。

丈の黑髮風になぶらせて、御納戸矢絣の袖長う海老茶の袴華やかに、すらりと高き御ものごし、 花恥かしき麗はしの御すがた。

遲々たる春の光のどかに、そよ吹く風折々強う裾に吹けば 清き花びら散りて亂れて、袖に裳に髮にリボンに、とまりたるさま、

道行く人の仰ぎて過ぐる門の山櫻、病みませる友を慰め奉らんものと花鋏もちて花の下に立ちつ。

彼の枝よけむ、此花如何にと打仰ぎつゝ漸う見出したる 枝振をかしき美しき一枝、あれよからむと歩み寄らんとせし時!

塀に怪しき音のして道は如何に顯れ出でたる大なる双手に、目ざせる枝はメリ〳〵と情なくも折り去られつ。あなと計り外をうかゞへば花

空人は雲を霞と逃げ去りつ。一しきり舞ひ立つ花吹雪、あとはたゞ落花狼藉たるのみ。

「いざや父上、さらば母上、まさきくおはせ。戰塲に花々しき功たてゝ、身に餘る譽負ひて凱旋すべき日を待たせ給ひかしさらば」御軍に召さるゝと勇みに勇む今日の門出に流石に老ひたる父母に心殘りて人知れず涙のみ込みつ。二三歩行きて又ふりかへりつ。無量の感慨胸に迫りて打仰ぐ門べの櫻、散りて亂れて雄々しき征衣の肩に……落花亂れて地に花は櫻、潔く散れとや。未だ明けやらぬ曉の氣消う、ほの白う——

赤十字

伊勢　花涯女史

昔ては「露西亞」「土耳其」と
干戈交へし修羅の巷
世に名も高き「クリミヤ」の
慘劇、誰か忘る可き。

其慘劇に加はりし
「英」の精兵、五萬人
黑海の岸、荒原の
疫鬼、諸障を蒙ひては。

病みて斃れし、怨魂の
靈なほ迷ふ、草まくら
救護を叫ぶ聲かれて
三軍の士氣沮喪し時。

神の權化の「フロレンス
ナイチンゲール」は妙齡の
さなり、か弱き身を以て
病覺の陣に臨みつゝ。

慈悲の涙と血と精を
注ぐ、天幕の深情
三十四人の女丈夫が
看護の力、著るく。

赤誠茲に酬を得て
險惡の勝は毀たれつ
數千の戰士、病傷の
不快の色の消え行けば。

再び把りし銃劍の
火花は匂ふ「英」の軍
戰局こゝに收まりて
孃の名更に高まりつ。

慈善、博愛、勇侠の
熱情の色は美はしく

榮譽を貫す感激の
昌天の聲、士女の祭
世界に響く功績は
赤十字旗に仰がれて。

戰史の上に異彩ある
「頁」をそへたり雄々しくも

吾が子の出征を送る

深川　青木ひとし

起てよ吾が兒よ大刀はきて
行けよ吾が兒よ銃とりて
怨つきせぬ殘虜の
蠻族屠りつくせよや。

吾は聞かけりニヱルタの
たみな征師を勵ますを
吾が兒よ知れよ死の際を
死すべき時は今なるぞ。

瓦となりて殘るより
玉となりてぞ碎けよや

満洲の野に月冴えて
寒風肌をさすの時
光芒寒き大刀ふりて
仇なす敵を打ちやぶれ。

想へ十年その昔
吾が大丈夫が血にそめし
遼東奪ひしその怨
報ふは今ぞ今なるぞ。

君に捧げしなが命
すつべき時は今なるぞ。

小說

夜の川舟

田山花袋

一

利根の流は墨のごとく、上流下流それと川筋もわかぬばかりの眞の闇。星屑が銀のやうに冬の寒空に閃めいて、それがをり〳〵川の波頭に微かに反射しなかつたならば、對岸咫尺の處に長い黒い丘陵が塀のやうにくつきりと闇を限取つて居らなかつたならば――否夜泊の船の苫から怨むやうな寒い覺束ない欵乃が聞えなかつたならば、人は其處に坂東太郎が溶々と地を劃して流れて居るとは知らぬであらう。

この黒暗々の利根の流、それが唯一ところ、美しく闇に輝いて、岸に燃え上がる焼火の周圍、其處には二人の船頭が鐵のやうな蒼黒い顔をして、焼火の消え懸るのを絶えず憂ふるやうに、傍の木片やら落葉やらを頻に其上に加へて居る。ぱツと燃えあがる度毎、闇を限取る領分は俄かに廣く、傍なる椎の大樹、渡船小屋らしい低い小屋、枯芦のがさ〳〵と靡く川岸、其處には一艘の舟が全く苫に包まれてさびしく繋がれて居るのが微かながら眼に入る。

『何うしたんだなア』

と胴震ひを爲ながら一人の船頭は言つた。

『本當に。こんな寒い夜にかう待たせられては遣り切れアしねえ。もう、かれこれ一時間以上になる』

『もつと上になるア』と前のは受けて、『それに景氣の

好い酒樽でも積むんなら好いが、……ちや恐れるから
なア」
と言つたが、其言葉は解らなかつた。
「本當よ、御陀佛では本當に何うも難有くはねえ」
少時言葉は絶えた。
「それにしても、死んだのは、誰だえ？　此處の家にア、そう急に死にさうな奴も居ねえかつたが……」
「お前、まだ知らねえのか、此處の神さアの妹だアな。一月程前から、布川から此處へ保養に來て居つたゞが、急に惡るくなつて、家に歸る隙もなく、死ねて了つただア。それで、葬禮を爲るにや、家で無けりや駄目だつて言んで、今夜舟で布川までその死骸を下さうと言ふんだがナ」
「それは知つてるがナ」と一人の船頭は少し考へて、
「それにしても病氣は何だ？」
「肺病よ」
「年は若いのか」
「若いどころッて、お前、まだ色も戀も知りやしねえだ、何でも十八だかで、己ア、一寸見た事アあるが、中々器量よしだつたアな。今二三年も經てばなア、面白い事にも邂逅はすのに……惜しい事だ」
「それア、可愛想だ、實際、人間に生れて、その位で死ぬ程可愛想なことは無えだからなア」
燒火が消えさうに爲つたので、一人の船頭は豫じめ拾ひ集めて置いたらしい枯枝を一束ほど傍から取つて、そしてそれを火の上に加へた。
火は熾んに燃え出した。
「肺病ッていふ病氣は色病だつて聞いたが、そんな幼い頃にも起るもんかなア」
「起ると見えるだア」
と一人は答へたが、急に語調を改めて、「それにしても餘り遲い。お前、一つ行つて見て、催促して來ねえ」
「よし來た」
と一人は起つて闇の中に消えた。

二

其の渡頭、其の椎の樹、それを向ふに廻ると、闇の

中に長く横れる丘があつて、其の半腹の樹の繁茂に、ちらりと一つ燈火の光が見える。

其の微かな燈光、それは即ち美しい少女の永久の眠を護れるもので、其の一室の光景は實に想像するに難からぬのである。今こそはその遺骸を五六里下流の故郷に送り歸さうとして居るので、其準備やら何やら彼やらで、家の人の影は彼方に動き此方に動きつゝ、頗る忙しげに見えるけれども、一時間前までは、一室は丸で水を打つたやうに森閑として、逆屛風を取卷かせた奥には、線香のかをり悲しく薫じ、白絹の掻卷に蔽ひ包まれた遺骸は世の中のいかな汚點からも全くのがれたと言はねばかり、その清さ美しさは眞に此世のものとは思はれなかつた。まして、白い絹の手巾に隱されたる其顏！ 美しい目を半ば開いて、痩せたる頰のあたりに名殘なく湛へられたるやさしい微笑。これを見て、姉が、

「お雪や、」

と呼んだのは無理ではない。

けれど少女の美しい眼は旣にいかなる活動をも爲さぬのである。笑ふ度に限りなきの艶色を湛へたその頰も、物に憧がるゝやうに絶えず動いた其眉も、更にいかなる此世の面影をもとゞめぬのである。

最後の時、

「お雪や、しつかりおしよ」

と姉の呼んだのを耳に留めて、莞爾笑つたその笑顏。その微かなる面影を此世に殘して、かの女の靈は遠くかの蒼穹に上つて了つた。

少女は十七歲、さりとは餘りに若いではないか。いかに美しい戀の女神の默止し難き仰せとは申せ、いかに美しい女神のその愛せらるゝ侍女に召させられたとは言へ、この世の紅、この世の紫、この世の戀、そこにも捨て難い閃きがあるではないか。

少女の短かい生涯、もし世にまことに不幸福といふものがあるならば、此の少女程不幸福な星の下に生れて來たものは無いであらう。少女は美しく生れた、けれどそれが旣に少女の身に取つて此上ない不幸福であ

つた。少女は幼なくして母を喪つた。母を喪つた娘の子のいかに不幸福であるかは今更此處に言はずとものこと。優しい兄、なつかしい姉、一家平和の庭に生ひ立つたからとて、少女の世の娘に似ぬ胸は何うして寂しさと悲しさとを味はずに居られやうか。

少女の清い姿、こは何故に他の娘に比して殊更に卓れて美しく清いのか。少女の氣高い眉、こは何故に常に限りなきの愁の思を宿したのか。少女の美しい眼、こは何故に常に世に似ざるかゝやきとやさしさとを顯はして居つたか。

皆なこの少女を不幸福ならしむる爲め。

少女の肺を得たといふ噂が、町中に聞え渡つた時、町の多くの若い胸は何んなに烈しい鼓動を感じたであらうか。誰も皆口々にこれを惜んで、何うかして、再び健全にと願はぬものは一人も無かつた。けれどこの惜しまるゝのが愈々この少女の不幸福であるから悲しい。

三

田舎であるから、駕籠も無く、擔架も無く、戸板に其まゝの少女の遺骸。庭口より洋燈、カンテラに送り出さるゝを、擔夫は、よし來た！と腕に受けて、静かに丘陵の間の路を一歩一歩下つて行く。

冬の寒空は無數の星の光を閃かして、あらはに夜の冷やかなる空氣に觸れたる少女の白い掻巻は、闇の樹間にもそれと著く。これよりのぼらんとする新しき魂を天は喜んで迎へるかのやう。跡から跟いて忙しげに下りる三人四人。其足音は早くも凍てた道に高く響いて、誰か知らぬが、「おー、寒い」と覺えず口走つた者がある。

闇夜であるので、更に其の髣髴を認めることが出來ぬが、この丘の上からは、利根の大河の東西に横流するさまが明かに見えて、波頭の小屋、美しく黄葉せる鴨脚、枯芦の間には半孕んだ帆が斜に欹つて、彼方の絶壁に偏つて流るゝ水の淵の碧さ！ 實に此上もない好景であるのである。一月ほど前、この附近の人々は此の丘の上に蒼い顔をした美しい少女の常に逍遥して

居るのを見ぬものは無かつたので、暖かい晩秋の午後には、病める少女は、この丘の上に立つて、大河の東に流るゝのにじつと見入るのが常であつた。其姿、――薄紫の矢絣の衣服に黄八丈の長い羽織を着て、赤い鼻緒の雪踏を穿き、夢見るものゝごとく恍惚と深い物思に沈んで居た姿は、いかに詩に耽る若者の心を惹いたか知れぬ。

その丘を今は冷き遺骸と爲つて、しかもこの寒い夜に……

丘を下ると、渡頭。

焚火は既に消えんとして、其の薄蒼い烟の彼方には、提灯の火が二つ三つ忙しく動いて、黒い人の影のそりをり其間を透して行くのが見える。岸に近く、船の繋いであるあたりに、先その遺骸を載せたる戸板は下されたるらしく、提燈はやがてその周圍にと集つて行つたが、

『何方から入れる』

『かうするが好い』

『いや、右から遣るが好い』

などゝいふ聲が混雜と聞える。

と思ふと、不意に女の聲で、

『とう〳〵御亡くなんなすつたッて、……實に何とも申上げやうがありませんので、それもね、一月とか二月とかどつと御寢つて居らしてならまだ斷念やうもあるのですけれども、四五日前までは、よくまだ此處に御出なさつたがね……』

近所の知合の主婦らしい。

『えゝ、もう、可愛想で、幾ら泣いても足りないので御座いますよ』と答へたのは確かに姉の聲である。すぐ跡を續いて、『それに、とても駄目な病氣とは申しましても、まだ、年が若う御座いますから何うかひよつとかして治るやうなことが無いでもありますまいと存じまして、布川の本宅は人出入が多う御座いますから、自然無理も出やうと思ひまして、それで態々此方へ連れて參つて、緩くり養生させやうと存じましたのに、……遂々逝かれて了ひまして本當に殘念で御座いま

す」

と詫尾は涙に曇るのであつた。

『本當に、まだお若いのに……さぞ御殘念で……御座いましたらう」

同じく涙に曇る聲。

船頭も手傳ひ、附添の人々も手傳つて、やがて漸く遺骸を船の苫の中に擔ひ入れたらしい樣子。寒いから、火鉢も一個では足らぬ、酒も二三本は熱くして置かるければ好けぬなどとの注意もあつて、兄、姉、附添の人々も段々にその船の苫の中に入ると、送つて來た人々もそれではと別れを告げて、待ちに待つた船頭は徐かに船を出すの準備にと取懸つた。

船の苫の中がまた哀れである。遺骸は西向に、依然として白絹の手巾で其顏を蔽はれて居るが、姉は女の身の胸もしどろに、それと相對して座を占めつゝ、頻りに線香の火の絶ゆるのを氣遣ふといふやうに、絶えず前に据えられてある香爐を氣にして居る。少し離れて、陶器の小さい火鉢が二箇、それには活々と火が起されてあつて、兄と、これも親類のものらしい五十歳ばかりの二重外套に包まつた田舍紳士、其の向ふには伯母らしい四十二三の主婦と卅七八歳の番頭らしい縞の羽織の男が座つて居る。

「寒い、まア、一つ召上りませんか」と兄は傍の湯沸から燗徳利を拔いて、盃を田舍紳士に差し、「こんな寒い夜に、河風に五里も吹かれるんですから、大に元氣を附けて置かんと遣り切れませんからナ」

と言ふ。

「いや……」

と言つたが、辭みもせずに其盃を受けて、波々と注ぐのを引懸けて、今一つ注がせて、そしてそれを下に置いた。

此時、舟はするりと岸から滑つて、たぷたぷと湛へた坂東太郎の流の上にゆるやかに浮び出す。

「それぢや遣りやすぞ！」

と船頭の高い聲。

兄は苫から顏を出して、

「餘程時間が懸るかな」
「いや、何アに、下りでがアすで、譯はねえだよ」
「三時間も懸るかな」
「さうだナ、三時間は懸るべいかナア、源公。」
「三時間は懸るだア」
と源と呼ばれたる船頭は答へた。
水馴棹の水を切る音深く、舟底に當る水の流れだぶだぶと、少女の遺骸を載せた舟は、渡頭を離れて次第に下流へと下るので。
顧ると、見送りの提燈の影既に絶え、燒捨てし火の煙も闇の中に微かに、黒い森、丘、林、それも次第に遠く遠く、寂寥は既に全く其の渡頭を襲つた。

四

それより利根川は四里下流、杉江村と大泉村との間に三角の渡といふのがあつて、川は丁度其處で右から左へと大迂回を爲し、其の北の一角に蠶養川といふ流を容れて、恰も不等邊三角の形に流れ下つて居るのであるが、其の渡頭の左岸の一角に高く築き起されたる二階造の家屋があつて、これは地方でも有名な運漕問屋。舟がゝりの小埠頭には丸新と記されたる瓦斯燈が點せられて、傍には常に一二艘の運送船が舳をつらねて夜泊をして居るのが例。
其の二階の川に面した南の一室、其處には何時も燈火などの點けられた例は無いのであるが、今宵は既に九時を過ぎて、河風が顏を向けられぬ程烈しく寒いのにも拘らず、雨戸は全く開け放されて、十分間毎に、其欄干に顯はるゝ人の影。
「また、見えないかねえ、新平や」
といふ若い女の聲。
「へい」と新平と呼ばれたるは、此家の番頭らしく、「先刻から一生懸命に見て居るのですけれど、何うもそれらしいものが見えませんで」
「もう餘程遲いだらう？」
「え、九時廻りました」
「そんな遲い筈が無いのだかねえ」
「何か若奥樣が思ひ違ひなすつて入らしッたんぢゃ無

いのですか」

『いゝえ、そんな事が有るものかねえ、先刻忠臧が來て、お雪さんは今日の三時にお亡りになつて、今夜七時までに舟で布川の本宅へ死體を送る筈になつて居るとあれ程分明言つたのだからねえ」

『それぢや追付參りませう。』と新平は言つたが

『それに、かういふ事は得て遲れ勝なものですから」

『それも左樣ねえ……」



烈しい河風が眞面に吹附けたので、

『おゝ、寒い』

とこの家の若き妻は其儘首を引込ませて了つたが、悲しさうに、

『お雪さんの死體をこんな寒い晩、此處で待たうとは夢にも知らなかつた。本當に、お雪さんは可愛想……」

『お傷はしい事ですねえ」

と番頭も愁然として言つた。

『妾よりも二つ年弱だから、まだ漸つと十七、

……妾ア、多い女友の中でも一番仲好でね、それに家も近かつた者だから、幼稚い頭から、よく一緒に遊んで何んなに力に爲て居たか知れないのに、……」

否、この若き妻のこの家に嫁げる時は、雪子は猶顏の色紅に、さる病を獲んとは夢にも知らず、何彼とやさしく祝ひて與れたるに、――否、お雪さんがあの人のお嫁になる時には、それこそお祝ひ申しますよとあれ程樂しく戲れ合つたのに。まだ、一年と經ぬ中に……。



若き妻は思ふに堪へざるやうに、其儘顏を兩手に掩つた。

「それでは、少し先に行つて聞いて參りませう」

「何卒……」

番頭は去つた。

若き妻は親しき稚な友達の悲しき末期を思ふに堪へず。其儘溢れ出づる涙を兩袖に蔽つて、久しく頭を擡げやうとも爲なかつたが、不圖眼に見えるのは、大學の制帽を冠つた、色の白い、眼

に無限の表情のあるやさしい二十四五の若者の姿―と、續いて、四五年以來はさま〴〵なる追懷がさながら走馬燈のやうに急に回轉し始めて、其身が垣根に凭り懸つて編物を爲て居ると、其前を夏休暇で歸つて居る其若者が通て行く。お雪さんにあの人が戀して居るといふことを聞いた時は、此身は何んなに悲しかつたであらう、何んなに口惜しく思つたであらう。昔からの交情などを捨て丶了つてまでも自分はこの戀を滿足させなければならぬとまで思つた。けれど、あの晩あのお雪さんが、そんなことをとこの私が思つて居やうとは少しも知らず、さも喜ばしさうに其の物語を打明けた時、此身は心からお雪さんいとしく、いつそこの戀思ひ捨て丶も、この二人を一緒に……と忽ち潔よく決心して、それからは此身は犧牲、戀も何も無い運漕問屋の妻となつても、せめてはお雪さんだけはあの人に……と思つたのであるのに……

何故かの人はお雪さんを捨てたであらうか。あれ程互に思つて居りながら、いざといふ時に及んで、何うしてあのやうな冷なる行爲を敢てしたのか。男の心は薄情とは聞いて居つたが、あの人に限つて、そんなことを爲るやうな筈は無い。此身は昔からよくその性質を知つて居て、そんな事を爲るやうな人とは何うしても思はれぬ。何かそこに譯があるに相違ない。

私はそれと聞いて、非常に驚いて、繋げるものならばとあの人に手紙を遣つたが、其の答の言葉。それには重々其身の惡いといふ事を書いて、これも無き緣と御許し下され度く……と書いてあつた。

果して無い緣！

否、お雪さんはこの絕望の爲めに肺病に爲つて死んで了つた。

思へば思ふ程、悲しい追懷のみ繰返さる丶ので、いつそ思ふまいと心を決して、それにしても、來るものならもう來さうなものと、障子を開けると、戶外は墨を流したやうな闇。そり〴〵星に閃めく川筋が微かに見えて、何處の岸ともなく、怨むがごとく長い佗しい欸乃の音！

不意に階梯を上る足音。
「若奥樣、とう〳〵參りました」
と番頭は叫んだ。
「來たとえ」
と思はず二三歩其方に歩み寄つて、「何處に？」
「今、私が向ふ岸に渡つて聞いて來ましたが、……そら」と上流一町程距てた闇に微かに閃めく一穗の燈光を指し、「あれが左樣で御坐います相で、この下を通る時には必ず呼ぶやうに、皆なに賴んで參りました」
その燈光、その微かな燈光が雪子の遺骸を載せた舟と思ふと、更に胸が烈しく波立ち始めて、若き妻はいかにしてもかうしてじつとしては居られぬのであつた。
見て居ると、燈光は愈々近く、愈々明かに、果てはその黑い舟體も覺束ないながら見え始めて、此處より大凡三四十間の距離になつたと思ふ頃、川の瀨が二三日來の雨に變つたのか、燈光は急に左に曲つて、今まで右岸に沿うて來たものが直ちに左岸に移らうとするのである。
「お――い」
と此方の岸から呼ぶと、
舟は急に停つた。
「その舟は山田さん……處の……舟かえ……」
呼ぶ聲は長く長く暗い大河の上に漂ひ渡て聞える。
「お――い」
「お――い、其舟が布川の山田さんの舟なら、一寸停めて呉れろ――」
やがて其聲は全く通じたと覺しく、啻に舟の進行を停めて、此方の爲樣を待つばかりではなく、一箇の提燈は直ちにその蓬の上に掲げられたのである。
此方より闇を衝いて出る一艘の舟、櫓は番頭の手に操られて、其儘溶々たる夜の大河を眞直にその燈光目蒐けて進んで行つたが、川幅は廣いとは言へ、さして遠い距離でも無いので、瞬く間に其の舟の傍へと近づいたので。
「お雪さんの姉樣……」

と震へた聲で、此方から若い妻が聲を懸けると、
『おや、お粂さん！』
と飛んで出たのは姉である。
『今夜、お歸りになると聞きましたから。一目、お雪さんに……お目に……懸り度い……と存じましてね……』
涙に礙げられて滿足には言へぬのである。
『よく、まア、お粂さん！』
此時若い妻は旣に彼方の舟に乘り移つて、二人の女性は其の無限の悲哀を語らうべく互に相抱いたのであつた。
『お粂さん、遂々逝かれて了ひました』
『私は……何うしたら……好いかと』
『本當に殘念で……』
『こんなに早くとは……少しも思ひませんでしたから』
潸然たる涙の言葉。
少時してから、
『これが……お雪さんなの……』
と若い妻は其傍に近寄つた。
其の白い搔卷に包まれた瘦せた遺骸を一目見ると、幼稚き昔より今までの互の親しきが思出されて、我ながら泣かじとしても、自づから溢れ出づる涙に、殆ど眼も曇るばかり。
手巾を取ると、
其の笑顏！
お粂はこれがその雪子の最後かと思ふと、何うにも彼うにも堪らなくなつて、突如傍に打伏して了つた。
お粂が身を起したのは、それから久しい後で、元の席に戻つた其眼は全く涙に腫れ上つて居た。
『嘸、佛が喜んだでせう』
と少時してから姉は言つた。
若き妻は漸く押へた悲哀をこの一語に再び催されて更に溢れ出づる涙を禁め兼ねつゝ、左の袖に顏を掩つた。
『お粂さんとは交情が好くつて、死ぬ前にも何んなに

貴嬢のことを申して居つたか知れません。何うか、今一度治つで、お条さんに逢ひ度い／＼と申しましてね」

『もう、もう仰つて下さいますナ』

『本當に、私は何んなに泣いたか知れませんのよ。温順い娘で、兄や姉にも世話を焼かしたことは一度も無く……それも母でも居つたら、少しは我儘も申したでせうに……と思ふと、その温順かつたのが一層不便で……』

『本當に……』

と辛うじて合せた詞は涙に礙へられた嗚咽の聲であつた。

いつまで惜んでもその悲哀は盡きるのでもなく、且この寒い夜に舟を河の唯中にとゞめさせて置くも心無い業と、お条はやがて暇を告げて、其儘自己の舟へと移つた。

櫓聲伊軋として、次第に下つて遠かつて行く其舟、其燈光、それもいつか小さく小さく、若き妻が陸に舟を捨てた頃には、もう螢火のやうに遙かに布川の町近くに下つて居た。

* * * * *

若き妻は其夜遲くまで眠られなかつた。思ふまじとしても、其事胸に浮び、考ふまじと決しても其姿眼に浮び、あはれなる女友の短い生涯は、實に言ひ知らずその小さい胸を騷がせて、殆ど今迄に覺えざる程の悲哀の情の烈しく其身に迫るのを感じた。

お条は夜更けて一人起きた。そして、小さい洋燈の光をたよりに、硯箱、卷紙を取出して、頻りに手簡を書き始めた。――かの女はその寒い夜の川舟の光景を都の若者に報ずべく思ひ立つたのである。（完）

露西亞小話

櫻塘山人

其七

丁度エリシヤが百姓の小舍を出て、三里許來た時に、東雲の空から日の影が映した。とある木の根へ腰を下

して、鞄の口を開け、錢勘定を始めたが、調べて見ると、もう二ナルーゾルと小錢が少しあるばかり、甚だ心細いので、熟々考へて見ると、僅かこれだけの旅費ではとても海を渡つてジエルサレムへ行く事は出來ない。さうかと云つて人の情けを受けるやうでは、反つて罪を重ねる道理だ。連れのエフヰムは餘分の旅費をもつて居るに相違ないが、それを的にするのも男らしくない、さうだ家へ歸るまでの事だ。とエリシヤは心に決めて、後へ引返したが、百姓の村の人に見えないやうに急いで通り越して、家の方へ歸つて來た、先きへ行けば或はエフヰムに遇はれたかも知れないのだが、もうかう決心したからには、一日に老人の足で五里から歩行いて、やつと自分の家へ着いた頃には、收獲も濟んで居た。

エリシヤが壯健で歸つて來たので、家の者は固より親類も大悅びで、旅は什麼だつたの、何故連のエフヰムとはぐれたの、と懊惱く聞くが、エリシヤは少しも詳しい事は話さない．只『神樣が自分に家へ歸れと云つたから、歸つて來たのだ！』と澄して居る。

旅費の殘餘は悉皆女房にやつて、家の事を聞いて見ると、其處は手際なもので、何一つ缺げた所がなく、家中樂しく暮して居た。するとエフヰムの家では、エリシヤが歸つて來たと云ふ事を聞いたから、息子の一人は早速遣つて來て『エフヰムは什麼したらう！』と頻りと聞く、エリシヤは平氣なもので。

『エフヰムは壯健だよ、三日ばかり一所に歩行いたつけが、俺よりも足が達者だつた。俺は途中で錢が入る事が出來たものだから、とう〳〵歸つて來てしまつたが、エフヰムさんは乾度ジエルサレムへ行つたに違ひないよ！』

エフヰムの息子は更なり、これを聞いた者は皆呆れてしまつた『彼の悧口な爺さんがジエルサレムへ行くと云つて、途中で錢を費つてしまつて歸つて來ると云ふのは什麼したのだらうと！』近所では噂さをして居るが、エリシヤはそんな事に氣をとめない。冬の仕度に息子と一所に森へ行つて木も伐れば、女房を手傳つて米の粉を拵へる。隣りへは金を借りた禮に密蜂の十束を遣り、新らしいのが巢についたと云つて、十束の代りに十七束に殖してやつて、借金の肩も脫けたので、さアこれからが冬籠り、雛那の皮の靴も編めば、蜂小舍を拵へる事に夢中になつた！

其八

さて富豪の隠居エフ井ムはエリシヤが水を飲みに行くと云つて引返したまゝ、何日まで俟つても來ないから、其晩は心配しながら宿屋へ泊つて、翌る朝起きたら來るだらうと思ふと、未だ來ない、其夕方になつても影を見せぬ。『エリシヤはもう俺よりも先きへ行つたのか知らん。それとも何かエリシヤに恨を含んで居る者があつて、捕へられたのではあるまいか！』と延上り〳〵後を見て歩行いて居るが什麽してもやつて來ない。行く先々で『禿頭の爺さんを見懸けはしないか？』と聞いて見るが、唯一人見懸けたと云ふ者がない。『さうだ！　オデッサで邂逅はなければ、船の甲板で遇ふに違ひない！』と信じ切つて道を急いだが、こゝで一人の道連が出來た。

此道連と云ふのは黄金楊の衣服を着た、長い毛の巡禮で、今迄アソス山の寺にお籠りをして居たのだが、これからジエルサレムの靈場へ參詣しやうと云ふので、宿屋へも一所に泊れば、身の上譚もする。洵に此上もない道連が出來たのである。

三日許りして二個はヲデッサに着いた。こゝには大勢の巡禮が群集して居るので、遇ふ人毎にエリシヤの行衞を聞いたが、少しも解らない。

そこでエフ井ムは往復の切符を買ひ、船中の食料に麵麭と青魚とを買入れた。巡禮の中には『なアにジエルサレムへ行くに船賃を拂ふやつがあるものか、貴郎お廢しなさりアいゝに』と云ふ者もあつたが、エフ井ムは耳に入れない『假令巡禮と云つても只船へ乘れるものではない！』船は出帆した。で、巡禮は皆甲板へ乘込んだ。錨は卷かれ、船足早く港を出たが、其日は眞個に好天氣で、巡禮は皆大喜び、歌を唄ふ者もあれば、祈禱を上げるものもあつた！

寸善尺魔とは好く云つたもので、其夕方から風が吹き出した上へ雨さへ混つたから、浪は上へ下へと煽る。乘組の人はもう氣を失ひかけて、殊に婦人と來ると、船に弱い所へこんな暴風を食つたのであるから、泣くやら喚くやら、其騷動は一方でない。船員はもう何處か避難所を見つけやうと、一心に四方を見廻はして居るのである。

エフ井ムもさアかうなつては人心地はない。第二甲板の隅に蹲踞んで、靜としたまゝ徹夜座り通して翌る朝まで我慢した。巡禮の中で誰一人話をするものもなく、各々後生大切に自分の鞄を抱へたまゝ、横になるもの

すらなかつたが、かくする事三日、天氣も快くなつたので、船は眞直にコンスタンチノープルに着いた。こゝで巡禮の中の半分は上陸した。これは皆セントソフヰアの聖堂へ參詣する爲めで、今は土耳古の領地になつて居る。そこへ行くのであるが、エフヰムは矢張甲板の上に座り込んで麵麭を噛つて居る。

スミルナで一寸碇泊して、アレキサンダーでも一寸錨を下した船は、とう〳〵ジャフワへ着いた。こゝで乘組の巡禮は悉皆上陸する事になつたのであるが、船着きの惡い港であるから、上陸するには是非高い船の甲板から下に繋いである端舟へ飛下りなければならないので、さアまた一騷動が始つた。惡くすれば水の中へ落ちなければならないのだから、それも其筈ではあるが、一人二人海へ落ちたばかりで他は大抵無難に端舟へ飛乘る事が出來た。

これからは徒步で目的のジェルサレムへ向はなければならぬので、三日路を漸く其處へ着いた。靈場へ行くと、男は婦人と別になつて輪になつて座りながら、脚袢を解く。すると一人の坊さんが出て來て一々巡禮の足を手拭で洗つて、順繰に口吻して行くのであるが、エフヰムにも全じやうな眞似をした。巡禮はまたこれが濟むと祈禱を上げる、蠟燭を神に捧げ、親類一同の幸福を祈つたが、食事をする時になつて、神の血と云ふ葡萄酒が御馳走に出た。

翌る日は埃及のマリーが懺悔したと云ふ洞穴を見物して、其處へも蠟燭と祈禱とを捧げ、アブラハム寺へも行けば、エホヴアの墓へも行き、マグダレナの靈地にも參詣し、基督の兄君シエームスの寺院も拜したが、これは巡禮の一人で、此處へ幾度も來たものが案內したので、悉皆靈場を廻つて、其晩エフヰムは大勢の巡禮と宿屋へ泊つて、いざ寢やうとする時に、思懸げもない珍事が出來した。

それは巡禮の一人が寢衣に着換へやうとした時に、衣服の衣囊に入れて置いた財布が無くなつたと云ふ事で、其巡禮の話によると、確かに晝間兩替した三ルーブルが無くなつたと云ふ。いくら嘆いて見た所が、無くなつた錢が出る筈がないから、一時騷ぎ立つた巡禮も皆各々床に就いて寢てしまつた。

其九

エフヰムは床に這入つては見たが、さア什麼しても寢られない。考へて見ると、金を失くしたと云ふ巡禮は眞個に盜まれたのではないらしい。始めから此巡禮

は金を持つて居なかつたのだが、かう云つて人前をつくろつたに違ひない。臆面なくあゝは云つたもの丶、其時の心中は什麼であつたらう。定めし心苦しかつたに違ない。今頃は心で懺悔をして居るだらう。など丶餘計な事ではあるが、其人がいかにも可哀想な氣がしてならぬのである。

夜が明けると、基督復活の寺へ參詣したが、例の金を盗まれたと云ふ巡禮は始終エフヰムの後を蹤いて來る。寺院へ行くと、其處にはもう各國の巡禮が群集して居る。希臘人、アルメニヤ人、韃靼人、シファン人と云ふやうに種々な人が寄つて居る。皆が門の前へ來ると、坊さんは直ぐに十字架の側へ案内する。燭蠟を捧げて祈禱が濟むと、これからまた坊さんは大勢の巡禮を案内して、十字架の立つて居るゴルゴサの丘から基督がアダムの骨へ血を濺いで居る影像から、基督が王冠を戴いた時に兵卒の鞭撻をうけたと云ふ石、基督の足跡が印して居る石や何かを見せて、未だ外に種々見せてやらうと云つたが、巡禮は氣が急いで居るので、基督の御墓を見せてくれと、外の物は見ずに御墓へ急いだ。

御墓の前で巡禮は皆膝づいて祈禱を上げたが例の金を盗まれたと云ふ巡禮の爲めに、懺悔の祈禱を上げたのはエフヰムばかりで、我さきに御墓の前へ出やうとするから、其混雜は一通りでないのであるが、エフヰムは一面には此憐れな巡禮が改心するやう、一面には早く眞實を懺悔するやう祈つて居た。

其　十

御墓の上には三十六の燈火がかけ連ねてあるので、エフヰムは不圖此燈火の下を見ると、頭の禿げた一人の老人が、自分と同じやうに荐りと祈禱を上げて居るのである。能く見ると其老人は極めて能くエリシャに似て居る。あゝエリシャは何日の間にか此處へ來て居るのか、と一反は思つたが、いやいやさう云ふ筈はない、自分と一所の船に乘つて來ないエリシャが其前の便船で、自分より早く此處へ來て居る筈がないのだ！かう考へながらエフヰムは祈禱を上げて居たが、其老人が振向いた顔を見ると、髭の長い所から、眼鼻の工合、什麼してもエリシヤとしか見えぬ。

エフヰムはもう思懸げもない所で朋友に遇つたやうな氣がしたので、早く其側へ行かうとしたが、何分一杯の人であるから什麼する事も出來ない。さうだ今に皆が立上つたら、連の巡禮をはぐらせて、エリシャと

一所にならうと思ふから、祈禱の間一生懸命其方へばかり氣を配つて居たが、祈禱が濟むと、我先きにまた十字架へ接吻しやうと駈出した。エフ井ムも遲れじと續いて駈け出したが、龕の所にはお籠りの連中が飯を食べて居るものもあれば酒を飲んで居るのもある。眠つて居るのもあれば、本を讀んで居るものあると云ふ仕末で混雜の中にとう〳〵また其老人の影を見失つてしまつた。

エフ井ムは落膽して宿屋へ歸つて來たが、其晩例の金を盜まれたと云つた巡禮は居なくなつて、エフ井ムの金まで若干か一所に失つたと云ふ。

翌る日また御墓へ參詣すると、もう前の方は閉がつてしまつて居る。仕方がないから後の方へ坐つて見廻はすと、矢張りエリシヤは前の方に祈禱を上げて居るのであるが、祭壇に上つた坊さんのやうに張肘をして、燈火の故爲かいやに其禿げた頭が光つて居る。よし！　今度こそ見逃がすものか、と大勢の巡禮を搔別て前へ出たが、不思議やエリシヤの姿は消えてしまつた。三日目にエフ井ムが御墓へ行つて見ると、例のエリシヤは兩方の手で顏を抑へて額づいて居る。よし〳〵、今度こそは門の處で捕へてやらう！　と門の處で半日の餘も俟つて居たが、大勢の巡禮が此處を出てしまつたのに拘らず、エリシヤの姿は何處へ行つたのか少しも解らない。

エフ井ムはかくて六週間ジエルサレムに滯つて居た。其間にはベスレヘムへも行つた。ベサナイへも行つて見た。ジヨルダンへも行つた御墓へは絕えず蠟燭を捧げて、一家親族の安全を祈る爲めには、ジヨルダンの水を罎に取つて地へ撒いた。丁度財布が空になるまで、靈場を巡禮して歩行いたが、とう〳〵エリシヤに遇ふ事が出來ないで、思切つて歸る事にした。ジヤフワからオデッサへ駈けては往き通り船であるが、オデッサからはまた歩行かなければならぬのである。

* * * * * * * * *

エフ井ムは嘗てエリシヤが通つた、例の百姓家のある村へ來ると、百姓家の小兒は眼早く見つけて、自分の家へ連れて行つた。もう此時は百姓も、老婆さんも、嫁も、若い娘も皆壯健になつて居て、エフ井ムに御馳走をして、先にエリシヤが自分達を扶けてくれた事を悉皆話し、彼の人は神樣か、神樣があの人をよこしたのか、何しろ彼人が來なかつたら、自分達は死んでしまつて居る處だ！　と云つて喜んで、エリシヤに似て

居るからと云ふので、大層エフ井ムを饗應した。丁度一年目にエフ井ムは家へ歸つて來たが、途中心配に心配をし拔いた甲斐もなく、息子は酒店へ入浸つて、家の事は何一つしてない。翌る朝エリシャの家へ行くと、エリシャは裏の蜂小舍の番に行つて居たが、エフ井ムが來たのを非常に悅んで。

『貴郞何日歸つてお出でなすつた。それでも丈夫で結構でした。

と云ふと、エフ井ムも久し振で朋友に遇つたのだから、これも莞爾〳〵笑ひながら。

『俺は何だよ、ジエルサレムから聖の水を取つて來たから、いつでも來なさい、配けて上げやう、ところでジエルサレムの靈場で、どうしても御前としか見えない男に遇つたよ。

エフ井ムはかう云つてエリシャの顏を見ると、

『この世界に生れて來た者は、何でも死ぬまで働けと云ふ神樣の思召で、いゝ事をすれば乾度好い報ゐが來るのだ。俺が彼の貧乏な百姓を扶けたのも神樣の命せだし、貴郞がジエルサレムで俺に逢つたと云ひなさるのも、大分神樣のお導きに相違ない。

とこれから二個はまた末長く相結んで、無事に此世を送つたと云ふ事だ。

（完）

軍事小說

離れ鴛鴦

物集梧水

一

庭の植込。樋の狹間。霜を凝らすなる夜の風は。宛ら夢から醒されたかのやうに。一陣々々。一種悲愴な調をなして。雨戶にトンと打當ては。餘韻のみ物哀れに。行衛も知らず消えて仕舞ふ。其の度每。田鶴子の部屋の机の上の。花傘翳した置洋燈は。寒さうにぶる〳〵と身顫ひして。小さな焔をゆら〳〵とふるはす。

『おゝ寒い。』

獨言を云つて。田鶴子は一寸襟を掻合はせて。その睫毛の長い眼を伏目に。再び餘念もなく編みかけの靴下を編みつゞけた。四本の編棒は交る〳〵。玉を延べたるが如き細き指にあやつられながら。スコッチの毬は自ら獨り解れて。蠶の絲をうむやう。

淋しき哉。夜を警しむる拍子木の音。遙か裏街に冴え

渡るかと思へば。何時かそれも聞えなくなる。座敷を距て丶父上のお部屋には。俄かに高い笑聲。田鶴子は思はずハッと手を止めて。聽耳峙つれば。許嫁の良人道夫は。さも心地快げに。

『今も其の話を佐伯大尉の許で話してゐたんです。海軍の方は孰の道早く打撃けて仕舞はんけりやならんし。それには吾々は骨を粉に碎いても露西亞の海軍を覆滅させんぢやア。職分に對しても責任があるつて…佐伯も私も。天晴れ日本魂を現はして。思ひ切つた働きをして。敵を愕かして遣らうと誓つたんです。』

『それは大いに愉快ぢやな。』と。これは父上の御聲で。

『結局。戰爭となれば大丈夫日本が勝つと決りきつとるが。何しろ歐羅巴人を敵手にするのは初めてぢやから。當局者だつて。イザ戰爭と云ふ段取になるまでには。充分愼重の態度を取つて。ぬかりの無いやうにせんけりやならんからなア。』

『そりや然うですとも！　歐洲の列國中でも。露西亞に睨まれては。餘り好い心持が仕ない手合が多いんですから。其れに。近頃漸う勃興したての。日本のやうな小さな國が。一つ打つかつて試やうかと云ふのですから。考へて見れば。隨分日本も強くなりましたものです。』

『全く。實に愕く可き進歩ぢや……が併し。露國の東洋艦隊も却々侮れんと云ふぢやないか……？』

『何有お父樣。些とも其の御心配には及びません。噸數なぞを以て比較したら。却々侮れやしますまいけれど。大切な〳〵海軍の士官等が意氣地が無いんですから。少しも怖るゝには足らんです。』

『はゝはゝは左樣かな。日本の海軍士官にはお前なぞが居て呉れるから。大いに心丈夫だ。はゝはゝはゝは』

『どうも是れは！　はゝはゝはゝは』

尚ほ繼いて笑聲は聞えてゐたが。其中旋て。椽側傳ひに跫音がして。田鶴子の座つてゐる傍の障子がサラリと開いた。

『田鶴さん。大分御熱心だね。』

突立つた儘。道夫は色飽くまで黒きが上に。更に滿身の酔ひを引いて。面は恰も赤丹の色。田鶴子は振向いて。笑ひながら。

『今貴郎のお靴下を精々と編んでる處なのよ……まア那麼所に立つて居らつしやらずに。お這入んなさいましな。』

『そりや有難いね。』
と美しい髭から巻煙草の烟パッと吹いて。更にその美髭を捻りつゝ桐胴の火鉢の前。座蒲團の上へ尻居に撻と。さて巻煙草の灰を落しながら。
『田鶴さん。僕悉皆酔つちやつたよ。御覧。顔が眞赤だろ！ 佐伯の許へ行つたら。未來の戰捷を祝すつて。僕が飲めん〳〵と辭退するのを押へて。到頭恁麽に酔はせちまつた！』
『まア酷い方なのねえ』
田鶴子は編掛を傍に推遣りつ。昵と道夫の顔を見て。
『あのう矢張。明後日お立ちなさらなければなりませんの！』
と心許なさうに問ふ。道夫も急に眞面目に。
『左樣ねえ。廿三日迄には奈何して佐世保に着かんけりやならんので。明日……明後日……左樣・奈何しても明後日立たんければなるまいよ。』
『どうしても！？』
と田鶴子は語調するどく。不安の眼は輝いた。
『うむ。最う斯う時局が切迫して來ちやア。那時何時談判が破裂するか分らんから。僕も平常のやうに愚圖愚圖しちや居られんので。』

『左樣ねえ』
とがつかり力無く。田鶴子は俯向いて。灰を均しながら。
『左樣すると。次回は何時御還りになれるの？』
『次回は何時歸れるか解らんよ。談判が破裂すれば忽ち海戰が初まる。左樣なつちや却々一寸は歸られん。それだから佐伯の家でも。軍の首途だから。お祝ひに是非々々つて。日本酒を飲ませられる。麥酒を浴せられる。三鞭をすゝめられる。大變な持方で。僕は。家に家婦が待つて居りますから。情願お許し下さいつて云つたらね。佐伯と。佐伯の妻君が兩方から。僕の手首握る。顔を押へる。那麽事云つた。罰に今一盃々々つて。嗚呼非道い目に逢つて來た。田鶴さんのお陰で。飛んでも無い命拾ひをした。』
『存じません。妾のお陰だなんて仰有つて！ 那麽つまらない事仰有るのが惡いわ。』
と美しい。氣高い面をサッと赤らめて。田鶴子は怨ずるが如く斜眼に道夫を睨んだ。
田鶴子は今年十八。幼にして父母に別れ。三栗の一つ遺されし世に便なきものと。道夫の父の情に引取られて。道夫とは七歳違ひの。幼稚い時分から兄よ妹よと

互ひに睦しく。漸う長じて物心附いてからは。道夫は田鶴子を愛し。田鶴子は道夫を慕つて。燃ゆるが如き青春の戀は。兩人の胸に宿つたのであつた。

元來我が子の愛に脆き道夫の父母は、田鶴子が來ん三月、淑德女學校の卒業を待つて、目出度く華燭の典を擧げんと、其れのみ待ち設けてゐたのである。

それを知つてゐる兩人は、愈々戀に焦れて、若き士官が汐路遙けく。キャビンの夢に手と手と握交うて、エデンの園生に遊びしも、そも幾度なりけんよ。家を外なる身は海軍士官、遠洋航海のその度ごとに、辛き別れの涙包むとすれば、久濶の逢瀨の嬉しさ、田鶴子は其の日ひねもす、そは〳〵して過したりしも抑も幾度なりけんよ。

さればこそ、今や日露の危機は一髮千鈞を釣れるに等しく、倏忽の間、砲火相見えんとするに當つて、若き士官は明後日佐世保に行かねばならぬ。田鶴子は別れの辛さを思ひ、更に此度の戰爭を思ひ浮べて、云ひ知らず哀しさに堪へかね、すゞろに胸も塞り、女心の道たゞ一筋に、何時しか眼には涙の雫が宿つてゐた。

夫は早くもそれと見て取り、

『田鶴さん』と元氣好く叫へば、

『え、？』と俯向いてゐた顏を擡げて、故意とらしく笑顏を見せる。

『田鶴さん、お前又泣いてるんだね。』

『あら……否え、那麼事……。』

『隱したつて駄目だ。ソレ〳〵涙が出てゐる！』

『……』

『又お前下らない事考へてるんだろう？』

『否え左樣ぢやなくつて。』

『なくつてぢや無かろう？』

『左樣ぢやないわ。』

『だつて涙が物を云ふ……屹度、今度僕が佐世保へ行つたら、露國と戰爭が始まつて、僕が討死しや仕まいかつて田鶴さん取越苦勞して心配してるんだろう？左樣だろう？屹度左樣だ、屹度左樣だ、屹度左樣に違ひない！　幾干隱したつて駄目だよ。僕ア醉つぱらつてゐたつて、田鶴さんの胸の中は、瞭然と見ぬいて仕舞ふから不思議だ！』

『ナニも些とも不思議ぢやないわ。』

『左樣なら當つたんだろう?!』

『……』

『僕の身を案じて呉れるんなら、そりや僕ア嬉しいけ

れど……併し、決して僕の事ア心配して呉れなくつても好いよ。田鶴さんの思ひ計りだつて、却々討死しや仕ないから。ナニ露西亜ッぽうの彈丸が飛んで來つて、田鶴さんの思ひで彈き飛ばして仕舞ふ。おゝ左樣だ、僕は好いお守を持つてるから大丈夫なもんだ。』

と軍服の隱袋を手探りながら、

『好いお守だから、今見せて上げる。』

田鶴子は何だらうかと、涙の目を睜つてる前に、道夫は紙包を取出して、披きながら。

『ソレ見給へお守！　僕のお守は是れさ‼』

田鶴子は顏を赤めて、

『まア、那麼物……妾の寫眞なんか……………！』

『はゝはゝは。』

と道夫は元氣好げに打笑つた。

二

懷しい道夫が佐世保へ往つた後、其處から直ぐ軍艦敷島へ乘込んだとの手紙が、田鶴子の手に落ちた頃は、極東の風雲いよ〳〵急に電光一閃、動員令の赤紙は、縱横都下の豫備後備を惹動した。

二月の空に雪もよひ、さらでも淒愴なる光景の中を、號外々々の聲は突として八方に飛びかひ、市民の面には云ひあはさねど、一種自から決心の色は浮んで見えた。

田鶴子は此時から、朝な〳〵程近き八幡樣へ通ふやうになつたのである。

外交斷了！

仁川の海戰！

驚破こそと、豫てより待ちに待ちたる日露の開戰！市民は又今更のやうに色めき渡つた。仁川の海戰、續いて旅順の砲擊、鋭氣滿々たる大都は至る所に敵愾心勃興し、資産も汗血も擧げて義勇公に奉せんと、拳を固め、眦を決き、脈管の血汐は宛ら煮え返るやう。田鶴子は、痛く道夫の身の上を案じて、今朝も例の如く家内の者の未だ起きぬ間に、密と臥戸を脫出でゝ、二町許りの八幡樣のお社の、階下近う、跪いて兩手を合せて、一意專心、神も哀れみ給へやと、ひたぶるに道夫の身の安全を祈るのである。

一際鬱蒼とした、東の森の茂みから烏が一羽、啞々と鳴いて、東天の色はほがら〳〵明けはなれると、玉垣に置く霜五彩の光を散じ、莊嚴なる朝の世界は、軈て華やかなる光景に變らんとする。

暫時あつて田鶴子はやをら起立つて、胸掻き合はせ、他に顔見られじと俯向きながら、西より東、廣く横はれる大路へ、神寂びたる鳥居を潜ると、通りすがりの十歳ばかりの新聞賣子、見覺えの何處かにあるやう、能く見ればおゝ其れよ、出入の大工の子悴、庄太郎であつた。田鶴子は衝と傍へ寄つて、

「お前、庄ちやんぢや無いかい？」

賣子は愕いて立止まつた、田鶴子の面を見戍りながらきよとんとした風、

「お孃樣は誰樣？」

「誰れだがお前知つてる筈だよ。」

「俺らア……」と不審の小首傾げ、軈て嫣然して。

「俺らア知つてる、お孃樣——萩原樣のお孃樣だア………」

「然うだよ、庄ちやんお前新聞賣子なんかになつて………一体如何したの？」

「俺らア如何も爲やしない、新聞配つてお金儲けるんだい。」

「だつてお前、年齢もいかないお前が、那麼事しなくたつて、お父樣が………」

「俺らア阿父兵隊になつて、戰爭に行つちやつたんだもの！」

「まア左樣！　左樣かい！！　些とも妾知らなかつた。お父樣が………與太郎がかい!!!」

「それからお母ア嬰兒產んで、起上がる事が能きねえんだから、俺らア新聞配達になつて、稼いでるんだ………お孃樣、一枚買つて與れないか。」

「まア其りや可愛相に、那麼事妾些とも知らなかつたけれど、それぢやアお母樣は何なんだね、お產で寢てるんだね。」

「あゝ」

「左樣かい、お父樣が戰爭に行つた跡？」

「だから俺らア心細くつて〳〵。」

「それでお母樣も、嬰兒も壯健なの？」

「お母アは生きてるけれど、嬰兒は死んぢやつたんだ。」

「まあ!!!　そりや奈何したら可からう？」

と田鶴子は殆んど驚愕の餘り、屹と庄坊の面を見詰めたのであるが、忽ち其の美しい眉根を寄せて、

「本統にお前。そりや大變な事ねえ！」

と小兒の手首を緊乎と握りしめた。

「だつて仕方が無えや、阿父が戰爭に行つて了つたん

だもの、仕方が無えや、俺らア阿父の代りに稼ぐよりか、最う仕方が無えや。』

『本當にまア、恁麽幼少な小兒が、可哀相に……戰爭と云ふものは勇ましい樣だけれど、跡に遺された遺族は――あ、けれど庄ちやん、決、決してね、力をお落しで無いよ、今の中、眞の今の中だけだからね、もう直きそれ〳〵庄ちやんの家族を扶けるやうになるんだからね、好いかい、力を落さずに……能くお母樣に孝行を盡すんだよ。又後刻で妾が庄ちやんの家へ往つてあげるから……。』

と呉々も此の小さき新聞賣子を勵まして、田鶴子はいかに戰爭の裡面には悲慘なる影が宿つてゐるかと、襯襯と思つたのである。

三

旅順の砲撃、日本の海軍は充分なる功を奏したのに引換へて、哀れむべし露西亞の艦隊は、ツザレウヰッチレトウヰザン、其他數隻の敗艦を殘して、旅順港内深く、鼠のやうに遁竄して了つた。

一度此の報傳はるや。萬都の人々は宛ら狂喜せん許り武勇卓越なる司令長官、司令官、及び各艦長の堂々たる風丰は、諸新聞の第一面に揭げられて、等しく敬意と尊崇とを起さしめたのである。

とは雖、假令その勇、その畧、チルソンを凌がすとも渾身唯だ是れ愛國の情あるのみなる部下幾多の勇士を殺さなかつたら、恐く此の奇捷は得るに難かつたであらう。

さればこそ諸新聞は又いち早く名譽の戰死者の名を列ねて、國民と共にいとゞ亡き靈を惜んだのであるが、嗚呼是等勇ましき戰死者の中に、何ぞ計らん萩原少尉の姓名を見出さうとは！

田鶴子はこれを見た時に、ほと〳〵魂も消ぬべく愕いて、周章て〳〵他の新聞を二三種披いて見たのであつたが、哀しい哉、一字の誤植も無く、良夫道夫の討死は疑ひを容れぬのであつた、彼女は部屋に引籠つて、二日、三日、五日、十日瘦せに瘦せて、撞と病床に就いたのである。

佐世保の鎮守府から、旅順の海戰の後數日して、道夫の戰死の通知が來たので、萩原の家では取敢ず、假葬式を行つたのであるが、道夫の屍体を見たと云ふでもなし、奈何しても戰死したとは信じられぬ、思へば先月、軍服勇ましく意氣揚々と、家の門を出る時振返り

ながら、『今度歸つて來る時は、分捕品を澤山お土産に』と其の聲も、其の俤も、今も其時に在るが如く思はるゝのである。

嚴めしき姿、優しき聲、田鶴子は、これが常に幻影のやうに目前にちらついて、時折尙ほも道夫は生きて居るかのやうにも思はれる、而して其れが唯だ空想に過ぎず、良人と自分とは、旣に幽冥その境を異にしてるのを思ひ出しては、我が身も生きてる心地なく、小暗き部屋の中、獨り潜々と打悲しんでゐるのである。

或時、道夫の母は、林檎の籠に洋刀添へて、田鶴子の部屋へと這入つて來た。

『まア此樣に薄暗い處に寢てゐて』と母は窓の障子を衝と開いた。

『田鶴さん、身体の具合は奈何？　最う些とは快いかい。』

田鶴子は蒲團の上に起きあがつて。

『もう些とも身体は惡か無いんですけれど、矢張り兄樣の事思ひ出しては、胸が一杯になつて……』

『そりや困るねえ、お前までが病氣になつて呉れちや、本統にお父樣もお母樣も、氣も張も拔けて仕舞つてね、今迄妾達は早くお前が學校を卒業して、而して改めて道夫と夫婦に爲やうと、其ればつかり樂しみにしてゐたのに、到頭道夫は……！田鶴さん、林檎を一つ喰べてみて御覽な、乾度胸がすくから。』

『は、有難う御座います。』

『ドレ妾が剝いて上げませうね』

『どうも！　お母樣に剝いて戴いちや罸が當るわ。』

『ほゝほナニをねえ……』

と母は、年齡には稍すげみたる頰に微笑みながら、林檎の最も美しいのを一つ擇んで、薄刃を當てながら、

『お母樣はねえ』と是れを冒頭に、沈んだ調子で、

『斯樣な性質だもんだから、早く初孫が產きたら、負つたり、抱いたりして、妾が一人でお守をして、育ててみたら奈何に嬉しからうと、其事ばかり樂しみにしてゐたのに、道夫は到頭戰死して仕舞ふし、妾は泣くには泣かれず、茫然して、氣拔がして了つて、彼の報知が來た時は、間違ひぢや無いか、お門が違ひやしないかと思つた位。如彼に壯健だつた忰が、いくら大砲の彈丸に中つたつて、豈や戰死するなんて、夢にも本統に思はれ無いんで……』

『私もよ。兄樣が、僕が凱戰して還る時分にや、田鶴さんも學校を卒業して了ふし、アノ左樣したら……

ッて仰有つたお言葉は、今でも判然耳に殘つてゐるやうで、妾、奈何かすると時々、襖の陰やなんかに、若しやお在でになりは仕まいかと思ふ事が時々ありますの……けれど、けれど、もう本統に兄樣は御戰死なすつたのでせうかしら?!』

『えゝ?!』と母は眼を圓くして、田鶴子の顏を眺めた、

『左樣思ふ事が妾も度々あるよ。未だ其の報知が來なかつた中は、何とも思はなかつたけれど、此節は時々氣が沈んでる事があると、フイと耳の側で。お母樣唯今歸りましたッて云ふ聲が判然と聞えて、妾は思はずハイと返事する事があるよ。何だか道夫が戰死したなんて、嘘のやうで……』

『お母樣、如何でせうかしら? 若しか兄樣は……新聞や何か、皆んな人違ひで、フイと歸つて被來しやるやうな事は。』

『だと好いんだけれどほゝほ、那麼事思つたつて、百の中一つもありやしないんだから……噫道夫も軍人とは云ひながら可哀相な事しましたねえ。』

母は林檎を剝きながら、我が子の事思ひ出しては、心も消えてゆくやう。眼に一杯涙の露を浮めた。

母も默すれば、田鶴子も俯向いて、つれなき涙のみすゝろに溢れ出づるのである。折から小間使は紙門を啓けて、

『お孃樣、お手紙でございます。』

手に取つて返して見ればこれぞ道夫の同僚なる親友海軍大尉、佐伯春彥よりの書翰さてはと思つて慌てゝ封を押し切つた。

四

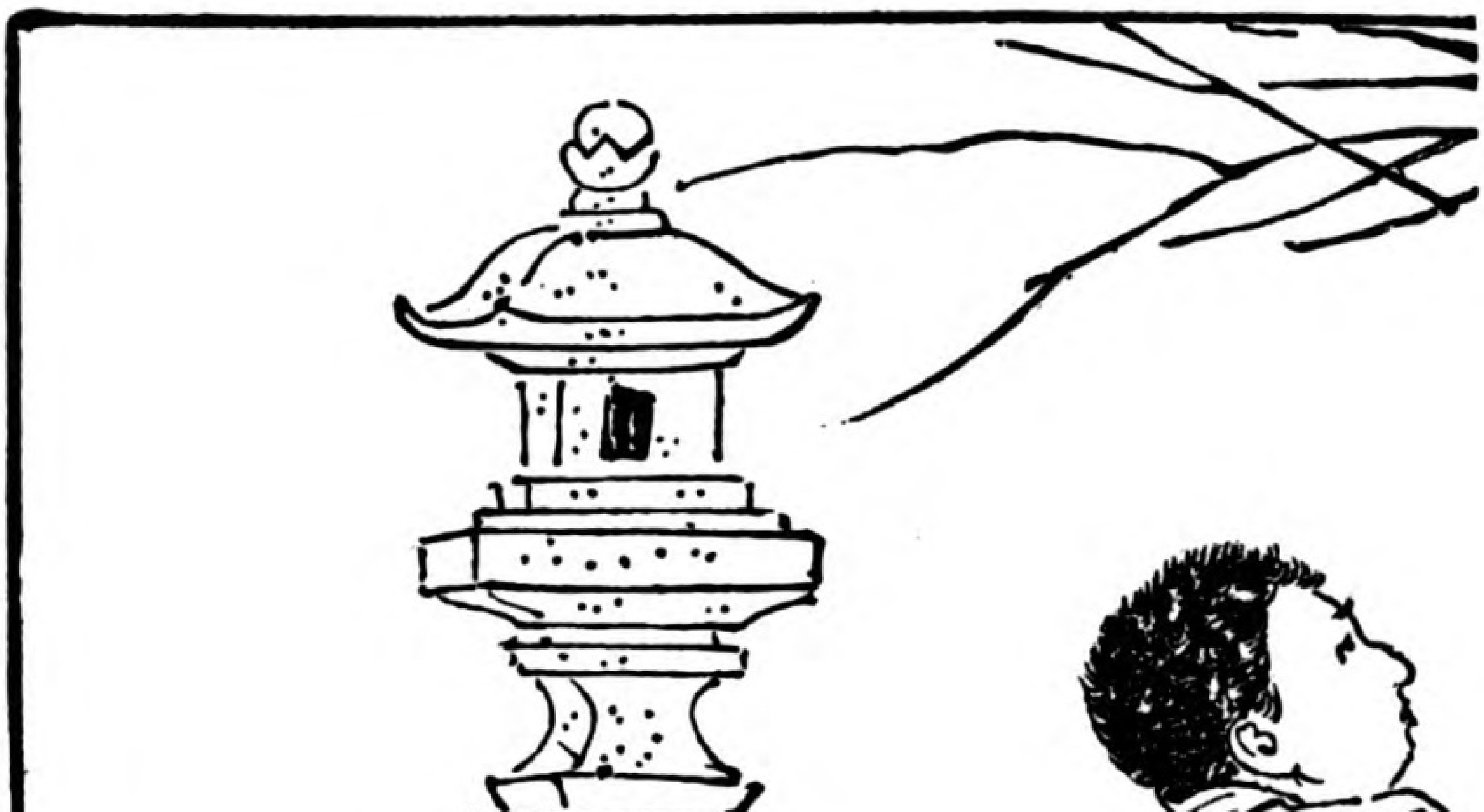
前畧其後は心ならずも御無音に打過し何とも申譯も無之候　扨て此度道夫樣事天晴れ御奮戰被遊、遂に名譽の戰死を遂げられ　候事、最早御聞き及びに候はん、御痛はしさ、御歎きの程は幾重にも恐察仕候、就ては戰友の私より同君御最後の御模樣、逐一申上ぐべく候　最初我が艦隊は、六日急命に接し、佐世保出港、九日には旅順港にて海戰致候。同日朝七時半、常よりは少し早めに朝餐を終へ、皆々戰鬪の準備に着手致し候、かくて九時半頃、各將校相集まり、一同卓を圍みて珈琲を飲み。ビスケットを喫して勇氣を皷舞しつゝ談笑致候　是れぞ所謂決死の水盃のやうなるものにて候ひき、此折道夫樣の元氣はなか〳〵にて、敵艦來らば一擊の下に擊沈せんな

ど、愉快氣に見へ候、其折同君の仰せに、此度の海戰には必ず大功を立つべし、首尾よく凱旋して故國に歸らば、田鶴子と華燭の典を擧げ申すべく候とこれは小生にのみ囁かれ候、小生は故意と笑ひ乍ら、萬一敵彈飛來り候はゞ奈何爲し給ふやと申したるに、そは大丈夫なり、決して杞憂に及ばず、彈丸避のお守は胸に在りと仰せられ候程に、さらばそのお守見せ給へと强て願ひ候へばそれは田鶴子様のお寫眞に有之候、扨て十時頃初めて山東角を望み。各員各々其の職に就き、道夫君は右舷の砲術長に從ひて奮戰被遊候。小生は生憎左舷の職務なれば戰鬪に與る事不能、殘念に御座候。



かくて敵の砲臺より打初め申候。續いて敵艦よりも砲撃致し一發又一發、我が艦隊の士氣頓に昂り申候。先づ單縱陣を取りて益々敵に迫り申候、此時旗艦三笠より信號有之候ひしかば即ち各艦盡く檣頭に軍艦旗を掲げて應戰致し候。砲聲は轟々として百雷の一時に落るが如

く、砲門よりは不絶炎を迸しらせて、壯快筆紙に盡き不申候。斯る折しも敵の彈丸は我々の乘りたる艦のフォーア、ブリッヂに命中し。破片四方へ飛散つて一齋に斃るゝもの十數名見る見る甲板の上は慘膽たる修羅の巷と相成候。血は混々として流れ戰鬪員は爲めに足を辷らせ。働らきも自由ならぬ程に候。小生もこの激戰の光景に一時心膽を奪はれ人我の差別を喪ひたる位に候。



午后一時、戰鬪終りて後、小生始めて道夫樣の御討死を聞き、驚いて、急ぎ病室を見舞候ひしに眞白なる布に蓋はれて、寢臺に横臥し居られ候。聞けば彈片心臟を貫きて即死し給ひたる由。國家の爲めとは申ながら兄弟も啻ならぬ交情なる小生の悲痛何とも形容の辭無之候。この折道夫樣の御顏拜み參らせたるに、堅く口を結び、眼を少しく開きて、更に生前に異る御容子もなく、何か物云ひたげなる御有樣に、小生は思はず、道夫君と叫んで、男泣きに泣き申候。先程珈琲をすゝりて共に

談笑致したる事、旋て最後の道夫樣の御言葉かと、前後僅かに數時間、忽ち幽冥所を異にするに至りたる無常迅速の世のたとへ痛歎腸を絶ち申候、扨て御許樣の御寫眞小生御預り申置き候間、何れ御面會の折お返し申す可く候。御許樣の御悲痛さこそと相察し申候へども、餘り御痛悼の極、御健康を御害ひ給ふ樣の事ありては、却て道夫樣の御志にも背く可く候。既に同君が天晴軍人の龜鑑として、名譽ある御戰死被遊候以上は、御許樣に於ても、道夫樣に劣らぬやう、天晴れ日本の婦人として、御國の爲め、君の爲め、雄々しき御働きなさるやう、ひたすら懇願仕候。さすれば道夫樣も九泉の下にて嘸ぞ御滿足に覺さるべく、小生に於ても是れに過ぎたる喜び無之候。何は兎もあれ、御面會の折具さに陳述仕る可く、必ず〳〵御身御大切に被遊やう願上申候　敬具

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

嗟哉如何にせん、事は無情くも事實なりき。母も田鶴子も豫て覺悟はなしつゝも、それと聞ては又今更に目前道夫が戰死を見るやうなる心地して、同僚が情けある手紙にひれ伏しつ、人心地無くすゝりあげては泣き悲しんだのである。先刻から萬一にも。道夫の戰死の誤報を祈つてゐた名譽ある戰死とは言ひながら、その仇なる願ひも、嗚呼茲に至つてふつゝりと切れて了つた！

五

日露戰爭は著しき國民の敵愾心を興奮せしめて、懦夫も劍を杖いて戰塲に赴かんとすれば、纖弱き婦女も赤十字の旗蔭に、それ〴〵奉公の誠を盡さんずる勢ひで、至る所に恤兵献金、義勇奉公の聲は盛んに響いた、中にも特筆すべきは、礫川の去る敎會堂に催さるゝ婦人後援會である。抑も是れは東京に於ける主なる女學校の生徒の發企で、國家多事の際、我が邦は男子にのみ國家の大事を委任すべきものならず。婦人も宜しく男子の後援者となつて、出征軍人の遺族を保護し、充分後顧の憂なからしめんと云ふ。至極立派なる主旨であつた。

會塲が敎會堂なので。表に例の如く大きな立札、墨痕淋漓たる文字、婦人後援會と筆太に書かれたる次に順を追うて講演者の姓名と、其の演題とがずらりと並記

せられてゐる、その末に、愛國の婦人は須らく來り聽く可しと、感歎符號が三つ打つてあつた。

我が邦には珍らしい、未曾有の企圖と、名にし負ふ現今第一流の女星を集めての演說であるから、開會の刻限午后一時の打たぬ前から。會場は最早立錐の餘地も無いほど、海老茶、紫、あつぱれ姬君の袴の色に綾どられて、四邊は宛らまばゆきばかり。四壁の窓が明け放してあるにも拘らず場內は人の溫氣に充滿ち、正面の演壇にはおきまりの大花瓶に梅が香粉々、其側に水注と洋盃。

刻限が來ると。第一に會長上田和歌子女史の「開會の辭。」終つて村橋絹子の「戰爭と女子の義務」次は浦田櫻子の「戰時に於ける米國婦人と日本婦人」次は跡部花硯女史「日本の婦人は古來烈婦多し」など、とり〳〵の演題、とり〳〵の演說ぶり或は眼鏡をかけた鋭そうなる辯士或は洋服を召た優さ姿の才媛或は黑の袴を穿いてゐる老刀自、いづれもとり〳〵の打扮とり〳〵の態度、論辯風を生じ嫣辭人を腦殺して有髯男子も舌を捲くばかりであつた。それで、演說の切目に、聽衆の一隅では。

「貴孃、最う歸りませうか。」

「左樣ねえ、最う歸つても可くつてねえ、皆な同じ事、分り切つてる事ばかし……些とも私インフルエンスされないわ。」

「左樣ねえ、皆樣演說は本統にお上手だけれど、仰有る事が理屈つぽいばかしで……」

「けども貴孃、もう後たつた一ツ切だから聽いて行きませうよう……一番お終ひの方は淑德女學校の生徒だつて……奈何な方だか見て往かうぢやありませんか。」

など、私語きあつてる中に、軈て次の演說が始まらうとして、先づ紹介者は演壇の側に現はれた。

「些と諸君に申しますが……此度御演說なさる方は、萩原田鶴子樣と仰有つて、先に旅順港の海戰に、名譽ある戰死をなすつた、萩原少尉の未亡人です、何卒暫時の間御謹聽を」

と能く紹介して退いた。

徐かに場內に現はれたのは即ち未亡人田鶴子の君、誰れの目にも哀れと思はるゝばかり姿は窶れて、蒼白い顏容潤みを帶びた眼光、身長のすらりとして撫肩なのに、鼠地の大小霰に、黑の紋羽二重の被布を着、惜しや綠の黑髮根元からふつりと切つて、物の響きにも

倒れんとする身体を他に扶けられつゝ、いとも靜かに壇上に登られた。

一瞥滿場を見渡すと、等しく聽衆の視線が集まつたので、彼女は、其の蒼白い頰に颯と紅潮を呈して、急いで伏目になり、水注の水を洋盃に注いで、眼を塞つて一口。聽衆は互に。

『まア彼の方が萩原少尉の未亡人……未だ如彼にお若いのにお可哀相ねえ』

『如彼に窶れてお仕舞ひなすつて、奈何なさるんでせう！』

『本統にお氣の毒ねえ』

斯る折しも田鶴子は胸の動悸をおし鎭め。

『皆様！』と。其の血の氣乏しき唇はうごきぬ、扨て再び滿場を見渡して、極めて沈痛なる語調で。

『今日皆様に、態々此處まで被來つて戴いた、事に就きましては、會主や其他の方々が仰有つた通り。既う皆様も御承知であらうと存じます、で私は唯だ、戰爭に被行つた軍人の方々の遺族の中に、隨分困難なすつてる、その手近い例を申上げて皆様の麗はしい同情の涙を注いで戴かうと存じまする。

それは此處から程近い、切士丹坂の下に住んでゐまする大工の家で御座いますが、今度の日露の開戰で、後備で召集されまして、跡に遺つてゐるのは、九歳になる男兒と、妊娠してゐる女房でございます。元來其の日稼ぎの苦しい中を、俄かの召集に、應じまして家には一文の貯金も無く、仕方なしに其の九歳になる男兒が新聞配達をして、漸々とお湯なり粥なりすゝつてゐる中、女房は出産致しまする、そこで種々とその女房は心配致しまして、生れた嬰兒は直に歿つて了ひました、妾は其れを聞きました時には、實に可哀相で、胸も張裂けるやうにおもひました。で朝夕斷れるやうな霜を踏んで新聞賣を仕たり、夜には遲くまで賃仕事を仕て居るので御座いますけれど、迚もそんな小兒の小さな腕て、親子の口を糊らして行く事は能きません。こうなると人と云ふものは實に情ないもので小兒はお腹が減つて空腹い〳〵の一心から、苦し紛れに、駄菓子屋のお菓子を一つ摘まんだので御座います。すると其れが見つかつて、駄菓子屋の女房は大立腹で、散々惡躰吐いた上句、打つ蹴る、泣き叫ぶ小兒の襟頸つかんで、母親の許に引擦つて往つて、いろ〳〵惡体を申しました、すると其兒の母親は最う堪らなくなつて、口惜しいやら、情けないやら、悲しいやらで、到頭血が

逆つて、狂女になつて仕舞ひました。於此で今殘つてゐるのは九歲になる小兒と、狂女のお母樣限、此先まア奈何するのでありませうか、若し此事を戰爭に行つた夫が聞いたなら、果して奈何な感じが致しませうか？　戰爭に行つて勳功を立てるのは、御國の爲め、君の爲めとは申しながら、一つは故國に歸つて、可愛い妻や子を喜ばし度い其れを、今は良人の顏も他の顏も見定めの就かない狂女の女房と、盜賊をするまで飢ゑきつてゐる唯つた一人の小兒……良人が還國て來ましたら、嘸ぞ奈何に歎くで御座いませう！　此のお話は決して作り言ではありません、全くの事實、そして世間には是れに類した出征軍人の遺族が、いくらもあるだらうと存じます。

妾は此事を知りましてから、早速其の哀れなる遺族を救はうと存じましたけれど、此度は直接に妾の身に悲しい事が降りかゝつて參つて、長らくの間病の床に臥せつて居りましたので、思ふ樣に參りませんでしたが。兎もあれ、出征軍人の遺族の狀態を皆樣のお耳に入れて、奈何かして救はなければなりませんと存じて今日おこがましくも參ッた次第でございます。』

と田鶴子の沈んだ語調に、聽衆は等しく首を垂れて、悲愴の感に打たれた。田鶴子は更に

『妾の申上げまする事は、たゞ是れだけです、されば假令どれほど日露の戰爭が長延くに致しても、出征軍人をして後顧の心配の無いやうに致しまするのが、是れが眞の婦人の義務だらうと存じます……』

悽愴たる田鶴子の風姿、悲哀なる其語調、聽衆は腸を掻きむしらるゝ思ひして、滿場盡く咽び入つたのですが、彼等は散々に悲しみに耽つた後。忽焉として偉大なる閃光の迸しるのを認めたであらう――御國を護る者豈に唯日本男子に限らん哉。

（完）

人間死ぬる事を思へば何樣な事でも出來ます、我々の同胞の一部は今や交戰に從事して日々生命を棄てつゝあるのであります、これを思へば此の際日本國民が少々の苦痛を忍ぶのは何でもない事ではありませんか。戰爭に出て死ぬる人があればこそ我々國民は枕を高ふして寢る事も出來るのであります。（女學記者）

集會彙纂

▲愛國婦人會の軍隊慰問　愛國婦人會總裁閑院宮妃殿下より第一師團慰問使として去月十九日岩倉公爵夫人山縣侯爵夫人を第一師團司令部に差遣はされたり、尙ほ同會貴婦人は全國の出征軍兵士に檄文を配布し同會員は奮つて軍人遺族救助の道を盡すべければ後顧の患なく國家の爲め奮戰せられ度旨を告げたりといふ又た仄に承るに、皇后陛下には戰死者遺族及癈兵救護の爲にとて、此程金五千圓を同會に御下賜相成りたりと。

▲公使夫人發起の音樂會　日本赤十字社篤志看護婦人會寄附の爲め各國公使夫人等の發起せる慈善音樂會は二月五日上野音樂學校に於て催ほさる來會者非常に多く其收入金數千圓に上り一人にて數百圓を寄附したる者もあり。

▲勤儉貯蓄の談話　京橋區長は小學校兒童をして勤儉貯蓄の美風を涵養せしむるには此際最も其好機會なるを認め且之を實行するには學校と家庭との連絡を圖ふするの喫緊なるを思ひ區内の各校長幷に設立者を區役所樓上に集め左の兒童心得書を頒附したり。

兒童心得（總ふり假名付）

（一）自分の仕事は勤めてなせ（二）苦しい事も我慢してせよ（三）體を丈夫にする事を心掛けよ（四）筆墨紙を無益に使ふな（五）玩弄品を買ふな（六）買食をするな（七）身なりを飾るな（八）小遣錢をねだるな（九）貯蓄を心掛けよ（十）小遣帳をつけよ

▲赤坂區の諭達　日露開戰の今日に於て、勤儉貯蓄の方法を講ずるは最も肝要の事なり、されば赤坂區にては近藤區長率先となり區民一般に對し儉勤質素を旨とすべき諭達を配布したり

一、男女共衣服及履物は成るべく質素の事
二、冠婚喪祭は努めて質素の事
三、女の結髮は必要の場合の外成るべく束髮になしたき事
四、年始五節句祭葬の贈物は互に廢止の事
五、彼岸其他佛事供養の爲に蒸物を互に遣取りするは無益なるのみならず衛生上有害に付必ず廢止の事
六、宴會又は多人數打寄るも飲食を愼む事
七、兒童の玩具も華美を避け又兒童の小遣も成べく消費せず貯蓄に心を傾ける事

▲德香社の事業　去月十八日を以て神田區須田町筋交ひ角に開業したる德香社煙草店は、内外諸種の煙草を販賣し、配達をもなすなるが、其の普通煙草屋と異る所は、營業上の利益一切を擧て、社會的慈善事業に充つるに在りと、尙同社にては、追て勞動紹介、改良安泊、職工寄宿所、實業夜學校、貧民貸家等の諸事業をも經營すべしと云ふ。

▲眞美會　上野公園五號館にて開會中なる眞美會は、會員の寄附品數十を集め、其の賣上高を恤兵部に獻納する由なるが、出品畫中岡不崩の日露海戰、憲田其石の夕暮などは殊に大作なりと。

學校消息

▲華族女學校生徒の綳帶製作　華族女學校にては大祭日運動會等の茶菓料を廢し此資料一年約五百圓を恤兵部に寄附せんと職員生徒協議の上之を決定せしが同く寄附せんには有益なる物品こそ然るべく、夫れには最も婦人の手を要する綳帶卷こそ宜しからんと五千卷を寄附する事となり、授業時間を割りて後一時間宛職員生徒一同にて綳帶作製に從事し居れり。

▲女子學院と英語　同院にては各高等小學卒業生にて多數の入學志望者中英語の力足らざる爲め入學するを得ざるもの多きは遺憾とし豫備科を設けて高等小學程度に英語を加味して本科との連絡を謀りたるも本科への志願者多きに不係豫備科への志願者尠きは豫備科の名目の下にあるより高等小學にて優待さるゝの勝れる爲ならんかとて本科志願者に英語の素養を望み居れり。

▲日本淑女學校　は今度新築落成したるに付來四月より專門學校令により規則を改正し高等女學校四年卒業者を大學一年級に編入し同五年卒業者を特別試驗優等者無試驗にて大學二年級に編入する事とせり。

▲女子實學園　藤本善治氏の管下に在る女子實學園苦學女生の自治團隊は目下生徒二十九名ある由なるが毎日午前中學資を得るために職業に從事し午後は修學することに定まれりその

職業は專ら裁縫、編物、洗濯、看護婦等にて熱心に勉めをれりと。

▲日本女子美術學校展覽會　芝山内なる同校にては去月二十、廿一日の兩日校友會を催し、造花、裁縫、細工物、編物、摘み細工、刺繡、繪畫等の各科展覽會を開き、賣上の益金一切を擧げて恤兵費に献納したり、尙ほ同校にては此際出征軍人家族に對しては授業料全部を免除し尙ほ事情に依ては必要なる小道具及び書籍材料品等を貸與することとなし是等生徒の製作せる物品を日本橋白木屋吳服店に陳列し又海外にも販路を擴むる方針なりといふ。

▲女子靜修學館の成績展覽　日本橋區蠣殼町元商品取引所跡にある女子靜修學館にては、此際赤十字社並に出征軍人家族救助費等へ寄附せん目的を以て、去月廿、廿一の兩日、製作美術品の販賣展覽會を催したりと。

▲女子語學校の慈善市　京橋區明石町女子語學校にては去月廿八日卒業證書授與式を擧行したるが、尙ほ三十日午前九時より慈善市を開き、恤兵部献金の目的を以て生徒製作品を販賣し、頗る盛會なりき。

戰時彙報

▲雪子女王殿下の御仁恤　賀陽宮邦憲王殿下の御姫宮なる雪子女王殿下は本年御年八歳目下京都に御在住中にて嘗て上京區竹間小學校に御通學遊ばされ今は尋常二年生にてあらせらるゝが此度征露の役の事を聞かせられ幼き御身にも深く將士の勞をお心にかけさせ給ひ父宮より日常の御手當として下し置かれたる金十五圓を御手自ら封筒に入れ給ひて校長の許に差し出し給ひしよし。

▲水戸家の節儉　德川御三家の隨一として累代節儉の聞え高かりし水戸家の當主圀順侯は齡未だ十九歲に滿たざるを以て母堂ふさ子刀自親權を行ひ祖父昭武子爵後見として專ら家政を處理されつゝあるが取分日露開戰以後は節約の上にも節約を加ふることに力め衣服の如きも新に調製することを廢し副食物は其數を減じ婦人の結髮も各自之を行ふことにしたり、又侯爵は先頃十萬圓の國庫債券の募に應じ國民救護會には侯爵より五千圓子爵より二千圓を贈り又昨年先考烈公贈位の事ありて之が祝典を擧ぐべかりし豫算の費用をば本所區徴兵慰勞義會及舊領地出身の軍人家族に寄贈したり、又た母堂ふさ子刀自には率先して赤十字社へ金品を寄贈し昭武子爵の令孃まさ子及び侯爵の令妹ゆき子なんど夫々寄贈するところありしといふ。

▲老婆の從軍出願　去る日大和郡山町役場に出頭し從軍を願出たる一人の老婆あり、驚愕の目を以て迎ふる受付に向ひ、容儀を正して曰く、例へ老婆なりとて今時の若いものに劣るとは覺ゐず腕に覺ゐの長刀にては毎年武德會の試合にて賞點を得るほどのたしなみありその手讃さるへなし下されば露國兵の首級の二つや三つやは斬取て歸り來ればと仔細らしく述立る樣子の狂人とは見ゑざるより猶能く聞訊すとこの女は同町茶町に住む安達歌と呼て當年七十六歳の高齢ながら薙刀には堪能の聞ゐあり去る頃同地に奇僧の聞ゐある星合孔章といへるが皇軍大勝利の祈禱を宗延寺にて行へる時歌も參詣しその際酷く感激するところありて偖てこそかゝる出願に及びたるものと知れたるより今昔時勢の相違を說き聞せて漸く歸宅せしめたりといふ恃もしきかな日本婦人の意氣。

▲奇特の婦人　小石川區表町藤田某の妻濱子は手づから眞綿入チョッキを仕立て其裏に自製の和歌「敵に勝つ大和心の丈夫よ進めや進め西比利亞の野に」を縫付けたるを同家宿舍中の兵士に一枚づゝ贈與したりと奇特の事と言ふ可し。

▲多士濟々　奈良縣吉野郡十津川村大字風屋の松尾德正氏は資性忠君愛國の念深く君國の爲に一家一族の男子は盡く陸海軍の將校たらしめんとて自身先づ陸軍に入り中尉にまで昇進したるも老年の爲に休職となりて目下自宅に在り養子藤兵衞も亦早くより海軍に入りて現に大尉となり長男正龍も亦工兵少尉にて小倉なる第十二師團に在り又女婿大津勉は步兵中尉にて金澤なる第九師團に在り次男正治も同じ目的を以て士官學校に在學中なるが目下中學にある三男四男も追つては何れも海陸の士官たるべき目的なりとは眞に名譽の家と云ふべし。

新刊紹介

▲戰爭と婦人

日本は既に露西亞に向て名譽ある劍を拔けり、此の戰や國民四千五百萬の大活動なるが故に、女子も亦た此の大活動に對する用意なかる可からず數むる所婦人の覺悟及任務あり、歷史に輝く日本婦人の面影あり、戰爭に關係したる外國婦人の傳記あり、著者三浦秋水、文明堂發行。

▲二十世紀の婦人

北海道婦人同志會の設立者今井歌子女史の主宰する月刊雜誌なり、本誌は實に其の名の示すが如く我邦婦人界に向つて新進的婦人の一旗幟を飜したるもの、全篇總て活氣ある文字を以て充たされたり、唯その主義少しく急進に失するの嫌はあれど其の元氣は喜ぶべし、博文館發行。

▲朝星夕星

例の小波をぢさんの世界御伽話です、朝生れた子は皇后の子夕生れた子は女官の子と着想既に奇なり、意匠の奇拔なる挿畫の斬新なること一々いふまでもありません、前篇の鷲王子をお讀みになつた方は是非本書をお讀みなさい。

▲娛樂の卷

教訓書話の第十八篇これも又少年世界の兄様木村小舟さんの作です。遊び事にかけては三度の食事も忘れる少年諸君のよいお伽です。

▲理化の卷

これも教訓書ばなし十九篇です、少年世界の兄さん株武田櫻桃さんの作です。風船玉や魚形水雷や軍艦や大砲などについておもしろく書によつて說かれてあります、明治の少年諸君達はこれを讀んで器械的智識を御學びなさい、以上三篇博文館發行。

▲女子摘み手藝教本

摘み細工といふものは古來女子手藝の一つとして習ひたりしものなるが女藝の發達せる今日摘み細工も又一つの美術として刺繡、造花と同じく各女學校に於て教授せらるゝに至る、されどこれを學ぶに就て完全なる教本なきを憾みたりしが今回斯道に熱心なる田中晋氏が編述されたる教本は極めて親切丁寧にして凡そ摘み細工を學ばんと欲する者はこの書を便りとして得る處ろ大なるべし、書中一々圖畫を挿み花、鳥、器物その外種々の形を意匠して初學者の獨習に便にしたるのみならず、別に摘み細工切形圖案を添へられたるは用意周到といふべし、代價は教本三十五錢切形圖三十五錢、發行所目黑書店。

▲舞踏大觀

長原政二郎氏の著舞踏の解、舞踏の注意、方舞圓舞の操行方法列舞環舞の注意方法等を解り易きやう解說したり今や我國漸く此の技の必要を認めて女學校に、團体に、將た個人に研究をなすもの少からざるの時に際し斯の技の教授に實地經驗ある氏の好著に接したるは喜ぶべし、定價六十錢、十字屋發行。

▲新教育唱歌

編者は東京府師範學校教諭小出雷吉氏自家の作曲及び歐米音樂諸大家の作曲を蒐集し、之に適切なる歌詞を附せられたる好唱歌集なり、定價廿五錢、同上發行。

次號記事要目

四月五日發行

每月五日發行

定價表

一冊（紙數二百八頁）	金二十錢
四冊（三ヶ月分）	前金七十五錢
八冊（半ヶ年分）	前金一圓四十五錢
十六冊（一ヶ年分）	前金二圓八十錢

內（定刊數……十二冊　增刊四回……三、六、九、十一月價格同一）

郵稅　一冊　二錢

廣告料

	二十四字詰一行	半頁（卅二行）	一頁（六十四行）
特等	……	……	割引三十三圓
一等	四十四錢	十四圓〇八錢	割引二十七圓
二等	三十六錢	十一圓五十二錢	割引二十二圓
三等	二十九錢	九圓二十八錢	割引十八圓

▲等級の位置〆切日等御照會次第御報可致候

注文略規

●一 本館發行の圖書は都て前金の外送本せず
●二 御拂込の前金相切れ候節は送本を停止す
●三 郵券代用は一割增にて五厘一錢の切手に限る
●四 總目錄御入用の方は二錢券相添申込あれ

明治卅七年四月五日發行　第四卷第五號

編輯兼發行人　松原岩五郎
印刷人　水谷景長
印刷所　東京市小石川區久堅町百〇八番地　合資會社博進社工場

發行所　東京市日本橋區本町三丁目　博文館

電話本局　三百三番　千十八番　二千六百二十番　三千二百二十九番

造花技術校長

山田興松君著

實用造花術指南

附り　實習模形圖畫

造花術の技工に關する良書極めて尠く偶ま之を得るも技術者と著述者と其人を異にするを以て、理法實際に適せず、讀者をして全然無意味に了はらしむるの憾ありしなり、然るに本書の著者は拾數年來斯術に從事せられ目下校舍を開て生徒を敎授するの傍ら其敎科書に充ん爲め本書を編述せり、故に其記する所專ら受驗實用を旨とし一定の方式を案出し初學者が容易に了解し得る樣最も親切に說明せられたる女子手藝の要技として家庭上欠くべからず請ふ續々御購覽あらんことを希望す

全壹册

菊判和裝挿圖數十個入り
正價貳拾五錢
郵稅六錢

發兌元　東京　博文館

前山口縣知事　法學士武田千代三郎先生著　（新刊）

心身鍛練　少年競技運動

▲口繪　楠公士卒訓練之圖……山中古洞君筆

全壹册

洋裝菊判截頭美本
挿圖六十個入
正價金拾八錢
郵稅四錢

本書は室外敎育の理法に通曉せる武田先生の宇內近時の大勢に鑑み、近き將來に於て世界に覇たるべき天運を有する我帝國の少年の爲めに、如何にせば能く其心身を訓練して大國民に欠くべからざる實力を養ひ得べきやの問題を、極めて簡明平易に解說せられたる空前の良書にして、戰時の讀物として、每家庭に一本を欠くべからざる寶典なり江湖の父兄諸氏子女の家庭に於ける敎養を忽にせざらんと欲せば必ず本書に依れ

發兌元　東京　博文館

（後付の一）

稀代の珍冊

河口慧海師著

（全二冊上巻製本既成）

世界之秘密國 西藏旅行記

洋装 菊判總クロース金文字入極美本

紙數 一冊五百頁

上巻 正價金壹圓 郵税金拾錢

上巻口繪

比馬羅耶山脈中世界第一の高雪峯（ゴーリーサンカ）の景二頁大◎慧海師出發當時の肖像◎西藏語梵語博士チャンダラーダース氏肖像◎タシルフンフー寺大喇嘛致師シエンチエンドルヂエンチャン尊者肖像◎慧海師入藏踏査地圖（石版着色）

河口慧海師は宇治黄檗山の僧にして夙に西藏譯の佛書を求め佛敎の眞義を極めんとの大志あり明治三十年印度に渉りて爾來三年の間幾多の艱楚を嘗め姿を喇嘛僧に變し遂に西藏に入り首府拉薩に留ると二年既にして其日本人なると發覺して咄嗟奇變の迫るに遭ひ僅かに身を以て脱出し滿六年の星霜を經て昨年五月無事歸朝するを得たり西藏は（ヒマラヤ）山北の高原國にして世界の高山峻嶺を以て其四邊を圍み且國道に關門を設けて鎖國を嚴行せり彼が完全鎖國を勵行せしより歐洲の探檢を企てし者幾數なるを知らずと雖も或は道途の險に仆れ或は彼國人に殺戮せられて一も成功せしものなし今日尚彼國内の消息を詳かにするを得ざりき是れ師の談話の最も珍重すへき所以なり時事新報記者曩に師の談話を筆記し數十日間紙上に連載して江湖の歡迎を博せり今回弊館更に師の校訂を經て前に遺漏せし所のものを悉く具備して之を上梓するに至れり然るに今や西藏は吾人の最も注意せざるべからさる境遇にあり英國は近頃遠征隊を彼國に送らんとし露國亦之れに對する運動をなさんとす若し夫れ此世界に於ける秘密國の眞相を知り英露の彼國に於ける勢力消長の如何を知り且又非常に活潑なる精神的活動を知らんと欲する者は師の辛苦經營の偉蹟を讀んで其稗益を得給ふべし

東京日本橋區本町三丁目 發兌元 博文館

（後付の二）

（後付の三）

工業叢書

工學士町原駒君著

紡績一斑

全壹册

(製本既成)

洋裝並製總クロース
正價金八拾錢
郵稅金拾錢

我國紡績の業比年悲運に沈淪し今や更に一大打撃を蒙らんとす、其前途の暗憺なる容易に恢復の望なきが如し、然れども、是は發達期中に免るべからざる一段階にして其改善進歩は之子以て鑑となす、見よ大工場を整理するもの、若くは大合同を實にするもの比々皆然るに非ずや、當事者たるもの專心鋭意此難關を展開して進まば、庶幾くは以て我大工業たる紡績事業の基礎を建つるを得んか、本書此際に出づ、後進の技術者及び技術以外の當事者をして、最も明瞭なる知識を保有せしめ、進んで斯業の發達に就て大なる貢獻を與ふるものは、蓋し本書也

工學士重見道之君著

工業數學

全壹册

(近刊)

洋裝上製總クロース
正價金……未定
郵稅金……未定

工業の進歩は其實地を經濟的に發達せしむるにあり、吾國工事の遠く歐米に及ばざる所以のものは主として實地工業者の學理に精通せざるに因る、特に其基礎たるべき應用數學の智識に缺如せるを以て、其端緒を得るに苦み遂に學理を註解のものとして茫然自失せるもの少しとせず著者茲に感ありて遂に本書を著はす。本書は專ら工業學校、工手學校、鐵道學校生徒の參考及び土木、造兵、造船、建築等の實物工業に從事するもの、獨習用たるを期すれ共、又尋常中學高等學校入學受驗生の物理數學問題の練習用として最も親切なる方法を採れり、初學者が高尚なる研究をなすの階梯は實に本書の特質にあるを諒知あれ

發兌元　東京市日本橋區本町三丁目　博文館

紅浪池田米太郎君著

小峯大羽氏表紙意匠畫

時は維れ春陽駘蕩の時、國は維れ揚武顯義の國、年少氣鋭の諸子豈に攸々として貴重の今日を沒了すべけんや、課外の講究を實地に試驗し理科採集に健脚を競ひ体育智育共に全ふして此快濶の天地山川を跋渉するの好伴侶を得たるは諸子の爲め大に歎ふべきなり

日曜の昆蟲採集

四月上旬出版

全壹冊洋裝
袖珍頗美本
正價……未定

●昆虫採集の掲示●出發準備●捕虫用具の説明●野外の心得●出發採集●採集昆虫の説明●昆虫の躰軀●質問●昆虫の分類●緑山へ行進●蟻の話●餘興●談話●劍舞●軍歌●歸校●標本製作●教師の挨拶●退教

日曜の植物採集

四月上旬出版

全壹冊洋裝
袖珍頗美本
正價……未定

●植物採集の掲示●生徒の登校と出發●採集準備第一回講話=●椿、梅、桑、杉、菜花、密柑、櫻、葡萄、菫、梨、李、牡丹、杜若、枇杷の談話●葉の質問●花の質問●顯微鏡と受胎の話●餘興第二回講話=●藤、薔薇、林檎、柘榴、菖蒲、芍藥、百合、百日紅、海棠、麥、茄子、楓、山吹等の談話●根と幹との質問●歸校

發兌元　東京市日本橋區本町三丁目　博文館

第五編

口繪に奥陸軍大將山本海軍大臣●齋藤海軍次官●露國極東總督アレキシーフ●同陸軍總指揮官リ子井ッチ●同黒海艦隊司令長官スクリッドルフ●同コザック兵軍團長チヤコーフ●同西比利亞沿海州軍務知事コリユバキン●清國關外防禦軍總統馬玉昆●旅順閉塞の決死隊有馬中佐、廣瀬少佐、齋藤大尉、正木大尉、島崎中尉●韓國皇帝と同皇宮内の玉座●在韓國第十二師團長及林公使一行●旅順攻撃の驍將淺井大佐、土屋、大島、松永、近藤、久津見の五少佐、同負傷者松村少佐、同桑原、南摩の兩少尉候補生、同佐藤水兵……●南澤機關少監と曙艦全乘組將卒名譽の戰死者梶村少尉候補生

▲本編附錄には日露陸戰方面詳密地圖（八十万分の一）第壹平壤、義州、鴨綠江、鳳凰城附近を掲げ次編附錄には同圖第貳旅順、奉天、海城、牛莊附近を掲ぐべし。

▲本誌第一編より増刊出來に付取揃ひ御注文に應ず

（後付の六）

博文館發行 日露戰爭實記

同名同種の雜誌あり博文館發行に注目あれ

定價 一册金拾錢 三册廿八錢五厘 九册八十三錢 十八册一圓六錢 卅六册三圓十五錢 ▲郵税一錢五厘宛

第六編四月三日發

三月二十三日發行

（每月三回の日發行）
（每編紙數百二十八頁）

本館發行の日露戰爭實記が口繪寫眞の新奇鮮明なる記事材料の豐富正確なる他に卓絶せることは既に世の認むる所なり、然るに今回露國東清鐵道會社に雇はれたる技師某氏が萬死を賭して辛うじて齎らし來りたる滿洲西比利亞各要地最新秘密寫眞三百五十葉は數千金を投じて本館の特有となれり、これを次編より本誌上に連載して旅順、青泥窪、奉天、遼陽、海城、哈爾賓等の實景は續々本誌に顯はれ來らん、之に加ふるに、今回本館特派寫眞班の從軍を陸軍々司令部の監督の下に許可せられたるを以て、我が戰爭實記の講讀者は居ながらにして眼前戰爭の大活動を目睹するの思ひあらん見るべし本館の作戰計畫のいかに卓絶せるかを

(後付の七)

(後付の入)

太陽臨時增刊

新法令

附 軍國議會史

正價三拾錢　郵稅三錢

明治三拾五年五月より第二十議會の終焉に至る間に發布せられたる法律勅令省令律令其他重要なる法令を蒐集して外交、租稅產業教育衛生通信會計軍事等の各章總て二十餘に區分し更に幾多小節に分彙統同して詳密なる索引を附し一目瞭然たらしめたるもの抑も法令の繁多にして其索出の困難なるは此種編纂者の通弊とせる所本館夙に玆に見るありて大に力を其分類法に盡し繁簡宜しきを得るに努めたり本號は曾て三十五年五月發行に係りし新法令に接續するものにして法治國民坐右の一大寶典なり

附錄――軍國議會史は第二十議會を中心として日露事件の發生以來總て議會に關する一切の事件を網羅叙述し殊に第二十議會の詳說に至りては恰も親睹するの感あらしむ本誌本年一月明治議會史を臨時增刊し大に江湖の好評を博せり本附錄は則ち其續篇と見るべきもの刻下軍國の事急なるに際して國民の必ず一讀せざるべからざるものなり

四月二十日發行

口繪

●内閣諸大臣●兩院●正副議長●伊藤侯●山縣侯●井上伯●松方伯●其他我軍事界の大捷者●露國の宿將及老政治家●兩院及政府の諸委員に至る迄寫眞版を以て鮮明に印刷し其風彩面貌をして其人を想見するに足らしむ

明治史第壹編

議會史

本書は初期以來第十九議會に至る間に於ける政黨勢力の消長歷次内閣の施政方針等細大漏さず叙述したるものにして諸名士が議會に於ける萬丈の大氣焔は彷彿として親しく之を聽き之を見るが如く一讀議院の慣例政變の由來を了知する至便の要書なり（正價三十錢郵稅三錢）

發兌元　東京日本橋區本町　博文館

博文館發行日露戰爭實記

定期增刊

毎月一回發行

日露戰爭寫眞畫報

▲第壹號　四月八日發行

征露の戰役は邈古無前の大戰なるのみならず、世界希觀の義戰なり、將た快擧なり、本館は既に日露戰爭實記を發行して、大に軍國の爲めに盡すあらんことを期せり、然るに我國連戰連捷の餘勢、事端益々大に方面漸く廣からんとし、從來の戰爭實記のみを以て滿足する能はざるに至る、茲に於て、毎月一回更に日露戰爭實記の定期增刊として寫眞畫報を發行し、彼此相俟て以て隔靴の歎を免れしめんと欲す、且つそれ文字の及ばざる所は、特に從軍寫眞班が隨時撮取送致する所の最近最珍の材料を用ゐて、許多の精巧無比なる寫眞版となし、猶諸畫伯の揮灑を請ひて、寫眞の尙及ばざる所を描寫し、或は石版、或は木版となして、萬遺憾なき戰爭時局を活現せしめんとす、乃ち畫報は啻に美術的戰爭雜誌たるのみならず、永く當年の紀念として後世に傳ふべし、又以て明窓淨机の好裝飾品に充つべし、軍國家庭の讀本、何物か之に過ぎんや。

体裁

毎月一回八日發行	
大判（縱八寸五分 橫六寸）●石版極彩表紙	
石版畫精彩色刷	二頁
アートペーパー刷	四頁
時局最新寫眞版	卅二頁
本文記事滿載密畫數十個挿入、	六十四頁

定價

壹册　金貳拾錢　郵稅貳錢

日露戰爭實記及寫眞畫報兩雜誌共（一ケ月四冊刷行）前金

一ケ月	金四十七錢
三ケ月	金壹圓三十五錢
六ケ月	金二圓六十五錢
一ケ年	金五圓二十錢
外に郵稅一ケ月	金六錢五厘

發兌元　東京日本橋區本町　博文館

女學世界
第四巻第五號
(明治参拾七年四月五日發行)
(明治卅参年貳月廿五日第参種郵便物認可)



(定價金貳拾錢)